
神さまとゲーム脳と過守護な殺戮竜の物語

ゼロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神さまとゲーム脳と過守護な殺戮竜の物語

【Nコード】

N2195U

【作者名】

セロ

【あらすじ】

女の子だけゲーム好きでオタクな主人公。

ある日、パソコンにオンラインゲームの広告が届いた。興味を持って事前登録すると、デウス・エクス・マキナ（マキナ）と名乗る少女が現れ、妙な質問を出し始める。戸惑いつつもそれに回答する主人公。しかし、出せるはずのない質問を出されたことによりそのゲームの異常性に気付く。だがすでに遅かった。

主人公はマキナにより、ゲーム参加者としてゲームの世界に連れ込

まれてしまう。

目を覚ますとそこは牢屋の中だった。そこが異世界であることを悟りはしゃいでしまう主人公。しかしその牢屋は奴隷として売られる少女が囚われた牢屋だった。

【女性主人公とかダブルヒーローとか、やってみたかったことまとめてやっちゃいましたな作品です。お見苦しい点もあるかもしれませんが、頑張つて面白い作品にしたいと思います】

追記 ノクターンにてR - 18セルフパロディ『神さまとゲーム脳とエロゲ主人公の物語』始めました。

プロローグ（前書き）

はじめましてかお久しぶりですセロと申します。 m () () m

友達に「女の子作るの妙に上手い」って言われて「じゃあ女の子を主人公に書いてみよう」と書いてしまったこの小説。一人称とか女性視点とか不安だらけですけど頑張ります。

プロローグ

「どう？ 錆び臭い旧世代ガン ムも悪く無いけどさ、やっぱりス
タイリツシユな新世代でしょ？」

「男つてのがわかってないよなもこ姉は。錆び臭いからこそいいん
だろ。やっぱり初代から逆シャ だな」

床に敷かれたレッドタイガーの毛皮で作ったふかふかのじゅうた
ん、天井には光を灯した光魔石をたくさん吊り下げたシャンデリア。
とあるお城の一室。西洋ファンタジーとかでよく見るような石造
りの大きな部屋で、あたしとあいつはハイビジョンプラズマテレビ
の前に座っていた。

「け、けどさ、こつ……GM粒子をバーツて拡散させるシーンとか
燃えない？」

「……『俺がガン ムだ！』っていう痛すぎる台詞で一気に萎えた」
「い、痛いつてあんだねえ！ 刹那君のガン ムに対する想いがわ
からないの!？」
「わからん」

「即答するなーっ!」

昨日から徹夜でお気に入りの作品を見せてるけど、こいつは
いっこうにガン ム〇〇の良さをわかつとしない。

なんでわからないかなあ、こんなにかっこいいのに。絶対気に入
ってくれると思ってたのに……

気に入ってくれたら一緒に劇場版も見ようと思ってたのに……

いや、諦めるもんか！ 絶対こいつもこっちの世界に連れ込んで
やる！

「うう、これは世界観から入った方がいいか……資料集でも召喚し
てもらおう」

「……いまさらだけどこんなことであんまこき使つなよ。曲がりな
りにもあいつ神様だぞ？」

「いいじゃない。仕事はちゃんとこなしてるんだし、正当な報酬よ」

あたしがそう言つとあいつは苦笑いしながらポケットから飴玉を
取り出して口に放り込んだ。

「それよりそろそろ行くこうぜ。今日の仕事は西の大陸での魔王退治
だろ？ 早く行かないと日暮れまでに帰れなくなるぞ」

「はい」

我ながらとんでもない会話してるなあって思う。ほんの何カ
月か前までは普通に女子高生やってたのに。

半年だっけ？　なんだかもう何年も経ってるような気がする。

あたしが殺されたあの日から……

十　半年前

『新作無料オンラインゲーム　”デウス・エクス・マキナ”　近日公開』

学校から帰って、なんとなく机のパソコンを見たらそんなメールが開かれていた。

……なにこれ？

パソコンの電源はちゃんと切ってたはずだし、以前ウイルス入りのメールをもらってパソコンに入れてたゲームのデータやお気に入りイラストが全滅してからは心当たりの無いメールは開けないようにしてる。

でも、今日学校から帰ってみればパソコンは起動していて、当たり前のようにメールが開かれていた。

はて、と首を傾げて考えてみる。

親はあたしが小学生の頃死んじゃったし、引き取ってくれたおばあちゃんも去年死んで今は一人暮らし。親の幽霊が心配して現れてパソコン開きっぱなしとかも聞いたことない。

あたしにストーカーとかは……無いね、うん。

……ま、いつか

気にはなるけどそれだけ。

もしかしたらゲームの神様があたしに『このゲームをやりなさい』
と言ってるのかもしれない。

モン　ンもHR999にしたし、最近の武器性能のインフレに飽
きてきたし、こっちに乗り換えるのも悪くない。

無料だし試しにやってみてもいいか……。あ、事前登録やってる。

椅子に座り楽な体勢をとってマウスを操作。事前登録をクリック。
画面が切り替わりお城の中のような背景に変わる。そしてドロ
ン　ンという効果音と同時に煙の中から女の子が現れた。

年は10歳ぐらい。髪はふわふわ揺れながら虹色に輝いてる。眼
はくりくりしていてなんとなくいたずらっ子みたいな感じがあった。

画面の中の女の子はカメラ目線になってニコツと笑いかけてきた。

『はじめまして！今日は事前登録だね？　ありがとう』

おおっ！　ボイス付きだ。すっごくかわいい声だけど声優誰だろ？
それによく動く。これは期待以上の力作かも。

『私はデウス・エクス・マキナ。この世界の、気まぐれでいたずら
好きでご都合主義な神様です。あ、けど呼ぶときはマキナって呼ん
でね？長いしかわいくないから』

マキナはそう言うところほんと咳払いした。そんな何気ない動作まですごくリアルだ。

『それじゃ、名前教えてくれるかな？』

あ、ハンドルネームとかじゃなくて本名ね』

ん、名前ね……。

言われた通りに“浅倉 もこ”自分の名前を打ち込む。

『浅倉 もこさんだね？ ありがとう』

「え？」

思わず声に出してしまった。普通、こういうキャラの声をやるのは声優さんだ。どんな名前を打たれるかわからないのに声を用意しておくなんて普通しない。

ましてそれを完璧に発音するなんてありえない。

『次は質問だよ。これから出す質問にYESかNOで答えてね？』

何でも無いようにマキナは続ける。

……ま、まあ、それだけゲームが進化したってことだね。3Dのゲームまで出てるんだし驚くことない。

『それじゃ質問いくよ。一つ目、ゲームが好きか』
そりゃもちろん。

YES

『男である』

NO

『自分はオタクだと思っ
ずいぶんピンポイントね。』

YES

『剣か魔法なら剣だ』

どちらかというの後衛が好きか。

NO

『異世界とか行っちゃいたい
もち、是非とも。』

YES

『凌辱系エロゲとかに興味がある』

いや、これセクハラじゃ……まあ……

YES

『会いたい人がいる』

そりゃね。小学生の頃の友達どうしてるかな。

YES

『人生やり直せたらなとか思っ』

えらく重いわね。

YES

『お姫さまと勇者さまみたいなのに憧れる』

そりゃ女の子だし。

YES

質問に答えていく。

けどなんだろう？　なんか質問に違和感を感じる。気のせいかな？

そのまま質問に答えていく。

YES・YES・NO・YES・NO・NO・NO・YES・NO・
YES

NO・YES・YES・NO・NO・YES・YES・YES・Y
ES・YES……

多い。果てしなく質問が多い。

だんだんだれてきた。

というかコスプレがどうか好きな食べ物がどうか関係あんの？　これで騙しだったら怒るよホント。

『猫と犬なら猫がいい』

NO・つつか関係あるの？　これ。

『現実はずまらない』

どんな質問してんのよ。

……YES

『今までに親しい人を失ったことがある』
なにこの質問。

……YES

『その人はとても大切な人だった』

……YES

おかしい。何か変だ。質問が

『親が死んでから現実がどうでもよくなった』

っ?!

「なに……これ……？」

あたしは質問を見て息を呑んだ。

あり得ない。こんな質問、普通じゃない。

画面の中のマキナがクスクスと笑った。動きがリアル過ぎる。

まるで本物の女の子が笑ってるみたいに。

『あれ？ どうしたのかな？

そんな驚いた顔して』

っ?! 今、間違いなく画面の中のマキナはあたしに言った。息が詰まる。なに……これ……。

『あはは、鳩が豆鉄砲喰らったみたいな顔してる』

最初に言ったじゃない。私は神様だって。神様ならこれぐらいできて当然と思わない？ これで登録は完了だよ。ようこそ、私の世界

へ

「ひっ?!」

怖くなってパソコンの電源を連打した。

けど画面の中のマキナは消えない。

ニコニコ笑いながらどこから取り出した銀色の拳銃をあたしに向ける。

ズドン、と重い銃声が響いた。

あ……………ね……………なんで……………？ 身体が……………動かない……………。

赤い液体で汚れた画面の中で、マキナはガンマンさながらに拳銃から立ち昇る硝煙にフツと息を吹いた。

『浅倉 もこさん。享年17歳。参加No.777……………つと。あ、スリーセブンだね。なんかサービスしとくよ。え〜と、それじゃ質問の回答をいくつか反映するね。』

『ゲームが好きか』

YES

『男である』

NO

『自分はオタクだと思っ』

YES

『運がいい方だと思っ』

NO

『コスプレに興味がある』

YES

『自分はエロい方だと思っ』

YES

『凌辱系エロゲとかに興味がある』

YES

『会いたい人がいる』

YES

『人生やり直せたらなとか思う』

YES

『お姫さまと勇者さまみたいなのに憧れる』

YES

『猫と犬なら猫がいい』

NO

うんうん、こんなところかな？ それじゃ、ごきげんよう。またあ
いまして〜』

プツン、と画面が消え黒く変わる。

黒い画面には胸を血まみれにした、あたしの姿が映っていた。

一日目（前書き）

- ・作者のセロは変態です！
- ・作者のセロは変態です！

大事なことなので二回言いました
書いてたら自然とこうなっただんです……

一日目

気が付いたらあたしはかたいベッドの上で石の天井を見上げていた。

「……………は？」

思わず声が出た。辺りに自分の声が反響してあわてて口を閉じる。

身体を起こして周りを見ると石造りの部屋に鉄格子が付けられた、ファンタジーでよく見るような牢屋みたいなところだった。

薄暗くてよくは見えないけど、あたし以外にも何人か女の子がいて、だいたいはぼろっちい服装でだらんと木のベッドに寝転んでいる。

少し肌寒くて身体が震えた。

意味がわからない。え、え〜と……………なにこれ？ 夢？

う、うん、こついう時は古典的にほつぺたをつねってみよう。
いたたたた！

じんじん痛む頬つぺたを指で擦りながら、一応もう一度つねってみる。痛い。

夢じゃない……………よね？ えっと、よし、何でこつなつたか考えてみよう。

まずオンラインゲームの広告が来てて

クリックしたら幼女がでてきて質問されて

で、撃たれて

そしてここにいる。

見事に繋がらない。

息をするのも、ポカンと開けた口を閉じるのも忘れていた。バクバクと心臓が鳴ってる。

……けど、パニックにはならなかった。というか頭は意外と冷静だった。

なぜなら昔からよく、気付いたら見知らぬ世界にいたっていうのを妄想してたから。

これ……もしかして……

「あの……大丈夫ですか？」

「ひゃいつ?!」

うああ……、声裏返った。

見上げてみると茶色の髪をした女の子が、茶色い器を持ってあたりを見ていた。

……あれ？　なんか女の子の頭でぴよぴよ動いてるのが……？

犬耳っ?!

女の子の頭に付いていた物。それは真正銘の犬耳だった。しかも視線を落としたらお尻の辺りからしっぽまで生えている。コ、コスプレじゃないよね？　動いてるし……。

「あの、水ですけど、飲めますか？」

「あ……う、うん、ありがと……」

ほとんど無意識のまま水の入った器をもらって一口飲んだ。
錆びた鉄の味がする。まずい。

けど、確信を持たれたことが一つ。

これは……異世界召喚だ。

よく漫画やゲームで起きる展開。何かのきっかけでまったく違う世界に飛ばされるといっやつだ。

かなり突拍子の無いと言えは無いけど不思議とそんな考えを受け入れられた。

……というより、犬耳女の子が普通にいる時点ではほぼ間違いないでしょ。

ゼロとかD G DAYSとか、異世界召喚っていうのはあたしたちオタクにとっては一度は妄想する展開だし……ん？

あたしは水に映った自分の顔を見た。

お……おおっ？！

そこには見たことも無いような美少女の顔があった。長い艶やかな黒髪にぱっちりした眼。長い睫毛。雪のような白くてきめ細かい肌。小さくて形がいい、けれどふっくらした唇。

思わず自分の顔に手をやる。……間違いなく自分の顔だ。

やっぱりこれ異世界召喚だ！で、あたしはヒロイン級な美少女

に転生！ よし！

「あ、あの……どうしたんですか？ そんな嬉しそうに……」

思わずガッツポーズしたらさっきの犬耳の女の子にドン引きされた。

あわてて言い訳して深呼吸して気を落ち着かせる。

「ふう……ふうふう」

自然と笑いがこみ上げてくる。昔から憧れてたんだこっぴつ展開。退屈でどうでもいい日常から抜け出して非日常の住人になること。おまけにこんな美少女に転生とか美味しすぎる。

冴えないオタク女子高生として日常を過ごすか絶世の美少女になつて異世界で冒険なら断然 異世界でしょ！ あとは素敵な勇者様でもいれば完璧だけどいたりしないかなあ……。

『プルルルル プルルルル』

「ひゃっ?!」

いきなり携帯の着信音が聞こえた。牢屋の中に音が反響する。

あわてて音の出所を探すとベッドの枕元にあたしの携帯が置いてあった。

すぐに手に取って音を切り、周りを見回す。

けど、あれだけうるさかったのに犬耳の子以外はこっぴつちにたいして興味を示してる子はいなかった。

「えっと……それ、何かの魔法ですか？」

犬耳の子はちょっと困ったような顔をしてあたしを見てる。しまった、ほったらかしだった。

「え……あ、うん。魔法。そんな感じ……」

愛想笑いしながら携帯を開く。新着メールが一件。だけど電波は圏外になってる。

とりあえずメールを開いてみる。差出人は……ゲームマスター？

『おめでとうございます。あなたは神の作りしゲーム“デウス・エクス・マキナ”の参加者となりました』

ゲームの世界……か。

これもけっこうよく聞くパターンね。現実には小説よりってやつかしら？

『あなたはゲームの参加者です。そして参加者であるからにはこのゲームのルールに従っていただきます。あなた方の目的はこの世界の神 デウス・エクス・マキナの元にたどり着き、神の座を譲り受けることです。』

ひとまずは一ヶ月間、無事に生き延びることだけをお考えください。デウス・エクス・マキナは強者を求めます。生き延びた者に道は開けるでしょう。

ささやかながらそのための力をあなた方に差し上げました。どうぞご確認ください』

……一ヶ月間生き延びる？

不吉な予感がした。

そこまで読むと下に“浅倉 もこのステータス”と書かれたリ
ンクがあったので押してみた。

浅倉 もこ LV・1

1stジョブ オタクゲーマー

2ndジョブ なし

3rdジョブ なし

スキル

???????

ジョブ酷くない!?

スキルの?????っていうのは緑色に点滅していた。

ゲーム的に考えるなら条件を満たしたら発動するようなスキルつ
てことかしら

ん……と、魔法とか期待してたのに無さそう。LV・1ってこ
とはレベル上げれば覚えられるとかかな？

とりあえずこのゲームはラスボスのデウス・エクス・マキナ……
ってののところまで行って神になるのが目的ってことかしら？

とはいえそれに乗るかはまだ未定。せつかくの異世界召喚だしこ
の世界をたっぷり楽しみたい。

とにかく今の状況確認ね。あたしは今どういう状況なんだろう？

さっきの犬耳女の子なら何か知ってるかな。

「あの、あたしたち今どういう……」

その時、牢屋の外で鉄の扉が閉まる大きな音が聞こえてきた。

「ひいつ!?!」

犬耳女の子はびくりと身体を震わせた。布団を掴んだかと思うとそれをあたし共々頭から被って、あたしの腕にしがみついてガタガタ震え出す。

さっきまで無気力にベッドの上で丸くなっていた女の子たちも一斉に布団を被り、何かに怯えたみたいに震え出した。

え? なに?

少しすると牢屋の外から足音が近づいてきた。

剣を腰に下げて革の鎧を着た兵士二人と、宝石をじゃらじゃらつけたいかにも金持ちそうな太ったおじさん。

あたしは布団の中から様子を伺う。

おじさんは顎に手を当てながら牢屋の中にいる女の子達を順番に見ていく。

何してるんだろう? と思って見ていたらあたしと目が合った。

「ひ……!?!」

鳥肌が立った。

舐めるような、ねっとりとした視線。あたしを性欲の対象としか見てないような目。

そいつはニヤニヤしながら牢屋の中のあたしたちを見回すと、兵士と何か話ながら一人の女の子を指差した。

「う、ああ……っ!!」

指差された女の子が短く悲鳴をあげた。二人の兵士が牢屋に入ってきて女の子の両腕を掴んだ。

「いや……いや！ 誰か……誰か！ いやあああああっ!!」

悲鳴を上げて、泣きながら女の子は抵抗する。エルフ耳でさらさらした金髪の、12歳ぐらいの小さな女の子だった。

女の子は引きずられていく。

牢屋から出されるとその女の子は後ろから兵士に羽交い締めにされた。必死に暴れてるけどびくともしない。

それにおじさんが近付いていく。

足をばたつかせて遠ざけようとしたけどその足も他の兵士に掴まれ、無理やり両足を広げさせられた。

「どね」

「ひぐっ!!」

おじさんはおもむろに女の子の服の下から手を入れた。

え？ う……うそ……

あたしからは見えないけど、たぶん女の子の大事な場所に触ってる。

女の子が悲鳴を上げたら兵士に口を塞がれた。

「んーっ！ ……んぐ、んん……！」

身体が反り、天井を仰いだ目からぼろぼろと涙がこぼれる。おじさんはニタニタと気持ち悪い笑みを浮かべながらそれを眺めていた。

「ふふ、これはよさそうだ。こいつを買おう」

おじさんはそう言って手を抜くと、女の子は糸が切れたみたいにもその場に崩れ落ちた。兵士が鎖付きの鉄の首輪をはめて、そのままどこかに引きずっていく。

しばらくの間女の子が悲鳴を上げてるのが聞こえたけど、また鉄の扉が閉まる大きな音がするとそれも聞こえなくなつた。

「なに……今の……」

あたしは震えていた。胸の中がぐちゃぐちゃにかき回されたみたいに気分が悪い。

「ね、ねえ……あの子……どうなるの……」

聞かずにはいられなかった。あたしにしがみついていた犬耳の女の子は震えながら泣いている。

「……凌辱されて……性奴隷にされる思います……」

……ライトエルフ族は清純で虚弱だし……あの子はまだ幼いから……
死んでしまつかも」

吐き気がした。頭がぐらぐらする。

犬耳の女の子はあたしにしがみついて泣いている。

「……いい子だったのに……リンちゃん……」

さっきの光景や悲鳴が頭の中でリフレインする。胸がズキズキ痛い。

なんなのよ……」

5分前の自分をぶん殴ってやりたい気分だった。

二日目

「寝ちゃったか……」

あのあとしばらく、犬耳の女の子を慰めてたけど泣き疲れて寝ちやったみたい。

今はあたしの膝を枕にしてすやすや寝息を立ててる。

ちよつとため息をついて壁に空いた小さな窓に目をやった。

窓から見える小さな四角い空は、夜明け前みたいで少し白んでいた。

「なんか……ハードな始まり方だったなあ……」

状況から考えて、あたしは今奴隷として売られてるらしい。……しかも、Hなことさせる目的で

そしてここはどうやら砦かなんか。奴隷商が牢屋として使ってるみたい。

捕らわれのお姫さまとかならありだけど、捕らわれの性奴隷候補ってどうよ？ ハードモード？

はしゃいでたのがバカらしくなってくる。

「ん……んん……」

犬耳の子があたしの膝枕の上でもぞもぞ動いた。

あらためてその子を観察してみる。

歳はあたしより下かな？ 明るい茶髪からピヨコンと飛び出た犬耳。首回りにはふかふかした綿毛みたいな白い毛が生えている。

おしりのちよつと上辺りは服に穴が空いていて、モフモフのしっぽが出ていた。頭を撫でてあげるとちよつと気持ちよさそうに表情がとろけた。 かわいい。

やだなにこの子めちゃくちゃかわいいよ萌えの塊だよ！？ 犬耳しっぽ付きとかなんてあたし得！ 耳フニフニしたいしっぽでモフモフしたいギョツッて抱きしめたい！

耳ぐらいならいいよね？ フニフニしていいよね？ 誰かが止めてもあたしは行くよ？

……うああ〜！、柔らかいよフニフニだよ幸せだよ〜！

「うっ……うっん」

あ、目覚ました！？ 目をぱちくりさせてあたしを見上げてくる。

ハッと我に返ってあわてて耳から手を離す。

いけない、暴走した。あたしの悪い癖がでた。

「わ、わわ！ すいません！」

その子にあわてて起き上がるとぺこぺこ頭を下げてきた。
なんでそっちが謝る？

「す、すいません！ 私いつの間にか寝ちゃって……」

「いいよ。気にしなくて」

その子はまだぺこぺこ何度も謝ってくる。話が進まないからあたしから話すことにした。

「あたしは朝倉 もこっっていうの、あなたのお名前は？」

「フ、フィロです」

「そっか、じゃあフィロちゃんに聞きたいことあるんだけど……いいかな？」

奴隷とか砦とか、あたしの予測はだいたい当たっていた。全然嬉しくないけど。

あたしの境遇は話さないでおいた。信じてもらえるか不安だったし、せつかくの出会いなんだし『変なやつ』なんて思われたくない。

ちなみにあたしは気絶した状態でここに運ばれてきたことになってるみたい。その辺はどうなってるんだろ？

よし、とりあえずゲーム的に言うならヒロインっぽいのも出てきたし、次はここからどうやって脱出するかね。

このまま売られて『異世界に来て変態おやじの性奴隷になり一生を終えました』なんて嫌すぎる。それに……、あたしだって女の子だ。ゲームの中ではさんざんいろいろやったけど、現実リアルのファーストキスや初めては好きな人にあげたい。

もっと言うなら、今はこれだけ美少女になれたんだし、どうせな

ら超美形なエルフとかに、ロマンチックな部屋で頭なでなでされたり優しくキスされたりしながら『いいの？ もこちゃん』『うん……優しく……してね？』ってかんじで……

妄想してたらフィロちゃんが不思議そうにあたしを見てた。おまけにあたしよだれ垂らしてた。ヤバい……、本気で痛い。

と、とにかく脱出狙いってのは絶対！

……ここが本当にゲームの世界なら助けに来てくれる勇者様でもないそんなもんだけど……期待しない方がいいか。そうなると必要なのは……レベルアップね。できるだけ戦闘力上げて強力なスキルも使えるようになれば楽になるはず。

そういえばフィロちゃんが魔法がどうって言った。後で詳しく聞いてみよう。

そんなことを考えていたら頭の中でポーンという効果音がした。

『新しいスキルを獲得しました』

そんなアナウンスみたいなのが聞こえた。新しいスキル？ 携帯を開いてブックマークしたあたしのステータスを見てみる。

浅倉 もこ L V ・ 2

1st ジョブ オタクゲーマー

2ndジョブ なし
3rdジョブ なし

スキル

???????

ゲーム脳(NEW)

これバカにされてんのかなあ……え〜と、スキル ゲーム脳
効果は“様々な動作をゲーム仕様にする”らしい。
どういうことだろう？

それとなぜかレベルアップしてる。けどモンスターとか倒した覚えは無い。敵を倒した経験値でレベルアップとかじゃないのかな？

「あの……もこさん？ 何してるんですか？」

「あ、ううん、何でもないよ」

あたしは携帯を閉じるとフィロちゃんの頭を撫でた。髪がさらさらしてなんか癒される。フィロちゃんも気持ちよさそうに目を細くしてしっぽをパタパタさせていた。

……ヤバい。かわいい。また暴走しそう。落ち着けー、落ち着けあたし。きつと仲良くなればいくらでもモフモフさせてくれるから。

フィロちゃんなら大丈夫かな？ いい子そうだしちよっと脱出について情報集めときますか。

……で、脱出話を持ちかけたら本気で反対された。聞くところによると、皆の至るところに警備や魔法罫、感知魔法が張られていて奴隷が逃げたことは無いらしい。

『今まで脱走できた人はいないですし、捕まれば酷い目に合わされます！ それよりは売られた後、ご主人様の命令をよく聞いて信頼をもらい、ある程度の自由をいただくという方が望みがあります』とのことだ。

かなり脱出は厳しいみたい。いきなりこんな難易度ってどんだけ鬼畜ゲームなのよ……。

うんうん唸ってたらフィロちゃんがじつとあたしのことを見てきた。

「……もこさんってこんなところにいるのに……強いですね……」

「ん？ 強い？ あたしが？」

「はい。本当に……すごいです。私なんて脱出って考えただけで怖いんですし……よく不安になって泣いちゃいますし……それに引き換えもこさんは……強いんですね」

「……あたしは弱いよ。弱すぎるから強く見えるの。フィロちゃんのが全然強い」

きよとんとしたフィロちゃんの頭を抱き寄せて、本当の犬みたい
に頭とか顎の下とか首筋とかをわしゃわしゃしてみろ。……と、な
んかよっぽど気持ちよかったみたいでふにゃつと表情がとろけてた。

かわいい。超かわいい。うあ〜！ 押し倒しちゃいたいぐらいか
わいいよ〜！ ……自重しないと、うん。

そうやってたら兵士の人が食事を持ってきた。

なんかあたしたちのこと見てニヤニヤしながら口笛を吹いた。…

…昨日の一件も有ってかすごく嫌悪感が湧く。

ま、いいや。ご飯ご飯。何かを考えるならまず腹ごしらえ。頭を
使うゲームする時も食後が一番調子良くなるし。

「フィロちゃん、一緒に食べよ」

「あ、は、はい！」

ベッドにフィロちゃんと並んで腰掛ける。

メニューは果物と野菜のサラダとパンに何かのスープ。あとは野
菜ジュースらしい色をした飲み物だ。

正直、ここに来るまであたしがいつも食べてたやつより美味しそ
う。

「うわあ……けっこういいの出すんだ」

「体調悪くしたり、肌艶が悪くなったら奴隷としての価値が下がり

ますからね」

少し上がったテンションが急降下した。……フィロちゃん、その情報はあまり欲しくなかったよ。

でも、なんにせよ美味しいご飯はありがたい。

元の世界ではインスタントばかりだったからなあ……。

こっちの世界での楽しみの一つになりそう。

「いただきます」

さつそくパンにバターを付け、顔を近付ける。焼きたての香りによだれが出る。かぶり付こうと大きく口を開けた。『スキル。“ゲーム脳”発動』

頭の中でそんなアナウンスが聞こえた気がした。

あ〜ん、ガチン！ あたしの歯はきれいに空振りした。

ご飯が消えた。全部、まるごと。サラダのトマトっぱい果物のヘタから、付け合わせのバターまできれいさっぱり。そしてお腹だけはなぜかいっぱいになってた。

は？

訳もわからず空になった食器を見つめる。

……あ〜、わかったかも。レトロゲームの食事シーンって、だいたい机の上の食べ物パツと消えるって感じになってたっけ。

なるほど、スキル“ゲーム脳”の効果はそういうのを文字通りゲーム仕様にする能力ってことね。

やったねあたし！ さっそくスキルの効果がわかったよ！

泣いた。

「ふあ！？ ちょ…もこさんいつの間に食べて…ってなんで泣いてるんですか?!」

「なんでも…ひっく…うああああん!!」

フィロちゃんの胸で泣いた。フィロちゃんは戸惑いながらだったけど優しく慰めてくれた。

触ってみると意外に胸、大きくて柔らかい。…ちよっと長めに泣いとこ。

ひとしきり泣いた(胸の感触を味わった)あとでフィロちゃんに魔法のことを聞いてみた。

「魔法を見たことないんですか？」

「あゝ、あるけど無いといつかなんといつか…」

「珍しいですね…もこさんって名前からして東方の国の出身ですよね？ 向こうでは無いんですか？」

フィロちゃんはそう言うと言いつと手を出し、そこにポンと火を灯して見せてくれた。

「おおっ!?!」

「そんなに驚かれると恥ずかしいですよ……」

フィロちゃんは照れたように目を伏せて顔を赤くした。

「ね、ね、これあたしでも使えるのかな？」

「ううん、どうでしょうか……」

原理とか教えてもらったけど、ここら辺は精霊だの術式だのたいテンプレだったから簡単に覚えれた。要するに、魔法を使える魔族とか妖精の血を引いてれば儀式をして使えるようになるらしい。

フィロちゃんに覚えが良いつて誉めてもらった。

ちょっと気分いい。その後はいくつか魔法のことを教えてもらったり、他愛ない話をしたり。明日できそうなら儀式について教えてくれるというところで話は終わった。

「で、現在に至る……と」

あたしはベッドに仰向けに寝転びながら、携帯の日記に今日の出來事を一通り書いておいた。習慣ってやつね。

時間は23時57分。あと少しで日付が変わる。

フィロちゃんはあたしのとおりですやすや眠っている。起こさないように軽く頭を撫でながらぼんやり天井を見上げた。

うーん、全然眠れない。明日はフィロちゃんによいよ魔法習うんだし、早く寝たいんだけどなあ。

さっき打った日記を読み直してみる。

『……あたしは弱いよ。弱すぎるから強く見えるの。フィロちゃんのが全然強い』

ちよつと恥ずかしくなつてにやけてしまつ。あはは、我ながら中二みたいな台詞言つたなあ……

けどそう、あたしは弱い。弱すぎるぐらい弱い。

だつて我慢できないぐらい嫌なことあつたら、死んで逃げちゃえばいいなんて思つてるもん。

あたしはフィロちゃんみたいに辛い目にあつても生きようなんて思えない。

そりゃ死ぬの怖いけど、どんなに辛い目にあつても死んじやええばそれで終わり。もうそれで痛いことも怖いことも苦しいこともない。よくドラマとかで“ のためなら命だつて惜しくない”とか言うけど、それつてようするに駄目だつた時に生きてるのが辛いから命が惜しくないんじゃないのかな？

それならあたしだつてたいして変わらない。そんな風に考えてるから大胆なことができる。周りから強く見える。

いつからかなあ……こんなネガティブに前向きになつたの。

小学生の頃、お父さんとお母さんが死んで、おばあちゃんの家に取り取られて、おばあちゃんも死んだ頃か……

やめよ。なんか鬱になつてくる。

ため息一つ。携帯を枕元に置いて…… 『プルルルル プルルルル』

思わずビクッ！ てしてしまった。この着信音は心臓に悪い。
あわてて音を止めて携帯を開く。時刻は深夜0時0分。かけてき
たのは

『デウス・エクス・マキナ 黒』

ディスプレイにはそう表示されていた。

二日目（後書き）

作業BGMには東方ヴォーカルメドレーがお気に入りなセロです。

今回のお話ではもちゃんが日記に書いた内容をサラサラ〜っと。

なんか妙なスキルを手に入れましたけど、このゲームの世界じゃみんなこんな感じですよ。面白いスキル募集中！ 自分で考える

三目目(1)

デウス・エクス・マキナ

この世界の神様で、そしてあたしをこの世界に連れてきた張本人……らしい。たしかマキナって呼べて言ってたっけ。

けど 黒 ってのはどういうことだろう？

何か嫌な予感がする。どうしようかなこれ。無視しちゃ駄目かしら？

電話に出ようかどうか悩んでたら勝手に通話モードに切り替わった。

『参加No.777 朝倉 もこさん聞こえますか』

携帯からあの声が聞こえてきた。

立ち上がってフィロちゃんから離れ、携帯を耳に当てる。

「……もしもし？」

『こんばんは。朝倉 もこさん。このゲームは楽しんでるかな？』

相変わらずのかわいらしい声。けどその声を聞いてるとなぜか不安になってくる。心臓がしめつけられる、そんな感じだ。

電話の向こうでマキナはくすくすと笑った。

『さて、さっそくだけど本題。今から貴女に試練を与えます』

「……試練？」

『そ、試練。メールで来たでしょ？ 数々の試練を乗り越え一ヶ月生き残れって。』

貴女がこの世界に来てから一ヶ月間、つまりあと29日間でランダムに六回、私たちは貴女に試練を与える。死んじやったらゲームオーバー、一ヶ月生き残れば次のステップへ、簡単でしょ？』

あたしが漠然と感じていた不安が形になった。
嫌な予感しかない。

『それじゃ、まずは場所を移動するから』

「え？」

一瞬で周りにあった牢屋の中の風景が消えた。

黒。あたしは真っ黒な空間の中に立っていた。暗いわけじゃなく、自分の姿ははっきり見える。ただそれ以外は何もかもが黒い世界。

「お、おい！ なんだよここ！」

「きゃっ?!」

後ろで声かして驚いて振り返った。

そこには四人いた。

軽くパニックを起こしてる不良っぽいチャラチャラしたお兄さんに眼鏡の学者っぽい人。あと、何が起きたのか理解できないって感じでポカンとしてるお姉さんと中学生ぐらいの女の子。

「なんなんだよ！ わけわかんねえ世界に連れて来られて！ 次はこんな……ざけんなよ！」

パニック気味なお兄さんが叫んでる。うるさい。

学者風の人も黙ってるけどかなりおろおろしてるな。

そうやって分析できる程度にあたしは落ち着いていた。

こつこつ時は普段からゲームとかラノベ読んでたあたしみたいなの方が適応しやすいのかしら。

……マキナはどうくるだろう。

なるべく隙を作らないようにして周りを見回す。

『お待たせ』

いきなり“ぐにやり”と風景が歪んだかと思うとそこからマキナが出てきた。

ただ、パソコンの画面に出てきたのは虹色の髪をしていたけど、今目の前にいるマキナは艶のある黒い髪に黒いドレスという姿だった。

『ふう、2000人近くいるから移動させるの疲れちゃった』

マキナは袖で額の汗を拭いた。まるで仕事終わりみたいに爽やかな笑顔を振りまく。

今2000人って言った。あたしに参加No.777って言うたからかなりの人数をこの世界に連れて来たんだろうと思って

たけど予想以上だ。

なにせよ何か重要なことを言うかも知れない。集中して聞いとこう。

『おまけにいいスキル持つてる人は攻撃してくるし……いちいち相手するの面倒なんだからやめてほしいよ。こんなかわいい女の子に斬りかかって来るなんて酷いと思わない？』

パニック男も毒気を抜かれたみたいに叫ぶのをやめて、ぶつぶつ文句言うだけになった。

マキナはくすくす笑うとパチンと指を鳴らす。

するとマキナを囲むように五つのパイプ椅子が現れた。

『さ、座って座って。今から試練のルール説明するから』

あたしを含めた五人は顔を見合わせた。

あたしの考えだと今は従うべきだと思う。目線でそれとなく伝えてみると他の三人も同意件みたいだ。パニックお兄さんもあたし達が座るのを見てぶつぶつ言いながら座った。

マキナはあたし達を見回すと満足したみたいに笑顔を浮かべる。こんな時じゃなきゃ抱きしめたくなくなるぐらい無邪気でかわいい笑顔なのに……。

ふわりとマキナの身体が浮かんだ。3mぐらいの高さ、あたしたちを見下ろせる位置で止まる。

プレイヤーキャラ

『さてPCの皆さま、ようこそお集まりいただきました。お楽しみ
の第一の試練です。……とはいっても、まだみんなレベル低いね。

このままなんかと戦わせてもグダグタするだけだしさっさと終わら

せよ』

マキナはそう言うとうん、と唸りながらこめかみに人差し指を当てて考え始めた。

『よし、ううしよ』

ポンと手を叩く。

『みんなは“こいつ死んでよし”って思うやつ指差して。一番多く指差された人が死亡ね』

「な?!」

一瞬何を言ったのか意味が理解できなかった。子供が鬼ごっここの鬼を決めるみたいな軽さで、マキナは死ぬ人間の決め方を言ったのだ。

しかもこいつはたぶん本気で言ってる。言葉に誰が死ぬのか楽しみにしてるような感じがあった。

あり得ない。言葉を失ってしまった。

「それじゃせいでいくよ、せいで……」「ざけんなよ!!!」

さっきまでパニック起こしかけていたお兄さんが叫んだ。

うざいとか思ってたごめん、お兄さん。あたしも今はお兄さんの味方だ。

お兄さんが叫ばなかったらあたしが叫んだ。いくらなんでもむちゃくちゃすぎる。

「なんなんだよそのルール！ お前何がしたいんだよ！」

お兄さんはマキナに詰め寄る。マキナは困った顔をしてお兄さんを見た。

「あやや、お兄さんはこのルール気に入らない？」

「つたりまえだ！」

「そっかー、残念だな」

マキナは手を銃の形にしてお兄さんの額に向けた。

次の瞬間、お兄さんの頭が弾けてなくなった。

「……え？」

辺りに赤い塊が飛び散る。少し遅れて髪の毛がついたままの肉の欠片が落ちてきて、べちゃっべちゃっとな音がなる。

頭のなくなつたお兄さんの身体は糸が切れた人形みたいに床に崩れ落ちた。

マキナがパチンと指を鳴らすと、その身体も辺りに散らばつた肉の欠片も全部消えて無くなった。

「ルールが気に入らないなら参加を強制したりしないよ。やっぱりみんなには納得した上でやって欲しいしね。他の方々にはお見苦しいものをお見せしました」

あたしの思考は完全に停止していた。すぐには理解できなかつた。お兄さんがいたっていう証拠はもう、空いた椅子だけしかない。

い。

それもマキナがもう一度指を鳴らすと消えてしまった。

誰も声を上げなかった。声が出せなかった。

息ができない。……怖い。

怖いよ……。なにこれ……。なんなのよこれ……。怖いよ……。怖い
……。怖い。助けて……。誰か……

「さ、それじゃ“死ねばいいのに”って思う人を指差してください
ね、はい、せうの！」

「ひっ?!」

マキナの言葉にあたしはほとんど反射的に手を動かしていた。

あたしが指差したのは正面にいた女の子だった。そして……

二本の指があたしに向けられていた。

三回目(2)

四人の内、あたしに向けられた二本の指。あとはあたしが女の子に向けてる分と、学者風の人が女の子に向けてる一本。

一番多く指差されていたのはあたしだ。

「はい、けつて〜い。死んじゃうのは朝倉 もこさん。残念でした」

嘘だ。こんなあり得ない。だって……だってあたし何もしてないんだよ？ まだ……まだ何もやってない。ゲームなんですよこれ？ 大丈夫だよ？ 大丈夫なんだよね？

さっきのお兄さんの最期が頭をよぎった。

嫌だ。怖い……嫌だ、嫌だ！ なんであたしが……なんであ
たしだけ！

「あはは、怖がっちゃって、かわいそ〜」

マキナはあたしの前まで降りて来るとあたしの顎に手を当てた。指先で顔を上げさせられる。

「いや……やめて……いや……」

「なんなら助けてあげようか？」

「……え」

「貴女の代わりに他の人を殺すわ。それで貴女は助けてあげる」

優しい声だった。

助けてくれる？ 本当に？ 怖いのも終わるの？

マキナはニコツと笑った。虫をいたぶる子供みたいな無邪気な顔だった。

次の瞬間、感じたことが無いぐらいの痛みがあたしの肩を襲った。マキナがレイピアみたいな細い剣をあたしの肩に突き刺していた。

悲鳴を上げようとしたけど先にマキナに口を塞がれて上げられない。

痛い、痛い痛い！ なんで……助けてくれるって言ったのに……

「ぐめんね。さっきの無し。ルールはルールだもん」

「そ……んな……ひどい……い……」

痛みで声もまともに出せなかった。

涙でぐしゃぐしゃになった視界の中でマキナだけが笑ってる。

「ひどい？ 他の人は死んでもいいって思ったのによくそんなこと言えるね？」

マキナはそう言うにあたしの膝の上で膝立ちになった。

寒気がする。カエルの標本でも見るような眼であたしを見下ろしてる。

「一つ教えとくとね。この試練は“全員、誰も指差さなければ”誰

も死ななかつたんだよ。あたしは誰かを差さないと殺すなんて言うてなかつたんだから。

……だけど！ 貴女は指差した！ 他の人は死んでもいいから生き延びたいって指差した！ これはもう殺されても文句言えないよね？ どうか？ どうか！？」

どんどん声がヒステリックになっていく。

この子は 狂ってる。

「ど……う……して……こんなこと……」

「……それを答えられるようになりたいからかな？ 私達はね、空っぽなの。空っぽだから何かで満たしたいの。たとえばそれが絶望でも」

マキナはまた指をパチンと鳴らす。いつの間にか周りにいた他の人は消えていた。

そしてマキナの手にはあたしの肩を刺したのと同じようなレイピアが握られていた。

「貴女つて苦しくなれば死んじやえばいいって思ってるらしいね？ だったらあとで教えてよ。死ぬのと生きるのどっちがいいか。目を反らさず反らせず、最期の最後まで死ぬ程の死を味わって！」

胸にレイピアを突き立てられた。引き抜いて、突き刺して、笑い声を上げながら何度も何度も。

消える。

消えてく……あたしが……消えて無くなってく。

嫌だ……死にたくない……い……消え……たくない……嫌……だ、こんな
の………

………生きて……た……い………

『朝倉 もこ 死亡』

『特殊スキル、コンティニューの発動条件を満たしました』

『コンティニューしますか？』

『 コンティニューし、ゲームを続きから始めます。残機0 ゲ
ーム再開』

「いやあああああつー!」

「っ?！ もこさん?!!」

「いや! いや……! もうやめて……お願いだから……もうやめてええええつー!!」

「もこさん!!」

……………フィロ………ちゃん?

フィロちゃんの声であたしは我に返った。元の牢屋。フィロちゃんがあたしの手を固く握っている。

生きてる?

身体中汗でびしょびしょだった。息が苦しい。

マキナに刺された場所に手を当ててみる。傷も何もない。

「いきなりどうしたんですか? 怖い夢でもみました?」

夢?

ううん。違う。あれはそんなものじゃない。

あたしは握りしめていた携帯を開いた。ボタンを操作する手は情

けないぐらい震えていた。

浅倉 もこ L V . 2

1 s t ジョブ オタクゲーマー

2 n d ジョブ なし

3 r d ジョブ なし

スキル

コンティニュー (0 / 1)

ゲーム脳

スキル コンティニュー……効果は“死亡した時、一度だけ復活してゲームを続けられる”最初見た時、????????ってなつてたスキル……。

……つまりあれは現実だった。あたしは殺されて、このスキルで生き返った。

「う……くう……」

涙が溢れた。吐き気がした。あの時死んだお兄さんのこと、あたしのこと、身体を串刺しにされる痛みと怖さが頭の中でぐちゃぐちゃになった。

「もう……やだ……こんなの、やだよ……」

帰りたいよ……。つまらなくていいから……。どうでもよくていいから……。元の生活に戻りたいよ……。嫌だよ……。もうこんな……。けど、死にたくない。もう死ねない。あたしは知らなかった。知らなかったから『辛くなったら死んで逃げちゃえがいい』なんて思えたんだ。そんなやさしいものじゃなかった。死ぬのは死ぬほど痛くて怖くて苦しいんだ。あたしは……。何も知らなかった。

あはは、どうしよう。最後の逃げ道無くなっちゃった。

もう逃げ道無いんだ。この地獄をずっと味わっていかないと駄目なんだ。

なら、壊れちゃえがいいのにあたしの心。

壊れて人形みたいになっちゃえがいい。そうすればもう何も感じない。痛いのも怖いのも苦しいのも。

だから壊れてよあたしの心……

このまま売られて性奴隷にでも何でもしていいから、誰かあたしを壊して。誰か、誰か、誰か……

「もこさんっ！」

気がついたらフィロちゃんがあたしを抱き締めていた。

「……フィロ、ちゃん？」

「大丈夫、大丈夫ですよ……。私がついてますから……」

フィロちゃんはさらに強くあたしを抱きしめる。暖かい。すごく
……暖かい。

とくん、とくん、って心臓の音が伝わってくる。

「う……ああ、うあ………」

「泣いてください。泣けば嫌なことも涙と一緒に流れていきますか
ら」

優しい声。心から心配してくれる言葉。さっきまでと違う涙が溢
れてきた。

「う……あ……うあああ……うああああっ！……」

泣いた。泣けた。心の底から。

子供みたいに。あたしより年下のフィロちゃんにしがみついて。

あたしは夜明けまでずっと泣いていた。

三日月(2) (後書き)

どうせキャラをいじめるならこれくらいの方がいいよね？ ね？

とりあえず僕がやりたかったことの一つはこんな感じ、最強主人公マンセーより最弱主人公がつまずいたり落ち込んだりしながら成長していく小説が書きたかったんです(笑)

さて、いじめるのが楽しくなったんで(おい)序盤はゆっくりこっぴどくいじめます。Sな皆さんお楽しみに

三日目(3)

あつたかい。

まるでお母さんに抱かれてるみたい。すごく安心する……。

あいつも、お父さんとお母さんが死んだ時は一晩中あたしを抱いて泣かせてくれたっけ……今頃なにしてるかなあ……

「お目覚めですか？」

「ふえ？」

寝てたみたい。なんかまぬけな声が出ちゃった。フィロちゃんの胸に顔を埋めたまま顔を見上げる。

「あ、あの〜、もこさん？ 起きたのならそろそろ離れて……」

「やだ。もっとこうしてたい」

「……意外と甘えん坊なんですネ」

「そだよ、あたし本当は甘えん坊だよ〜。だからもうちょっと甘えさせてね」

フィロちゃんはちょっと困った顔をしたけど、そのままあたしの頭に手を回して抱きしめてくれた。

本当に気持ちいい。心の中にあつた悲しい気持ちがどんどんほぐれて消えていく。

さらにたぶん一時間ぐらい経った。

ちょっと名残惜しいけど顔を離す。両手を上げてうぐん、と伸びをするあたしを見て、フィロちゃんは嬉しそうに笑ってくれた。

「落ち着いたみたいですね？」

「うん……ありがとう」

窓を見ると太陽はほとんど真上まで昇っていた。

昨日の鬱な気分は泣くだけ泣いてだいぶすっきりした。元々、今までにいろいろ経験したせいか立ち直り早いのもあったしね。

……けどフィロちゃんがいてくれて本当によかった。あの時フィロちゃんが抱きしめてくれなかったら、あたしは本当に壊れてたかもしれない。

『性奴隷にでも何でもしていいから壊して』ってどんだけ病んでたのよあたし。

「朝ごはん、もこさんの分とっておいてもらいましたけど、食べられますか？」

「うん……、ありがとう」

あたしが答えるとフィロちゃんがパンと美味しそうなフルーツの

サラダを持ってきてくれた。

食べようとしたら『スキル。ゲーム脳 発動』ってなって食べ物が消えたけど。なにこの糞スキル。

フィロちゃんが目をまん丸にして驚いてたから『あたしの家系に代々伝わる早食いの魔法』ってことにしといて無理やり言いくるめておく。これは上手く説明しようがない。

というかフィロちゃん本当にいい子だ。あれこれ詮索してこないのがすごくありがたい。ただそれとなく気遣って、話したいことだけ聞いてくれる。

……大丈夫。あたしはもう大丈夫。あたしは生きてる。生きてるんだから大丈夫。あの時のことは仕方なかったんだ。あれでパニック起こさない人間なんてそうそういない。悪いのはマキナだ。

それと、死ぬのが怖いのも当たり前。今までが異常だっただけ。むしろこれで普通になったんだ。

うん、ポジティブにポジティブに……考えるのやめよ。思い出したら気持ち沈んできた。

気分を変えよう。というか今日は魔法の練習っていうお楽しみイベントがあるんだ。そっちに集中しよう。うん、そうしよそうしよ。

というわけで魔法に関する準備を初めてもらった。

フィロちゃんは兵士の見回りが来ない時間を狙って石で床に魔法陣みたいなのを書いていく。こう言つと悪いけどミミズがのたうつたみたいなの変な文字がいつぱいだ。

「じゃあ、この陣の真ん中に立つてください」

「これでいい？」

あたしが陣の真ん中に立つとフィロちゃんが呪文みたいなのを唱えた。すると陣の文字が光だしてあたしを光が包んだ。なんだか頭がポーツとしてくる。

「魔法の素養は大丈夫みたいですね」

「……そなの？ 何かよくわからないけど」

「はい、この光が出るのは魔力を持っている証拠なんです。それじやいよいよ、本格的に魔法を覚えましょうか」

フィロちゃんがそう言つて呪文を唱えると魔法陣の光が消えた。本当にファンタジーだなあ。

「さて、それでは始めましょうか。魔法を覚えるのに重要なのは三つ。まず魔力……これは大丈夫ですね。次に呪文を暗記する記憶力。そして呪文を理解する読解力です」

うわ！？ めんどくさい気配満点だよ？

「ぐ、具体的にはどうするの？」

「まずこれから最も初歩的な火の魔法【ファイア】の呪文を教えませぬ。それを暗記して、詰まらず言えるようになったら呪文の意味を正しく理解していきます。魔法っていうのは、呪文を正確に詠唱し、それに意味を乗せることで初めて使えるんです。……慣れない内は詠唱短縮もできないですから大変ですよ？」

「ヤバイよ!? 早くも不安でいっぱいだよ!? めんどくさいどころのレベルじゃないよ!？」

「ち、ちなみに呪文ってどんな?」

「え、一度聞いただけじゃ絶対に覚えられないと思いますけどいきますね。」

『母なる大地よ。我が声を届けよ。まつろわぬ火精よ。我が声を聞け。我が名はフィロ、汝らが主、サラマンダーと契約せし者なり』
（中略）……ゆえに我は第三の契約に基づき汝らを使役する権利を得た。望むは炎、我に与えよ【ファイア】』

無理です。

フィロちゃん早口でぶつ通して唱えて30秒以上かかってたよ。なにこの鬼畜難易度。この世界の人ってみんな天才かなんかなの？

う、、厳しいなこれ。ゲームなら魔法の名前唱えるだけなのに……

“ゲーム”なら？

「…………【ファイア】」

『スキル。ゲーム脳 発動』

ポウツ！ と手の平の上に火が灯った。

「おおっ?! マジで使えたよ?!」

「い、いきなり詠唱破棄?! もこさん天才ですか?!」

フィロちゃんが唾然としてあたしを見る。気分いい。

「…………にしてもちよっと小さいなあ」

「この皆には魔力抑制の結界が張られてるからですよ、外に出ればもっと強くなります。」

…………というかもこさん本当に初めてですか？ 私なんて詠唱破棄で
きるようになるまで一年かかったのに…………ちよっとジェラシーです
…………」

そのあとは魔力に関する知識を教えてくださいましたが、そっちなもだ
いたいテンプレですぐに覚えれた。

要するに魔力もゲームでいうMPみたいに制限が有って、魔法を
使う度に魔力は減る。魔力切れの時は魔法が使えない。しばらく休

むと魔力は回復する……と、こんな感じ。

そうやって勉強していたらさっきまでベッドに横になっていた、腕に鱗の有るお姉さんが近付いて来た。

「あんた……本気でここから逃げる気？」

「ん？ ああ、うん」

「どうして？ ここにいれば外よりはまだ安全よ？ 食べ物はあるしモンスターに襲われることもない。それにあんたは自分が美人だって気付いた方がいい。

あんたみたいなのが外でふらふらしてたら、男共に捕まって慰み物にされるのがオチさ」

……たしかにそうだ。外が安全かとか考えてなかった。

もしかしたらここに残って、どっかのお金持ちに売られて、ひたすら言うこと聞いてた方が安全なのかも知れない。

けど。それでもあたしは行きたい。

「あたしは行くよ。確かに外は怖いかもしれないけど……死ぬのは死ぬほど怖いけど……あたしはあたしでいたいから。辛いのずっと我慢して誰かの言うこと聞くなんてあたしは絶対嫌だ」

そう言ったらお姉さんはため息をついた。

しゃがんでフィロちゃんに文字を書くのに使っていた石を取る。

「……うちの種族が使ってる魔法、教えてあげる。あんたはなかなか才能が有るようだから覚えられるだろう」

「え？」

お姉さんはちょっと照れたように笑った。

「うちらにはもう必要無いけど、外に出る気のあるあなたならいろいろ必要だろう？ 遠慮なんて許さないよ」

「……………ありがとう」

そうしてあたしはお姉さんに別の魔法を覚えてもらった。

お姉さんと話してたら他の人も来たりして、魔法教えてくれたり生きるための知識を覚えてくれたり……とにかく得たものはかなり多かった。

具体的に言うと

まず【ファイア】

フィロちゃんに教えてもらった火の魔法。手から火を出して投げたり燃やしたりする。魔力の消費が少ないらしくて使いやすい。

二つ目が【サイキクス】

お姉さんに教えてもらった、物を浮かべる魔法。食事に出されたお盆程度の重さの物なら自由に浮かべて動かすことができる。ただ、ちよつと魔力食うみたい。

三つ目が【ヒール】

エルフ耳の子から教えてもらった説明不要の回復魔法。ただ、これはかなり魔力使う。二回連続では使えなかった。

あとは調合とか食べられる植物とかいろいろ。携帯にメモしていく

のが大変だった。

そんなこんなで三日目の後半分は有意義に過ぎていった。

四日目(1)(前書き)

誰かー、この小説読んでる人でアーマード・コアV買う人いませんかー？ リア友で買う人いなくて寂しいんですよー

野良でオペ子やっても絶対指示に従ってくれない気がする今日この頃(笑)

さてさて、“神さまとゲーム脳と過守護な殺戮竜”略して“神ゲー”そろそろもう一人の主人公が出てきます。そこからは、もちやんとそいつの視点をちよくちよく入れ換えながら話を進めようと思いますので一応ご報告をば。

四日目(1)

びじりじり。

深夜。時間は0時を過ぎたところだ。昨日のことも有ったし、0時を過ぎるまでは起きておくことにした。

ベッドに座って携帯を操作するあたしの隣でフィロちゃんがちょっと身体を丸くして寝てる。

楽しい夢見てるのかな？ 時々しつぽがパタパタ揺れてる。

本当にどうしよう。

さすがにこれはまずい。いくら何でも引かれる。

そんなことを考えながら、あらためてフィロちゃんの寝顔を見た。

……ドキドキする。

最初会った時の「犬耳かわいい〜！」って感じじゃなくて、その……ときめいてる。

あたしフィロちゃんにときめいてる。

いやいや、冷静になれあたし。相手フィロちゃんだよ？ 女の子だよ？ そりゃフィロちゃんかわいしいしっかりしてるし気が利くし頭いいし空気読むし甘えさせてくれるしいい子だし犬耳だしっば付きだけど……女の子だよ？

たしかにあたしは女の子キャラに萌えたりするよ？ ギュッしたりされたりしたいって思ってたけど、恋愛となるとちょっと……いや全然違う。

寝ているフィロちゃんの頭をそつと撫でてみる。「ふにゅ……」って言って気持ち良さそうに笑う。
胸がキュンとしてしまった。

だめだめだめだめ！ やっぱ無理！ というかこんな気持ち知られて嫌われたらそれこそ立ち直れないよ！？
心臓がドキドキすぎてやばい。フィロちゃんに聞こえたりしないか心配になってくるぐらい。

落ち着けー、深呼吸ー。もうちょっと冷静にー。

とにかく今はまずい。さすがに引かれる。なんかするならもつと友好度上げてフラグも立てて……いや、いつそのことどうにかして既成事実を作って……あれ？ なんか変？

『最初は純愛チックだったのになんだか変な方向に話が行ってるよー？』

「ひっ　　?!」

いきなり笑いながら宙に現れた白いマキナにあたしは硬直した。

『ああ、怖がらなくていいよ。私はマキナだけど試練を与えるマキナじゃないからね。違う意味での試練を与えるのは大好きだけど』

突然現れたマキナは膝を抱えた格好のまま、クスクス笑ってあたりを見下ろす。

あれ……？ マキナだよな？ 顔立ちとかは昨日現れたあの黒いマキナそのものだ。

だけど今日の前にいるのは髪もドレスも真っ白で瞳だけが赤い。

見た目もそうだけど何より違うのが……雰囲気。黒いマキナはなんとというか……狂気みたいなのを感じたけど、この白いマキナからはそんな感じがしない。いたずらっ子みたいな印象しかなくてなんか……警戒心がわかない。

『さて、おめでとう浅倉 もこさん。あなたはLV・5になりました。だからボーナスあげるね。ああ、それと私の姿も声も他の人には見えてないし聞こえてないし、そもそも周りのNPCは私がいなくなるまで絶対に起きないから、そこは安心していいよ』

「……LV・5？ ボーナス？」

『そ、携帯でステータス確認してみてよ』

あたしは白いマキナに気を付けながら携帯を操作した。

1stジョブ オタクゲーマー
2ndジョブ かけだし魔法使い
3rdジョブ なし

スキル

コンティニュー (0/1)

ゲーム脳

魔法LV1 NEW

またレベルが上がっていた。それにジョブも追加されてる。

『確認したね？ 私は一定レベルごとにいろんなボーナスを届けるのが役割なの。何か欲しいボーナスある？』

「……………不死身になる薬かこの世界から脱出するアイテムが欲しい」
『はい却下。というよりボーナスはもともと私が勝手に決めることだし聞いたただけなんだけどね』

……………やっぱり性格は悪い。

白いマキナは探偵よろしく「うん」と顎に手を当てて考えている。

少しして何か思い付いたのかパチンと手を叩くとあたしの携帯を指差した。

『あなたの携帯にマップ機能をつけてあげましょ』

「マップ機能？」

『そ、マップ機能。周辺の地図や他のPCの位置を表示する機能です。有効活用してね』

そう言うとフツとマキナは消えてしまった。

牢屋の中に静けさが戻る。

来る時と一緒に帰るのも突ぜ 『ああ、それと』

……また出てきた。

マキナはニヤニヤ笑いながらフィロちゃんを指差す。

『フィロちゃんと周りの子たち、朝まで絶対目を覚まさないようにしといたから何かするなら今のうちだよ？』

「……………は？」

『だから、しつぽもふもふしたり耳フニフニしたり、ぎゅーってしたり、ちゅーしたり、あんなことやこんなことしたり』

ちよ？！ な、何こいつ？！ 意味わかって言ってるの？！ 顔

が一気に熱くなった感じがした。

あんなことやこんなことってつまり……………その……………あんなことやこんなこと？

「…………………………そ！ そんなことするわけないでしょ！」

『あはは 今の間は何かなく？ ああ、戻ってきたついでに一つ

神様からのお告げ言っとくね』

マキナはそう言ってあたしを指差した。

『最強の盾は最高の盾とは限らない。けど、最高の盾は最強の盾になれる。最高の盾となるために最強を捨てることを望んだ彼は何を護れる？ ……護られる者が支えてこそ、盾は護りたい者を護れる』

まるで歌うように、マキナはそう言った。不思議と耳に、頭に染み透るような声だった。

「……………どういこと？」

『それはその時のお楽しみ、それじゃ今度こそ、またね〜！』

マキナはまた姿を消した。今度は戻ってくる気配もない。

なんだっただらういたい。

一呼吸して携帯を操作してみる。マップ機能って言ってたけど……あつた。

アプリの欄にそれらしいのが有った。さっそく起動させると今いる砦の見取り図らしき物が出てきた。

階段の位置。牢屋、扉、罾の位置。切り替えると各階のマップが出てくる。かなり詳しい。これは脱出に使いそん？

マップを切り替えて砦周辺のマップを出した時、砦の近くに人の形したマークが二つ有った。

マキナの言葉を信じるならあたし以外の召喚された人かしら？

しばらく見てるとその二つのマークは砦の周りを移動し始める。
何してるのかな？

……ん。まあ、今のあたしには関係ないだろうし、とりあえずもう寝よう。いろいろあつて疲れた。

明日……いや、もう今日ね。このマップをよく見て頭に叩き込んでこよう。

それと意外な効果があった“ゲーム脳”あれはもう少し効果を検証すべき。あたしの勘が当たってるなら、あれは予想外にいいスキルかもしれない。

あたしは静かに目を閉じた。

……ぎゅーってするぐらいならいいよね？

夜が明けた。

「アイテム、しまっ」

目の前にあつた小石がフツと消えた。

朝、わりと早く目が覚めたあたしはさっそくスキル“ゲーム脳”

の検証に入っていた。

昨日の魔法の一件で確信したけど、このスキルはただご飯が味わえないだけの糞スキルじゃないみたい。

いや……もしあたしの勘が全部当たってるならとんでもないスキルだ。

「アイテム、まとめて取り出す」

あたしがそう言つと十個程の石が宙に現れてバラバラと床に散らばった。

床に散らばった石を見て、全部にチェックマークを入れる。……

“チェックマークを入れる”ってなんだって言われてもうまく説明できないけど、とにかく頭の中で石にチェックマークを入れていく。

「アイテム、まとめてしまう」

床に散らばっていた石がまとめて消えた。

とりあえず試したけど予想が当たっていた。

ゲームでよくある仕様として、ドラ もんの四次元ポケットみたいにあり得ないぐらいに大量のアイテムを持ち歩くつてのがある。

どうもこれができるみたい。あたしがしまうつて言つと物が消え、取り出すつて言つと頭の中でした物の一覧が出てきて物を取り出せる。

そついえば薬草とかの回復アイテムとかはどうなるかな？ 一瞬で回復できたりするなら敵に出会つても薬草使いまくりのゴリ押し

で乗りきれぬかも。……痛いのは変わらないだろうけど。

さらに実験を続ける。

まずはベッドをしまおうとしたけど……これは無理だった。あまり大きな物はしまえないみたい。

次に寝てる子の握りしめてた毛布をしまおうとしてみる。……無理と。けど毛布だけなら普通にしまえた。誰かが持つてるやつも無理なことかな。

え〜と、他には……

ベッドに腰かけ、石を取り出してチェックを入れる。で、転がしてみた。

石はコロコロ転がって……だいたい1mちょっとでチェックが外れた。

この辺りが物をしまえる範囲ってことね。うん、だいぶわかってきた。

だんだん脱出の準備が整ってきた。

あとはタイミングね。ベストなのはやっぱりあたしが誰かに買われて、砦の外に出たあたりかしら？

……いや、駄目だ。あたしがここに来た初日、エルフ耳の女の子

が連れて行かれる時に首輪を付けられていた。

後でフィロちゃんに聞いたことだけど、あれは魔法や身体能力を封じるための物らしい。

あたしの頼みの綱は魔法だ。それが封じられると逃げられるかわからないし、あのお姉さんが言うには外は危険だそうだ。できれば万全な状態で逃げたい。

……というかそれ以前に、そういう目で見られたりあそこを触られたりする時点で絶対やだ！ 論外！

女の子をなんだと思ってるの！？ あのエルフ耳の子を連れていったやつのこと、思い出しただけで殴りたくなってくる！

となると兵士から鍵を盗むってのがいいわね。

スキルのゲーム脳で鍵をしまっちゃえばあたり以外には取り出せないし証拠も残らない。

たぶん鍵を盗むのは難しくない。兵士がよく腰のベルトに鍵の束をぶら下げてるの見るし、あたしの能力なら手を近付けただけで鍵を“しまえる”。ちよっと隙さえ見つけければ大丈夫。

あとは深夜にタイミングを見計らって牢屋を出て、マップを見ながらこっそり脱出ってとこかな？ 段ボールとかの脱出用アイテム無いかしら？

「もごさん？ どうしたんですか？」

「ひゃっ！」

後ろからフィロちゃんに覗きこまれて悲鳴をあげてしまった。
フィロちゃんはクスクスと笑う。

ど、どうしょ！ 心臓の音ヤバイ。

「大丈夫ですか？ 顔赤いですし、心臓の音もずいぶん早くなってますけど」

「し、心臓の音聞こえるの?!」

「ええ、まあ近くなら」

フィロちゃんの犬耳がぴくぴく動く。犬耳は伊達じゃないのね……
「どうかどうするよこれ!? 鎮まれ! 止まれ! あたしの心臓!っ!!」

「風邪ですかね? 寒気とかしません? 昨晚も私に抱きついてましたし」

へ?

「お、起きてたの?」

「まあ、少しだけ」

「いつ?」

「もこさんがあのケータイっていうのを閉じて私に抱きついてきた辺りです」

……あんの邪神! 絶対に目を覚まさないって言ったのにどんだけ性格悪いのよ馬鹿!っ!!

うわあああつ！ 終わったあああ！ 完璧終わったーっ！
首周りのもふもふをクンカクンカしたり胸に顔埋めてへヴン状態に
なつてたのバシたああつ！ 殺せーっ！ いっそ殺せーっ！！
うわあああああん！！

「あの、もし寒気がしたりするならもう少しくっついてみましょうか？」

「今なんと？」

「ですから。もう少し抱き合つてみましょうか？」

「いいの？」

「あれ？ 知つててやつたんじゃないんですか？ 私たち狼人族は
寒い時は家族みんなでくっついて暖をとりますから、親しい同性同
士が抱き合つて眠つたりするのはわりと普通なんですよ？」

「……抱きしめてよかとですか？」

「なんか言葉変に……きゃっ！？」

返事を聞く前にあたしはフィロちゃんに抱きついていてた。

うっ。あたし今幸せかも。

……もしこのまま脱出しちゃつたらもうフィロちゃん会えないの
かな……

「ねえ、フィロちゃん……」

「はい？」

「ちょっと話が……」

「ただどあたしが話そうとしたその時、牢屋の外で重い鉄の扉が閉まる音が聞こえた。」

「今の音……！」

「あたしが来た初日にエルフ耳の子が連れて行かれたのを思い出した。」

「大勢の足音が近付いてくる。」

「ずかずかと牢屋の前まで来たのは立派なマントを着けた大柄な、中年の男だった。」

「少し遅れていつもの見張りの兵士と、たぶん男のボディガードらしい全身鎧姿の兵士が四人続く。」

「ほう、また上玉を仕入れたな」

「男は牢屋の前で足を止めるとニヤニヤしながらあたしとフィロちゃんを見た。」

「上から下まで、舐めるように見られる。」

「気持ち悪い。」

「しばらくの間、あたしとフィロちゃんを見比べるみたいに視線が行ったり来たりした。」

「よし、それでは“あれ”をもらおう」

男が指差していたのはあたしだった。

四日目(2)

“あれ”というのが自分を差していることに気付くのに少しかかった。

頭が真っ白になる。

すぐに鉄格子の扉が開かれて兵士が入ってくる。

心臓が縮みあがった。

初日のこと。エルフ耳の子がされたことを思い出して背筋が凍る。

前と同じならこのあと……、あたしは……

「いやあっ!?!」

状況を把握した時には兵士に手首を掴まれていた。抵抗しようとしたけどびくともしない。

「やめてっ! いや! 助けて! 誰か……! くう……【ファイ……】」「もこさん!?!」

魔法を撃とうとした瞬間フィロちゃんが突然大きな声を出した。びっくりしてあたしも兵士も動きを止める。

フィロちゃんは立ち上がって鉄格子に近付くと男に向かって丁寧に頭を下げた。

「あの子の代わりに……、私を買っていただけませんか」

「フィロちゃん?!」

なんで！？ そんな……

男の方は不機嫌そうにフィロちゃんを見る。

「奴隷が生意気なことだな。自分を買えと言っか」

「……………はい」

フィロちゃんは男の手を取る。そしてこともあるつにその手で自分の胸をわしづかみにさせた。

頭に一気に血が昇った。

「あんた！ なにや…むぐっ?!」

怒鳴ろうとしたら腕に鱗があるお姉さんに口を塞がれた。
離してよ！ フィロちゃんを止めないと！

「馬鹿……………！ あの子の気持ち無駄にする気？」

お姉さんに耳元で言われた。

気持ち？ どういうこと？

「ここで騒ぎ起こしたらあんたもう絶対逃げなくなる……………。だからあの子は……………」

え？

頭から血が降りる音が聞こえた気がした。

男の方を見るとニタニタしながらフィロちゃんの胸を揉みしだいていた。

怖いからか、恥ずかしいからか、フィロちゃんの身体がプルプル震えてる。

「私の胸……気持ちいいですか……？」

震える声でフィロちゃんは言った。

「……ふふ、悪くないな」

「……どんなことでもします。だからどうか……」

「なら靴を舐めてみる」

男が鉄格子の隙間から足を入れてきた。

フィロちゃんは少しためらいながら四つん這いになってそれを舐める。

やだ……やめて、やめてよ……。

あたしは血が出そうなほど強く唇を噛んだ。

もういいよ……。そんなフィロちゃん見たくないよ……。だから、だめ、お願い……

「ははは！ なかなか淫乱な牝犬だ！ 気に入った。おい！ こいつを部屋へ連れていけ！ 商談が済んだらさっそく楽しませてもらおう」

フィロちゃんが連れていかれる。

「フィロ……ちゃん……」

一瞬あたしと目が合ったフィロちゃんはニコリと笑った。
やめて……どうしてそんな顔するの……

フィロちゃんが牢屋から出され、首輪を付けられる。そしてそのまま首輪に付いた鎖を引かれて連れていかれた。
遠くで重い鉄の扉が閉まる音がした。

「フィロちゃん……」

あたしはふらふら鉄格子に近付いていった。
やるせなくて思い切り鉄格子を殴りつけた。痛い。
ずきずきと痛む手を押さえながらその場に膝をつく。

悔しくて、痛む手で今度は石の床を殴り付ける。

どうしてこんな辛いことばかりなの!? フィロちゃんが……フ
イロちゃんがこの世界で見つけた幸せだったのに……フィロちゃ
んがいてくれるなら辛いことも頑張れると思ったのに……

いつそのこと、あたしも一緒に買ってくれればよかった……
脱出とかもどうでもいいから……フィロちゃんという方がいい
……。ううん、フィロちゃんと一緒なら辛くてもきつと頑張れる。
嫌なことがあってもきつと立ち直れる。

……あの男、もう一度戻って来ないかな？

そしたら色仕掛けでもなんでもやってやる……好きでもない男にHなことされるのは嫌だけど。すごく嫌だけど。独りぼっちになるのはもつと嫌だ……。もう独りになりたくないよ……。

その時、また鉄の扉が閉まる音がした。

戻ってきた!?

あたしは顔を上げる。突然のことにあわてた。え、えっと、色仕掛けって具体的にはどうすればいいんだろ？ ふ、太ももとか見せればいいんだよね？

……けど足音が全然違った。というか妙だった。

たぶん足音は二人分、その内の一人の足音が カラン コロンって、まるで下駄をはいてるみたいな小気味いい音を立てている。

けど下駄？ ないでしょ。この世界って西洋ファンタジーでしょ？

そうしてる間に カラン コロンという足音が近付いてくる。

「ふむ……このあたりのはずなのじゃがのう」

「ふえ？」

現れたのは……その……ロリッ娘だった。

腰まで届く長い黒髪で、きれいな赤い着物着てて。腰に刀を下げた12歳ぐらいの美少女が、たどたどしい手付きで携帯いじりながら カラン コロンと歩いてくる。

悲しむのも忘れて思わずポカーンとしてしまった。ついに幻まで見え始めたのかと疑ってしまう。

女の子は携帯から目を上げるとあたしの方を見た。

「のうおぬし、少しよいか」

「は、はあ」

「この辺りに“浅倉 もこ”という子はおらんか？ 探しておるのじゃが見つからんのでのう」

は？ ますます混乱してきた。なんでこのしゃべり方が独特な子
はあたしの名前知ってるの？ こんな子と知り合いになった覚えな
いよ？

「浅倉 もこはあたしだけ……」

「おお！ おぬしか！ 神埼！ 神埼こっちじゃ！」

あたしの位置からは見えないけど、その子はもう一人に手を振って
るようだった。

神埼？ なんか聞き覚えがある気がする。

近付いて来たもう一人は男だった。年はたぶんあたしとあまり変
わらない。

くわえ煙草でこれまた世界観無視の学ラン姿。

腕と足には銀色のガントレットとレガースを付けている。

その人はあたしの前まで来ると腰を落としてあたしと目線を合わ

せた。スポーツマンっぽい日焼けした顔。ちょっとはにかんだように頭を掻く。

「あ……。もこ姉か？」

「……………え？」

「俺のこと覚えてるかな……………」
「神崎 竜斗」ほら、昔よく一緒に遊んでたろ？」

その言葉を聞いて一瞬ぽかんとしてしまった。どこかで聞いた名前……………頭の中にその言葉がゆっくり染みてる。

神崎 竜斗……………りゅう君?! なんで?! どうして?!

思い出した!“ 神崎 竜斗” それはあたしの幼なじみの名前だ。

あたしより一つ年下。小さい頃からいつも一緒に、まるで弟みたいなやつだった。

……………けど、小六の時にあたしのお父さんとお母さんが死んで、おばあちゃんの家に取り取られてからは一度も会えなかったけど、まさかこんなところで……………

……………普通に考えて信じられない。

りゅう君がたまたまこの世界に来て、たまたまこの誓にやって来て、たまたまあたしに出会ったとか明らかに偶然ってレベルじゃない。性格の悪いあのマキナのことだし、偽物か何かの可能性も

……んむぐつ?!

いきなり口の中に何か突っ込まれた。なに?! 毒?! ……ん?
甘い?

「なに難しい顔してんだ? というかその顔、もしかして泣いてたのかよ? 飴食べる、元気であるぞ」

口に突っ込まれたのは飴だった。ついでによくみたらりゅう君がくわえてたのも煙草じゃなくて棒付きの飴だった。

口の中に広がる素朴な味。……そういえばりゅう君、飴大好きでいつも舐めてたっけ。その記憶の中の顔と今、目の前にいるやつの顔が重なる。

「……本当にりゅう君?」

「だから言ってるだろ? 俺は神埼 竜斗。もこ姉の幼なじみで弟分みたいなもんだった神埼 竜斗だ」
そう言ってりゅう君はニカツと笑う。

同じだ。あたしが覚えてるりゅう君と同じ笑顔だ。

……やば、また泣きそう。
胸がなんか暖かくなってきた。

「どっか怪我とかしてないか?」

りゅう君は優しい手付きで、確認するようにあたしの身体を触ってくる。

頭を触って、肩を掴んで腕を握って。

ちょっと恥ずかしいけどなすがままにされておく。心配されるのも今は悪い気がしない。

ムニユッ

……こいつ今どこ掴んだ？

いやいや、さすがにね。こんな事故ぐらいはあたしが大人になって大目に……

ムニユッ

……両乳……だと……？

その時点ですでに明らかに事故じゃない。そのまま手があたしのお腹の辺りを通り、下半身に伸びていく。あたしの中で何かがぶち

切れる音がした。

こいつは 敵だ。

「じゃの……！」

「ん？」

「変つ態……！」

「づぶづぶ……！」

きよとんとした顔に、あたしは思い切りグーパンチを叩き込んだ。

四日目(3)

「な、なにすんだよ?!」

「うっさい! 本気で感激してたのにこのド変態!! 最っ低!!」

「いやなんだよ?! 俺が何したってんだよ?!」

「自分の胸に手を当てて考えてみなさいよ!!」

本当になんなのよこの変態!? しかもあんなことやってとぼけるとか死ねばいいのに!

「まあまあ、二人共落ち着かんか。今はそんなことやっとなる場合でもなかるう」

着物の子が間に入ってきた。

あいつは「はい師匠」って言うておとなしく引き下がる。

師匠? なにあいつ。

着物の子はあたしに目を向けると柔らかく笑いかけてきた。かわいいい。

「はじめましてじゃの。わしは神埼の武術の先生をやっとなる“赤川恋次”という者じゃ。おぬしと同じくこの世界に連れて来られた口じゃな。よろしくの」

「赤川……恋次?」

なんか男みたいな名前……ていうかもろに男の名前。正直まったく似合わない。せつかくこんなにかわいいんだから親ももつといい名前付けてあげればよかったのに……

そんなことを思ってたら、それに気付いたのかその子は渋い顔をして腕を組む。

「むづ……やはり違和感があるか……では恋ちゃんとも呼んでくれい。ママにはそう呼ばれておったしのう」

恋ちゃん……ね。まあそれならいいか。

けどこの子、和風な感じなのにお母さんのことママなんて呼ぶんだ。

「ん……まあ自己紹介はともかく、恋ちゃんとそっちの変態はどうしてこんなところにいるの？」

「経緯を話すと長くなるので後に回すが、おぬしを助けに来た」

「……助けに？」

「うむ、弟子の頼みというのと同じ境遇ということでの」

恋ちゃんは腕を組み、堂々と小さな胸を張る。いや……助けにたつて……ねえ？

「……え〜と、気持ちは嬉しいんだけど見付からない内に早く逃げた方が……」

「なんでじゃ？」

「なんでって……ほら、危ないしこの牢屋の鍵も無いし……」

恋ちゃんは「ふむ」と牢屋の鉄格子を見た。小さな手でコンコンと叩いて、何かを考えるみたいにあごに手を当てる。

「まずはこっちからじゃな。ちょっと離れておれ」

そう言っただけ恋ちゃんは腰に差した刀を抜いた。キラリと光る白い刃。あたしが一歩下がると刃を鉄格子に向ける。

「……………むん!!」

恋ちゃんは“Z”の形に刀を振った。

鉄格子がバラバラになって崩れた。

……………つてええええっ?! 今何したこのロリっ娘?! あたしの手首ぐらいの太さの鉄格子がバラバラになったよ?!

「これで問題解決じゃの、さあ行くぞ。そろそろ気付かれる頃じゃ」

恋ちゃんは呆気に取られるあたしの手を取る。

な、なんか知らないけど凄そう。これなら脱出できるかも……

……………駄目だ。

「このまま行ったらフィロちゃんと離ればなれになる。たぶんもう会えなくなる……」。

「しゅめん……」

あたしは恋ちゃんの手をほどいた。

「友達が連れていかれたの、もしかしたら戻ってくるかもしれないから待ってないと……」

「友達が連れていかれた？」

恋ちゃんの後ろに下がってたあいつが突然反応した。

なにこいつ。いきなり反応して。まさかフィロちゃんが女の子だから興味示したとか？ だったらリアルにぶっ殺すよ？

あいつはあたしに近付くと携帯をチラリと見て、またあたしの方を見た。

「その友達っていうの、もこ姉にとってどれぐらい大切な人なんだ？ そいつはもこ姉にとってどういう存在だ？」

本当になにこいつ。どれぐらい大切？ どういう存在？ いきなりそんなこと言われても……さ、さすがに片想い中なんて言えないし……

「し、親友？」

「そういう漠然としたのじゃ駄目なんだよ……」

いや駄目って何よ！？ というかさっきから何言ってるのこいつ！？

「それじゃあ……。もしその子を俺が助け出したら、もこ姉は俺の言うことをなんでも聞くって約束できるか？ それぐらい大切か？」

「……は？」

「だから俺がもこ姉の親友を助ける。そしたらもこ姉は俺の言うことをどんなことでも聞く。どんな面倒なことでもどんな恥ずかしいことでもな。これ、約束できるか？ それぐらいの覚悟を決めれる相手か？」

心臓がバクバクし始めた。

い、いや、な、なんでもって……。か、確実にやらしいことする気満々だよ！？」

というか久しぶりの再開で胸わしづかみにしてくるやつだし絶対あんなことやこんなことして……

あまつは薬使われて調教されて輪されて……。最終的には抜けることができない快樂地獄に墮とされ性奴隷に……

い、いや、さすがにこれは同人誌読みすぎにしても間違いないやらしいことはされる。つつか恋ちゃんの前でなんて話してんのよこいつは！

……。けど、それでフィロちゃんにまた会える……？

「……約束したらフィロちゃん……。あたしの友達助けてくれるの？」

「それは約束する」

「絶対に？」

「ああ」

「絶対の絶対の絶対に？」

「絶対の絶対の絶対にだ」

「……わかった」

「後で取り消したり逃げたりはさせないぞ？」

「……うん。いいよ……それでフィロちゃんを助けてくれるなら……」

身体から力が抜ける。何か大切な物を無くした気がした。顔を上げてみたらあいつはニカツと明るく笑っていた。本気で殺したい。

「おい邪神。これで“過守護”の発動条件満たせるな？」

いきなり何も無い方向に喋り始めた。

なに？ 変態でゲスで鬼畜な上に厨二で電波なの？ 宇宙から電波受信してるの？ ほんと手の施しようがないわね。

「よし、それじゃ大丈夫だ。師匠、もこ姉頼みます」 あいつはそう言っただけ上がる。恋ちゃんも小さく頷いた。

「よいのか？ わしに任せてしまって。本音は自分で護りたいんじゃないの？」

「俺が10人いて護るより師匠が一人いる方が安心ですからね」

「ふふ、それでは弟子の期待に応えられるように気張るとしようかのう」

二人は拳をコツンとぶつけ合った。
恋ちゃんがあたしの手を引く。今度はあたしも素直に外に出た。

「わしらは先に脱出しておく。神埼、おぬしもフィロとやらを助けて早く追いついて来るのじゃぞ」

「はい！」

あいつは力強く返事すると気合いを入れるように強く息を吐く。

「もこ姉、そのフィロって子のわかりやすい特徴とかないか？あと最近まで使ってた物とか」

……写真なら一応あるけど……

あたしは何も言わず携帯に保存してたフィロちゃんの寝顔を見せた。

「……なんで寝顔なんて撮ってるんだ？」

「う、うっさい！」

あいつはしばらく携帯に写ったフィロちゃんを見ると小さく頷いて顔を離す。

「よし。あと最近まで使ってたやつ。毛布とかそっついののは？」

……あるけど、何に使う気こいつ……。とりあえず言われた通りにフィロちゃんが使ってた毛布を渡した。……で、あいつはそれに

顔を埋めた。クンクンと匂いを嗅いでいる。

うわぁ……うわぁ……行動が変態過ぎて言葉を失ってしまった。

あいつはしばらく匂いを嗅ぐと毛布をあたしに返して立ち上がる。

「よし、それじゃ言うてくる」

「……あんだ、フィロちゃんの居場所とかわからないのにどうすんの？」

「大丈夫」

柔らかく、そしてなんか嬉しそうに笑う。

「心配せずに待っててくれよ。“今度こそ”約束は守る」

そう言い残してあいつは走り去って行った。

四日目(4)(前書き)

牢屋長っ!？ とか言わない。お兄さんとの約束だ。

だいたいの舞台が整う7日目までは超ゆっくりやります。

そっからはメインイベント以外は1日1〜2話おーキンググクリムツン！ を使う予定。

とりあえずそれまでは気長にお付き合いくださいな。

四日目(4)

side 神崎 竜斗

もこ姉の見た目もだいぶ変わってたな。いや、まあ見た目はいいんだ。可愛かったし。けどいきなりグーで殴ってくるような性格だったか？

……また俺何かやらかしたのかな？

石の階段を二段飛ばしでかけ降りる。

もこ姉が言ってたフィロって子の匂いは下の階層に続いていた。

階段の踊り場から一気に飛び降りて着地。そのまま廊下を駆け抜ける。

砦の中は少し騒がしくなっているようだった。

たぶん師匠が暴れ始めたんだろう。もこ姉のことはあの人に任せておけば間違いない、おかげで俺はこっちに集中できる。

誰か来る。走りながら聴覚に意識を集中した。鎧や剣が擦れる音、緊急事態で緊張した感じの呼吸音、歩幅の広い足音。……敵の兵士だ。

固く拳を握る。タイミングを合わせ、曲がり角から飛び出して来た兵士を出会い頭に殴り倒した。

「な、なんだお前は!？」

もう一人が剣を抜く前に顎を蹴り上げた。兵士は短い悲鳴を上げて床を滑る。

『おゝ、りゅう君かつこいい』

「引つ込め邪神」

白いマキナがいきなり俺の隣に現れた。それに構わず再び走り出す。マキナは空中に寝そべった体勢のままついてくる。

『おーい、スルーしないでよー』

「お前に構ってる暇なんか無い」

『ひどっ!? 神様なんだから敬ってよ!』

「敬って欲しいなら何かいいことしろ!」

デウス・エクス・マキナ

俺たちをこの世界に召喚した神で俺たちにとって最悪の敵……のはずなんだが、こいつはことあるごとに俺の前に現れる。

俺が特殊な立ち位置のPCだから気になるらしい。

ただ、もこ姉がこの世界に来ているとわかったのも、完璧に姿が変わってしまった師匠と早い段階で合流できたのも一応はこいつが教えてくれたおかげだ。

信用するかは微妙だが白いマキナは『“面白い限り”人間に手は出さない』と言っていた。

実際にいい情報もたまにくれるし、今のところは利用させてもらっている。

「……おい邪神。一つ答えろ」

『だから私は神様だよ！ 邪神じゃないよう！ で、何？』

「……あゝ、俺……もこ姉に何かしたか？ なんかやたら怒らせたみたいなんだが……」

俺が言うと思いい出し笑いたみたいにマキナは笑い始めた。

俺がもこ姉に殴られた時も笑い転げてたなこいつ。訳もわからず笑われるのは腹たつな……。

「……おい！」

『あはは あれは傑作だったねー！ 答えを言うとりゅう君のスキルの効果の影響だよ。

前にも言った通り、りゅう君の固有スキル “過守護” がりゅう君の “衝動” を封じてるんだけど、それに巻き添えみたいな感じで幾つかの欲求や知識なんかも一緒に封じられちゃってるのよ。

だから意識しないでもこちゃんを怒らせるようなことしちゃったの』

いまいちわからん。

「……何とかならないのか？」

『スキル制限系の薬でも使えばいけると思うけど、その場合 今まで抑圧されてた欲求が暴走しちゃうと思うよ？ もこちゃんのことレイプしちゃうかもよ？』

「レイプってなんだ？」

『うあ〜。そういうのも忘れちゃってるか。めんどくさいな〜。えーっと、レイプっていうのはー』

そこまで言ってマキナはいたずらっぽく笑った。

『というか変態ー。それ私みたいな女の子に説明させる気かな？
かな？』

……とりあえずまずい言葉らしい。もこ姉に聞くのはやめとこつ。後で師匠にでも聞くか。

『ま、それだけで済んだら万々歳なんだけどね実際。“衝動”が暴走したら私達以外、誰にも止められないもん。だから気を付けてね？』

「……お前に心配されるなんてな」

『まあね。私が興味を持ったのは“暴走しなかった”りゅう君だもん』

そう言つとマキナはフツと消えてしまった。……と、フィロつて子の匂いがだいぶ近付いてきた。廊下の突き当たり。両開きのかい扉。速度を緩めず肩から思い切り突っ込んだ。

扉を突き破るとそこはやたら派手な寝室だった。
すぐに左右に視線を走らせる。

いた。でっかいベッドの上で下着姿で女の子に覆い被さっているおっさん。そしてそのおっさんに両腕を掴まれベッドに抑え

込まれた、裸で犬耳の女の子。この子だ。この子がフィロだ。

「え……？」

「な、なんだ貴様は！」

問答無用で踏み込み、振り向いたおっさんの顔面に蹴りを叩き込んだ。グチャアという気味悪い音に背筋がゾワゾワする。

おっさんはそのままベッドから転げ落ちた。

俺はベッドの前に着地してフィロを見る。

「ひっ……！」

ビクツってされた。まずい、恐がらせたか？

「あ、あの！ わ、私はただの奴隷で……」

「違う違う！ 俺はもこ姉に頼まれてあんたを助けに来たんだ。…と、え、あんたがフィロで間違いないな？」

「は、はあ。……あ」

フィロは何か気付いたみたいにあわてて布団を被った。

なんだ？ ああ、素っ裸だとさすがに寒いか。

布団からぴよこんと顔を出したフィロは視線を右往左往しだす。

顔が妙に赤いし風邪でも引いたのかもしれない。

俺の服でも貸してやるか。

そう思って服を脱ぐのに邪魔になる腕のガントレットを外した。

ビクリとフィロの身体が震えた。目を見開いて俺の腕に付いている数枚の“黒竜鱗”を見ていた。

黒色の尖った形をした鱗で、俺がマキナに目を付けられたきっか

けだ。

「竜……人族？ うそ……？ あれは昔話じゃ……」

驚愕したという感じの目。……この子なら犬耳とかしっぽ付いてるし大丈夫かと思っただが……やっぱり見慣れないか。

俺はそのまま学ランを脱ぐ。フィロが一気に怯えた表情になったけど、俺が「これ着ろ」って言って学ランを渡すとホッとしたような、拍子抜けしたような顔をして受け取る。

「あ、ありがとうございます……あの……えっと……」

「神埼 竜斗。まあ話は後だ。とにかくここを出るぞ。もこ姉が待ってる」

狼狽しているフィロの手を掴む。「待てっ！！」

さつき蹴り飛ばしたおっさんが起き上がった。鼻が変な方向に曲がり、鼻や口の周りが血でべたべただ。寝てりゃいいのに。

「貴様あ！ よくも貴族である私にこのような……おい！ 近衛兵！！ 早く来んか！！」

おっさんが叫ぶと隣の部屋から四人、全身鎧を着た男が部屋に入ってきた。訓練されると一目でわかる動きで俺とおっさんの間に入る。

俺もフィロの前に立ち兵士の前に立った。だが今は脱出優先だ。やり合う意味も無いしできれば戦闘はしたくない。

「……おっさん。頼むからこのまま逃がしてくれないか？ お互い痛い思いはしたくないだろ？」

「今さら命乞いしても遅いわ！ お前ら！ その男を殺せ！」

その言葉で兵士達が一齐に剣を抜いた。俺はフィロの手を引き自分の背に隠しながら拳を握る。

身体の中で血が熱くなる感覚。深呼吸してそれを静める。

四人……ガントレット外したのはまずかったな……

「リ……リュウトさん！」

フィロが俺の腕にしがみついてきた。

「もういいです！ 十分です！ だからお願いです！ 逃げてくださいー！ このままじゃ……」

泣きそうになっているフィロ。女の子に泣かれるのは苦手だ。頬にそっと触れる。

「気にすんなよ。かわいい女の子を護るのは男の権利って言うだろ？」

「……え！？ あ……あの？」

フィロはおろおろとしはじめる。見ているとなんか子犬みたいで可愛い。

「はは、本当にかわいいな」

安心させようとフィロの頭をくしゃくしゃ撫でた。……おお？
この犬耳ふにふにして気持ちいいな。

「~~~~っ?!」

フィロの身体がビクンと震えた。頬が一気に赤くなる。耳が熱い。
やっぱり風邪なのかもしれない。

「はああああっ!」

兵士の一人が斬りかかってきた。

けど気負いがある。後ろ蹴りでその手から剣を弾き飛ばし怯んだ
ところに突きを放つ。

俺の拳は兵士の鎧をへこませ正確に急所に衝撃を通した。

攻式 鎧通し。

師匠から習った鎧を着た相手を倒すための技だ。まさか異世界で
役に立つとは思わなかった。

さらに斬りかかってきた兵士が胸に振るった剣を足のレガースで
弾き、そのまま兜の上から上段蹴りで首を刈り取った。

二人目、この程度ならまだ楽しよ 俺の腕を剣閃が切り裂いた。

「っ!?!」腕の傷口から鮮血が溢れた。

三人目が斬りかかってくる。他と動きが違う。

こいつは 強い!

左右に振るわれる剣の速度が段違いだ! ガントレットを外した

俺は本気で馬鹿か！？ まともによりあうのはまずい！

一文字に振られた剣を伏せて避ける。

続けざま、流れるゆうな動作から兵士が上段から振り下ろした剣をほとんど身体を横倒しにして脛のレガースで無理やり受け止めた。

床に視線を走らせる。さっき倒した兵士の剣と俺のガントレットの落ちている位置を確認。

体勢が崩れる前に側転して距離を取りつつ、剣とガントレットを拾い上げた。

手の中で剣を逆手に持ち変え投げつける。

敵の兵士がそれを弾く間に駆ける。二人目に倒した兵士が持っていた剣を拾い上げつつ、振り下ろされた剣をガントレットを盾に防いだ。

こんなのと戦ってられるか！ なら狙うは一つ。人体も組織も頭が急所だ。

兵士二人の脇をすり抜け、剣の切っ先を貴族のおっさんの喉元に突き付けた。

「退け。じゃなきゃ殺す」

ドスの聞いた声で脅す。他の兵士の動きが止まった。おっさんは目を剥いて俺を見る。

「う……貴様……何なんだ……」

「聞いているのは俺だ」

男の首に剣の切っ先を沈ませる。血が流れ、男の顔がみるみる蒼白になった。

「くう……ひ、退くぞ！」

男はそう叫ぶと兵士を連れ足早に部屋を出ていった。

……とりあえずこの場はしのげたか。ホッと息を吐く。……いや、安心するのは早い。早く脱出しないと。

「リ、リュウトさん！ 大丈夫ですか!？」

フィロが駆け寄ってきた。俺の手を見て口を覆う。

「ああ!？ ち、血がこんなに……!」

「大したことねえよ。それよりそっちは大丈夫か？」

「は、はい。けど……」

フィロは心配そうに俺を見ている。いい子だな、と素直に思う。高校にいたギャル軍団とはえらい違いだ。こういうところも、もこ姉が気に入ってる理由だろうな。

「そんな顔せず笑ってくれよ。そのために俺も頑張ったんだから」

「え？ こ……こうですか？」

言葉通りに受け取って、フィロはぎこちなく笑顔を作った。思わず笑ってしまった。その表情を見るとこんな時なのについ和んで

しまじ。

「わ、笑わないでくださいよ……!」

「はは、悪い悪い。……ほんと、やっぱりかわいいなお前」

「っ??!」

「俺、お前のことなんか好きだな」

「っ??!??!」

火が付いたようにフィロの顔が真っ赤になった。

「うおっ!? なんかもた顔赤くなつたぞ?! おいおい、やつかない病気じゃないだろうな? とりあえず早く連れ出してやらないと。」

「行くぞ」

「きゃっ??!」

フィロの足と肩を持って抱き抱える。俗に言うお姫様抱っこというやつだ。流石に病人に走らせる訳にはいかない。

「あ! あの! えっと……!」

「ん? 悪い。どこか痛かったか?」

「い、いえ……ただその……素敵な男性にお姫様抱っこしてもらったの……小さい頃からの夢だったので……」

「……あゝ、なんかよくわからんがまずいことしたか?」

「……………いえ」

フィロは目を伏せてボソボソと呟く。

「夢が叶いました……………」

「お、おお、そうか。良かったな。……………じゃあ、落ちないようにし
がみついでてくれよ?」

「……………はい」

フィロは俺の首に手を回す。

密着した胸から感じる心臓の音がかなり早い。

本当に大丈夫か? なんともしなければいいんだが……………。

四日目(5)(前書き)

一応りゅう君の簡易データです。読み飛ばしOK

名前 神崎 竜斗

年齢 16

種族 黒竜の竜人(詳しくは作中で)

もこの幼なじみで元弟分。もこの両親が死んだことをきっかけに離ればなれになってしまったがとても仲が良かった。

子供の頃はやんちゃな子だったがとある理由から年齢に合わない程大人びた考え方をしている。

また、もことの再開時等にとんでもないことをやらかしたが、これにもやむにやまれない事情があった。

四目(5)

side 浅倉 もこ

フィロちゃん大丈夫かな……。

地面に腰を下ろして空を見上げながら、あたしはそんなことばかり考えていた。

一緒に行けなかったのが悔しい。本当なら自分で助けてあげたいのにりゆう君に頼るしかないなんて……。

もっとあたしが強かったらよかったのに。というか大丈夫だったのかなあ、あいつに任せて。変態だしあいつ……もしかしたらあいつがフィロちゃんに……

「どうしたのじゃ浅倉？ そのような怖い顔をして」

恋ちゃんがちょっと心配そうにあたしを見てくる。

「なんでもないよ」とごまかしながら、草場の向こうに見える皆の方を見た。

あたしたちは皆を脱出して近くの森に隠れていた。少し肌寒くて、針葉樹みたいな葉の尖った植物が多い。

待っているだけだと心配になる。無理やりでも一緒に行けばよかつたかも……。

「大丈夫かな……」

「心配するでない。女の一人も助けられんようなやわな鍛え方はしとらん」

「……恋ちゃんはいつのこと信頼してるんだ？」

「もちろんじゃ。わしの自慢の弟子じゃからの！」

えっへんとばかりに胸を張る恋ちゃん。かわいいんだけどなんか変わってるのよね。しゃべり方おじいちゃんみたいだし。

「おお！ 来たぞ！」

「ホントに!？」

恋ちゃんが指差した方向を見ると、りゅう君が学ランを着たフィロちゃんをお姫さま抱っこして走ってきて、そのままあたし達が隠れてる草影に飛び込んだ。できた。

「お待たせしました。師匠。もこ姉」

息を弾ませてそう言いながら、りゅう君はフィロちゃんを下ろす。

「フィロちゃん!！」

「も、もこさん!？」

あたしはフィロちゃんの胸に飛び込んだ。
よかった……よかったあ……！　またフィロちゃんに会えた！

潰れちゃいそうなくらい、力いっぱい抱きしめる。伝わってくる体温さえ本当に嬉しい。フィロちゃんもくすりと笑うと「やっぱり甘えん坊なんですネ」なんて言っただけ抱きしめ返してくれた。

本当に……一時はどうなるかと……

そうだ。りゅう君にもお礼しな　げっ？！

ビクッてしてしまった。

りゅう君の腕からどくどくとたくさんの血が出てて、着ているワイシャツを真っ赤にしている。

「ちょ、ちよつとあんた大丈夫！？」

「ん？　……ああ、舐めときゃ治るだろ」

い、いや！？　あり得ないでしょ！？　てかなんでそんな平気な顔してんのあんた？！　そ、そうだ！　牢屋で回復魔法習ってたんだ！

「ヒ……【ヒール】……！」

あたしの手から白い光が溢れる。

それがりゅう君の腕に触れるとみるみる内に傷口が塞がっていく。

「「お、おー」」

二人で思わずそんな声が出た。

光が消えるとそこには元通りの手があった。

「い、今の回復魔法ですか?! け、けどあんな傷を治せる回復魔法なんて……」

フィロちゃんが驚いてる。

反応から見るにどうも普通の回復魔法ではあの怪我を治すの厳しいみたい。

たぶんこれもゲーム脳の効果かな? ゲームじゃHPさえ回復すれば回復だし、折れてようがえぐれてようが関係ないもんね。……やっぱなにげに凄いわねゲーム脳。

「と……で、あなたは大丈夫? 痛くない?」

りゅう君は手の具合を確かめるように手をグーパーさせてる。

「大丈夫だな。サンキュ、もこ姉」

「お礼を言うのはあたしの方だよ」

あたしは姿勢を正して、できるだけ丁寧に頭を下げた。

「ありがとう。あなたのおかげで……その……なんとなくあったわ。本当にありがとう」

心からの感謝の言葉だった。もしあの時こいつと恋ちゃんが来てくれなかったらと思うと……ゾツとする。フィロちゃんとまた一緒にすごせるようにしてくれただけでいくらお礼してもし足りないぐらいだ。

「なに、気にするなよ」

そう言っつてりゅう君はニカツと気持ちいい笑顔を返してくる。

お？ ちよっとかっこいいじゃん。そういえばりゅう君小学生の頃からけっこうモテてたっけ？ 懐かしいなあ

「ああ、けど俺とした“言うこと聞く”って約束は忘れるなよ？ きっちり守ってもらうからな？」

忘れてたああああっ？！ しまった！ こいつ変態だった！
なに見直したとかかっこいいかもか思っつてんのあたし？！ ど
うしようどうしようどうしよう！？

落ち着け…… 落ち着けあたし。 落ち着いて素数を数えるんだ。
どうする？

1・逃げる…… 逃げてどこ行く？ この世界危ないらしいし、フィ
ロちゃんの安全も考えると……

2・ごまかす…… 実力行使されたら無理。

3・殺す…… よっぽどじゃない限りあたしが無理。

うっ……、どうしよう。

諦めるしかないのかなあ。実際こいつが助けてくれなきゃもつと悲惨なことになってたかもしれないし……。

それに、こいつのことだから下手したらフィロちゃんに手を出し
かねないし……

それならもう……あたしが身代わりになってでもフィロちゃんを
護るしか……

それに身体は許してもあたしの心はフィロちゃんに捧げ「あの、
リュウトさん！」

フィロちゃんがりゅう君に近付いていく。

……あ、あれ？ 何か顔が赤い気がするけどなんで？

「この度は……その、本当にありがとうございました！ ま、まだ
ちゃんとお礼を言ってなかったの！」

「ああ、お前も気にするなよ。俺はもこ姉に頼まれただけだからな
りゅう君がそう言うのと、フィロちゃんは少し不安そうな顔であた
しを見た。な、なに？」

「もこさんとリュウトさんってどういった関係ですか？ もしか
して……恋人……ですか？」

「ち、違う！ 「冗談じゃないわよそんなやつ！」

あたしが叫ぶとフィロちゃんはホッと息を吐いた。

え？ いや、なんでそこで安心するの！？　なんでしつぽパタパタ揺れてんの！？

「あ、そ、そういえばちゃんと自己紹介してませんでしたね！　わ、私は狼人族のフィロって言います！　15歳です！　こ、ここ………恋人はいません！！」

だ、だからなんでわざわざ恋人はいないなんて言うの？！
おかしいよフィロちゃん！？

「おう。これからよろしくな」

「は、はい！　え、えっと、こ、今回のお礼もありますし私にできることなら何でも言うてくださいね？　そ、その………何でもしますから！」

フ、フィロちゃあああああんっ？！

「ほう、これはこれは」

恋ちゃんがニヤニヤしていた。りゅう君の隣に行くと「っのっ」と脇腹を小突く。

「てっ！？　な、何してんですか師匠！？」

「いやいや、弟子の成長が嬉しくてのう。僕念仁じゃと思っておっただが………まったく、こんなかわいい娘さん相手に………」

「い、いやなんのことっすか？」

きよとんとするりゅう君。その前でフィロちゃんは顔を真っ赤にしてあわあわしてる。

もしかしてりゅう君……気付いてない？

「よいか？ わしから言うことは一つ。手を出すのなら責任は持て、じゃぞ」

「は、はあ。よくわからないけどわかりました」

「い、いや！ わ、わわ私はべべ別にそんなつもりじゃ……！
……け、けど……その、どうしてもっていうなら……その……」

「おいフィロ？ 大丈夫か？ 顔真っ赤だぞ？」

「は……は……は……」

なんなの、このコント……

あたしは大きいため息を吐いた。

そして日も暮れた頃

砦からさらに離れ、あたしたちは綺麗な水の流れる大きな川の河原でたき火を囲んでいた。薄暗くなつた中で火の粉を散らしながら燃えるたき火はすごく綺麗だ。

りゅう君と恋ちゃんはこの荷物を置いていたみたいで、布団や食べ物、着替えなんか置いてあつた。

あたしとフィロちゃんは水浴びして汗を落とした後に少し仮眠して起きたところ。

りゅう君は食材の幾つかを鍋に入れて料理をしていて、恋ちゃんは刀の手入れをしていた。

「それにしても本当に信じられないです。まさかこうやって外に出れるなんて……特にもこさん、恋さんと二人でよく脱出できましたね？」

「あはは……」

実はあたしの方は思いの外簡単に脱出できた。というか恋ちゃんやんがチート過ぎた。

兵士相手にリアル 国無双するのは刀で壁を切り刻んで道を作るは、あたしを背負つて砦を囲つてる塀を飛び越えるはでやりたい放題。

確かにさ。ゲームとかに出てくるロリっ娘がチート性能だったりすることはよくあるけどさ。あたしとの性能差ひどくない？ 泣くよ？

「んで、これからどうする？ 行きたい場所とかあるか？」

りゅう君が鍋をかき混ぜながら言った。
なんかいい匂いがしてくる。

そういえばこれからどうすんのかな？ 脱出ばかり考えてたけどその後はノープランなのよね。この世界のこと自体ほとんど知らないから当たり前だけだ。

……あのマキナの試練もあるから、レベルアップはしとかなないといけないし。

「あんだ達は？ 行きたい場所とかないの？」

りゅう君と恋ちゃんに聞いてみたけど答えはあたしと同じだった。

「それじゃフィロちゃんは？ 行きたい場所ある？」

「私ですか？」

フィロちゃんはちよつと目を伏せる。

「できれば故郷に……帰りたいです」

「故郷？」

「はい。私は行商人のお父さんと一緒に旅してる時に拐われて奴隷にされたのですが……。できれば故郷に帰って家族と再会したいです……」

「よいのではないか？ わしは賛成するぞ」

恋ちゃんが刀の具合を確かめながら言った。目付きがまるで職人みたいだ。

「けど、オオイグに乗って行っても二〜三週間かかるんです。さすがに願うするのは……」

「二〜三週間か。なら急がないとね」

「もこさん？」

オオイグ……馬みたいな乗り物かしら？ 何にせよマキナが言っていたゲームの期間にけっこうギリだ。明日からでも急いでいかないよ。

「二人も良いよね？ 目的地会った方が張り合いあるし、フィロちゃんを故郷に連れてってあげよ？」

「うむ、わしは構わん」

「俺も。……おし、そろそろできたかな」

りゅう君が作った料理ができたみたいだ。野菜スープみたい。

「あのニンジンみたいな野菜は抜いてくれ」という恋ちゃん。

その言葉を見無視してニンジンみたいな野菜を山盛りに入れて、「『好き嫌いはするな』ですよ？」と渡すりゅう君。

涙目になる恋ちゃん。

兄妹みたくて和んでしまった。そういえばこの二人本当はどういう関係かな？ 武術の師匠と弟子って聞いたけど正直納得できないし。

……いかがわしい関係だったらと思うと怖くて深く聞けない。

「ほら、もち姉とフィロも。口に合えばいいけど」

そう言ったりゆう君はあたし達にも器を渡してきた。

二人でお礼を言って受け取った。

野菜のスープ。いい匂い。

フウフウと冷ましてひとく 『スキル。ゲーム脳発動』

……忘れてた。器の中身が一瞬で消える。

ヤバイなこれ……食べ物を目わえないって意外と精神的にくる。

あれ？ けど皆でりゆう君がくれた飴は普通に食べれたよね？

あれ？

「おお！？ もち姉早いな？ どうだった？ 旨かったか？」

「あ、う、うん。美味しかったよ」

あまりに無邪気に聞いてくるからついそう答えてしまった。すごく嬉しそうな笑顔を返してくる。

実際どうなんだろう？ もちちゃんの方を見ると 「おい……

……しい……」

フィロちゃんがすごく驚いた顔をしていた。

「す、すごいです。素材が完璧に調和してるというか、フユキビの

実の甘味とナツマトの実の辛味がいいアクセントになって……こんな美味しいもの初めて食べました！」

「んな大げさな……。ま、ありがとな。そう言われると作ったかいがある」

そんなに美味しかったんだ……。

やば、また泣きそう……。なんか泣き虫になっちゃったなああ。これくらい我慢しないと。こんなので泣いてどうする。我慢我慢。

「お料理がうまい男性……。いえ、お料理がうまいリュウトさん、素敵です……。」

泣いた。

おまけ フィロの遠話魔法“声便り”

前略

この空の続くどこかにいるお父さんへ。

私は元気です。心配かけてごめんなさい。このメッセージが届いていることを祈って毎日あちこちに遠話魔法“声便り”を飛ばします。

あの日、行商先の街で誘拐されて、奴隷として売られそうになってしまいました。奴隷商の牢屋で知り合ったもこさんと、そのお友達のリュウトさんとレンさんという方々に助けていただき、今は自由の身です。

しかももこさん達は私を故郷の村まで送ってくれと言っんです。こんな素晴らしい方々に出会えたことには感謝しないといけませんね。

えっと、せつかなのでもこさん達のことを紹介しておきますね。どんな人が知ってもらった方がお父さんも安心できると思いますし。まずもこさんのことから。

人間なのに狼人である私とても仲良くしてくれる心の広い方です。

少し変わってたり常識知らずなところが多いですけど……すごく

いい人です。それと私より年上なんですけど、たまに甘えん坊で妹みたいでかわいいです。

ああ、あと一瞬でご飯を食べる『早食いの魔法』とか、何もないとところから物を取り出す『アイテムボックスの魔法』っていう一風変わった秘伝の魔法を使えるんですよ。将来、行商の旅に役立ちそうだから教えてくれるように頼んでるんですけどなかなか首を縦に振ってくれません。けど頑張ります。

次にレンさん。

東方の国の『和服』っていう珍しい服を着た女の子です。

まだ幼いんですけどすごくしつかりしていて頭も良いんですよ。

なんだか話していると私の方がずっと年下みたいに思えてしまいます。

……こう言うと怒られそうですけど少し爺臭い感じも……ほ、本人には秘密ですよ？

ただ、意外と恥ずかしがりみたいで、水浴びに誘ったら「お、おなごがそのようなこと言うでないわ！」って逃げちゃったんですよ。まだ馴染めてないんでしょうか？ ……今度また誘ってみようと思います。

……さ、最後にリュウトさんっていう方の紹介ですな……。

え、えっと……とっても強くて優しくてかつこよくて誠実な素晴らしい方です！

そ、その……わ、私のこと助けてくれたのはこの方で……えっ……、あの、あ、お料理がすごくお上手です！ 一緒に行商に出れば毎日美味しいもの食べられますよ！ そ、それに家事全般が得意らし

いですから一緒に来てくれたら私も助かるなー、なんて……あ、あれ？ 私何を……

そ、それと……あの……も、もうすぐ私たち狼人族の発情期の時期ですよ？ い、今までは魔法薬で抑えてましたけど、今はその魔法薬がありません。ですから……その……も、もし我慢できなくて……あ、い、いや……べ、別に普通だったら魔法薬無しでも我慢できる自信は有るんですけど。も、もしも……もしもですよ？ もし素敵な男性が現れたりしたら我慢できずに……そ、そういうことしちゃうかもって……

け、けどその時はちゃんと責任取ってもらいますから！ そうなったら三人で一緒に行商の旅しましょうね？

そ、それではこれで！

PS・料理道具、新しいの揃えといてください。

おまけ フィロの遠話魔法“声便り”（後書き）

おまけです（笑）

シリアス続きっぱなしだからちよっとぐらい息抜きしたかったんです

あゝ、早くほのぼののシーン書きたいです……

一応 説明

遠話魔法“声便り”

自分の声を魔力で包み、遠く離れた相手に飛ばす魔法。よつするに手紙の声版みたいなもんです。

外に出れたのでどこかにいるはずのお父さんに宛ててあっちこっちに飛ばしてるんですねww

これが届いた時お父さん……どんな顔するでしょう（笑）

五日目(1)

「……きれい」

夜空を見上げると満天の星空。たき火にあたりながらそれを堪能する。

手を伸ばせば届きそう。それぐらい近くに感じる。
プラネタリウムでは見たことあるけど、本物は圧倒的だった。

文明万歳な生活してたあたしだけど、この星空を見ただけで心が震える。自然も悪くないな、なんて思ってしまう。

時刻は深夜。もうすぐ日付が……変わった。

少し様子を見てみるけど今日も試練は無いみたい。ホツとして白い息を吐く。

「とはいえ問題が先送りされただけじゃがのう」

恋ちゃんがボソツと呟いた。

なんか恋ちゃんはこういうところ妙に大人びてる。

クーデレ？ こういう子が思い切りデレてくれたらかわいいだろ
うなあ……『お姉ちゃん』とか言って甘えてきて欲しいなあ……あ
！？ いや！ あたしはフィロちゃん一筋だよ！？

……フィロちゃんは椅子がわりの丸太に座ったまま、りゅう君にもたれ掛かって眠っていた。

もたれ掛かるならあたしにすればいいのに、どうしてわざわざりゅう君の隣に行つて寝るかな……。寝てるのになんか顔が嬉しそうだししつぽパタパタ振ってるし。

「……もこ姉？　なんか俺を見る目やたら鋭くないか？」

「気のせいでしょ。それよりフィロちゃん起こさないようにね」

にしても、こいつは本当にりゅう君でいいのかな？　確かに笑った顔とか昔の思い出とかはりゅう君だったけど、少なくともりゅう君は変態ではなかった。

それにあたしの覚えてる限りではちよつとカッコつけて、背伸びしたがるタイプ。元気な弟って感じのかわいいやつだった。

いくら五年経ってるって言ってもこんな落ち着いた感じになるかしら？　一応もう少し警戒しといた方がいいかも……。ってこら！　あたしのフィロちゃんの頭撫でるな！　というか代われ！

N P C……元からこの世界にいた人は深夜0時に必ず寝ちやうようだ。

それまで普通に話してたのにいきなり「眠たくなってきた」って言つて眠ってしまった。

りゅう君や恋ちゃんに聞いたけど、二人が見て来た限りでも深夜0時までにはN P Cはいきなり眠たくなって寝ちゃってたらしい。つまりはマキナの試練にはN P Cは気付かないようになってるってこと。

なんともご都合主義というかなんというか。神様には何でもあり

みたい。

「さて、フィロを故郷に帰すのはいいとして、これからどうするのじゃ？」

「ちょっと北に行ったところに町があるらしいから、そこでフィロちゃんが言ってたオオイグって乗り物を探しましょ」

恋ちゃんに携帯に表示したマップを見せる。

「ほう、地図か。便利なものを持っておるのう」

「レベルアップのボーナスでもらったの」

「ふむふむ、……いい機会じゃしそれぞれ持つておるスキルや道具、それにこの世界に来てからの経緯を話し合わんか？　これから一緒に行動するなら知っておいた方がよかるう」

確かにそうね。二人がどんなステータスかも気になるし。

りゅう君を見ると棒付きの飴を舐めながら頷く。飴　何個目だあいつ。

とりあえず一番シヨボそうなたしから話した。

奴隷のことにフィロちゃんとの出会い。後はあたしのへんてこなスキルとか。

「ゲーム脳……また変なスキルだなもこ姉も」

りゅう君は苦笑いを浮かべる。実際変なスキルだから言い返せない。

「けど変じゃないか？ 皆じゃ普通に俺があげた飴舐めてたろ？」

「なのよね。さっき試しにりゅう君の飴食べてみたけど消えちゃったし、なんでだろ？」

「ふむ」

恋ちゃんはじっと手に取った飴を見つめている。

「浅倉、口を開けてみよ」

「へ？」

「ほれ、アーンじゃ、アーン」

そう言いながら飴をあたしに近付けてくる。

ヤバい！？ かわいいよ！？ アーンってしてくる恋ちゃん
かわいいよ！？

本当は『お姉ちゃん、アーン』とか希望だったけどこの『浅倉、アーンじゃアーン』ってのも普通にあり！ むしろクーデレっぽくて正義！ ああ、もう恋ちゃんの方を美味しくいただきたい！

「あ、あゝん」

パクツと口の中に飴が入った。あれ？ 消えてない。口の中に素朴な甘さが広がる。

恋ちゃんは満足したように笑った。

「ふむ、どうやらおぬしのスキル。能動的に何かする場合には発動するが受動的に何かされる場合は発動せんらしいの」

あ、なるほど。だから皆でも普通に食べれたんだ。

というか恋ちゃん頭いいなあ。難しい言葉も知ってるし子供とは思えないわね。

口の中で飴をコロコロ転がす。

そうなるど誰かに食べさせてもらえばいいわけね。フィロちゃんに『アーン』って……うふふふ。

「さて、次は俺が話すか」

りゅう君がくわえていた飴の棒をたき火に向けて吹き捨てながら言った。

携帯を操作してステータスの画面を出すと携帯をあたしに渡してきた。

神崎 竜斗 L V ・ 1 4

1 s t ジョブ 過守護者

2 n d ジョブ 武道家

3 r d ジョブ なし

スキル

過守護（守護対象を護るのに特化する）

拳闘術 L V ・ 5 （中級拳術使用可能。格闘の威力に補正）

料理上手 L V ・ M A X

クスツと笑ってしまった。

料理はステータスのお墨付きなんだ。あとけっこうレベル高い。

「この過守護ってというのはどんなスキル？」

「あゝ、悪い。それは言えないんだ。スキルの目的に反する結果になる危険があるから言えないらしい」

らしい？ スキルの目的に反する？ なんかよくわからないけどまあいいや、そこまで興味無いし。

ステータス画面を消してりゆう君に渡す。お、待受画面初代ガンムだ。好きなのかな？

「さてと、じゃあ話すぞ。

俺の方は旅の商人のテントで行き倒れとして扱われてた。あゝ、俺の方はちよっと特殊でな、異世界ってのはすぐにわかって、もこ姉

や師匠がこの世界にいるのもすぐ教えてもらった」

「教えてもらった？ 誰に？」

「悪い。それも口止めされてるんだ。言ったら“面白くない”らしい」

「だからその“らしい”って何よ？」

「すまん。本当に言えないんだ。口止めたやつが性格悪くて……
うじうじ？！」

いきなりりゅう君が、まるで誰かに後頭部を殴られたみたいに顔面から地面に突っ込んだ。

けど見回したけど誰もいない。一人芝居？ なにしてんの？

というか口止めか、こいつ話さないこと多いわね。

その後のりゅう君の話でもたびたび“教えてもらった”ってのが出てきた。

話終わってもかなり納得できない部分が残った。要約するとその誰かに教えてもらって恋ちゃんと合流して、あたしを助けにきたってことらしいけど。

「次はわしじゃな」

恋ちゃんが見るからに不馴れな動きで携帯を操作してあたしに渡してきた。さてさて、恋ちゃんはどんなステータスかしら？

赤川 恋次 L V ・ 6 3

はい？

赤川 恋次 L V ・ 6 3

1 s t ジョブ 武帝

2 n d ジョブ 英雄

3 r d ジョブ なし

スキル

武帝（剣術、拳闘術、練気術の L V ・ M A X）

英雄（魔王討伐ボーナス。全ステータス二倍＋名声効果）

一騎当千（対多数でステータス上昇。戦闘による疲労無し）

装備品スキル

神龍の太刀（魔王討伐ボーナス。防御無視攻撃）

天狗の下駄（魔力消費により身軽さを上昇）

なんぞ?!

いやいやいや、63!? 魔王討伐!? なにこれ!? 何が起きてんの!?

「わしの方じゃが、まず目を覚ました場所が魔王とやらの城でのう」

恋ちゃんが話始める。……って魔王の城?! 難易度ルナテ
イツクモード?!

「少し様子を見てたんじゃが魔王というのが人々を奴隷として使っておつての。あまりにもその扱いが酷かったので決闘を挑んだんじや」

挑む普通!?

「で、倒したのじゃ」

倒すなあああつ!?

「魔王のやつめ、わしを甘くみてまるで本気を出しておらんでの。不用意に近付いてきたところを居合で仕留めた。まったく、慢心は身を滅ぼすと言つに」

いやいや魔王様は悪くないよ?! 本気だつたら普通は大人げないって言われるよ!?

「そして魔王を倒したらその配下の連中が『やつを倒せば俺が次の魔王だ! ヒヤッハー!』とか言いながら襲ってきた。で、それつらを返り討ちにしてじゃの」

もつツツコミ疲れた……。

「気付いたらこのレベルじゃった。ふふ、ボーナスを渡しにきたマキナとやらが口をあんどりさせておるところはなかなか痛快だったわい」

そりゃあんどりするでしょ……。初日で魔王討伐て……。ん？

なんか一瞬、焚き火から離れた暗闇の中で何か光った気がした。目を凝らしてみる。けど何も見えない。気のせいか……。「危ないっ！！」

いきなりりゆう君に突き飛ばされた。直後にさっきまであたしの頭があつた場所を何かが通つて地面に刺さる。

矢？ え？ なに？

りゆう君にもたれ掛かつていたフィロちゃんが地面に頭を打って悲鳴を上げた。恋ちゃんが自分に飛んできた矢を刀で弾いた。

何?! 何が起きてんの?!

「敵だ! もこ姉! フィロ! しつかりしろ!」

「大勢いるようじゃ! 気をつけよ!」

りゆう君と恋ちゃんが声を張り上げる。フィロちゃんが跳ね起きてたき火を背にして身構えた。

敵?! 敵つてなに?! 何が襲つてきてんの?!

たき火から少し離れると完全な暗闇。敵の姿は見えない。音も無くなり、焚き火だけがパチパチと枝が弾ける音を鳴らしてる。

怖い。敵はどこ……！？ どうなんの！？

呑み込まれそうな暗闇が怖くて、あたしはりゆう君の背中に隠れていた。我ながら情けない。けど身体が動かない。怖くて、勝手にガタガタ震える。

「まつろわぬ光精よ」

しんと静まり返った中でフィロちゃんの澄んだ声が響く。

「求むは光。照らせ！ 太陽の如く！【トーチ】」

フィロちゃんが呪文を唱えて手を上げると閃光弾みたいな光の玉が空にうち上がった。それが破裂して太陽みたいに辺りを明るく照らす。

「ひっ！？」

ずらりと、周りを覆い尽くすぐらいの数がいた。あたしたちを襲って来てたのは武器を持った半魚人みたいなやつだった。

全身がヌメヌメした鱗に覆われた、人の形をした怪物。飛び出た丸い目がギョロギョロ動いてあたしたちを見る。

「水妖……！ モンスターです！ 気をつけてください！」

フィロちゃんが叫ぶのとほとんど同時にそいつらは向かってきた。
「こっち来る?!」

「きゃああああっ!?!」

「もこ姉下がね!」

りゅう君があたしの前に立ちそいつの顔面を拳で叩き潰した。青みがかった血が飛び散る。

「蹂躞せよ炎!【フレイム】」

フィロちゃんの手から大きな炎が出て半魚人を燃やす。

恋ちゃんが半魚人の塊の中に飛び込んで縦横無尽に太刀を振り、次々と敵の首を切り裂いていく。

辺りに半魚人の悲鳴が響いて、血が、肉が、飛び散る。

「う……あ……」

りゅう君が蹴りで半魚人の頭を割った。

恋ちゃんが何匹かを連続で胴切りにして真つ二つにする。

フィロちゃんが呪文を唱えて何体かまとめて吹き飛ばした。

周りに飛び散る血、内臓、身体のパーツ、生臭い臭い。

「あ……あ……いや……」

「もこさん! 水妖は炎に弱いです! もこさんも!」

フィロちゃんが炎でできた剣を振り回しながら叫んだ。

「そ、そうだ。みんな戦ってるんだ。あたしも……あたしもや、やらないと」

「フ……ファ……う あ………」

声が震えて発音できない。一匹の半魚人があたしに気付いて向かってきた。

「ひ……！ ファ……ア……【ファイア】」

手から炎が飛び出す。炎は半魚人をそれてあさつての方向に飛んでいった。

「う……く……！ 【ファイア！】 【ファイア！】 【ファイア！】」

無茶苦茶に撃ちまくった。けど炎は全部それて当たらない。なんで！？ なんて当たらないのよ！

半魚人が手に持った剣を振り上げた。

「ひいつ?!」

「もこ姉！」

りゅう君があたしと半魚人の間に飛び込んできた。

肉が切られる音。りゅう君の肩から飛び散る赤色。回し蹴りで半魚人を吹き飛ばす。

「大丈夫か！？ 怪我は無いか！？」

りゅう君はあたしの方を見て、怪我が無いのを確認するとホッと息をついた。

肩からポタポタ血を流しながら……

五日目(2) (前書き)

間違えて一度消しちゃって、書き直したら妙に文字数が少なくなっ
た件

早くほのぼのパートに入りたいのになんか入れないorz

五日目(2)

十

「はあ……」

ため息が漏れた。

半魚人がいなくなつた後、りゅう君の手当てをして朝まで睡眠を取つたあたしたちは近くの町へ向けて川沿いに歩いていく。

朝の空気は冷たくて、ため息も白い息になつて消えていく。

先頭を恋ちゃんとは並んで歩くりゅう君を見る。

肩には布が分厚く巻いてあつて赤く血が滲んでいる。平気そうにしてたけど傷はすごく痛そうだった。

気持ちが重くなる。本当は回復魔法で治したかったけど、魔力が尽きてて使えなかった。あたしがバカみたいにファイア連発したせいで。

ホントに……なにやってんのよあたし。役立たずで、護られてはついで、怪我させて、治すこともできなくて。

溢れてきた涙を袖で拭つて無理やり止める。泣くな。これ以上迷惑かけたくない。

「もこさん、まだ魔力は回復しませんか？」

フィロちゃんがそう聞いてきた。あたしは首を振る。
魔力の量はなんとなく自分でわかる。なんか魔力が減ってるとお腹の辺りがキユウってなるんだ。

「そうですか……ちょっと遅いですね。いきなり詠唱破棄までできたもこさんなら、もう回復したかと思ったんですけど」

「フィロちゃんはもう大丈夫なの？」

「はい、もう全回復してます。私は元々魔力の量が多い方ですので」

フィロちゃんの口振りからするとあたし魔力少ないのかなあ……詠唱破棄とかできたのもゲーム脳のおかげだし。今も全然回復した気がしない。

「ちなみにさ。魔力を増やすにはどうすればいいの？ やっぱり修行？」

「そんなことできませんよ？」

え？

「魔力の量はほぼ生まれつき決まっていますから。いくら頑張っても魔力の量自体は変わりません。……ああ、一応、魔族の心臓を食べべて魔族になったり、悪魔の奴隷になる契約で魔力を増やせるという話を聞いたことがありますけど……そんなこと考えちゃ駄目ですからね？」

「う、うん」

魔力を増やす方法が無い。……もしあたしの魔力が少ないんだっ
たらあたしは弱いまんま？

さらに気分が沈んできた。

りゅう君は強くて料理上手で。

恋ちゃんは反則的に強くて頭が良くて冷静で。

フィロちゃんも意外に強くて、この世界のこととかいろいろ教え
てくれて。

このメンバーの中であたし……足手まといにしかならないん
じゃ……

「浅倉、少し水をくれぬか？ のどが乾いた」

「あ、うん」

ゲーム脳の効果を発動。見えないアイテムボックス（そう呼ぶこ
とにした）から水筒を取り出して恋ちゃんに渡す。フィロちゃんが
かなり驚いてたけど説明する気力が無くて適当にごまかした。

恋ちゃんが飲んだ水筒を受け取ってまたしまう。

あたしの役目、アイテムボックス……かなあ。

「お、町が見えたぞ」

りゅう君がそう言って遠くを指差した。ああ、本当だ。なんか煙
突っぱいが見える。

町ならりゅう君の傷の薬とか買えるかな？ それか魔力を回復で

きる薬。

……それに替えの服とか下着なんかも欲しい。……この世界って生理用品とかあるのかなあ……？ 無いとかなり困るんだけど。

ああ、町なのにテンション上がらない。

町が近付いてくる。周りが3mぐらいの分厚い石の壁で囲まれて、入り口らしい大きな鉄の門の前には鎧を着た門番が四人いた。けっこう警備が厳重。夜に襲ってきたモンスターみたいなのがいるし当然か。

あたしたちが門の前まで来ると目の前で門番二人が長い槍を交差させてあたしたちの道を塞いだ。

「止まれ」

無愛想な言い方で兵士の一人が言った。あたしたちを見て、そのあとフィロちゃんを見て、眉をひそめる。

「狼人族を連れている……何者だ貴様ら」

何者だって……何者って言えばいいんだろ。というかなんでフィロちゃん？

「ま、待てお前たち！」

壁にもたれ掛かっていた門番が慌てて二人を止めた。どうもこの中ではランクが高いらしい、鎧に勲章みたいなのが付いている。

そいつは恋ちゃんの前まで来て腰を90度に曲げてお辞儀した。

「失礼いたしました英雄 恋次様！ なにとぞ……なにとぞお許しください！」

「わしを知っておるのか？」

恋ちゃんが門番を不思議そうに見る。

「は！ 当然であります！ 魔王討伐の英雄“ 恋次” この名は大陸中に知れ渡っておりますよ！」

これが恋ちゃんのスキル “英雄” の名声効果ってやつかしら？ すごいわね。

「で、そっちの狼人族の女は……」

「む、この子は……」

恋ちゃんは一瞬フィロちゃんを見た。何かアイコンタクトみたいなのが有った気がした。

「……近くの奴隷市で買ったわしの奴隷じゃ」「恋ちゃん?!」

思わず叫んでしまった。だけどフィロちゃんがあたしの隣に来て何か訴えるようにあたしの目を見てくる。

話を合わせろってこと？

「頭も良くて魔法も使える。なかなか優秀なやつでの。丁寧に扱ってもらえるかの？」

「……わかりました。英雄様が言うのであれば。ささ、どうぞ中へ。」

旅で疲れたでしょう。私の自腹で最高の宿を用意させていただきま
す。もちろんお連れの方々も」

兵士の人が合図を出すと重い門がゆっくりと開いていく。恋ちや
んが歩き出すとフィロちゃんもそれに付き従うように後を追ってい
った。

「もこ姉はまだ知らないのか？」

「え？」

「この世界では純粹な人間以外の“人”は差別や迫害の対象らしい。
場合によっちゃ町に入れないってこともある」

「そんな……」

「まあ師匠がいる限りは手出しできないさ、あまり心配するなよ」

五日目(3)

用意された宿屋の部屋。最高つて言うだけあってかなりいい部屋だ。広くて、清潔で、元の世界でも十分通用するレベル。

あたしは窓からぼんやりと町を見下ろしていた。

中世ファンタジーっぽいれんが道。石造りの建物。綺麗な水が湧き出る噴水。

ホントはあちこち観光したかったんだけどフィロちゃんに『買い物は私と恋さんでやりますからもしさんは魔力の回復に集中してください』って言われて宿屋に残ることになった。

たぶんフィロちゃんの方には悪気は無い。だってフィロちゃんにはこの世界が普通なんだから。……それとも、もしかしてフィロちゃんに恨まれてるのかな……りゅう君怪我させたから。

ダメだ。今、かなり鬱だ。なんでフィロちゃん疑ってるのよ。そんなこと、フィロちゃんがするわけないのに。
あたし最低だ。

なんで最初こっちに来た時はあんなはしゃげただろ……。
帰りたい。元の世界ではあたしどうなったことになってんのかな……。学校の友達はどうしてるだろ……。
ラーメンとかパフェとか食べたいな……。今のところまともにご飯

味わえてないし……。

ホームシックまで出てきた。ダメだなあたし。役に立てない上に暗くなつてどうすんの。せめて明るくしなきゃダメでしょ。

と、その時部屋の扉がコンコンとノックされた。

「もこ姉、開けてくれ」

「あ……、う、うん」

慌てて目に浮かんでできてた涙を拭いた。化粧台の鏡を見る。ちょっと目の周りが赤いけど大丈夫。

せめてみんなの前では笑つてよう。

笑顔を作つて扉を開けた。

そこにはふたを被せた丸いお皿を持ったりゅう君が立っていた。

「お、サンキュ……ってどうしたもこ姉？　もしかして泣いてたのか？」

「ふえ？」

一目で気付かれた。そんな酷い顔してるのかなあたし。

「……なんでもないよ。それより何の用？」

「お……ああ、これ持ってきたんだ」

りゅう君はそう言つと持ってたお皿のふたを取った。

カレーライス？

それは間違い無くカレーライスだった。
白いご飯にかかった茶色いルー。食欲をそそるいい匂い。

「あゝ、その、あれだ。なんかしょげてたから気晴らしになるかな
つと。好きだったるたしか」

「どつして……」

意識せず、自然とそんな言葉が漏れていた。

「どつしてそんなことしてくれるの……？ あたし、足手まといだ
し……、りゅう君、腕けがしてるのに……」

「それでしょげてたのか？ なら気にするなよ、あんなの」

「けど……」

「これは命令だ。俺の言うこと聞く約束だろ？」

りゅう君はそう言ってあたしのおでこを小突いた。
スプーンを手に取り、カレーライスをすくってあたしに向ける。

「ほら、ちょっと味見てくれよ。それなりのできばえだと思っから」

「い、いいよ。自分で食べるから」

「自分で食べたなら消えるんだろ？」

「け、けど……」

「じゃあこれも命令だ」

卑怯だ。

仕方なく口を開けて食べさせてもらう。

口に入れた瞬間絶妙な辛さとコクが口の中に広がる。 おいしい。

おいしいなあ、ホントに。家庭的なカレーライス。なんかすごく懐かしい味。

こんなこともできるんだ。

「う……ふ、あ……」

涙がポロポロ溢れてきた。

「お？ ちょ？！ もこ姉？！」

惨めだ。あたしはなんにもできなくて、心配されて。わざわざご飯食べさせてもらって。こいつは強くて優しく、フィロチヤンにも好かれて……

「なんで……なんであたしなんか優しくすんのさ……！ それでいい人ぶってんの！？ 優しくされる方が辛いよあたしは！」

気がついたらそんな言葉を吐いていた。

「い、いや俺はもこ姉が心配で」

「そうやってあたしのこと哀れnderの!? それともあたしの身体でも欲しいの!? だったらそう言いなさいよ!」

「お、おいもこ姉?」

「あたしは弱くて! 何もできなくて迷惑ばかりで! それに……」

違う。ホントに言いたいののはこんなことじゃない。ホントは…… “ありがとう” って言いたいの……

なのに……悔しくて、悔しくて……涙が止まらない。

『あなた、うざい』

突然だった。

かわいらしい“あの声”がしたかと思うといつの間にかあたしとりゅう君の間に白いマキナが立っていた。

息を飲む。マキナは不機嫌そうにあたしを睨んだ 瞬間。マキナの髪が生き物みたいに動いてあたしに襲いかかってきた。

「ひっ?!」

瞬く間にマキナの髪はあたしの両手両足を絡め取った。動けない!? 礫にされたように大の字にされ、宙に浮かされる。髪の毛の先端は刃物みたいに鋭い。あたしの肌に押し付けられて、少し動いただけで肌に刺さり、皮を切った。

『あなた、面白くないのよ』

「え……?」

面白く……ない? 何それ……? どういう意味……? マキナは髪であたしの身体を持ち上げながら、あたしの胸元、ちょうど心臓のある辺りに指を当てて円を描く。背筋がゾクゾクした。

『りゅう君はこのゲームでの私のお気に入りキャラなのよ。それを困らせるあなたうざい。』

あなたみたいなの私 大嫌い。弱い? 何もできない? 何もしないだけじゃない。うじうじぐじぐじ、見えてイライラする。だからさっさと死んで、消えて、リタイアして』

「マキナ!」

りゅう君がマキナの頭に拳を振り下ろした。けどそれはマキナに触れる直前、見えない壁のようなものに阻まれて止まる。

『りゅう君への重力を五倍に変更』

マキナは振り向きもせず指を鳴らした。

次の瞬間、りゅう君の身体がまるでとんでもなく重い物に乗せられたかのように床に突っ伏した。

「ぐう……くそ……」

『やっぱり十倍に変更』

マキナが手を下げるような動作をすとりゅう君が悲鳴を上げた。

地面に貼り付いたようになり、まったく動かなくなる。バキバキと木の床にヒビが入った。

『そ〜だ　いいこと思い付いた』

マキナはにたあ、と口を歪ませて笑うと、手招きをするような動作をする。するといきなり天井が割れた。割れ目の先にあるのは何も無い真っ暗な空間。そこからいくつもの赤い目がじっとあたしを見ていた。

『この向こう魔界なんだけどさー。魔界って面白い怪物がいっぱいいるんだよ？　女の子をめちゃくちゃにしちゃう触手とか』

まるで悪戯をする子供のようにはマキナは笑みを浮かべる。

寒気がした。天井の割れ目からジュル、ジュルと水っぽい音がして、ゆっくりと白い三本の触手が垂れてくる。

「う……そ……」

触手の一本が頬に触れる。ぬるぬるして、熱く脈打ってる。

触手はまるでいたぶるようにゆっくりと、粘液を引きながら首筋をたどっていき、襟から服の中に入ってきた。

「ひ……い、や……あ」

胴体にうねうねと触手が巻き付いてくる。気持ち……悪い……。寒気がする……。やだ……。やだ……。やだ……。やだ……。

そのまま触手はあたしの下腹部を通って下りていく。内股を擦られて思わず身体を反らせた。

『ふふ、このままりゆう君の前でめちゃくちやにしてあげようか？
幼なじみの前でってシチュエーション萌えない？ 良かったね？
凌辱ゲーに興味有ったんでしょ？』

「や……、やめて……やめてえ……お願い……お願いだから……」

必死で声を絞り出した。マキナはニヤニヤとあたしを見ている。

『やーだよー。私はもつと大嫌いなもこちゃんが泣いて、叫んで、
壊れていくのが見たいんだもん。というわけで触手ちゃん達、犯っ
ちやって』

「や、や……、いやああああつー!!」

身体に巻き付いて蠢いていた触手が一斉に動き出す。

「やー! やあつー!! こんなのいや! いやあつー!!」

『……なんちやって』

瞬間、触手が全部消えた。……え？ 訳もわからずマキナを
見る。

『残念ながらあたしが直接プレイヤーに手を下すつてのはこのゲー
ムのルールに違反することになるんだよね。私たちはルールを守る
の。……だから私はこうするんだ』

さらにパチンとマキナは指を鳴らす。

瞬間、部屋の中が暗くなった。……夜?! 窓から差し込むの
は柔らかい月の光だ。さっきまでであった街の喧騒もなくなっている。

机に置いてあつた携帯電話が鳴り始めた。

それが勝手に通話モードに切り替わる。

『もー、いきなり時間変更なんて何するのよ白マキナー！ まだ準備中だったのにー！ ……まあ、いいや、それじゃ始めようか』

「っ?!」「マキナ!?!」

携帯からもあの声がした。

白いマキナはにたりと笑う。

『『第二の試練、開始します』』

二つの声が重なった。

五日目(3)(後書き)

この話ノクターンに持っていったら需要あるでしょうか(ボソッ

最近面白い作品に飢えてます。このサイトの小説で面白い作品と
かあったらおすすめしてくれると嬉しいです(二次創作もok)m

(m)

六日目(1)

周りの風景が変わっていく。

いつの間にかあたしを拘束していた髪は解けていて、りゅう君も自由になってあたしの隣まで走ってきた。

「もこ姉！ 無事か！？」「大丈夫よ！」

またこいつは……あたしよりヤバい目に合ってたのはあんだでしょう。気遣われるのがやっぱり悔しい。

周りを見回す。最初の試練の時と違って、空間がぐにやぐにやとモザイクをかけられたようになりながら変わっていく。やがてそれが収ま 「うっ?!」「見るな！」

りゅう君があたしを抱き寄せて片手で目を塞ぐ。

けど一瞬見ただけでそれはあたしの目に焼き付いていた 死体が山積みになっていた。

あたしはりゅう君の手をどかした。りゅう君は一度それを拒否したけど無理やり引き剥がす。

見ないでいる方が……よっぽど怖い時もある。

あたしたちがいたのはどこかの町の、大きな広場のような場所だった。“夕日”が石畳に覆われた道路や建物を真っ赤に染めている。まるで戦争でもあったみたい。見える範囲の建物はほとんど崩れて瓦礫の山になっていて、道路にもあちこち大きな穴が空き、剣や

盾、鎧の破片なんかが散らばっている。

そして、広場の角に積み重ねられた死体の山がいくつも。子供も女の人も関係なしに、身体中生々しい傷が付いてて、池を作るぐらいの血が流れ出していた。

生暖かい風と一緒に漂ってくる死臭。酸っぱいものが胃から口に昇ってくる。

ただでさえさっきので気持ち折れかけてるのに、追い討ちをかけるようなその光景に意識が遠くなってくる。気付いたらりゅう君の方に一步寄って腕を固く握っていた。恥ずかしい、情けない。

これ以上迷惑かけるな。心配させるな。必死に自分に言い聞かせてアイテムボックスからナイフを取り出して握りしめた。

魔力は……まだ【ヒール】は無理だけど物を浮かせる【サイキクス】ぐらいは何回か使える程度に回復してる……と思う。

できるだけ死体を見ないようにしながら周りに注意を払った。

その時、目の前の空間が二ヶ所、ぐにやりと歪んだ。そこからさっきの白いマキナと、炎みたいに赤く光る髪に、赤いドレスを着たマキナが出てきた。

赤いマキナは優雅にスカートの端をつまんでお辞儀する。

白いマキナは楽しそうに爛々と光る目であたしを見ていた。

『『ようこそ、第二の試練の場へ』』

二人の声が重なった。

『ごめんなさいね。白マキナがいきなり試練を前倒しにしちゃった

からまだ片付けが終わってないの。とりあえず臭う物は先に燃やすわ』

赤いマキナがそう言って指を鳴らすと広場にあった死体の山が一斉に火柱に包まれた。

炎は空に届くようなものすごい勢いで燃え上がり、死体はあっという間に消し炭に変わる。

……大丈夫。あたしはまだ冷静だ。前みたいなパニックになつてない。なるもんか。

りゅう君の学ランの袖をぎゅっと握った。

悔しいけど、誰かが一緒にいてくれるってだけですごく安心できる。

そんなあたしを見て白いマキナはフンと鼻を鳴らすとニコツと一度笑みを浮かべてどこかに消えてしまった。

『ああもう！ 掃除ぐらい手伝いなさいよ白マキナーっ！ ……あゝっ！ もういいや。それじゃ第二の試練のルール説明するね。とはいってもとっても簡単で、二時間後まで生きてたらクリア。わかりやすいでしょ？』

うん、とつてもわかりやすい。この試練が相当危険だつてことも。

『ま、ルールはそれだけだから好きなようにやって生き残つてよ。生き残れば何でもあり。ああ、それと、あなたたち二人以外にもあと三人、他のPCがこの町にいるから』

「他のPC？」

『そ、あなたたちと同じでこの世界に召喚された人たち。もちやんの携帯にマップ機能付いてるでしょ？ あれで探せるからさ。じや、頑張って』

そう言つと赤いマキナは消えてしまった。

「……………どうする？」

あたしはりゅう君を見上げる。

「この広場に居座るのが無難だろうな。視界が開けてるし、何か来ても逃げ道がある」

「け、けどあたしたち以外にも三人いるんだよね？ その人達探した方がよくない？」

「ならそうするか」

「……………あつさり意見変えるのね」

「どっちにしる初手の判断材料が少ないんだ。俺が言ったのもあくまで“無難”っただけ。

もしかしたら他のプレイヤーと協力しないとクリアできないかもしれないし、俺達が居座るのを見越してこの広場に仕掛けをしてあるつても無いとは言いきれない。

重要なのは何か起きた時にどう対処するかだ」

りゅう君はざらりとそう言つてのけた。なんかすごく頼もしい。

「それよりも姉、マップに他のプレイヤーは？」

そう言われてあわてて携帯を取り出し、マップを開いた。ん……と、マップの表示範囲にはいないみたい。

りゅう君も横から覗き込んでそれを確認すると静かに頷く。

「じゃあとりあえず通りを真っ直ぐ行こう。俺から三步以上離れないようについてきてくれ」

言葉少なく言ったりゅう君が歩き出した。それにぴったりついていく。

道の瓦礫や穴に気を付けながら周りを見回した。

人の気配がしない。動く物も無い。風に乗ってくる血の臭いが気持ち悪い。

夕日に照らされる誰もいない町をただ進んでいく。

ところどころで食べ物が少し入った鍋や、野球のボールみたいなのが転がっていた。

ほんの少し前まではここにも人が普通に生活してたんだ。

そう思うとやるせなくなってくる。

もしかしたらマキナは、試練に使うためだけにこの町をこんなにしたんだろうか？ そうだとしたら……

「もこ姉。近くに人いないか？」

「え?! あ、……いや、いないみたい」

「……余計なことは考えない方がいい。今は俺たちが生きるか死ぬかなんだからな」

……なんでこいつはこんなに冷静なんだろう。なんでこんな状況であたしに気を使えるんだろう。

まるで生き残ることしか頭に無いような……いや、違う。その……まるであたしを護ることしか考えてないような……。

だけど、そうだとどうしてそこまでする？　そこまではよ
うな理由が無い。

確かにあたしたちは幼なじみで、すごく仲が良かった。

けど、小学校高学年になった頃からはしょっちゅう喧嘩してたし……。

おまけに5年近く会ってなかった仲だよ？　いくらなんでも……
「きやつ?!」

りゅう君の背中にぶつかってしまった。りゅう君はじっと立ち尽くしている。

というかこんな時に何を考えてんのよあたしは!?
こんなんだからりゅう君たちに迷惑かけてんでしょ!?

ぶつけた鼻を抑えながら、りゅう君が見ているものを見た。

人だ。

身体のあちこちに付いた生々しい傷から、いっぱい血を流した男の人がノロノロした動きであたしたちの前を横切っていくところだった。

生きてる人がいた?!　酷い怪我してる!　早く手当てしないと

……「待て！」

その男の人に近寄ろうとしたらりゅう君に腕を掴まれた。

「どうして止めるの！？ もう少して魔力も回復するし【ヒール】で治してあげれるはずなのに！」

「う……あ……ひとお……？」

男の人がぐりんと首をひねってこちらを向く　顔が半分無かった。

「ひっ……?!」

その人の顔は何かに挟られたみたいに顔の右半分、口から上が無くなっていった。傷口からぼたぼたと血肉が落ちる。

「ひと……おんな……にくう……」

そいつはあたしを見てにたりと笑った。

背筋がゾクリとする。りゅう君に腕を引っ張られ後ろに回された。

「にくう……にく……おんな……にく、おんな、にく、にくう……」

男はへらへら笑いながらあたしたちに近づいてくる。

「……にくかあ……？」

建物の瓦礫の中から掠れた声が聞こえた。

「おんな……おんなあ……」

「はら……へったあ、くいたい……くいたい……」
「くひ……、くふひひゃひゃ」

周りにあつた瓦礫の中から次々に別の男が立ち上がってくる。

まるでどこかのゾンビ映画のような光景。瓦礫の中から現れた男たちはみんなぼろぼろで、全員身体に致命傷があつた。血を滴らせながら、あたしたちの方を見る。

「くい、たい……くいたい……」

「おんなだあ……おかす……おか……ひはひゃはは」

気付けばあたしたちは数十人の男達に囲まれていた。

うわごとみたいな言葉を言いながら、ノロノロとあたしたちへの包囲網を狭めていく。

「……もこ姉。俺の学ランの裾掴んで絶対離すな」

「う、うん」

あたしは学ランを固く握った。りゅう君が足元に転がっていた剣を蹴り上げて掴む。

「くう……おかす……くう……くう……」

男達が一斉に走り出し、襲いかかってきた。

「ひっ!?!」「絶対に離すなよもこ姉!！」

りゅう君の声が響く。同時に正面から来た二体のゾンビの首を剣で跳ねた。

飛び散る血肉。その一欠片があたしの頬に当たってべちゃりと広がる。

身体中、鳥肌が立った。 怖…………い…………。

「くう…………くわ、せろお」

「おんな…………おんなあ…………」

「くひ、ひゃひひ…………おんなあ…………おかす…………」

「に、くう…………」

まるで欲しい物を見つけたようにへらへらと笑いながら、次々に襲いかかってくるゾンビ。足がガタガタ震えて膝から崩れ落ちそうになる。気付いたらりゅう君の学ランにしがみついたまま、またぼろぼろ泣いていた。

その間にりゅう君は次々に敵を倒していた。

相手の手が届く前に縦横無尽に剣を振るって腕を断ち切り頭を潰す。

身体をひねってあたしに向かって来ていたやつ胸を貫く。

その動きに必死でついていく。カタカタと歯が鳴った。

りゅう君が剣を振る度に血肉が飛び散ってあたしにかかる。気持ち、悪い。

もう、やだ。お願い、お願い、だから。終わって、早く、早く!

固く目を閉じて、すぐるようになりゅう君の学ランにしがみついた。

何分か、何十分かもわからない時間が過ぎた。

りゅう君はまだ戦ってる。剣を振る風切り音がする度に肉を切る音が聞こえる。それに混じって呼吸が弾む音も。

りゅう君の動きはあたしから見ても遅くなっていた。疲れてきてる……？ ひぐつ？！

いきなり髪の毛を引っ張られた。

「つか、まえたあ……」

ゾンビがあたしの髪を掴んでいた。さらに何体かのゾンビがあたしの髪を掴み、引っ張る。

「いやあああ！？ やめ、やめて！ 離して！ りゅう君！ りゅう君！！ 助けて！！」

「もこ姉！？」

りゅう君がこちらを振り向く。けどその瞬間にりゅう君の肩にゾンビが噛み付いた。学ランごと肩の肉を食いちぎられる。そのまま何体かのゾンビに抱き付かれた。

「おんなあ……！！」

思い切り髪を引っ張られて学ランを離してしまった。瞬く間にゾンビの集団の真ん中に引き摺り込まれる。

怖くて、視界が涙で歪んだ。

「いやっ！ いやあっ！ りゅう君！ りゅう君！」

ゾンビに囲まれてりゅう君の姿が見えない。あたしは石畳の地面に引き倒された。

ゾンビが我先にとあたしに覆い被さってくる。

「や！ やだやだやだあっ！！ やめて、やめてよう……」

引きはがそうとしたけど両腕を他のゾンビに押さえ込まれた。

あたしに覆い被さったゾンビはあたしを見下ろしてにへらと笑う。頭が欠けていて、あたしの顔に血が滴った。涙と混ざったそれをべロりと舐められる。鳥肌が立った。

荒々しい息が顔に当たる。

悲鳴も上げられなかった。怖くて、怖すぎて、舌が回らない。声が出ない。

だって

だってこいつら

あたしを犯すって……

「や……やあ……た、けて……たす、けて、誰か……おね、がい……」

服の胸元が引き千切られた。露になった白い肌、柔らかな膨らみ。ゾンビはそれにしゃぶりついてくる。心の中で致命的な何かが崩れる音がした気がした。

や……やだ……たすけて……たすけて……いやあ……

頭がぐらぐらして、痛くて、視界が暗転していく。

ゾンビの肩越しに見えた夕焼けの空高くで、白いマキナがあたしを見下ろしているような気がした。

六日目(2)

side 神崎 竜斗

次々に湧いてくるゾンビをかき分けて進む。身体中に噛み付かれ、ブチブチと服ごと肉を食いちぎられた。

「ぐ……う……！」

歯を食い縛って耐え、両腕を振り回して無理やり振り払う。足にしがみついていたやつの頭を拳で叩き潰し蹴散らした。

「もこ姉！ 返事しろ！ もこ姉……！」

返事は返ってこない。ゾンビに視界を埋められてもこ姉の姿が見えない。けど死臭に混じってもこ姉の匂いと声にもならない悲鳴は聞こえた。その方向に向かってひたすら進む。

喉笛に噛み付こうとしてきたやつ顔面を掴んでそのまま振り回し、何体かまとめて吹き飛ばして道を作る。

掴んだやつが奇声を上げて暴れ始めたのを、顔面を握り潰して黙らせる。絶叫、ぐちゃぐちゃと生暖かい肉の感触。……気持ち悪い。

……けど、ほんの少し、ほんの少しだけ“楽しい”と感じている自分がいて、思わず身震いした。

嘘だろ？　こんなに簡単に？　マキナには俺の“衝動”は誰かに殺意を抱いたりすると制御が効かなくなると聞いていた。けど……まさかこんな……。

頭は冷静さを保とうとしてるのに、身体が勝手に熱くなる。俺の意識を無視して、身体が戦いを求めている。

それでも、戦うのをやめる訳にはいかない。護りたい、今度こそ、もこ姉のことを護って側にいたい。

道に転がっていた槍を拾い上げて周りのやつの足をまとめて払う。視界が開けた。

進行方向にいたやつ胸を突き刺し、その身体を乗り越える。

「もこ姉！　もこ姉どこだ！？」

見付けた。何体ものゾンビがもこ姉を地面に押さえ付けていた。

もこ姉は泣いていて……一体がもこ姉に馬乗りになってへらへら笑い声を上げながら服を引きちぎっていて……。

頭に一気に血が昇るのを感じた。

ぶっ殺す……！　プツン、と何かが切れてしまった。

身体の血の回転が速くなるような感覚。酔ったような軽い多幸福感

で頭が痺れる。

気が付けば俺は笑みを浮かべていた。

もこ姉の胸にしゃぶりついてたやつ顔面を足のレガースで思い切り蹴りあげた。トマトのように弾け、吹き飛んでいく。

壊した瞬間の感覚、降り注ぐ血の匂いが心地いい。沸き出してくる悦びが収まらない。

「はは、ははははは……」

口から笑い声が出ていた。もっと、もっと。もっとだ！ 全員叩き潰す！

感情に任せて次のやつに向かう。腕を軽く振っただけでみんな壊れていく。顔面を叩き潰し、胸をえぐり、四肢を引きちぎる。辺りに飛び散る血と臓腑。

……気持ちいい。身体の血が沸騰するような感覚。熱い、だけでも気分がいい。

心地いい。ぼうとした頭のまま拳を振るった。ベキリ、グシヤリと敵を潰す小気味いい音が響く。気付けばもこ姉にまわりついていたやつはみんな潰れていた。……けど、足りナイ。

もっと……もつと壊しタイ。もっと血ニまみレタイ……もつと……もつと……

女に視線ヲ落としタ。怯エタような表情ヲ俺を見上ゲテる。ああ、マダ壊せるやつガいた……。

にいつと笑って拳を振り上げた。

「や、やめて！ りゅう君！」

っ?!

拳をそらした。もこ姉の顔を掠めた拳が道を舗装するれんがを粉々に叩き割る。サアツと、熱くなっていた身体が冷めていった。

今、何をしようとした？ 背筋が凍る。俺を見上げるもこ姉の怯えた目。ち、ちが……。俺は……。なんとか言い訳しようと言葉を探す。

だがその時、ゾンビに足を掴まれた。

「しまっ ?！」

思い切り引つ張られ前のめりに倒れた、口の中に血の味が広がる。そのままゾンビの群れの中まで引きずられた。

振り払っても振り払っても次から次に湧いてくる。立ち上がる隙が無い。自分の不用意さに歯ぎしりした。

「り、りゅう君！」

もこ姉の悲鳴が聞こえた。もこ姉も他のゾンビに襲われてまた見えなくなる。

く、そがあ ! ! もこ姉が……。ざけんなよ！ 俺が護らな
いといけないのに……。護れない？ また何もできないのか？ くそ、
くそ！ くそ！ くそおっ!!

まわりついてくるゾンビ達を引きずりながら進もうとした。ほんの数歩分、それが果てしなく遠い。
く、そ……。

「その状況で他人のことを見ますか、やはりなかなか面白い人ですねえ……。神埼 竜斗君」

っ?! 声がした。瞬間に俺にまわりついてきたゾンビ達の頭に次々とナイフが突き刺さった。

なんだ?! 何が起きた?!

俺を拘束していた手から力が抜ける。まとめて払いのけ、そばに立っていた男を見た。

ひよろりとした、背の高い細身の外人。短い金髪に赤いレンズの色眼鏡。

古びたスーツを着こなす紳士然とした男は俺を見るとにこりと笑いかけてきた。……誰だ? 今俺の名前を呼んだ? いや、今はそれじゃない!

跳ね起きてもこ姉の方に向かう。

もこ姉にまわりついてくるやつは首根っこを掴んで無理やり引き剥がした。

「もこ姉! 大丈夫か!」「っ!」

俺と目が合った瞬間、もこ姉は息を飲んだ。俺の差し出した手を取ろうとしない。恐がられた？ズキンと胸が痛む。

……違う。今はそんなことに気にするな。気持ち切り換える。もこ姉の前に立ち、護ることに重点を置いた戦い方に戻した。

さっきの男の方を見る。両手にナイフを握り、長い腕をまるで鞭のようにしなせながら向かってくるゾンビを切り裂いていく。

とんでもなく強い。まるで赤ん坊の手を捻るように簡単に敵を切り刻んでいく。さらに離れた場所にいる相手にはナイフを投げつけ、正確に眉間を射抜いていた。

どういう訳か、いくら投げてもナイフは無くならないらしく、その手には常にナイフが握られていた。

数分後にはもう動くゾンビはいなくなっていた。もこ姉の脇に膝まずく。

「もこ姉……、その、大丈夫か？」

「……………うん」

たぶんほとんど無意識に、もこ姉は腰を浮かして少し俺と距離を取った。……正直そうとうキツイ。

けど俺からは何も言えない。もしあの時、もこ姉が声を上げなかったら俺はもこ姉を殺さなかった自信がない。

「ひとまず落ち着きそうですね」

さっきの外人の男が言った。パンパンと手を叩いて手招きすると物陰から白衣を羽織った女の人とアロハシャツを着たおっさんがこちらに走ってきた。思わず体を強張らせる。

「その子大丈夫？　かなりショックを受けてるみたいだけど」

「おいおい、勘弁してえな……」

白衣の女の人とアロハシャツのおっさんだ。白衣の女の人のもこ姉の脇に座ると心配そうにもこ姉を見つめる。……危険は無さそうか。

「これは……そうね……」

白衣の女の方はそう言うと手を前に出す。その手が淡い光に包まれたかと思うと液体の入った茶色い小瓶が現れた。

「これを飲みなさい。気持ちが悪くわよ」

もこ姉は手渡されたその小瓶を受け取るとその人の顔と小瓶を順に見る。今の……スキルか？

「あの……どうも……あなたは？」

もこ姉は小さな声で聞いた。

「おう、ワイは大阪出身の馬場つちゆう」「あんだじゃない」

でしゃばってきたアロハなおっさん 馬場の方は俺がばっさり切り捨てる。白衣の女の人は柔らかくにこりと笑った。

「永森よ。あなたと同じこの世界に連れて来られたプレイヤーで元は町医者をやっていたわ。そこのゲイツさんに助けてもらったの」

そう言っつて永森さん……いや、永森先生はさっきの外人の男を指差した。……観察するような目でこっちを見ている。なんか、あの目は苦手だ。

「ゲイツ……さん、ですか？」

「ええ、よろしくお願いしますよ神崎 竜斗君」

「どうして俺の名前を？」

俺がそう言っつとゲイツさんはにやりと笑った。

「それはもちろん、貴方は有名人ですからね。このゲームに参加してる一部、情報に通じている者ならみな知っていますよ。貴方ご自身もよくご存知でしょう？ ご自身の特異性について」

なんだこの人は まあいいか、同じプレイヤー同士なら危険は無いだろ。今はもこ姉だ。

……馬場がもこ姉の破れた胸元をガン見していた。よくわからない

いがあるかこいつはいろんな意味で危険な気がする。気をつけよう。永森先生はそんな馬場を害虫でも見るような目で睨み、もこ姉に自分が着ていた白衣をかけてくれた。この人はいい人そうだ。医者だつて言つてたし頼りになりそうだな。

そして最初の外人、ゲイツさん……か。

さつきからずっと黙つて俺達のことを見ている。得体が知れないしなんか……嫌な感じだ。

けど、敵意は感じない。こちらの世界に来てから殺意や敵意には敏感になつたようで、これにはかなり自信がある。少し気にしすぎか？

「さて、皆さん」

ゲイツさんが近付いて来た。さつきまで手に持っていたナイフはいつの間にかどこかに消えている。

「ここで話すのも危険でしょう。どこか安全を確保できるような場所でも探すとしませんか？」

まあ妥当な意見だ。もこ姉を休ませたいっていうのもある。

永森先生と馬場もそれに同意した。……とりあえず考えるのは後に回すか……。

立ち上がったもこ姉を引っ張り上げてやろうとする。けどもこ姉は明らかに俺の手から逃げて永森先生に助け起こしてもらつた。チラリと俺を見る怯えた目。心が、痛い。

俺、こんなナイーブだったかな？

自嘲気味に笑つてゲイツさんの後についていった。

六日目(3)

俺達は辛うじて壊れず残っていた建物を見つけ、そこに籠城することにした。

元は食堂だったらしく、一つの広い部屋にいくつもテーブルと椅子が並んでいた。

そのテーブルや椅子を運んで扉や窓を塞ぎ、とりあえずの籠城の形が整う。床に適当に見繕った布を敷いてその上に座った。

「さて、まずはこうしてプレイヤー五人、欠けることなく揃えたことを喜びましょうか」

ゲイツさんはそう言って俺達を見回す。気のせいか……まるでこの状況を楽しんでいるように見える。ゲイツさんは周りを見回しても姉に目を止めた。

「もこさん……でしたね。どうです？ 落ち着けましたか？」

「あ……はい。その、ありがとうございます……」

「いえいえ、それよりそちらの彼氏にねぎらいの言葉でもかけてあげればどうですか？ 貴女を助けようとする姿は大変美しかったですよ」

「……………」

もこ姉はチラリと俺の方を見た。……怯える子供みたいな目だ。

またズキンと胸が痛む。 わからない。なんでこんなに辛いのがわからないんだ。

この世界に来て……、そしてこの体になって、あのスキルを得て、俺はいるんなことを忘れたみたいだ。特に……なんでこんな風にもこ姉を護りたいと思ってるかがわからない。思い出せない。

ただ、もこ姉のことを思うと何が何でも護りたいと思ってしまった。幼なじみだから、親友だったから……、違う。もっと何か……強烈な……。

「大丈夫？ 顔色が悪いわ」

永森先生が俺の様子を見ながら近づいて来た。

「さて、あなたの怪我、今のうちに応急処置しておきましょうか。奥の部屋に行きましょう？ こんな不潔な環境だし、怪我を放置するのは場合によっては命に関わるわよ」

「う……」

思わず苦い顔をしてしまった。この人もプレイヤー……俺の今の身体について知ってるかはわからないが、確実に変な顔はされる。いや、変な顔をされるぐらいならまだいいんだ。別に死ぬ訳でもないし、もこ姉以外はこの試練つてのが終わったら縁がない限りもう会うこともないだろう。けど、もし俺のことについて知っていれば……最悪ここから追い出される。

そんなことを考えていると永森先生は子供を叱るような目で俺を

見た。

「見くびらないで。私はあなたが患者でいる限りは決して差別はしないしさせない。できるだけの最高の治療を施すことを約束する。それが医者としての私の信念よ」

この人、俺のこと知ってる？

永森先生は俺の目を見る。瞳が僅かに光っているように見えた。

「私のスキルはね、扱ったことのある薬品や簡単な医療器具を自在に生み出す能力と、患者の状態やステータスを一目で見極めることができる目なの。安心なさい。これでも腕にはそれなりに自信有るから」

「……わかりました」

この口振りからして俺の秘密にしていることにも気付いているだろう。観念して先生と一緒に奥の部屋に行った。

元は生活スペースだったららしい小さな部屋。倒れていた椅子を拾って座り、学ランのボタンを外して服を脱ぐ。皮膚にぽつぽつとまばらに付いた黒い竜鱗と、噛まれた傷痕が外気にさらされた。永森先生はもこ姉にやった時みたいに薬の入った小瓶、脱脂綿やピンセットを出すと、脱脂綿を薬に浸して俺の傷に当てた。痛っつ？！

「少し染みるだろうけど我慢なさい。男でしょ」

少してレベルじゃない！ 噛まれた時の痛みの方がまだましだったぞ！？ 必死に歯を食い縛る。

「……あなた、自分の種族……黒竜の竜人について彼女に話してないの……？」

永森先生が静かに言った。普通の人間じゃまともに聞き取れないほど小さな声だ。思わず息を飲む。

「反応しない。他の人には聞かれたくないんでしょう？」

ここまでやるかと内心 感動しながら首を横に振る。

「私の目の力であなたのスキルの効果……あなたが何故、彼女や私たちを“殺さず”にいられるかは理解したわ。でもかなり危険なものに変わりない。これ、持っておきなさい。精神安定剤よ、毎食後に飲めば気休めにはなると思うわ」

そつとカプセルが入った瓶を握らされた。それをポケットにつっこむ。

「どうも……」

その時だった。

「おう、邪魔するで」

突然 馬場が入ってきた。先生が勢いよく立ち上がる。

「ちよつとあなた！ 今は治療中……」「まあまあ、用が済んだらすぐに戻るさかい」

馬場は俺に近付いて来る。おもむろに手を伸ばして俺の竜鱗に触

れると、いきなり一枚むしりとった。

「痛っ!!」「何してるの!?!」

永森先生が怒鳴る。だが馬場は素知らぬ顔で俺の竜鱗を見つめる。

「ええやないか。なんか銭の匂いがぶんぶんしてなー。鱗人間の鱗なんて珍しいし綺麗やから高く売れるかも知れんやろ?」

「なっ?!」

売る?! 冗談じゃない! …… 実際俺の竜鱗はかなりの高値で売れるらしいのだ。聞いた話だと宝石並みの値段で。

もし、その竜鱗の持ち主が俺だとわかったらどうなる? この世界にはそういうやつを狩るハンターまでいるらしい。おそらくはもこ姉と一緒にいるどころではなくなる。

学ランを羽織って元の部屋に戻って行った馬場を追った。扉をくぐるとそこには

「なあなあ、もこちゃんやつけ?」

「は、はい……」

馬場はもこ姉に声をかけていた。先生にかけてもらった白衣の間から見える破れた服を見てニタニタ笑いながら舌舐めずりする。

もこ姉の表情に怯えが走った。

「あんな鱗の兄ちゃんよりさ、ワイと仲良くせえへん? ワイこれ

でも銭はあるんや。もこちゃんかわいいし、あの兄ちゃんよりはワイと一緒にいた方がいい思いできると思うで」

「け、けっこうです！」

「つれないこと言うなや。仲良うしようやって」

馬場がもこ姉の腕を掴んだ。そのまま強引に自分の方に引き寄せ、肩に腕を回す。

胸の中で抑えていた黒い感情がふつふつと沸いてくる。訳のわからない怒り。さつき竜鱗をむしり取られた事より遙かに上。ただもこ姉にちよっかいを出してただけなのにぶち壊したい程馬場が憎らしかった。永森先生があわてて後ろから抑えてくれなかったら馬場に殴りかかっていたかもしれない。

「そこまでにしときましようか」

その時、ゲイツさんが馬場の肩を掴んだ。

「醜いですねえ。金、色、欲望に走る人間というのは……やめませんか、これ以上は黙って見ている訳にもいきません」

「なんやあなたの言うことはようわからんわ。固いこと言わんといてえな」

「亡者に囲まれ、私に必死に助けを求めて来たのは誰でしたかねえ」

馬場は小さく舌打ちするともこ姉から手を離れた。そのまま近く

にあつた椅子を蹴飛ばして建物の奥へと歩いていく。

「おや？ どこへ？」

「小便や小便！」

そう吐き捨てるように言って馬場は建物の奥へ消えて行った。

「もこ姉、大丈夫か？」

「う、うん。ちょっと怖かったけど……あ……ゲイツさん、ありがとうございます」

「いえいえ、お気になさらず……どれ、私も少し用を足してきますかね」

ゲイツさんもそう言って建物の奥へと消えていった。

俺はもこ姉のそばで膝をつく。

「……本当に大丈夫か？ 顔、真っ青だぞ？」

「う、うん。……大丈夫、だよ」

そう言ったもこ姉の体は小さく震えていた。俺がそれに気付いたことに、もこ姉も気付いたようで、抱き締めるように自分の肩を抱く。

「はは……なんか、ゾンビに襲われたの、トラウマになっちゃったかも……。男の……そういう目が、すごく怖い……」

もこ姉の声はひどく小さくて、震えていた。乱暴に触れれば壊れてしまいそうなので、できるだけ優しくその頬に触れた。

「その……俺も怖いかな？」

もこ姉は少し驚いたような顔で俺を見て、頬に当たった俺の手に自分の手を重ねながら、静かに目を閉じた。

「怖く、ないよ……今は」

俺はそつともこ姉の背中に手を回して抱きしめた。ひっぱたかれるのも覚悟していたけど、もこ姉は抵抗もせずに俺を受け入れてくれた。

なんでだろう。それがすごく嬉しい。嬉しすぎて胸が温かくなってくる。

「ねえ……、なんで……ゾンビに襲われた時、あんなこと、したの……？」

「……………」

「なんで、あたしを……殺そうとしたの？ 変、だよ……今はこんな優しい、のに……」

腕の中で、もこ姉は俺を見上げる。本当に小さな子供みたいな、親に怒られるかもと怯えながら親にしがみつく子供に似てる。

護りたい。もこ姉を……絶対に。

なら、話さないと……けど話してどうする？ 本当に話しているのか？ 話したらきくと、こうやって抱きしめることなんてできな

い。こんな目で俺を見てくれたりしない。もしそうなった時、俺はもこ姉を護りたいと思えるか？ 俺はもこ姉を……殺さずにいられるか？

カタン、と。もこ姉のポケットから携帯が落ちた。けどもこ姉はそれを気にする素振りは見せない。代わりに俺が拾った。

携帯の画面にはマップが表示されたままになっていた。俺、もこ姉、永森先生が青白いマーカーで表示されていて、少し離れたトイレの場所にゲイツさんと馬場の二人のマーカーが……ん？

「これは……？」

「……え？」

ゲイツさんと馬場、マーカーはたしかに二つ有る。ただ、二つのマーカーの内一つが赤く点滅していた。

その点滅がやがて収まり、マーカーが黒く変わっていく。

『馬場 正昭 死亡』

画面の右上にそんなメッセージが表示された。

六日目(4)(前書き)

読んでくださってる皆様お待たせしました。

夏風邪こじらせて寝込んでました。普段風邪ひかない分辛かったです……。

皆さんも夏風邪にはお気をつけて

六日目(4)

「死、亡……？」

思考が停止しかけた。黒く変わった馬場のマーカーの前でじつと動かないゲイツさんのマーカー。ゲイツさんが殺した？ けど何故？ 確かに馬場は嫌なやつではあったけど今はこの試練を乗り越えるために協力し合う仲間だ。仲間であるべきだ。それを殺したとなれば圧倒的にデメリットが大きすぎる。聡明そうなあの人ならそんなことわかっているはずだ。殺す理由が見当たらない。

頭の中を色々な考えが巡る。けど答えが出る前に携帯に表示されたマーカーは動いていた。

「ただいま戻りましたよ」

携帯に表示されたマーカーと同じタイミングでゲイツさんが戻ってくる。さっきまでと同じ声色、同じ口調、同じ笑顔、けど俺の嗅覚は一つだけさっきと違うものを感じ取った。この臭いは……

真新しい……血の臭い……。

「……馬場は一緒じゃないんですか？」

「ああ、彼はもう少しかかりそうでしたね。それが何か？」

紳士的な笑顔を浮かべてそう返してくる。その穏やかな目がもこ姉の方に向けられる。びくりともこ姉の身体が震えた。

まずい。とっさにもこ姉の腕を引いて背中に隠す。

それを見てゲイツは眉をしかめた。

「おやおや、感づかれましたか」

そう呟くと、俺ともこ姉に向けられていた視線が永森先生の方に移った。心臓が跳ねる。

「先生！ そいつから離れ」
瞬間、ゲイツの持った銀のナイフが先生の喉を斬り裂いた。

「あ？」

本当に一瞬だった。真紅の血が吹き出し、ゲイツを紅く染める。先生は何が起きたのかも理解できないように、大きく見開いた目で自分の血を浴びるゲイツを見上げていた。

「貴女の医者としての姿勢は美しかった。できれば貴女は最後にしたかったのですがね」

ゲイツはナイフを逆手に持ち変え、無慈悲に先生の眉間に突き立てた。ガスツと骨が碎ける音。先生の身体が力無く後ろに倒れた。目は見開かれ、天井を向いたまま光を失っていく。

ゲイツは先生の脇まで行くと膝を付き、そつと開いたままの目を閉じさせる。

なんだ……なんでそんなことができる？ どうして自分が殺した相手をそんな恍惚とした表情で見ることができる！？

背中にもこ姉の体温を感じる。ひどく震えていた。ゲイツは黙祷を捧げるように永森先生の前で目を閉じる。そして十字を切り、静かに目を開けると俺たちの方を見た。

「彼女は美しく、誇り高い人物でした」

まるで自分の言葉に酔うように、ゲイツは言った。

「このような世界に放り込まれながらも医者としての信念を失わず、行動した彼女は敬意を表するに値します」

「なん、なんだこいつは……？　なんで？　どうして……こんな……」

出会って一時間も経ってはいなかったけど、俺のことを知りつつ患者として受け入れてくれた先生。それをこいつは……！

「なんで殺した！？　馬場はまだわかる……いや、わからないけどまだ理解できる。けど先生が何をした！？　何のために殺した！？」

「その質問への答えは二つといたところですかねえ」

銀の閃光が走った。ゲイツが俺たちに向けてナイフを振るっていたのだ。知覚するよりも早く身体が反応してガントレットで受け止めていた。ゲイツがニヤリと口元を弛める。

「あれを止めますか、さすがと言っておきましょう」

「くっ?!」

もこ姉を脇に抱え、扉を塞いでいたテーブルを蹴り飛ばして外の通りに飛び出した。左右に視線を走らせる。幸い見える範囲にゾンビはいない。

瞬間、建物の中から無数のナイフが飛んできた。狙いは……もこ姉か！ ナイフの軌道ともこ姉の間に腕を割り込ませてガントレットで払うように弾き飛ばした。だがその隙を狙ったナイフが一本、俺の肩に刺さる。

「りゅう君?!」

歯を食い縛ってナイフを抜いた。道に投げ捨て、建物の方を睨む。

「逃げるのはいただけませんねえ。貴方も衝動に従い、闘争を楽しもうじゃありませんか」

コツコツと足音を立ててゲイツが建物から出てくる。その両手には刃渡り30cm程の短剣が握られていた。

「お前はいつたい……何なんだ？」

「おっと失礼。そういえば先程の質問にも答えていませんでしたね」

ゲイツはそう言うと芝居がかった動作で両手を広げた。

「まず、何故こんな事をするのかという理由。それは私たちが殺す側、神であるマキナの言葉を借りるならPKとしてこの世界に召還されたからですよ」

「P……K……?」「たぶん……【プレイヤー キラー】ってことだと思っよ……」

もこ姉が静かに言った。

「オンラインゲームとかで、他のプレイヤーを殺すプレイヤーのこと、そう言うの……」

他のプレイヤーを殺す……か、そうかこいつが……いや、こいつも……

「そうです。私はプレイヤーを殺すために召喚されたプレイヤー。神の意思に従って殺し、殺すたびに強くなり、また新たな標的を殺す。そんな存在です」

「……じゃあ、お前は生き延びるために他の人を殺したのか？」

僅かな望みに賭けてそう聞いた。けどゲイツは笑って首を振る。

「いいえ、確かに誰かを殺すようには言われていましたがこの試練でのノルマは一人。馬場を殺した時点でそれは達成しています」

「じゃあ何故……！」

「もう一つの理由、それはただ楽しいからですよ」

胃に重い物が落ちたような感覚だった。

「たの……しい？」

「そうです」

ゲイツはニヤリと口元をゆがめる。

「昔から好きなんですよ。命が散る瞬間を見るのが。生前が美しい者であればなおいい。高貴な命が壊れ、散りゆく様、美しい者をこの手で壊す背徳感、壊れ、動かなくなつた身体、そこに漂う虚無感、それはもはや芸術だとは思いませんか？」

狂ってるのか……？ いや、違う。こいつは正気だ。正気で言ってる……。

「お前は……普通じゃない……！」

「ええ、もちろん理解していますよ。私は異常者だ。ですがそれがどうかしましたか？ 私は“普通”の中に埋没して死んで生きるよりは、異常者として生きて死ぬことを望みます」

こいつは、殺す。殺さなきゃいけない。生かしておいちゃいけない！

「そして私が何者かという質問、申し訳ありませんがこれは私にもわからないのですよ。」

この世界に召還され、マキナに様々な情報や知識を脳に刷り込まれる課程で記憶が混乱してしましましてね、元の世界でのこともほとんど思い出せないんです。

ゲイツという名前もマキナに与えられた名前で、本当の名前すら思い出せません」

ゲイツは肩をすくめて小さく首を振った。

「ですが、おぼろげな記憶の中に一つ、私の愛称らしきものの記憶が有りましてね、今はその愛称とゲイツという新しい名前を組み合わせたものを使っています。」

ですから私が何者かと聞かれればその名で答えましょう」

ゲイツは芝居がかった動作でうやうやしく礼をした。

「我が名はゲイツ・J・リップー。神の意志により、貴方々の命を切り刻む者です」

背筋をゾクゾクと寒気が伝った。顔を上げてこちらを見るゲイツ。漂ってくる明確な殺気。

俺は師匠の元で何年間も武道の鍛練を積んできた。そのおかげか、戦う相手と向き合った時にだいたいの相手の力量や自分が勝てる相手かが感じ取れるようになった。

……とんでもない相手がきたもんだ。けど……ちょうどいいのかも知れない。もこ姉の脅威になるこいつを潰すか、潰されるかして別れよう。

俺は一緒にいない方がいい。俺と一緒にいたらきつともこ姉を傷付ける。だからここで別れよう。

「もこ姉……走れ」

「え？」

呆けた顔をするもこ姉の背中を突き飛ばす。

「いいから走れ！ 死にたいか！」

もこ姉の顔に怯えが走る。

「だ、だって……まだゾンビが……」

「ああくそ！ わからないか！？ もこ姉じゃ足手まといなんだ！早く行ってくれ！今すぐ！！」

もこ姉の表情が固まった。

目を伏せて、小さく一言呟くと俺に背を向けて走り出す。

『ごめんなさい』それがもこ姉の呟いた言葉だった。どういう意味で言ったのかな……。

思わずほくそ笑んでしまった。たぶんもこ姉のことだから俺の言葉通りに受け取ってんだろうなあ……昔からそういう所は妙に素直だったから。

「それで彼女を護ったつもりですか？」

ゲイツはため息混じりに言った。俺の行動に失望した、そんな感じだ。

「だとすれば貴方の彼女を護りたいという想いは酷い自己満足だ。貴方の庇護無しに、彼女がこの先生き残れると思いますか？」

「自分が勝つ前提で話すなよ」

「すでに貴方にも結果は見えているはずですよ」

ゲイツは悠然と構える。そうだ、俺とこいつがやり合ったら……ほぼ確実に俺が負ける。それももこ姉を逃がした理由の一つだ。

「本当に彼女を護りたいなら、貴方は自分もどうにか生き残ることを考えねばならなかった。自己犠牲、聞こえはいいですがそれは彼

女を一人、この世界に放り出すという残酷な行為であり愚かな自己満足です。美しくない」

好き勝手いつてくれる。……けどそうだな。そうだよ。自己満足、そんなの理解してる。

「……絶対無いだろうけど、もこ姉が俺の後を追って死んでくれたら、たぶん俺は嬉しいなんて感じると思う」

「……ほう？」

「俺なんかが何もかもからもこ姉を護れるなんて思っていない。より確実にもこ姉を逃がせる手があるっていうならそれが俺の最善手だ。……俺はただ、目の前でもこ姉が死ぬのは、傷付くのは、悲しむのは……死ぬより辛い。だから命に代えても護る……！」

小指から順に指を折り、固く拳を握った。

「だからお前はここで、死んでも止める！……」

ゲイツの表情が変わっていた。侮蔑から、とても嬉しそうな、楽しそうな表情へ。

「歪んだ愛ですねえ。……いや、逆ですね。綺麗事を並べる人間より貴方の方がよほど真っ直ぐだ。面白い！ 実に好感が持てますよ。……ならば」

ゲイツがもこ姉の背中に向けて投げナイフを構える。一気に踏み込んでその手を掴んだ。

「簡単にやらせるわけないだろ！」

「健気ですねえ。そして実に美しく、愚かです」

ゲイツの口元が歪む。組み合ってるだけで気持ち悪い。腹に蹴りを入れて吹き飛ばした。

向こうの武器はナイフや短剣だ。それなら師匠との訓練で何度かやったことがある。とにかく間合いを保って……この試練が終わるまでの時間を稼げれば 突然 胸に鋭い痛みが走った。

「え……？」

視線を落とす。長い三股の刃が俺の胸に突き刺さっていた。

視線を上げる。ゲイツの手に握られていたのは長さ3mはある長槍だった。

なん……こんなの……さっきまで……

「ここは元の世界とは違うのですよ？ 私がどういった能力を持っているか考えなかった貴方が迂闊でしたね」

能……力……？

胸に刺さった刃を抜いて数歩下がった。喉を血が上がってきて口から溢れる。

ま……ずい……。

ゲイツが口元を歪めて笑うと長槍が一瞬で消えた。代わりにまたナイフがゲイツの手の中に現れる。

「冥土の土産……というわけではありませんが、この能力について教えてあげましょうか」

ゲイツがそう言うとナイフは消え、その手には代わりに大鉈が握られていた。

「どうです？ 面白いでしょう？ ……私の能力の一つは【狂喜の宴】この世界のありとあらゆる刃物を作り出す能力です」

武器を作り出す能力？ ああくそ、キチガイに凶器持たせんな。

ゲイツの振り下ろした鉈を避けた。

刃物を作り出せるとは言っても使う人間はあいつ一人だ。隙を突ければどうとでもなる！

ゲイツが鉈を戻す前に体勢を低くして踏み込んだ。

一撃ぐらいならかまわない。どうせ俺の今の身体は簡単には死なない。けど向こうはどうだ？ 相討ちならこっちに分が有る！

「おやおや、誰が手にしか出せないと言いましたかね？」

全身を貫かれる痛み。

ゲイツの肘から、膝から、腰から、全身から飛び出した刃が俺を貫いた。

六日目(5)

side 浅倉 もこ

走る。

日が沈んで薄闇に包まれた廃墟の中をひたすら走る。
胸が苦しい。息ができない。けど走った。

二人死んだ。あの人に……殺された。逃げないと、逃げなきゃ。けどりゆう君は……、わかんない、わかんないよ……。なんで逃げないのよ……。なんで戦うのよ……。あたしを護ってよ！

……邪魔……。だから？ あたしのこと邪魔なのかな？ 足引っ張ってきたから……。

その時、何かが足に引っ掛かった。バランスを崩して地面に顔を打ち付けた。痛い。口の中に血の味が広がる。

「に……く……だぁ……」

「ひっ?!」

瓦礫に半分埋まった状態のゾンビがあたしの足を掴んでいた。ゾンビはニタアと笑うとあたしの足を両手で掴んで瓦礫の中から這い出てくる。

「や……やあ……」

振りほどこうとするけどほどけない。カラン、と手が落ちていた剣に触れた。

「っ！」

気が付いたらあたしは血塗れになっていた。目の前には何度も頭を叩き潰したゾンビ。ぼんやりと、あたしはそれを見ていた。

手に残った頭を叩き潰す感覚。……吐き気がする。

『お、敵初討伐だね。童貞卒業おめでと。……ん？ 女の子で童貞卒業って変かな？』

目の前に白いマキナが現れた。あたしはそれを見上げる。

『うわ、ぶっさいくな顔。死んだ魚みたいな目してるよ？ というかまたそんな状態？ほんとメンタル弱いね』

マキナは大きな鏡を取り出した。そこに映ったあたしは本当にぶっさいく。目に光が無くて、髪ボサボサで、泣きすぎて顔はむくんで身体中 血塗れで。

『あんまぶっさいくなのは見たくないよ。せめて汚いのは勘弁ね』

マキナは軽く指を振る。すると鏡に映ったあたしの身体はきれいになった。血の跡は消えて、破れた服もボサボサの髪も、むくんだ顔も元に戻る。けど光の無い目だけは変わらない。

『でさ、でさ、ど〜お？ 初の敵討伐の気分はさ？』

マキナはそう言ってあたしの顔を覗き込んだ。

『もしも〜し？ パニクるのは別にいいけど無視はしないでよ〜』

あたしの前で手を振る。しばらくすると小さくため息をついてパチンと指を鳴らした。

なんでこいつはこんな……。こいつだ……。こいつさえ、いなければ……！ あたしはこんな目に……！

「うあああああつー！ー」

『おっ！？』

剣を握りしめてマキナに斬りつけた。ざくりと肉を斬る感触が手に伝わる。

『きゃあああああつ？！』

マキナの胸元から血飛沫が上がった。空中に浮いていた身体が落ちる。

力無く大の字に伸ばされた手足。血がゆっくりと道に広がって
く。

「や……やっ……ってない」

ひよいと反動をつけてマキナは立ち上がった。パンパンと自分の
服を払うと、あたしが斬った傷も血の跡も消え失せる。

『やれやれ、こうでもしないとまともに話もできなさそうだったか
らね。あ、おめでと。私にダメージ与えたプレーヤー、もこち
やんが初めてだよ』

「なん、なのよ……。次は何しにきたのよ！ ……いいよ……もう
……好きにしてよ……」

手から剣が滑り落ちた。もうやだ……。たとえ何をやっても、こ
いつには絶対通用しない。頑張れば頑張るほど辛くなる。ならもう
何もしたくない！

けどマキナはあたしの反応に不満そうに顔をしかめた。

『別に今は何もしないよ。だってここであなたに何かしたら、あな
たのために死ぬりゅう君が可哀想じゃない。……いや、可哀想なの
は別にいいんだけどお気に入りキャラが犬死にっつのは嫌なのよね』

え？

『携帯のマップ画面、見てみて』

あたしは言われるがままに携帯を取り出した。マップ画面。表示
されるゲイツとりゅう君、二人のマークー。

りゅう君のマーカーが赤く点滅してる。心臓がドクンと縮み上がった。

『もうわかってると思うけど、赤の点滅はもう死にかけてるってことなの。ちなみにりゅう君はこのまま放って置いたら……え〜と、32分と17秒後に出血多量で死んじゃうから』

ゾクゾクと上がってくる悪寒。マップに表示された点滅する赤いマーカーから目が離せなかった。

「うそ……だって……そ、そんな……」

「ん？ なに？ りゅう君は死なないとも思ってた？ んなわけ無いじゃない。そもそも、ゲイツのレベル33だし、あいつのスキル接近戦ではかなり上位のランクA相当だし、りゅう君が勝てる見込みあんまり無いのよね。」

りゅう君もそれがなんとなくわかってたみたいだよ？ そうじゃなかったらこんな危ないところをもこちゃん一人で行かしたりしないよ。今まで馬鹿みたいにもこちゃん護ろうとしてたの忘れたの？』

死……ぬ……？ りゅう君が？ そんな……だめ……。だめ……！ 絶対だめっ！！ あいつは……あいつは……。

あれ？ あいつは……なに？ なんてこんな動揺して……なんで、あいつは、変態で……お節介で……幼なじみで……。

あたしの……幼なじみで……弟分で……親友だった。大切な、大

切な親友だった。

「お願い……します……」

『ん？』

あたしは土下座していた。頭を地面にすり付けて、心からお願ひする。

「お願い……します！ あいつを……りゅう君を助けて！ 何でも……何でもするから！ 何でもしていいから！」

そうだ。あいつは幼なじみのりゅう君だ。ずっとまた会いたいと思つてた大切な親友だ。あんなことが有つて素直に喜べなかつたけど、本当はすごく嬉しかった！ だから……だからこんなお別れなんて絶対嫌だ！

マキナはニヤリと笑つた。楽しそうにふわふわ浮かびながらあたしを見る。

『りゅう君が死ぬつてなつたらずいぶん態度変わったね』 ふふ、何でもか。なら自分で助けなよ。何でもするんでしょ？』

「そ、それができないからあんに頼んで……！」 『だからそういう考えが嫌いな』

バチンとマキナはデコピンした。目の前に星が散つて仰向けに倒れる。

『できない？ やらないだけじゃない。できないなんて誰が決めた

の？ あなたでしょ？』

「だ、だってあたしにはあいつを助けられるような力なんて……！」

『考えた？』

え？

『もちゃんはりゅう君と出会う前、必死に自分の能力の使い方を考えてたはずだよ。』

正直言うならね、もちゃんの状況への適応力と頭の回転の早さは全プレイヤー中トップクラスだった。

あの時は私も“この子はすごい”って期待してたんだよ？ ……けど、りゅう君や恋ちゃんと出会ってからあなたは考えなくなった』

マキナはふわふわ浮いて仰向けに倒れたあたしの真上に来た。

『楽だもんね、誰かに頼るのって。楽しんで怠けて、結果がこれ。さ、どうする？ 諦める？ それとも頑張る？』

何も言い返せなかった。そうだ……こいつの言うこと……間違っていない。

あたしは考えるのを止めていた。自分で何とかしなきゃって思ってた時は必死に考えてたくせに……。りゅう君と再開してから……。あいつは護ってくれるから……。あたしは甘えて……。

「……あと、何分？」

あたしがそう聞くとマキナはニッコリ笑った。

「28分。回復魔法が間に合うのは25分つてとこかな？」

あたしは身体を起こした。 考えないと。

なんでマキナがこんなことを言いに来たかとか、疑問は尽きないけど、それは全部 後回し。

考えないと。今頑張らなきゃ絶対に後悔する。あいつは……あたしの幼なじみで弟分みたいなやつなんだ。

他のどの友達よりも身近で、大切で、大好きだったりゆう君。

……あたしは、また昔みたいになりたいんだ。昔みたいに仲良くなって、けんかして、昔みたいにあいつを大好きになりたい。

こんなところで……こんなところで死なせるなんて絶対にやだ！

あたしはどうすればいい？ どうやったたら戦える？ どうしたらりゆう君を助けられる？

……ダメだ。考えがまとまらない。違う、こんな考え方じゃダメだ。あたしの武器になるのは魔法や変な能力なんだから。

たとえば……そう、ゲーム。ゲームでならあたしはどうする？

目的は友達を助けること、敵は格上、プレイヤーはあたし。こんなシチュエーション腐る程クリアしてきた。だからきつとできるはず。正攻法でやるのがダメなのはわかりきってる。なら……。

っ！

ある！ あった！ あたしの戦い方！ あたしにしかできない戦い方！

上手くいくかはわからないけど、絶対に意表は突ける！ もうこれしか思い付かない！

あたしはすぐに立ち上がり元来た道を走っていた。

六日目(6)

マキナが言った、りゅう君が手遅れになるまであと8分。あいつが何を考えてるかわからないけど今はマキナの言葉を信用することにした。

ぎりぎりまで仕込みに時間を使って、りゅう君のところへ走る。魔力は……ほぼ全回復してる。回数で言えば回復用の【ヒール】一回、これはりゅう君の治療に絶対使うとして、それに加えて遠隔操作の【サイキクス】一回分が攻撃の【ファイア】三回分ってところか。

頭の中で必死に考えた魔法の使い方をシミュレーションする。大丈夫……絶対大丈夫！ 自分に言い聞かせながら走った。

見えた。そして絶句した。

地面に倒れたりりゅう君、身体から溢れ出した血でりゅう君の身体が浸っているような状態だ。

そしてそれを見下ろすゲイツ。手の中で血の付いたナイフを弄びながら愉悦に満ちた表情で死にかけているりゅう君を見ている。

酸っぱい唾を飲み込み、足を止める。ゲイツがあたしに気付いて顔を上げた。

「おやおや、これはこれは」

ゲイツはにやりと笑って丁寧にお辞儀する。ぞくぞくと背中
の筋肉が強張るのを感じた。

「貴女のことは諦めていたのですが、まさかそちらから来て
いただけると思いませんでしたよ」

ゲイツの手の中でナイフが光る。

「う……」

一歩下がってしまった。覚悟を決めて来たはずなのに足がガタガ
タ震え出す。

怯えるな！ そう、あんなやつ何でもない。

いつもゲームでは格上のやつでもワクワクしながら行ってるでしょ
！ ああそう！ これはゲーム！ いっそそう思え！

……そうやってゲームをプレイしてる自分を想像したら本当に落
ち着いてきたあたし、どうかしてると思う。

深呼吸。ゲイツの位置とりゆう君の位置を確認する。手を後ろに
回した。

「装備、変更」

小さく呟くと手にボウガンが現れた。マップに表示された武器屋
の跡地で見つけたやつだ。ボウガンなのにマガジン式で、何発か連
射ができるようになってる変わったやつ。某狩りゲーみたいだ

しっかりとグリップを握りしめる。ゲイツを睨んで細く息を吐い

た。行く！

「これでも食らいなさい！」

素早くボウガンを構えて引き金を引いた。矢は真つ直ぐに飛んでゲイツの頬を掠める。

「……面白いですねえ。本当に私とやり合う気でしたか」

ゲイツはニヤリと笑った。ゆらりと身体を揺らしたかと思うとあたし目掛けて突進してくる。

「くっ……！」

あたしは矢をでたらめに連射した。けどその矢は全て外れるか、避けられた。

「そんな腕では私は仕留められませんよ！」

ゲイツがさらに速度を上げた。遠距離武器を使う相手には接近戦に持ち込む。ゲームと同じだ。

向こうもそれがわかってるみたいだ。狂った笑みを浮かべ、手に持った血塗れのナイフを振りかぶる。

……そう、やっぱりだ。遠距離武器相手には接近戦。それは現実でも同じだった。“ちゃんと接近戦を仕掛けてきてくれた”。

ボウガンはあくまでも仕込み！ あたしに突進させて、本命をぶつけるための！

ナイフが届く距離まであと五歩、四、三、 かつた！

ボウガンをしまつて両手を前にかざした。頭の中のアイテム欄に一気にチェックを入れる。

「アイテム！！　まとめて取り出す！！」

あたしの視界が鋼色の壁に包まれる。 ここに来るまでに拾い集めた剣　31本、それをまとめてあたしの目の前に取り出した。

「【サイキクス！】」

さらに目の前の剣の切っ先を全てゲイツに向けた。

「なっ ？！」

驚愕の声。ゲイツが止まりきれずに剣に突っ込んだ。上がる血飛沫、剣の壁を突き破って来るのを反射的にかわす。

ゲイツの身体が地面を滑った。少し遅れ、激突の衝撃で弾き飛ばされた剣が盛大に音を立てて舗装された道路にぶつかる。

「や……やってくれましたね……」

震える声でゲイツは言った。ふらふらと立ち上がりこちらを振り向く。

「うわ……」

思わず声を漏らしてしまう。ゲイツの右目に大きな傷が走り、潰れていた。身体中傷だらけで、血がボタボタ滴っている。

「ふ……ふふ、良い、良いですよ。貴女は美しい……恐怖に打ち勝ち、私にこれ程の傷を負わせたことは驚嘆に値します……」

ゲイツは嬉しそうに顔を歪めた。手に持っていたナイフがいつの間にか鋸に変わっている。

「是非とも……是非とも切り裂きたい！」

頭の中で装備にチェックを入れた。

「装備変更！ フルアーマー！」

次の瞬間あたしの身体はぶかぶかの全身鎧に包まれていた。鋼の肩当てがゲイツの鋸を弾く。

「お願い！ 動いて！」

ゲイツの足元に散らばった剣の内一本、まだサイキクスの効果の切れていなかったやつを操る。それでゲイツの足に思い切り斬りつけてやった。

「ぐあああああつ！？」

崩れ落ちるゲイツ。あたしはすぐに鎧を解除してりゅう君の元へ走る。

「りゅう君！」

「も……こ……姉……?」

まだ生きてる！ 滑り込むようにりゅう君の身体に覆い被さった。お腹に空いた穴に意識がクラクラしたけどそこに手を当ててありったけの魔力を込める。

「お願い！【ヒール】」

手から光が溢れた。傷の周りがシュウシュウ音を立てると見る間に傷がふさがっていく。りゅう君の目も少し光が戻った。

「りゅう君！ 大丈夫？ 立てる?」

「お……う……。っ！ 後ろ!」

りゅう君の言葉に後ろを振り返る。ゲイツが投げナイフを構えていた。

「く！ もこ姉下がれ!」

「りゅう君邪魔!」

装備を変更してボウガンを取り出す。

あたしの前に回ろうとしたりゅう君を突き飛ばしてゲイツが投げたナイフを空中で射ち落とした。

りゅう君とゲイツが驚いたように目を見開いて弾かれたナイフを目で追う。

その間にゲイツに照準を合わせ、連射する。

「むっつ！？」

ほとんどが短剣で弾かれたけど一発がゲイツの肩に突き刺さった。ゲイツはそれを無理やり引き抜き、さらに凄絶な笑みを浮かべる。

「ふふ、なるほど、最初に矢を外したのは私の接近を誘うためのブラフでしたか……。ナイフを落ち落とすとは……。見事な腕前です。まさかそこまでボウガンの扱いに長けていたとは」

あたしは内心で舌を出す。クロスボウの扱いなんて知るわけないでしょバーカ！ あたし普通の高校生だよ！？ けどゲームで仕組みを知ってるとか必要ある？ FPS（一人称ガンシューティング）でキルレート20を超えるあたしを舐めんじゃないわよ！ 心の中でやけくそで叫んだ。

ゲイツはくつくつと笑いながらまた立ち上がる。足を斬ったはずなのにまったく堪えた様子がない。なにこいつ？ こいつもゾンビじゃないでしょうね……。

「……今日は敗けを認めましょうか。さすがにこの出血量、これ以上はこちらも無事では済まなそうです」

「……え？」

「では、ご機嫌よう」

ゲイツはそう言うとおあたしたちに背を向ける。

……これ射つとした方がいいかしら？ 捨て台詞の後だけどそっちの方が安心よね？ ゲイツの後頭部に照準を合わせる。

その時、りゅう君があたしの前に立った。

「止めとけ……もこ姉。行かせた方がいい……」

りゅう君がゲイツから視線を反らさず言った。ゲイツはそのまま足を引きずりながら歩いていき、やがて見えなくなった。

「……………」

「……………終わった？」

ゲイツが見えなくなったとたんいきなり足が身体を支えられなくなった。カクンと足が折れてしりもちをつく。

「も、もこ姉?! 大丈夫か?! どこかやられたのか?!」

「い、いや、別に……ん、あれ？」

立とうとしたけど全然立てない。え? 腰抜けた?

りゅう君が膝を付いてあたしの状態を確認するとキツとあたしを睨む。

「なんであんな無茶したんだよ! もう少して死んでたんだぞ!」

……………無茶? もう少して死ぬところだった?

何を言ってるのこいつ? 思い切り自分のことじゃん。あたしが必死に使える武器を探してる間どれだけ心配したと……。

さっきまで心配してた分がそのまま怒りに変わってく。拳を握っ

た。

「ばかつ！」

「ぶつ?!」

ぶん殴った。

「思い切りこっちの台詞よばかつ！ あんたあと少し遅かったら死んでたんだよ!? どんだけ心配したと思ってんのよばかあああつ！」

「ちょ!? やめ……!! グーはやめるグーは！」

両手首をがっちり掴まれた。腕を広げられた状態で顔を見られる。

「わかった！ わかったからもう止めろって！」

……こいつは全然わかってない。涙がぼろぼろ溢れてきた。

「うおつ?! ちょ?! 泣くなよ!?!」

おろおろし出すりゅう君。もう知らない。慌てるだけ慌てればいいんだ。ちよつと反省しろ。

声を上げてわんわん泣いてやった。おろおろしたままあたしをなだめようとなんか言ってる。

……本当は、謝ったりお礼したりしないといけないんだけど、それは後にしよう。今はたっぷり慌てさせてやる！ 後悔させてやる！
もうこんな無茶しないように……ね。

六日目（7）

ああ、そういえば昔もこんなこと有ったっけ。

あたしがりゅう君に泣かされて、りゅう君はずっとおるおるしてて。

女の子に泣かれるのが苦手なのは変わってないね。

涙を拭く。大きく息を吸って、吐いてりゅう君を見上げた。

窓から見える大きな月をバックにりゅう君は頬をポリツと掻く。

あたしたちは元の宿屋の部屋に戻って来ていた。月明かりが部屋を青白く染めている。あたしはベッドに腰掛け、りゅう君は窓枠にもたれ掛かってあたしを見ていた。

「あゝ、その、落ち着いたか？」

「ん」

りゅう君の言葉にあたしは短く返事する。再び沈黙。いっぱい話したいことが有るのに言葉が見付からない。

……いや、言わなきゃいけないことは一つはつきりしてる。うん、これから言おう。言わなきゃ始まらない。

「りゅう君……今までありがとう。それと、ごめんなさい」

りゅう君は驚いたように顔を上げた。

「りゅう君、ここまですごく頑張ってたたしのこと護ってくれたよね？ フィロちゃんを助けてくれて、半魚人から庇ってくれて、落ち込んでるあたしを気遣ってくれて。本当に、本当にありがとう。すごく感謝してる」

「お、おう」

りゅう君の顔が赤くなった気がした。あはっ、照れてる照れてる。あたしはさらに続ける。

「それから、ごめんなさい。あたしはずっとりゅう君に頼りっぱなしだった。自分で頑張らないで、りゅう君に依存して、嫉妬して、八つ当たりして、ごめんなさい。りゅう君だっていきなりこんな世界に連れて来られたのに……本当にごめんなさい」

「べ、別に俺は気にしてないからいい……俺が好きでやったことだしな」

よし！ 言った！ 胸のつつかえが取れた気分。思わずホッと息をつく。

りゅう君はあたしに背を向けるとポケットの中を探った。けど目的の物は見付からなかったらしい。りゅう君がこういつ時に欲しがるのは……これかな？

「アイテム取り出す……と、りゅう君？」

「ん、ああ、サンキュ」

アイテムボックスに入れといた飴を投げ渡した。りゅう君はそれを受け取って口に放り込むとようやく人心地付いたみたいに表情を弛める。

「ねえ、りゅう君？」

「ん？」

「りゅう君、何か隠してるよね？」

りゅう君の身体が強張るのを感じた。視線が泳ぎ始める。……たぶん、ここで聞き逃したらもうちゃんと聞く機会は無くなる。なんだかそんな気がする。あたしはベッドを降りてそっとりゅう君の手を取った。

「もこ姉？」

「あたしに話せないこと？」

「それは……」

「あたしだって、ちゃんと謝ったんだよ？　女の子に言わせてりゅう君は黙ってるつもり？」

りゅう君は小さくため息をつくとベッドの方に歩いて行って、深く腰掛けた。あたしもその隣に腰掛ける。

「……そうだな。話さないとな」

そう言うとガントレットを外して、おもむろに学ランを脱ぎ始め

た。

学ランを脱いで現れたのは 鱗？

よく日焼けした筋肉質の身体にちりばめたように鱗が有った。指先で触れてみる……本物だ。

「黒竜の竜人。別名は【殺戮竜】今の俺の身体の種族名だ」

りゅう君はおもむろに言った。竜人？ 殺戮竜？

「種族としてはこの世界で最凶最悪。生まれついた時から破壊衝動の塊みたいな生物。見る物全て破壊し、殺し尽くす。大昔に、本来敵対してる人間と魔族が手を組んでまで滅ぼした種族……だとさ」

破壊……衝動？ それって……もしかしてあたしがゾンビに襲われた時の……。

「勘のいいもこ姉なら察しは付いただろ？ 俺もその破壊衝動つてのを持つてる。現に一度、本当にもこ姉を殺しそうになった。……だからゲイツと戦った時、もこ姉から離れようとした」

そうか……だから、だからあの時りゅう君はあたしを……

「け、けど！ 別に今までは平気だったじゃない！」

「それは……」 『スキルの“過守護”が働いてたからだよ』

この声？！ そう思った瞬間いきなり後ろからマキナに抱きつかれた……ってちょ？！ 胸触るな！？ 揉むなつねるな引つ張るな？！？！

『ふんふん、普乳つと。良かったねりゅう君、これならいろいろ挟んだりとかできそうだよ』

「な、何を言ってるのよあんたは?!」

『だってだって、こついうのって男の夢なんですよ？ できるかできないかでプレイも全然変わるし』

こいつ何を言ってるの?! ……チラリとりゅう君を試してみる。全く無反応。変な気を起こされるよりはいいけどなんか複雑だ……。

りゅう君はマキナを睨んだまま微動だにしない。

「何しに来た？」

『もこちゃんに“過守護”の説明をね。りゅう君話せないでしょ?』

マキナがそう言うとりゅう君は黙った。

過守護？ たしかりゅう君のスキル……効果は【守護対象を護るのに特化する】だっけ？

マキナはふわふわ空を飛んであたしたちの正面に回るとパチンと指を鳴らした。マキナの周りに黄色っぽい球形の空間ができた。なにこれ？ バリアみたいなもの？

『過守護って言うのはランク：A++の防御系スキル最高峰の一つ。平たく言っちゃうと護りたい人の最高至高のボディガードになれるスキルかな？ ちなみに今私の周りに有るのは視認できるようにした過守護領域ね』

「……ボディーガード？ 過守護領域？」

『そ、行動や思考速度の加速とか痛みの緩和、判断力向上とか効果はいろいろ有るけど、目玉はこの過守護領域。“ 守護対象に迫るありとあらゆる脅威を無効化する結果を展開する ” って能力。使用者の心の強さ次第だけど、脅威であればそれが剣だろうが毒ガスだろうがウイルスだろうが隕石だろうが、果ては敵意や殺意まで無効化しちゃうチートスキル。それが過守護だよ。

ちなみに私も普段は似たようなのを常時展開して周りから敵意を向けられにくくしてるの。ボーナスあげに行く度に攻撃されちゃかなわないしね。実際もこちゃんも私に敵意向けにくいでしょ？』

そういえば。

最初にこの白いマキナに会った時も今も、あんなことが有った直後なのにこいつを憎めない。子供のイタズラみたいな感じで心が済ましてしまっている。これが過守護領域の効果ってこと？

……殺戮竜の破壊衝動と、あらゆる脅威を無効化する過守護……それってつまり……

「りゅう君の破壊衝動を過守護が打ち消してるってこと？」

そう言つとマキナは驚いた顔をした後、普通の子供みたいに表情を輝かせた。

『正解正解！ その通り』 さっすがゲーム脳は理解が早い！
そこにシビれる！ 憧れるっ』

「なんでここでジヨ ヨネタ?!」

『なんとなく！ いや、そのツッコミ嬉しいな、ってマキナはマキナは感動に涙ぐんでみたり』

「……………あんだ、オタ？」

『YES！』

そう言っつてマキナは親指を立ててスツゴいい顔でサムズアップ。

まさかオタな神さまなんて…………… っつて馬鹿あたし！ なんてちょっと親近感感じてるのよ！？ こいつに何をされたか忘れたの！？ こ、これも過守護の効果……………？ なんて恐ろしい……………。

『うあ、なんかもこちゃんのこと好きになってきたかも。うん、やっぱり主人公の隣にはヒロインがいないとね。ちなみにちなみにもこちゃんは戦うヒロインと護られるヒロインならどっちが好き？』

「え？ あ、戦うヒロイン……………かな？」

『だよねだよね、やっぱりヒロインだって頑張らないとね。戦場で育まれる愛とかもつく、ってなるよね？』

「ん……………まあそれは同感ね。あたし的には特に」

「……………話進めてくれないか？」

りゅう君が呆れ顔で言った。あ……………しまった。マキナはケラケラと笑っつ。

『ごめんごめん。っと、もちちゃんの言った通り、りゅう君の破壊衝動は過守護のスキルが封じてるの。いや、最初はさすがの私も驚いたよ。』

ラスボス的なキャラとして殺戮竜の身体に、特に潜在能力高かった人の魂放り込んだら固有スキルで自分を封じちゃったもん。

とはいえ黒竜の竜人としての心の根幹を占める破壊衝動と力を封じちゃったりスクはけっこうあったんだけどね。根っこが変われば枝も変わる。もちちゃんも気付いてない？ りゅう君の変なところ』

……変なところって言われたら変なところだらけだ。いきなり胸わしづかみにされたり、全然怪我を気にしなかったりやたら冷静だったり。

『破壊衝動と力を封じた影響でりゅう君の心、感情、記憶、欲望なんかも影響がでてるのよ。特に性欲関係は過守護の元々の性質もあつてほぼ消えてるわ』

りゅう君の方をみる。……なるほど、思い当たる節は多々あるわね……。

『ま、結果完成したのが殺戮竜の破壊衝動と力を封じ込めちゃって、封じ込めるのに過守護の全能力を使ったうえに心まで変に歪んじゃった、特に何の能力も特徴もない普通の人間のりゅう君ね』

「……けど」

りゅう君が静かに言った。マキナとは打って変わって真剣な表情だ。

「頭に血が昇った時、破壊衝動を抑えきれなくなっただ……。もう少しでも姉を殺しそうに……だから俺はもこ姉から離れよう」と……」

『それ、やめた方がいいよ』

「……なに？」

『今、りゅう君の最優先守護対象はもこちゃんでしょ？ そのもこちゃんが近くににいるからこそ過守護が最大限効果を発揮して破壊衝動を封じられてるの。リアルな話、離ればなれになったら一週間も持たずに破壊衝動が勝っちゃうよ』

啞然とするりゅう君。けど、ぶっちゃけあたしはそれほど応えなかった。むしろおかげで楽に決心できる。道が一つなら迷うこともない。

りゅう君の手を取って、反論できないぐらいにっこり笑いかけてやる。

「それじゃ改めて、よろしくねりゅう君」

「は？ ちょ？ もこ姉っ?!」

勝手にどっか行かせてたまるもんか。あたしやっぱリメンタル弱いんだよ？ 友達もいないしゲームも無いこの世界、その中で再開できたとっても大切な人。絶対離してやるもんか。

『おおっ！ ナイスプレイもこちゃん！』

マキナは子供みたいに嬉しそうに言った。こいつに敵意を持たないのはやっぱりこいつのスキルの影響なのかな？

けど、こいつがりゅう君のことを好きっていうのは伝わってくる。どういふ好きかはわからないけど……少なくともこいつはりゅう君が不利になる嘘は言わない。と思う。たぶん。

ん？

突然、マキナの頭上の空間が割れた。そこからぬつと、子供の身体ぐらいの刃が付いた大斧が現れた。

「え？　ちょ？　え？　なに？」

『ん？　もこちゃんどうし……ひでぶつ?!』

大斧がマキナの後頭部に振り下ろされた。頭に斧が刺さったままうつ伏せにばったりと倒れるマキナ。白い髪が血で赤く染まっつき、手足がピクピク震えてる。　え？　いや、ちょ!？　な、なんかマジで死にかけてる？

するとさっきの空間の割れ目から青い髪と青いドレスを着た、別のマキナが出てきた。

あたしたちの方を見てぺこりとお辞儀すると白いマキナの方に視線を落とす。

『白マキナ、個人への干渉とルール違反多すぎ、みんなで裁判してお仕置きする』

青いマキナはそう言つと白いマキナの足をむんずと掴み、自分が
出てきた空間の割れ目の中に放り投げた。

『竜斗さんともこさん、お騒がせしました』

青いマキナはもう一度ぺこりとあたしたちに頭を下げるとフツと
消えてしまった。

あとに残されたあたしとりゅう君。……えーっと………う
ん。あはは………とりあえず休もうか。うん。

おまけ マキナ裁判

黒マキナ『静粛に〜、静粛に〜、それじゃこれから白マキナちゃんへのお仕置き魔女裁判始まるよっ』

白マキナ『意義あり！ お仕置き魔女裁判って無罪にする気無しですか黒ちゃん！？』

黒マキナ『うん。それじゃ証人の赤マキナさん証言を』

赤マキナ『さらっとうんって言ったね黒マキナ……。えーと、白マキナは神崎竜斗と浅倉もこに過剰な干渉をし、勝手に時間操作した上に私の担当する試練に勝手に大量にゾンビとか配置しました。…：というかあたしのお気に入りだったPCがゾンビに殺されたんだけどどうしてくれるの？』

白マキナ『カツとなってやった。反省はしているが後悔はしていない』

赤マキナ『……黒マキナ裁判官〜、こいつ極刑にしてください』

黒マキナ『了解』

白マキナ『あ？！ うそっそごめんなさい！ ちょっとぶざけただけ！ み、緑マキナ助けて〜！』

緑マキナ『……私のお気に入りだった女の子、あなたが放ったゾン

「ビ30人ぐらいに輪されて狂い死にしたの……」

白マキナ「本っ当にごめんなさい！」

青マキナ「反省、してる？ 悪かったって、認める？」

白マキナ「み、認めたく無いものだな。若さ故の過ちというのは……」

黒マキナ「とりあえず有罪でいいよね？」
一同「意義無し」

白マキナ「わ〜！？ だ、だから冗談だって！？ 場の空気を明るくしようとしただけだって！」

黒マキナ「どんな罰を与えようか？」

赤マキナ「火山の火口に放り込むのは？」

青マキナ「重しつけて、海溝に沈める」

緑マキナ「魔界の触手植物使って監禁凌辱調教一週間のあと、身体中に冬獣夏草の菌糸を寄生させてキノコにするのがいいと思うわ……」

白マキナ「みんなひどっ？！ というか緑マキナが怖い!？」

黒マキナ「ん〜、それじゃ火口 深海 魔界植物の順番でやるってことでいいかな？」

一同『意義無し』

白マキナ『誰か意義唱えてよ!?! とういか全部やるの?!』

黒マキナ『あ、そういえば意義有る』

白マキナ『黒ちゃん……!』

黒マキナ『私がまだお仕置き決めてなかった。足の爪先から一分間に1cmずつ切断していくのはどうかしら?』

白マキナ『お前ら人間じゃねえ!』

赤マキナ『さして、それじゃさつそくお仕置きしようか』

青マキナ『緑……そつち、押さえて』

緑マキナ『わかったわ』

白マキナ『ま、待った! ちよつと待った! 少なくとも緑マキナのをやったら管理人っていう最高神のお仕置きが……』

青マキナ『ならノクターンでやる。大丈夫』

白マキナ『だ、大丈夫じゃない。大問題だ!』

緑マキナ『お気に入りの仇をとるのです……』

白マキナ『う……うう、まさかエル ヤダイカウンターが来るとは……』

……』

黄マキナ『こんにちは、まだ裁判やってるかな？』

白マキナ『あ！黄マキナ！助けて！』

紫マキナ『うふふふ、私のお気に入り、ゾンビに食い殺されちゃったんだ、だからちょっとお仕置きをね』

白マキナ『オワタ（＾o＾）／』

おまけ マキナ裁判（後書き）

実はこれでこの小説の一章終わりだったりするんだぜ……。

はい、という訳で次回からは二章になります。少し中途半端な気もするけど二章です。

一章はけっこうダークな感じでしたけど二章からは少し明るくなるかな？ とりあえずもちゃんのヘタレモードは終わります。

で、こっからが本題ですが二章入る前に一週間ほど更新をお休みさせてもらいますm(_____)m

この前風邪をひいた影響で書き貯めてた分が無くなっちゃった上に、今も少し体力が低下してて夜更かして書くのが厳しくなっちゃいますm(_____)m

とりあえずもうすぐお盆休みに突入するので、一気に書き貯めて念入りに推敲したいと思います。という訳でご理解とご協力お願いしますm(_____)m

それでは皆様、一週間後にまたノシ

七日目 小休止な一日（前書き）

待たせたな！！

というわけで一週間ぶりの更新です。

お盆休みのおかげでゆっくり休めましたし体調も万全です！

書きための方もそこそこ……では行きます！

前回までのあらすじ：2回目の試練から帰ってきました。
もこちゃんへタレ卒業＼（＾o＾）ノ

七日目 小休止な一日

六日目のあのあとは、あたしとりゅう君はほとんど一日中寝て過ごした。

りゅう君は試練で受けたダメージがキツかったから。あたしの方は久しぶりに走り回って筋肉痛でしばらく寝込んでただけ……。たぶんだけどゲーム脳の効果で宿屋でしばらく寝ると体力も魔力も全回復するみたいなのよね。だからりゅう君を回復しては寝て、回復しては寝て、を繰り返して一日過ぎたってわけ。

ちなみに恋ちゃんも試練やって、PKとも闘ったらしいけどぴんぴんしてた。おまけにオオイグっていう移動用の動物と、これからの旅で必要になるものも買い揃えてくれた。あのちっちゃい体のどこにあんな体力有るんだろ……。

ただ、あたし達に必要な物を買って無かったから、りゅう君を留守番させてあらためてあたし、フィロちゃん、恋ちゃんの三人で町に繰り出すことになった。

「……どうも周りの視線が気になるわね……」

あたし達は町の商業地区を三人で歩いていた。

この辺りはかなり賑やかだ。雑貨屋やら食べ物系のお店、さらに露店や路上販売なんかがあちこちでやってて、その分人もやたら多い。その中ですれ違う人（特に男）がかなりの確率であたし達の方を振り返ってる。

なんかあたし達かなり目立ってるみたい。……まあ当然よね。

チラリと後ろを振り返る。

フィロちゃんは狼人族ってことで余計なトラブルを招かないようにフードと上着で犬耳やしっぽを隠している。けどフードから覗く顔はやっぱりかわいい。人混みに緊張してる姿はもう抱きしめたくなってくる。

そしてそれとは対照的に下駄をカラン　コロンと鳴らしながら堂々と歩く恋ちゃん。他の人とは違う東洋系の顔立ちにさらさらの長い髪、おまけに着物で下駄となると目立つなって方が無理だ。

「ん？　どうしたのじゃ浅倉？　わしの顔に何か付いておるか？」

「あ、いや、二人ともかわいいからやっぱり目立つな、なんて」

そう言つと恋ちゃんは「かわいい……複雑な気分じゃのう」とため息つきながら目を細めてあたしを見る。

「確かにわしらも目立ってるが、一番目立ってるのはおぬしじゃぞ？」

「へ？」

「人の視線や気を読むのには慣れておるから間違いない」

「いやいや？　なんであたしよ？　明らかにフィロちゃんと恋ぢゃんの方が目立つ要素満点でしょ？」

「もごさん、女の私から見てもかわいいですからね。ひそひそ周りで話されてますよ？」

フィロちゃんの耳がフードの中でピクピク動いた。

「う、噂？　え？　え〜と……あ、そつか……今はあたしもかわいくなってるんだっけ？　そう言われればさっきから視線が……きゃっ？！」

よそ見してたら誰かにぶつかってしまった。

「まずい、謝らない……と？」

「大丈夫ですか？　お嬢さん」

目の前にいたのは金髪巻き毛の超イケメンだった。カチンと身体が硬直した。

「申し訳ない。あなたのあまりの美しさについて見とれてしまいました。……よろしければお詫びをさせていただきませんか？　近くにいい喫茶店が有るんですよ」

「え……？　あの？　え……？　ちょ、これナンパされてる？　え？　いや、ちょ、待つ……」

思考が停止。なんか顔が熱い。耳まで真っ赤だよ。こちとら男慣

れてないんだよ。オタク舐めんな。高校入ってから数えるぐらいしか男子と喋ったこと無いんだよ。

助けてフィロちゃんー！ 恋ちゃんー！

ロパクでSOS。恋ちゃんとフィロちゃんが顔を見合わせる。フィロちゃんが慌てたように手と首を振ると、恋ちゃんがやれやれとといった感じでまたため息をついた。テテと小走りに走ってきてピヨンとあたしの肩に抱き付く。

「おねーちゃん 早く行かなくていいの？ 彼氏待たせちゃうよ？」

かなりビククリした。恋ちゃんは天使みたいな笑顔であたしにしがみついている。や、やば……可愛すぎ……は、鼻血出そう……。

「彼氏持ち……か」

さっきのイケメンはいきなり興味を無くした顔になった。そのまま恋ちゃんに手を引かれていったん人混みを脱出して路地裏へ。ホツと息をつくと後頭部を恋ちゃんに小突かれた。

「まったく、あれぐらい一人でさばけるようにならんか」

「う、ごめん。ありがとね？ あんな演技恥ずかしくなかった？」

「この程度のことを恥ずかしいと思うほど未熟でもないわい。むしろ恥ずかしくて弟子の友人を護れん方が恥ずかしい」

地面に着地して「ふんっ」と胸を張る恋ちゃん。なんつうか男前よねこの子。

「……そういえばまだ何を買に行くか聞いてなかったのう。いったい何を買っくんじゃ？ わざわざ神埼を留守番させて」

「下着とナプキンとかね」

……。

ん？ なにこの間。

「……すまん、なんと言った？」

「だから下着類と生理用のナプキン。ちゃんと買っとかないと困るでしょ？」

こっちの世界にも元の世界みたいな生理用品や下着類は有るみたい。マキナも女の子だしそこは気を効かせたのかな？

ん？ なんか恋ちゃんの表情が凍りついている？

「私なんか奴隷商の砦を脱出するときのゴタゴタで下着 着けて来れなくて……突然吹いてくる突風がすごく怖かったです……」

フィロちゃんが乾いた笑い声を上げた。恋ちゃんが盛大に吹き出した。

「な？！ つ、つつつまりおぬしは今、はいて……、あ、いや、すまぬ、何でもない」

どうしたんだろ？　なんかいきなり様子が変わったけど……？
慌てすぎてむせて咳き込みだした恋ちゃんの背中を擦りながら顔を見る。なんか赤い。んー、まあいいか。

「あたしももうすぐあれの日だったからナプキン買えそうで安心したよ……。下半身血まみれとかになったら本当に泣くしかないし」

「あ、それじゃ生理痛のお薬も買いに行きましょうか。よく効くお薬知ってますよ？」

「ほんと？　よかった。あたしけっこう重い方だから薬無いとけっこうキツイのよね。……あれ？　恋ちゃん？」

恋ちゃんは顔を真っ赤にしたまま口をパクパクさせていた。

……ははーん、わかった。さてはこういう話が恥ずかしいのね。やっぱりこちら辺は子供だなあ。　ちよっと苛め……じゃなくて、お姉さんとしていろいろ教えてあげないとね。うん。

恋ちゃんの耳元に口を寄せる。

「恋ちゃんって生理まだ？」

「ブツ?!」

「その反応はまだかな。んー、けど旅してる間に来るかもしれないし、一応恋ちゃんの分も買っときましょうか。ナプキンの使い方とか知ってる？」

「し、ししし知っているわけ無かろうがそんなもの！」

言った後で恋ちゃんはハッと口をつぐんだ。墓穴を掘ったって感

じの顔だ。なんかこうやって恋ちゃんいじめるの楽しいかも。あ、いやいや、あくまでも恋ちゃんのために教えてあげようとしてるだけだからね？」

「そっか、それじゃ今度教えてあげるね？」

「い、いらんわ！ わしは……」

「そっか。恋ちゃんの下着も買つとかないとね。ブラも……一応買つときましようか。着物の上からだと大きさわからないしお店の人に測ってもらいましょうね？」

「だ、だからいらんと……」「ダメだよ。ちゃんと付けとかないと形が崩れるって言うしあまり激しく動くと見えちゃうよ」

「せっかくだからレンさんの洋服も買いましょうか？ 着物だけじゃなにかと不便ですしね」

「フィロちゃんナイスアイデア。せっかくだからうんとかわいいの選んであげよ」

逃げ出そうとした恋ちゃんを後ろから捕まえる。ふふ、いくら強いつて言っても子供だし、力はあたしの方が上ね。

「は、はなさぬか！」

「だ〜め！ これから長旅になりそうだしちゃんと準備しないと。さ、行こ」

そのまま恋ちゃんを抱っこしながら歩いていく。最初は……下着

売ってるお店から行きましようか。

「わ、わしは何をしたああああっ!!！」

恋ちゃんの叫びが辺りに響き渡った。

八日目

side 神崎 竜斗

速い。広大な平原の風景がどんどん後ろに流れていく。

昨日の昼に町を出て丸一日、俺達はオオイグの背に乗ってフィロの故郷目指して移動していた。オオイグってどんな生き物かと思っただが……なんのことは無い、超巨大オオイグアナもどきだ。

俺達四人が余裕で乗れるぐらいの大きさ、背中は平べったくて乗りやすく、しかもあまり揺れない上に速い。おまけに大人しくて頭もいいとまさに乗り物になるために産まれたような……いや、たぶんそのために産まれたんだろう動物だ。

俺はオオイグの背中に取り付けた座椅子の上でそんなことを考えていた。フィロは頭に近い部分で手綱を握っている。元々オオイグに乗るのが好きだったらしくて、気分が良いのかしつぽがパタパタ揺れっぱなしだ。さっきまでは鼻歌まで歌っていたんだけど俺がそれを言ったら恥ずかしがって黙ってしまった。

上手かったのに……悪いことしたか？

もこ姉の方はなんか意識が朦朧としてる。どうも爬虫類が駄目だったらしくて、オオイグとの初対面では卒倒しかけていた。そういうえば子供の頃聞いた覚えが有るな、たしか寝てる時にヤモリが背中に入って来て、そのまま寝返りをうってグチャツってなったのがトラウマって。爬虫類……竜人の俺は大丈夫……だよな？

で、師匠は……。

「のう……、神埼、わしは……こんなキャラじゃったか……？」

なんか俺の隣で体育座りでいじけてる。昨日、もこ姉たちと一緒に買い物に行って帰ってきてからずっとこんな感じだ。(ちなみに帰ってきた時は白と黒を基調にしたゴスロリファッションだった)

「あの手の話を聞いただけでやたら恥ずかしくなるは、ひらひらした服を着せられて……その……、ほんの少しかわいらしいと思うわ……、のう？ わしってこんなキャラじゃったか？」

「いや、知らないっすけど少なくとも自分のキャラで悩む人ではなかったと思います」

そう答えると師匠は深くため息をついた。暗い顔でオオイグの背中に『の』の字を書き続ける姿はまるで普通の女の子みたいだ。

少なくとも元の世界にいた時の、毎日俺をしごいていた姿とは重ならない。

「もしかしたら……、体に合わせて心が変化していつてるのかのう……」

そう呟いて師匠はぐったりとうなだれた。

体に合わせて心が変化する……？ 確かにそれは有るのかも知れない。俺の方も竜人の体になって破壊衝動とかとんでもないもの持つようになったし、肉……とりわけ生に近いレア肉が以前より好きになった。

人間の男女だけでもホルモンバランスとかでかなり違いが有るらしいし、元の世界と違う体になるとやっぱりいろいろ有りそうだ。

……だとしたら、もし人間以外の体にされたプレイヤーがいたら、そいつはどうなるんだろうか？　ん？

突然、オオイグの速度が落ち始めた。まるで体の筋肉が硬直するように動きが固くなっていく。みるみる内にそれは酷くなり、やがて止まってしまった。

「フィロ、どうした？」

オオイグを操っていたフィロに声をかける。フィロも何が起きたのかわかっていないようでわたわたと慌てていた。

「わかりません。いきなり……おかしいですね」

フィロはペシペシとオオイグに鞭を打つ。しかしオオイグは微動だにしない。

その時、ふと周りの空気が変わるのを感じた。何か空気が重く、冷たく感じる。ゾワリと鳥肌が立った。

「あは　四人も来た」

後ろでもこ姉の妙に明るい声が出た。振り返るとそこには嬉々とした表情のもこ姉。さっきまでの憂鬱な顔はどこえやら、大好物を前にした子供みたいな表情をしている。

「もこ姉？」

「ふんふんふん ひっさしぶりの「飯」飯」

もこ姉は鼻歌混じりにいじけている師匠に近付くとその肩に手を置いた。

「……浅倉？」

「いただきます」

もこ姉が師匠に襲い掛かった。

「んな?! 浅倉何を……むぐつ?! ぐつ?!?!」

……あゝ……なんだったかなこれ……。

以前マキナに聞いた話だと、過守護が破壊衝動を抑えた関係で幾つかの欲求や知識が巻き添えみたいな感じで抑えられて忘れてるらしい。……けどこれは少し覚えてる。たしか……ディープキスってやつだ。

「むぐつ!?!? ん、ん、んんんん!?!?!」

うわあ、舌入ってる。あれ絶対苦しいだろ。師匠必死にもがいてるし。

けどもこ姉はがちり師匠を捕まえたまま、師匠の唇を塞いでいた。繋がった唇からピチャピチャと水つぽい音が聞こえる。

しばらくすると師匠の抵抗がやんだ。動かなくなった師匠の唇を貪るともこ姉は手を離す。師匠はその場にヘタリこんでしまった。

「あゝ、おいしかった。つ・ぎ・は……」

視線がフィロの方に向かう。あっけにとられていたフィロは「ふあっ?!」とすつとんきょうな声を上げた。

「うっふふ　おいしそう」

今度はフィロに襲い掛かる。んゝ、あゝ、たしかキスつてのは愛情表現の一つみたいなものだったよな？ 要はスキンシップだよな？ じゃあほつといていいか、仲が良いことは悪いことじゃないし。

「ちよ!?!　もこさ……ん、んんっ」

さて、それはそうとなんでオオイグが止まったかだよな。

おゝい、ちゃんと動いてくれよう？ 歩きとかごめんだぞ？

「だ、ダメですよもこさ……むぐっ！　わ、私たち女の子同士で……は、んあ……」

「よいではないかよいではないか　　けっこつ反応してるくせに」

後ろでもこ姉とフィロが取っ組み合ってる。仲良いなあホントに。俺ももこ姉とあれぐらい仲良くなれたらいいんだが……いや、さすがにあれは引くか。

「だ……だめえ」

「うっふふ、いただきます」

つと、だからなんでオオイグが動かなくなつたかだ。
腹が減つてるとか……いや、フィロがちゃんと食わしてたよな。
……そういや止まる時、なんか足が痙攣して金縛りになつたみたい
に止まつた。もしかしたらモンスターへの攻撃かも……。

「師匠はどう思います?」

そう言つてさっきからへたりこんだままの師匠の方を見る。けど
無反応。

「師匠?」

肩を叩く。するとなんの抵抗もなく師匠の体がパタンと倒れた。
目に光が無い。

「は?」

フィロの方を見る。もこ姉の腕の中でへたりこんでいた。師匠と
同じように目に光が無くなっている。

もこ姉は口をモグモグさせながら俺の方を見た。

「ムグムグ、さてさて、あとはお兄さんだけだね」

お兄さん?

昔から、周りからは大抵俺の方が年上に見られてたけど実際はも
こ姉のが年上だ。もこ姉の方も年下に見られるのを気にしてたらし
く、俺にもこ“姉”って呼ぶように強制してきたぐらいだ。
そのもこ姉が俺を「お兄さん」なんて呼ぶわけがない。

「お前……誰だ?」

「おろ。気付かれた？」

もこ姉の姿をした誰かは面倒くさそうに頭をかいた。

「ん〜とね〜、お兄さんたちもプレイヤーだよな？ 私 幽霊になったプレイヤーなの」

「……はあ？」

「いやだから幽霊よ幽霊。今はこの子の体に憑依してるってわけ」

「いや、わけって言われてもわけわからないからな？」

「あ〜、説明めんどくさいし、見せるわ」

そう言うともこ姉の体から何かが……いや、何かじゃなくて……人魂だ。青白い火の玉がもこ姉の背中辺りから出てきた。あ〜、え〜と、俺、幽霊とか信じてなかったんだがまさかこんな形でご対面するとは思わなかったぞ？

「と、言うわけで私 今は幽霊なわけで、魂がご飯みたいなもんで食べないと死んじゃうわけで、ああもう死んでるのか……とにかくお兄さんの魂食べさせてよ〜」

人魂はふわふわ揺れながらもこ姉の体に戻っていく。

「魂食べないと消えちゃうわけよ。だからお願いお兄さんの魂食べさせて？ 一口だけ、いや舐めるだけでいいからお願い！ 同じプレイヤーのよしみで〜」

もこ姉の体にとりついた幽霊……一応プレイヤーか。パチンと顔の前で手を合わせてペコペコ頭を下げている。

「……師匠とフィロの魂も食ったのか？」

「うん。そだよ」

「二人はどうなる？」

「魂一口食べたただけだから、少ししたら回復するし後遺症もないよ。十人ぐらい食べたけどみんな大丈夫だったから」

小さくため息一つ。まあ……後遺症もなんもないなら少しくらいはいいか。同じプレイヤーのよしみ……いや、似た境遇のよしみだ。今までとまったく違う体に放り込まれて、まったく違う体のルールに縛られてる。その気持ちはとてもよくわかる。

「わかった。いいぞ」

「本当に!？ うっわあありがとー じゃあちょっと屈んで、口移しじゃないと魂食べれないの」

「んと……うっつか？」

言われた通りに少し屈む。顔が近い。……あれ？ なんだ？ なんか胸が……ドキドキする。

「そうそう、そんじゃいくよ。変な気起こしちゃだめだよ？」

「変な気ってなんだよ？」

「またまた、わかってるくせに、それじゃいただきます」

「りゅう君のばかああああっ！！」

その夜

鉄拳が飛んでくる。ちょ？！なんで俺こんなぶちギレられてるんだ！？ 痛っ！？ 痛い！ や、やめ！

「よ、よりによってあたしの、……しかもデー……うああああん！！ 変態変態変態っ！！」

「い、いい加減にしてくれ！」

もこ姉の両手首を掴んで動きを止めた。自然と顔が近くなる。今度はもこ姉の顔が一気に真っ赤になった。

「ア、アアアイテム取り出す！ おつきな石！」

次の瞬間、もこ姉が俺の頭上に取り出した大きな石が脳天に直撃した。視界に舞い散る星。目の前が真っ暗になった。

八日目(1・5)

side フィロ

いろいろとんでもない目に合いました……。まさかもこさんが亡霊にとり憑かれてあんなことになるなんて……。

いえ、それはまだいいんです。みんな無事だったし過ぎたことです。……ファーストキスっていうのは少しシヨックではありませんけど、女の子同士でしたしあんな状況でしたからリュウトさんもノーカウントにしてくれるでしょう。

問題なのは亡霊にとりつかれたもこさんに、リュウトさんが自分から魂を食べさせたようだということです。

魂を食べられた時の記憶は朦朧気だけど、リュウトさんがもこさんに憑いた亡霊と話してて、自分から吸魂……。もこさんのキスを受け入れたように見えました。

一歩間違えば死んでたかもしれないのになんでそんな……。

もこさんが奴隷商に捕まっていた時、リュウトさんは危険を省みず助けに来たんですね。その後も水妖から身を挺してもこさんを護つたり、それでもずっともこさんのこと気遣っていたり、ただの幼なじみのためにそこまでできるでしょうか……？

……まさかりユウトさん、もこさんのことが……。

そ、そういえばもこさんも、私とリュウトさんが話してるとよくチラチラこっちを見てきますよね。今思い返してみると好きな人が他の人と話すのを気にするように見えなくもなかった気が……。

三日前は突然いなくなっただと思ったら一晩同じ部屋で過ごしてたみたいで……おまけに二人共やけに疲れ果ててましたし汗臭かったし……ま、まさか……まさか……！ あわわわわ！？

「どしたのフィロちゃん？　なんか悩み事？」

「ひゃい？！」

あ……あつう、変な声出ちゃいましたよ。もこさんが私の顔を覗き込んでくる。

「悩み事なら何でも相談してね？　話聞くから」

「は……はい」

相談……ですか。……一人で悩んでるより……ちゃんと聞いた方がいいかもしれませんね……。

……でもこれでもこさんと喧嘩したりしたくないし……いえ、隠しごとするのはもっと悪いですよ。お父さんも友達には隠しごとはいけないって言ってました。深呼吸。もこさんの目を見る。

「もこさんはリュウトさんのこと好きなんですか？」

……少しストレート過ぎましたか。もこさん目が点になってる……

…。

「え？ ちょ、な、なんでそんな話になってんの？ この間も言ったでしょ？ あいつとあたしはただの幼なじみだって」

「ただの幼なじみ……ですか」

もこさんならやっぱりそう答えますよね。これがもこさんが教えてくれたツンデレってやつでしょうか？ ……真相を確かめるにはもっと踏み込まないといけませんか……。仕方ありません。恥ずかしいですけど……。

「少し耳貸してくれませんか？」

「え？ こ、こっ？」

他の人が聞いてないかを確認。無言詠唱で音漏れ遮断の陣も展開。もこさんに近付いてそっと耳打ちした。

「実は私……もうすぐ発情期なんです……」

「……………は？」

「私たち狼人族は年に数回発情期が有って……その間は……その……、Hなことをすごくしたくなるんです」

もこさんの顔が赤くなっていく。聞こえてくる心臓の音がすごく早くなった。私のほっぺたも熱いです……。

「ふ、普段なら魔法薬で抑えるんですけど、今はそれが無いから……」

…あ、いえ……それでも我慢できるとは思いますが、万が一、万が一ですよ？ その、もしかしたら我慢できなくなつて……その時はリュウトさんと……」「そんなの絶対だめえっ!!！」

……予想以上の反応ですね。もこさんはあわてて口元を抑える。けどこれで確信が持てました。

「やっぱり……もこさんもリュウトさんが好きなんですね……」

「は?! ちょ?! ち、ちが……! あたしが好きなのは……」

「隠さなくてもいいですよ。……私もリュウトさんが好きです。愛しています」

ガーンと効果音が鳴りそうな程シヨックな顔したもこさん。やっぱりシヨックですよ、友達がライバルなんて……でも、これだけは譲りません!

「もちろん何が有ろうとどういつ結果になろうと私はもこさんの友達でいたいと思ってます。……でもこの恋は譲る気はありません! ですから、これからは友達でありライバルです!」

「いや!? だからあたしは……!」

「それでは、正々堂々よろしくお願いします!」

もこさんに背を向けて歩き出す。な、なんかついカツとしている言うっちゃった気もしますけど……大丈夫ですよ?

とにかく発情期が近いのは確かですし、どうしましょう……。さ、

さすがに本当にしちゃうのはちょっと……その、やっぱりちゃんとお付き合いしてからというか……、最初は痛いっていつし怖いですし……。
けどもこさんってライバルがいる以上、うかうかしてられませんか……。

あれ？ そういえば竜人にも発情期ってあるはずですよ？ 亜人や獣人はみんな発情期があるって聞いたことがあります。

で、発情期があるとすれば赤い月が昇る日の前後、私と同じ時期のはずですよ？

……どうしよう、ドキドキしてきました……。

と、とにかく頑張りましょ、「おおフィロ、神埼を知らんか？」

レンさんがやって来た。

肩には白い手拭いをかけ、キョロキョロと周りを見回している。

「かんざき……ああ、リュウトさんのことですね。知りませんよ」

「そうか……どこ行ったんじゃあいつ、一緒に水浴びでもしようと思っただのじゃが……」

「……一緒にですか？」

「うむ、髪も解かしたいのじゃがこの髪を解かすのが一人じゃとなかなか大変でう。綺麗でなかなか気に入っておるから切りたくはないの」

レンさんは自分の髪をご機嫌で撫でる。本当にさらさらして綺麗……。レンさんって少し男っぽい気がしますけどこつこつとこころはやっぱり女の子ですね。……って、い、一緒に？ ま、まあレンさんまだ子供ですしね。あはは……。

「なら私と一緒に水浴びしましょうか」

「え、遠慮する！ 神埼と行く！」

あれ？ なんで私とだとこんな必死に？ 普通逆じゃないですか？

「けど恥ずかしくありません？ そろそろまずい気がしますけど……」

「……別に恥ずかしくなどない」

……なんかお兄さんになついたら妹みたいです。

「うふふふふ」

「な、なんじゃ？」

「あ、すみません。なんだかやっぱりレンさんも子供なんだなうって」

レンさんが少しムツとした顔をした。ちよつとまずかったですかね？ これぐらいの女の子って子供扱いされるの嫌がりますし。

「し、失礼な！ 誰が子供じゃ誰が！」

ああ、案の定ですね。けどなんかかわいいです。

「ごめんなさい、けど子供でいれる期間ってすごく貴重なんですよ、ですから……」

「じゃ、じゃから子供扱いするでない！ わしの方がおぬしらなどよりよっぽど大人じゃー！」

「はいはい、ごめんなさいごめんなさい。レンさんは大人ですね〜」
なんかもこさんがレンさんを弄るのが楽しいって言ってた気持ち
がわかりました。むきになってくるところがすごくかわいいです。

「……少し耳貸せ」

「はい？」

言われた通り少し屈む。レンさんは私の頭の上の耳に顔を近付けると何かを話し始めた。

「……………の……………じゃから……………」

……………え？

「……………に……………勃……………して……………」

え？ ちょ？ え？

「……………男は……………で……………じゃから……………x……………」

ちよ？！ え！？ いや！？ あの！？ え、ええ？！ な、な
んでその歳でそこまで知って……というかなんで男性心理までそこ
まで詳しいんですか？！

顔を真っ赤にしながら「どーだ」と言わんばかりに胸を張るレン
さん。逃げるみたいに私から離れて行って……少し離れたところで
頭を抱えて何か悩み始めました……。

いや、でも本当に私以上にいろいろ知ってましたよ？！ ……ま、
まさか、リュウトさんと水浴びに行ってるのは……！

……強力なライバルが増えましたか……。

これは……本当にうかうかしてられませんね……。

九日目〜十二日目

side 浅倉 もこ

青白い月が照らす中、あたしとりゅう君は二人で焚き火にあたりていた。

風が少し肌寒い。上着をギュツと寄せて、手を擦り合わせる。手がかじかんじょうのはまずい、ボウガンで狙撃するにはけっこう致命的だ。

そんなことを考えてたらりゅう君がピクリと体を震わせた。

「もこ姉、モンスターが来てる。鳥系で数は一匹」

りゅう君は夜空を指差す。また来たのね……。たき火に近付けて手を暖める。

「ん、了解つと。……装備変更」

あたしの手の中にボウガンが現れた。それをりゅう君が指差す方向に向けた。一瞬、月明かりを反射して大っきな怪鳥の影が見えた。距離は70mぐらい。狙いを合わせるあたしの視界の中に十字の照準マークが表示される。重力とかの影響を考えて、照準を怪鳥の少し上に合わせ、引き金を引いた。ビュンと空気を裂いて矢が飛ぶ音。ちよつと遅れて怪鳥が地面に落ちるのが見えた。

幽霊騒動から四日経った。

あのあとはずいぶん平和に……いや、魔物の襲撃とか何回も有ったし普通に考えたら全然平和じゃないんだけど、この世界に来てからの日々の中では一番心穏やかな日々だった。

まあ、あれよ。自分で言うとおれだけどあたし、少しは成長できたと思う。

特に自分でもすごいと思ったのが飛び道具の腕前。元々戦争ゲームなんかも好きで、廃人プレイとかもしてたんだけど、その腕前がこちらの世界ではそのまま適用されてるらしい。……具体的に言うとお半径100m以内なら確定でヘッドショットできるぐらいの腕前。

おかげで魔物との戦闘にも参加できるようになったしレベルも順調に上がって14まできた。

……レベル上がってるんだけど白マキナがボーナス渡しに来ないのよね。二回目の試練の後に頭叩き割られたせいかしら？

それと、あたしのゲーム脳もなかなか役に立ってると思う。ああ、ゲーム脳って言ってもスキルじゃなくて考え方ね。

例えば夜眠る時の役割分担。魔物の襲撃に備えて二人ずつ見張りとお休む側に分かれることになったんだけど、そのチーム分けはあたしが決めた。

まず、鼻と耳で広範囲の索敵ができる竜人のりゆう君と狼人のフィロちゃん。この二人は別チームにしとくべき、ゲームでも索敵が強いキャラが一人いると何かと便利だし。(フィロちゃんが悲しそうな顔してたけど)

さらに松明の魔法で辺りを明るくできるフィロちゃんとあたし(あたしはフィロちゃんに教わった)も別チーム。フィロちゃんと一

緒のチームになれないのは残念だけど背に腹は変えられない。曇り空の夜とか、索敵できても真つ暗なままじゃ意味薄いし、視界を保つのはゲームでもとつても大切だ。そして何が起きてても問答無用で対処できる恋ちゃんは一番モンスターの襲撃が多いつていう丑三つ時には必ず起きててもらうことにした。

ちなみに今はあたしとりゅう君が見張る番で、恋ちゃんとフィロちゃんはテントで寝てる。

うんうん、我ながらいい布陣だ。

やっぱり役に立ってる実感が有ると充実感が違うわね。後は……

「一万円と二千元出したら愛してる」

「……なんの歌だよもこ姉……」

「別に」

ん、この歌にも反応しないか。

りゅう君と仲良くなるための計画として、あたしが小声で歌うア二ソーンに反応するかのをテストを実行中。とりあえず再会した直後に見たりゅう君の携帯に有った待受画面から、りゅう君が初代ガンムを好きなのは確かだ。

けど残念ながらあたしは昔のガンムにはあまり詳しくない。というかあたしは平成ガンム派だ。……ガンムファンは大きく分けて二つに分かれると思う。初代ガンムを中心とした旧世代派と、平成に入ってから作られたガンムを中心とした新世代派。

なぜこんな派閥が産まれたかというところ……ああ、まあいいや。要するにあまり仲がよろしくないんだ。

もちろん両方好きで、とかあたしみたいに向こうには向こうの良さが有るって割り切ってる人は良いんだけどりゆう君がそうとは限らない。

もし、りゆう君が新世代アンチだった場合、下手にガン ムの話を振ると仲良くなるどころか喧嘩の原因になりかねない。

だからあたしは別の方面……つまりガン ム以外の別のロボットアニメからアプローチをかけることにした。ガン ムが好きなら他のも好きかも知れないしね。

まあ要するに小さな声であたしが知ってるの歌ってみて反応示したら当たりね。りゆう君は耳やたらいいみたいだから小声でもちゃんと聞こえるみたいだし。

「ふんふん、ふんころがし」

………反応無し、と。こっそり携帯のメモ帳に記入。

「給料三ヶ月分、結婚指輪」………。

………これも違う、と。んん、どの歌なら反応しそうかな………。ちよっとロボット系以外にジャンル変えてみますか。

「ナインボールは 今日も元気に、ミサイルばら時き飛ぶよ
テ、テ、テ、テ、テ、デストロイ」

………ヤバい。いくら何でもマニアック過ぎた……。は、恥ずかし

い……。も、もうちよいまともなので……。

「半径〓85mは〓 超電磁砲射程距離〓」

（その歌……知って……る……）

「へ？」

突然女の子の声が聞こえた。びっくりしてりゅう君の方を見る。

けどりゅう君は別に何事も無いように飴を舐めながら周りを見ていた。え？ 竜人のりゅう君の方があたしより断然耳いいはずなのに……。

（お姉、ちゃん……、マキナ……ちゃんの……、お友……達……？）

途切れ途切れに聞こえてくる声。その声はひどく苦しそうで、息も絶え絶えという感じだった。

（お……願い……助けて……殺さ……れる……）

「え?! ちよっ! 殺されるって何よ!？」

「もこ姉!？」

突然叫んだあたしに驚いたのかりゅう君が声を上げた。すると聞こえてきた声の声色が少し変わった。

（黒竜の……竜、人……？ 良かった……まだ、生きてる人、いたんだ……お願い、助けて、こっち……）

「っ？！ もこ姉今の声は！？」

今のはりゅう君にも聞こえたみたいだ。
周りを見回す。けど人影らしいものは無い。

「あなた誰！？ どこにいるの！？」

見えない誰かに向かって叫ぶ。するとテントの中からフィロちゃんが出てきた。

「……………どうしたんですか？ こんな夜中に……………」

目を擦りながらあたしたちの方に近付いてくる。……………りゅう君以上
に耳がいいフィロちゃんにも聞こえてない？

「わからないの、突然声が出て……………」 「……………え！？」

突然あたしたちの目の前で空間が裂けた。まるで空間を無理やり
押し広げたような穴。その穴の向こうは真っ暗で、何も見えなくな
っている。

(おね……………がい、助け……………て、ぼく……………、死にたく……………ない……………)

この声はフィロちゃんにも聞こえたらしい。驚いた顔であた
しを見る。

……………この穴に入れてってこと？ でも見るからに怪しいし……………。

「もこ姉とフィロは待っていてくれ、俺が行ってくる」

「ちょ！？ りゅう君何をあっさり決めてんのよ！？ 何が有るか

わからないでしょ!？」「俺は……」

りゅう君はあたしを見てニカツと笑う。

「助けてくれて言われたからには助ける。もし畏か何かでも……、その時は俺が死ぬだけだ」

その言葉を聞いて、あたしは鳥肌が立った。過守護の効果で心が影響を受けてるのは知ってたけど、こんなにも簡単に、普通に“死ぬ”なんて言えるりゅう君に戦慄した。……再開した時からそうだ。りゅう君は自分自身の優先順位が低すぎる。死ぬことを気にしていないんだ。冗談抜きで誰かのためならあっさり命を捨てちゃうぐらいに。

「行ってくる」

「あ！ 待って！」

りゅう君は迷うこともなく穴の中に飛び込んで行く。一人で
行かせるのは……まずい！

「ちょっと！ 待って！」「リ……リュウトさん！」

あたしとフィロちゃんは後を追って穴の中に飛び込んでいった。

十二日目(2)(前書き)

前回の話……本当は替え歌を仕込もうと思って頑張ってたの
に……(お察しください)

ナインボールの歌詞と曲両方わかった人いたら友達になりたい

十二日目(2)

勢いで飛び込んでみただけ何にも見えない。……いや、遠くに小さな光が見える。トンネルみたいな構造になってるみたい。そして光に向かって走っていきりゆう君の後ろ姿も見えた。

「もこさん！　だ、大丈夫ですか!？」

フィロちゃんがあたしの手を掴んだ。フィロちゃんは呪文を詠唱して光の玉を打ち上げる。

……けどフィロちゃんが見えるようになった以外は見えるものは変わらない。というよりは周りが完全に真っ黒で光を出そうが出すまいがあまり関係無いみたい。

「何……?　」

真っ暗な何も無い空間に浮かんでるような、それでいて地面はしつかりと感じられる不思議な感覚。フィロちゃんは目を鋭くして周りを見回した。

「空間連結魔法みたいですけど……本物なんて初めて見ました……」

「……そんな珍しい魔法なの?」

「珍しいなんてものじゃありませんよ。時空間へ干渉する魔法はあ

らゆる魔法使いの最終目標なんて言われて、使える人だって世界中探しても100人いないって言われてるんですよ？」

時空間への干渉ねえ……なんかマキナは普通にやってた気がするけど……。あれ？　そういえばあたしを呼んだ声、あたしに『マキナちゃんの友達？』なんて聞いてきてたっけ……。恋ちゃん起こして連れて来なかったの失敗かも……。

後ろを振り返ってみてもあたし達が入ってきた入口は見えない。うー、ちゃんと戻れんのかなこれ……。

そうしてとりあえず歩いてる内にあたし達はトンネルの終点に着いた。通り抜けた先は小さな泉だった。周りはうっそうとしげる樹海。木々が空を覆い隠してとても暗い。

けど、その中で泉の近くだけはキラキラと明るくなっている。泉が自分から光ってるのかな？　えっと、りゅう君は……いた。

泉の近くにりゅう君がしゃがみこんでいる後ろ姿が見えた。あたしとフィロちゃんは駆け寄って……って、うわっ？！

りゅう君の前に一人の女の子が倒れていた。身体中に刀で切られたようなひどい傷が有って、息をするのも苦しそうだ。

「もこ姉！？　ついて来たのか！？」「いいからどいて！」

早く回復してあげないと！　りゅう君を押しつけてその子の体に手を当てる。

「【ジュール！】」

淡い光が女の子を包んで傷を治していく。その間にあたしはその

子を観察した。歳は……恋ちゃんと同じぐらいかな？

足元まで届くほど長くて、透き通るような淡い水色の髪で、右目は前髪で隠れてる。肌はびっくりするぐらい白くて、お人形みたいな顔立ちも合わせてなんか人間離れしてる。その小さな体に付いたたくさんの刀傷が痛々しい。

体はローブみたいな薄い布で覆われてて、濡れてびしょびしょだ。濡れた布のせいで体のラインがはっきり見えてエロ……ごほん。

……着ている布から出た細い手や足に、飾りみたいなヒラヒラした魚のヒレっぽいのと、小さな蒼い鱗が付いていた。この鱗……なんかりゅう君の竜鱗と似てる。

りゅう君の方を見る。女の子の体に付いた鱗を見つめて、じっと何か考えてる。

りゅう君の反対側で見ていたフィロちゃんも心配そうにその子を見ていた。

「この子も竜人……みたいです。伝説の竜人と二人も会うなんて……となるとこの傷はハンターに付けられたものでしょうか……？」

「ハンター？」

「竜人や悪魔を狩るっていう組織の総称ですよ。……竜人と同じで半分伝説みたいなものなんですけどね。けど竜人にここまでの傷を負わせられる人なんてそうそういるとは思えませんし」

ハンター……ね。ゲームとかでのモンスター側の気持ちってこんななのかしら……。

もう一度女の子に視線を戻す。体の見える傷はある程度回復して

きた。けど顔色は相変わらず悪いし息も苦しそう。

……あ、目開けた。

女の子の薄く開けたまぶたの中で、青色の瞳が動いてりゅう君の方を見た。

弱々しいながらも表情が明るくなる。震える手がりゅう君の学ランを掴んだ。

「お？」

「仲間……間……、まだ……いた……」

女の子は掠れる声でそう言って、にっこり笑った。なぜだかわからないけど……なんだか見ていると切なくなってくるような笑顔だった。

「仲間……、いた。ぼく……、一人ぼっち、じゃない……」

「……えっと、あなたの名前は？ よかったら教えてくれない？」

女の子はこっくり頷く。何か言おうと口を開くとゲホゲホと咳き込んでしまった。ってうわわ？！ 口から血が？！ と、吐血って内臓破裂とかでヤバいって聞いたことあるよ？！

「ご、ごめん！ 喋らないでいいから！」

女の子はもう一度頷くと静かに目を閉じた。それでもその小さな手はりゅう君の学ランをギュッと掴んだまま離さない。

……ヒールが切れた。レベルは上がったけど相変わらずあたしはヒールを二連発はできない。やっぱりフィロちゃんが言ってたみたいに魔力の量は変わらないみたいだ。えくと、確か前計った時だと魔力満タンからヒール一回使ってもう一回使えるまでは5分強ぐらいよね……。回復したらすぐに使ってあげよう。

とりあえずこの子を運んで……。何か来ます。リュウトさん……。もこさん」

「っ！」

周りの樹海を警戒していたフィロちゃんが静かに言った。

敵！？ あたしはすぐにボウガンを取り出して構える。りゅう君も鋭い目で周りを見回した。クンクンと鼻を鳴らす。

「……別に変な臭いはしないぞ？」

「臭いがしないから問題なんです。こんな樹海の中なのに……。何か所か臭いが来ない場所があるんです。たぶん……。消臭剤を撒きながら移動してるんでしょう」

消臭剤？ となると何かつてのはモンスターじゃなくて人間？ 周りに注意を払いながら携帯のマップを開く。……。反応は無し。PCがいれば表示されるはずだから周りにいるってのはPCじゃないし、この女の子もNPCってことね。……。NPCとかモンスターも表示してくれればいいのに……。

『警告スル！』

「ふえっ?!」

突然茂みの中から聞こえてきた声の方向にあわててボウガンを向けた。

茂みから出てきたのは……マネキン？

あたしの膝ぐらいの身長の白いマネキンが茂みの中から出てきた。小さいのに八頭身の体、色の付けられてない顔、それがカチャカチャ音を立てながら歩いてくる様はちよつと……いや、かなり不気味だ。

『警告スル！』

マネキンが機械的な甲高い声を上げた。

カチャカチャと手が動き、さっきの女の子を指差す。女の子は怯えた様子でりゆう君にしがみついた。

『リリー＝ウエルメイド。ソノ娘ハ邪悪ナル竜人ノ血ヲ引ク者トシテ、我々【光ノ教団】ノ駆除対象トナツテイル。速ヤカニコノ場ヲ立ち去ルベシ。警告ニ従ワナイ場合、命ノ保証ハシナイ』

リリー＝ウエルメイド……それがこの子の名前か……。にしても光の教団？ なにその名前からして厨二っぽくて怪しいのは。……たしか、この世界では純粹な人間以外は差別や迫害の対象になるってりゆう君が言ってた……。そしてりゆう君の種族、黒竜の竜人は人間と魔族に滅ぼされたって……。嫌な予感しかしないわね。

りゆう君も感づいたみたいで身構える。フィロちゃんは少し戸惑った様子でマネキンを見ていた。

『クリ返ス。コノ場ヲ立ち去レ、サモナクバ……』「その前にこちらの質問に二、三、答えてくれ」

りゅう君が一步前に出て言った。マネキンは『イイダロウ』と頷く。

「まず、この子……リリーをどうする気だ？」

『決マツテイル。我ラガ神ト人間ニ仇ナス存在トシテ駆除スル』

悪寒がした。人間に駆除なんて……害虫みたいな言い方するなんて……。りゅう君の拳を握る手に力がこもった。

「……もうひとつ、この子は何か悪いことをしたのか？」

『竜人トイウ存在ソノモノガ罪。許サレザル大罪。罪人ハ裁カレテシカルベキ。我ラ八神ノ代行者ナノダカラ。我ラノ行イコソガ神ノ意思！ 我ラコソガ……』 「ちが……う……！！」

リリーが初めて声を荒くした。ゲホゲホと血を吐いたけど、それでもマネキンをキツと睨み付ける。

「神さま……、マキナちゃん、こんなこと……、しない！ ぼくの友達……。変な、こと……言わないで……！！」

『貴……様八……！！』

マネキンの方の声も荒くなった。

『貴様！ 貴様ゴトキガ神ノ名ヲ呼ブカ！ シカモ……友達ダト！
？ 大概ニセヨ！』

「嘘、違う！ ぼくと……マキナちゃんは……！」 『ナラバ何故！
神八才前ヲ助ケニ来ナイ！？』

リリーは言葉に詰まった。ここだとばかりに、マネキンはさらに
まくし立てる。

『ドウシタ？ 貴様ガ神ノ友人トイウナラ、何故神八貴様ヲ助ケニ
来ナイ？』

「それ、は……」

『神トハ全知全能！ コノ場デ起テイルコトヲ知ラヌワケガナイ。
モシ神ガ、才前ニ味方スルトイウナラ！ 私ハ甘ンジテ裁キヲ受ケ
ヨウ！ ダガ……神ハ来ナイ！ 来ルハズガナイ！ 何故ナラ！
貴様ラハ悪デアリ、我々こそガ神ノ代行者ダカラダ！』

リリーは黙ってしまった。下を向いたまま、悔しそうに体を震わ
せている。

『ソシテ！ 神ノ代行者デアル我々こそガ正義！ 我ラノスル行イ
ハ神ノ意思！ 故ニ全テガ許サレル！』

なんなのこいつ……？ 言ってること……無茶苦茶だ。

『貴様ノ母親モ最期ハ救ワレタダロウ。慰ミモノトシテトハイエ、
神ノ代行者タル我々ニソノ身ヲ捧ゲラレタノダカラ！』

………ヒールのが無ければ、火で炙ってやるのに……。

『ダガ案ズルナ！ 貴様モ我々ニソノ身ヲ捧ゲサセテヤロウ！ ソ

レニ貴様ラ竜人ノ鱗ヤ爪八魔法使イニ高値デ売レル。喜べ！ 貴様
八我ガ光ノ教団デ……」

マネキンは全てを言い終えることができなかった。

「こんな子供を不幸にするのがお前の言う正義か……！？」

りゅう君がマネキンの頭を叩き潰していた。手に付いた破片を落
として少し申し訳なさそうにあたしを見る。

「……悪いもこ姉、つい……」

「いいわよ。あたしも我慢の限界だったし」

実際、ファイア唱えかけてたし。たく……元の世界のどっかの新
興宗教真っ青な言い分だったわね。

「……ま……ずい……です……」

え？ フィロちゃんが真っ青になっていた。あれ？ なに？
もしかして……地雷踏んだ？

「も、もこさん！ リュウトさん！ は、早く逃げましょう！ ど、
どどんどん増えています！」

……もしかしてなんかめちゃくちゃヤバい状況になってたりする
？ ワタワタとリリーを連れて逃げる準備をするフィロちゃんに従
って、リリーをりゅう君に背負わせる。その時、周りの樹海の
中から何かの気配がした。

☞
☞
☞
☞
☞
☞
☞

神ニ逆ラウ者達ニ裁キヲ!
☞
☞
☞
☞
☞
☞
☞

十二日目(3)

……白いのが多すぎて森が緑に見えない。えっと、なにこれ。白が9で緑が1だ！ とでも言わせたいわけ？

樹海の木々の隙間からマネキンがひたすら湧いてくる。行進とかそんな生易しいもんじゃない。わかりやすく言うなら……樹海って言う小さな箱にぎゅうぎゅう詰めになされたマネキンが小さな隙間から溢れだしてくるような捻り出されて来るような……んな感じ。

迫ってくる高さ10m越えのマネキンの壁を見上げれば、数えきれないぐらいの数のマネキンの皆さんがジロリとあたしにメンチ切ってきて……「なにポーツとしてんだもこ姉！！ 逃げるぞ！！」

気付いたらりゅう君の肩に担がれていた。右肩にリリー、左肩にあたしって構図になってる……じゃなくて！！ 何よあのマネキン軍団？！ 20体とか30体ぐらいに囲まれるとかならまだ想像できるけどあれ何体よ？！ 光の教団なんて名乗ってんだからもつと光つばいことしなさいよ！！ あれもろ悪魔とか闇系じやん！！

りゅう君に担がれたまま後ろを見る。数m後ろで、マネキンの津波が木々を薙ぎ倒しながら迫ってきて……

「いやあああ！！？ りゅう君！！ もっと！ もっと早く！！ あんなのに吞まれて死にたくない！！」

「こっちは二人担いでるんだ！ 無茶言うな！ というかそんなこと言うなら自分で走ってくれよもこ姉！」

「無理！ あたしゲーム脳の効果で10秒走ったらスタミナ切れで息切れするもん！」

「それもこ姉に体力無いだけだろ！」

少し前をいくフィロちゃんに邪魔なツタなんかの障害物を魔法で吹き飛ばしてもらいながらりゅう君は走る。けどこれ……いつか絶対、追い付かれるわよね……。……そうだ！

「リリー！ あなた……えくと、空間連結魔法？ 使えるんだよね！？ それ使えばここから逃げられるんじゃない！？」

「……ごめん、なさい……。この森、ぼくの神域……。外からのお客さんは好きに入れれる……。けど、中から外に出るの……。むずかしい……。……」

「フ、フィロちゃんなんかいい案無い？！」

「や、やってみます！」

フィロちゃんは四つん這いになると一気に加速してあたし達と距離を開けた。進行方向に有った木の枝に飛び乗り、詠唱を始める。

『阻むは大地の豪腕。高くそびえ天すら隠す。集まり、隆起し、凝縮し、迫り来る愚者に絶望を見せよ！ 【エンシェント クリフ】！！』

あたし達のすぐ後ろで地面が盛り上がって、それが瞬く間に空高くそびえる土の壁になった。壁の向こう側で何かが潰れる音が聞こえた。たぶんマネキンが激突したんだろう。りゅう君が立ち止まって後ろを振り返った。息を弾ませながら土の壁を見上げる。

「おお……。フィロすごいな……」

「詠唱短縮でできるかどうかわからなかったけど、うまく言ってくれました」

フィロちゃんはりゅう君に誉められて嬉しそうにしっぽを振っている。

確かにこれは……凄いわね。土の壁は物凄く固くて分厚そう、これならマネキンも……」

あれ？

壁の向こうから何か聞こえた気がした。壁に耳を当ててみる。

『……深淵……真に……阻むは……闇を駆け……全ては我ら……』

……これ、魔法の詠唱？ 何のまほ “ボゴンッ！” ……ボゴンッ？

音がした頭上を見上げる。壁から頭が突き出したマネキンと目が合った。

……

ボゴンッボゴンッボゴンッボゴンッボゴンッボゴンッボゴンッボ

ゴソッ

やっぱり闇系だ。次々に壁から顔を出すマネキン。

また全速力で逃げ出した。後ろの方で壁が崩される音がした。

『『『『『『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』

何重かもわからない雄叫びが空気を震わせる。鼓膜が破けそつだ。

「……黒竜の……お兄ちゃん。どうして……黒竜の力……使わないの……？」

リリーが小さな声で言った。

「黒竜、なら……あの人形……。全部……消滅させられるはず……なのに……」

「悪いけどそついうの期待すんな！ 訳ありで黒竜の力つてのは全く使えないんだー！」

「じゃあ……なんで……来てくれたの……？」

リリーはりゆう君をじつと見つめる。

「マキナちゃんの、友達で……、黒竜の竜人なら大丈夫って……思ったから……。力が無いなら……断ってくれば……。ううん、ごめん……ぼくの、せいで……」

ゴソソソ！ りゆう君はリリーの頭を殴った。リリーが痛そうにうめきながら涙目でりゆう君を見る。

「痛い……」「痛くなきゃ殴る意味が無いだろ！」

りゅう君は吐き捨てるように言っけてりりーを睨む。

「自分が危ない時に助けを呼ぶことの何が悪い！ 生きたいって思うのは当然だ！ 無事に事が済んだとき、礼をできればそれでいいんだよ、特に子供は！」

……謝るぐらいなら何とかする方法を考えてくれ！ どんな方法でもいいから！」

りりーは頷いて目を伏せた。……何とかする方法、正直あたしにはまったく思い付かない。

数も多すぎ、魔法まで使ってきて障害物も無視……あとはもうりりーしか……。

「……ぼくと……竜の契り……してくれる？」

りりーがためらいがちに呟いた。チラリとりゅう君を見て、また目を伏せる。りゅう君は首を傾げた。

「……竜の契り？」

「や、やっぱり……だめ……だよな？ そんな……いきなり……」

「それで何とかできるのか？」

「……え?! う、うん、竜の……契りをした竜人同士なら……力のいくらか、あげたり貸したりできるから……」

「よし！ わかった！ それで頼む！」

りゅう君が言った瞬間、リリーはビクンと体を硬直させた。顔が赤くなって、何かわたたと慌て始める。

「ほ……ほんとに……？ ほくで……、いいの……？」

「あ？ いいから早くしてくれ！ もうあんまり走れないぞ！」

「う、うん……。じゃあ……フィロ……お姉ちゃん？」

「は、はい?!」

突然自分の名前が出てフィロちゃんはびっくりして振り返る。

「少し……時間稼いで……欲しい。さっきの魔法、もう一度できる……?」

「な、なんとか！」

フィロちゃんが答えるとリリーは満足したように頷いて、あたしを見る。

「……………もこ姉お姉ちゃん？」

「もこお姉ちゃんって呼んで欲しいわね」

「じゃあもこお姉ちゃん……儀式、やるから……必要な宣言、お願いして……いい？」

「なんか知らないけどわかったわ!」

「……もう少し行ったら泉がある……そこで……」

リリーの言う通り少し行くと泉があった。リリーはりゅう君に下ろしてと合図する。フィロちゃんは踵を返してさっきの土の壁をもう一度作り出した。

その間にリリーは泉の水に手を当て、何かの呪文を詠唱する。すると水の中から水晶の玉が出てきた。

「……もこお姉ちゃん……儀式……するから……これ、合図したら読んで……」

リリーは緊張気味にその水晶をあたしに渡すと、りゅう君の手を引いて泉の中に入っていく。ああ! 早く早く! 後ろではフィロちゃんの作った壁にマネキンがぶつかる音が聞こえた。

リリーとりゅう君が腰まで泉に浸かったところでリリーからの合図が来た。同時に水晶に文字が浮かんでくる。あたしは何も考えずそれを読み上げた。

『蒼竜の娘、リリー。ウエルメイド。黒竜の男、神崎 竜斗。汝らは誰に強制された訳でもなく、自らの意思で竜の契りを交わすことを決断したということに違いないか?』

「「違い、ありません」」

りゅう君とリリーが同時に答える。するとキンツと高い音を立て、

りゆう君とリリーの周りの水に魔法陣が浮かび上がった。とりあえずこれでいいみたいね、次は……。

『神崎 竜斗。汝は穏やかなる時も病める時も嬉しき時も悲しき時も、リリー＝ウエルメイドと共に在り、これと歩き続けることを黄昏の竜に誓うか?』

「ああ、誓います」

りゆう君が答えるとりゆう君とリリーの周りにある魔法陣が少し複雑なものになった。よし、次は……

『リリー＝ウエルメイド。汝は穏やかなる時も病める時も嬉しき時も悲しき時も、神崎 竜斗と共に在り、これを支え続けることを黄昏の竜に誓うか?』

「………はい。………誓います………」

さらに魔法陣が複雑化する。あとは……

『ここに竜の契りは成立した。二人の新たなる旅立ちに黄昏の竜の加護があらんことを！………っ』

これで終わり！魔法陣が光出して二人にそれが集まっていく。

………けどなんかさっきの儀式の言葉どっかで聞いたような………。

「も、もこさあああんっ!!?」

後ろでフィロちゃんの悲鳴がした。振り返った瞬間 フィロちゃんが作った土の壁が崩壊した。

「きゃああああ？！」

悲鳴。逃げる間もなく、フィロちゃんの体がマネキンの津波に呑まれていった。

十二日目(4)

「フィロちゃん!!」

やだ?! うそ?! マネキンの白一色、呑み込まれたフィロちゃんの姿がどこにも見えない。そんな……。

その時、後ろでキンツと甲高い音が鳴った。振り返ると……泉の水が無くなっていった。視線を上げると空に泉の水が全部、球体になって浮いていた。その中心でリリーはゆっくりと手を広げる。まるで人魚みたいに、下半身が魚みたいになって、長い尾びれが水中でなびいていた。

(お姉ちゃん……どいて……! あいつら……水で流し潰す……!)

「待って!!」

あたしは叫んだ。水で流し潰す?! 「冗談じゃない! そんなことしたらフィロちゃんは……。」

(……あの狼人のお姉ちゃん、もう……あきらめるしか……。このままじゃ、お姉ちゃんやリュウトも……)

「……リリー!! 20秒でいい! もこ姉を護れ!!」

りゅう君が突然叫ぶと走り出した。え?! ちょ?!

あたしの脇を走り抜けてマネキンに向かっていく。

「あんた！ ちょっと！ 待ちなさいよ！」

反射的に追いかけてよとしたりせりー状の水の壁があたしを阻んだ。

(リュウト……お姉ちゃん護れって……)

リリーの申し訳なさそうな声。ああもう！ あいつはまた！ いたい今回はどうする気よ！

りゅう君にマネキンの津波が迫る。りゅう君は体を思い切り縮めると反動をつけて空高く飛び上がり、マネキンの第一波を避けた。けどすぐに空中にいるりゅう君にマネキンが群がっていく。

「フィロ！！ 聞こえたら叫べ！！ 絶対助けてやるから！！」

りゅう君が叫ぶ。一瞬の間が流れる。りゅう君がほんの少しだけ笑った。手を向かって来るマネキンに向けて突き出す。

瞬間、りゅう君の手元の空気が歪んだ。

りゅう君の手から黄色い光が広がる。その光に触れた瞬間、マネキンは糸を切られた人形みたいに動きを止めた。

以前マキナに見せてもらったやつとイメージが重なった。今の……りゅう君の過守護領域？！ なんで……いや、今のりゅう君は……もしかして……。

りゅう君はそのままマネキンの中に飛び込み、潜っていく。数秒

の間。フィロちゃんを抱えたりゆう君が顔を出した。

「リリー！ こいつら全部押し流せ！ 俺は大丈夫だから！」

「……え……けど……」

戸惑うリリー。けどあたしの予想通りならここはりゆう君が正解だ。

「リリー！ あたしからもお願い！ 今はあのスキルが働いてるけど時間経ったらどうなるかわからない！」

「え……？ えっと……」

「とにかく早く！」

あたしとりゆう君の声が重なった。

「……わかった……信じるよ？ ぼく、二人のこと……」

リリーは自分を囲む大量の水に手を向けた。

すると水の塊が細長く伸び、一頭の水の竜へ変わる。

「お母さんの……仇……！」

リリーの叫ぶ声を引き金に水の竜が新幹線みたいな勢いでマネキンの群れに向かった。ぶつかりあった瞬間、爆発したような爆音と水しぶきが上がる。

水の竜はまるで滝のような激流になって森の彼方にマネキンを押

し流していく。……りゅう君大丈夫？ これ……。

やがて水の竜が消えると、そこには深々と抉られた地面が残っていた。マネキンどころか周りの木まで根こそぎになっただけで跡形も残っていない。

……いや。削られた地面。その中でぽつんと一ヶ所だけ地面がまったく削られていない場所があった。りゅう君はそこにフィロちゃんを抱えたまま立っている。フィロちゃんは何が起こったか理解できてないみたいで呆然としていた。

「リュウト！！ 大丈夫!？」

リリーは地面に降りると一目散にりゅう君に駆け寄って言った。それに応えるりゅう君は……元気そうだ……。

マキナ曰く、りゅう君のスキル過守護は相当強力な防御スキルらしい。けど、普段はりゅう君自身の力と破壊衝動を抑えるのに全部が使われてて使えない。

それに対してリリーが言った竜の契りってというのは竜人同士で力の受け渡しができるようになる儀式らしい。つまり……竜の契りを使ってりゅう君の竜人の力がリリーへ行って、そしてそれでりゅう君の力が弱まって、過守護を使う余裕ができた……と、そんな感じだと思う。

『そそ、そんな感じ。さっすがもこちゃん、説明不要で大助かりだよ』

「わっ?!」

いつの間にか隣にマキナが浮いていた。あたしと目を合わせてに

こつと笑つと『リッちゃん！』とリリーに両手を振る。

……リッちゃん？

リリーもマキナに気付くとパツと表情を明るくして駆け寄ってきた。そういえばリリーが友達つて言つてたっけ……。本当だったんだ……。

マキナはリリーを胸に受け止めると頭を撫でながらあたしを見る。

『ちよつとお話しよっか？ いろいろ話さなきゃいけないこともあるしね』

そう言つてマキナはパチンと指を鳴らした。

「ご注文はいかがなさいますか？ お客様」

『私バケツプリン。生クリームたっぷりね？』

「……んじゃ、俺はサーロインステーキ。焼き加減はレアで」

「ぼくは……、コイキングのムニエル、よろしく」

「いやあんたら?! なんでそんな普通に注文できんのよ?! とうかうかりリーの注文ちよつと待て!」

マキナが指を鳴らした瞬間周りの風景が切り替わって……どうやら料理店らしいところに移動した。落ち着いた高級洋食店って感じの雰囲気、あたし達は白いテーブルクロスのかけられたテーブルを囲って、なんかやたらピシッとした正装の人が注文を取っていく。

「お客様、ご注文はまだお決まりではありませんか?」

「え、あ……、す、すみません……。じゃ、じゃあせつかくだからチヨコパフェ……」

「かしこまりました。しばらくお待ちください」

なんかもう相変わらず……一気にペース持って行かれたわ……。ちなみにフィロちゃんはこのにはいない。NPCは連れて来れないって言ってたけど……リリーは?

『とりあえず何かから話そっかな……。あ、まずはリツちゃん助けられてありがとね? 普段は私がリツちゃんの住んでた泉の周りに結界張ってたんだけどちよつと事情があって結界張れなくなっちゃって……。ああ、それとリツちゃんとりゅう君、竜の契りおめでと〜』

「ありがと……、マキナちゃん……」

リリーは照れくさそうにお礼を言つとチラリとりゅう君の方を見た。りゅう君と目が合うとあわてて視線を反らしてコップの水を飲

む。……ん？ ……とりあえず竜の契りっておめでたいことなのかな？ まあそれは後でいいや。せつかくマキナから話そうって言うてきたんだから情報集めないと。

「結界張れなくなった事情って？」

あたしが聞くとマキナはうへえっと気持ち悪そうに舌を出す。マキナがこんな顔するのは初めてだ。

『第2の試練の時ちよ〜つとやり過ぎたみたいでさ〜、お仕置きって言うて他のマキナに力封印された上に、火山の火口に大気圏外から叩き落とされるわ海溝に1000tの重りつけて沈められるわ…』

……なんで生きてんの？

『あと、触手に監禁凌辱調教一週間とかされそうになったり……、あ、けどこれは適当なプレイヤー身代わりにして回避したから勘違いしないでね？ みんなのアイドル マキナちゃんはしっかり貞操を守りました』

……身代わりにされたプレイヤーは？

『ま〜、そんなわけで結界張ってる余裕まったくなくて……その間に例の厨二軍団……もとい光の教団がリツちゃんたちの住み処特定しちゃったわけ。ごめんねリツちゃん？』

「仕方……ない。もともと、自分の身は自分で護るのが……本当。

……マキナちゃん、ぼくたちを今まで護ってくれた、責めるなんてできない」

『うっ、そんなリツちゃんもあたし大好きだよ〜!』

マキナはヒュンとテレポートするとリリーに後ろから抱きついた。すりすりとしりり〜に頬擦りする姿は本当に仲良さそうだ……。このことも聞きたいけど……。今は他のことについて情報集めるのが先ね。マキナの気まぐれは重々承知してる。話す気でいるうちに聞いてかないと。

「光の教団ってのは？ どういう組織？」

『ん〜、厨二……。もとい元々この世界にいた異能者で構成されたカルト集団だよ。うっとうしい連中でき〜、私たち“マキナ”の名前を語って、殺人 強盗 強姦 誘拐なんでもござれなやつらだよ。しかもリーダー格のやつがかなり強力な人心掌握系のスキル持ちで、教団メンバーは自分たちが何やつてもそれに疑問を持たないようになってる。ぶっちゃけこの世界で一番危険な組織かな？』

予想以上にヤバいのと関わっちゃったみたいね……。りゅう君が竜人っていうのもバレてそうだし……。

「なんとかならないの？」

『無理ね。私たちのルールで、むやみやたらにこの世界のこと干渉するのは禁止されてるもん。神さまはあくまでも見守る存在ってね』

「……………二回目の試練の時はあたしに直接攻撃してきたくせに……………」

『だからお仕置きされちゃったのよ〜。私もお仕置きはもうやだよ』

？ 今度こそ緑マキナに女の子の貞操奪われちゃうよ〜」

ため息一つ。もしかしたらマキナを味方に……と思ったけど無理そうね。じゃあ……

「りゅう君はどんな状態？ 過守護が使えるようになってるみたいだけど」

『さつきももちちゃんが推測した通りだよ。リツちゃんに竜人の力を分けたことで過守護を使う余裕ができた。……とはいえせいぜい二割程度だけどね』

なるほど……つまりリリーがいればりゅう君は過守護を使えるってことか……。ならもう一つ。

「ちなみにりゅう君の心の状態は？ 今までは過守護の影響で心が歪んでたんでしょ？」

『そだね。この状態を維持してればだんだんましになってくると思っよ』

そっか……よかった……。ならできればリリーには一緒に来て欲しいところね。戦力的にも頼もしいし、りゅう君の方もいつまでも自分の命を簡単に投げ出しちゃうような状態だとさすがに心配だ。そうになると……』うふふふふ

マキナがあたしのことを見て笑っていた。

「なに？」

『やっぱりもこちゃんはすごいな〜って思ってたね。その思考力と適応力、完全に高校生離れしてるわね』

マキナはクスクス笑うと自分の髪を指に巻き付け始めた。

『12日目でこれだけこの世界に適應してるのもこちゃんぐらいだよ。今でも「元の世界に返して〜」って嘆いてるのもけっこういるし。それに私から情報を聞き出す時の無駄の無さ、軽く鳥肌物だったよ?』

「…………ゲームみたいに考えてるだけよ」

『ゲーム?』

「そ、あたしはものを考える時、ゲーム基準で考えてる。今は最低限どんな情報が欲しい。どんな選択をすればいい。そういうの全部…………ね。ある意味現実逃避だけど、けっこう理屈にかなった考え方ができるでしょ?」

マキナは髪を指に巻き付ける動きを止めていた。興味津々といった感じであたしを見つめる。

『現実逃避…………ね。けど、その考え方や絶対割り切れない問題、そのうち来るよ』

「その時はその時。先のことなんてあんたぐらいしかわからないんだし、今は今のことだけで手一杯よ」

マキナはもう一度くすりと笑って軽く指を振った。すると最初にあたし達が頼んだ料理が運ばれてきた。

『やっぱり面白いね。ま、せっかくだからもう少しお話し
よ。楽しい時間はたっぷり有るからさ。』

話……か。あたしはマキナを注意深く見ながら運ばれてきた
チヨコパフェを受け取った。
何かしら情報は集まりそうね……。

あ……チヨコパフェ美味しい……。

十二日目(おまけ)(前書き)

やべえ…スランプ突入きた(- - ;)
文章が書けないですえ……

ただでさえ遅筆なのにさらに遅くなるかもですorz

十二日目(おまけ)

side 神崎 竜斗

……このステーキ、肉はいいんだがソースがいまひとつだな。少し甘味が強すぎて肉の旨味を殺してる。そうだな……赤ワインをもう少し追加して煮込む時間も30分増やす。隠し味に醤油を四滴くらい垂らせば美味くなるか……。

マキナともこ姉が話してる間、俺は料理の方に集中していた。

マキナともこ姉の話の中心は俺の心の状態がどうっていうのだ。

正直……あまり聞きたくない。

だってなあ……心が変になってるって言われてもこっちは自覚無いからなあ……あんまい気しないんだよ。というかなんで胸触ったり、もこ姉やフィ口の着替え見たら怒られたのかいまだにわからん。着替えとか一緒にやった方が早いだろうに。現に師匠は俺の前でも普通に着替えてるぞ？ それに……この間ともこ姉の胸 枕にして寝たら本気でぶちギレられたし。いいだる別に、もこ姉の胸ぶにぶにして枕にすると気持ちいいんだから。

……まあ、マキナが言うにはリリーがいれば心の状態も戻っていきやすいし、戻ればわかるんだろ。

……それなら俺がもこ姉を護りたい理由もわかるんだろうか？

こっちの世界に来て、俺はすぐに“もこ姉を護らないと”って思

った。

けど、その理由が思い出せない。やっぱり自分の行動の理由は…
…気になる。　ん？

リリーが椅子を抱えてトコトコ俺に近付いて来た。

俺の隣に椅子を置くと、「えへへ」と照れ臭そうに笑う。

「い、一緒にたべよ……？　……リュウト」

「おう。いいぞ」

俺が言う通りリリーは嬉しそうに、自分の椅子を俺の椅子にくっつけて、腕と腕が触れ合う距離で座る。　おお……。リリーの肌、ひんやりしていて気持ちいい……。さっき走って火照った体にはちよつどいい……。

もうちよつと触ってたいけど……腕だと飯食うの邪魔になるよな。
なら膝とか……。

そう思っただけでリリーの膝に手を置いた。ぴくつとリリーの体が震える。……あ、やべ。膝って触ったらいけない場所だったか？

……けどリリーは何も言わない。ちよつと顔を赤くしながらチラリと俺を見て……ん？　なんかちよつと嬉しそうだぞ？

リリーはおずおずと手を伸ばして、膝の上にあつた俺の手に自分の手を重ねた。そつと指を絡めてくる。やっぱり冷たくて気持ちいい。

手や足には身体中の血管が集中してるから、体を冷ましたい時はそこを冷やすのがいいんだ。ホツと息をついて力を抜いた。

けどなんかリリーの方はやたら力入ってるな。リリーを見ると顔が真っ赤だ。それでチラチラ俺の方を見てくる。なんだ？

「そ、そっいえば……えっと……ぼく、勢いでリュウトのこと、“リュウト”って呼んでるけど……竜の契り……したし、“あなた”って呼んだほうがいい？」

「んあ？　なんで竜の契りしたからって……とりあえず“あなた”は変だろさすがに」

「そ、そっか……じゃありュウトって呼ぶね……？　ね、ねえリュウト……？　コイキングのムニエル……食べる？　お肉よりこっちの方が美味しいよ？」

「お？　そっか、じゃあ少し貰おうか」

「う、うん……。じゃあ……あ、あーん」

リリーはフォークに刺した料理を俺の方に向けてきた。自分で食べようとしたが……右手がリリーにがちり掴まれて動かせない。仕方なくそのままリリーの差し出したやつを食べた。

……お、なかなか……

「おいしい……？」

「おう、なかなかいけるな」

なるほど、ここのシェフは魚料理の方が得意なのか。たしかこの

料理……コイキングのムニエルって言ったな。コイって言うわりにはスズキとかに近い味だ。この前の町で食べたマトマの実とかとも合いそうな気がする。

そんなことを考えながら、またリリーが出してきたやつを食べる。コイキングか……けっこうでかそうな魚だけど釣れるのかな？ リリーは普段水の中で生活してたらしいし後で聞いてみるか。

ふとリリーを見ると、リリーは俺の方を見てまた照れ臭そうに「えへへ」と笑った。

なんか可愛らしい。フィロとは違う、妹みたいな感じだ。手をほどいて透き通るような水色の髪に指を通した。こっちも少し濡れるような感触で、ひんやりしている。

「ひゃんっ?!」

「お?」

なんかリリーがビクンと体を震わせた。ん？ なんだ？ そのままもつ一度髪に指を通すとまた切なげな声を出して体を震わせる。

「だ……だめだよ……。こんな……で……ぼく、髪……敏感だから……」

髪が敏感？ ……そういや、水の中で生きてる生き物の中には体に敏感なセンサーを備えてるやつがいるよな。ナマズのヒゲとか。もしかしたら……。

試しにリリーの髪を一束手に取って指の腹で撫でてみる。

「ひあつ……?! あつ……くうん……だ、だめえ……」

「つと。すまん」

どうやらリリーは髪の毛にも神経が通ってるらしい。悪いことしたかな？ 手を離す……が、なんかリリーが潤んだ瞳で俺を見上げてきた。おいおい、大丈夫か？ なんか息が荒いぞ？

「やめ……ちやうの……?」

は？ いやおい、さっき「だめ」って言ってたろお前。いやなんだよその何かを期待するような目は？ 何を期待してんだよお前は？

「リュウトの……いじわる……」

なんだろうか？ 凄まじい地雷を踏んだ気がする……。

まあいいや。とりあえずこのコイキングの調理方を考えよう。とりあえず町で食べたミジユマルって生き物の血のソースと合わせるのはどうだろうか？

十二日目(5)

side 引き続き 神崎 竜斗

うわああああああっ!!

テントの中、頭を抱えて心の中で絶叫した。

うわああああああっ!! あーくそっ!! いっそ殺してくれ
ええええ!!

あまりにもいたたまれなくてテントの中でのたうち回った。なん
かもつ……今すぐどこかに消えてしまいたい。

俺たちはマキナの手によって元の場所に戻って来ていた。

師匠にはかなり心配かけたみたいだったが事情を話したら納得し
てくれて、一緒についてきたリリーも歓迎してくれた。

で、疲れただろうし自分が見張りをやるから休めって言われて俺
ともこ姉、そしてフィロとリリーの二組に分かれてテントで休むこ
とになったんだが。

……いろいろ思い出してきたんだ。うん、マキナが言ってたように心の状態が戻ってきたらしい。で、それはつまり今まで自分かごんだけとんでもないことしてきたかを理解できるようになってきたってことで……。

うわああああああっ！！俺 なにもこ姉の胸わしづかみにしてんだよ！ なにフィロの裸普通に見たりお姫様抱っこしてんだよ！ なにもこ姉の胸を枕にしたり、着替えようとして普通にもこ姉達の前で全裸になったり一緒に水浴びしようとしたり……！！ うあ………そういや前の幽霊騒動の時もこ姉とディープリキ………うわあああああああっ？！ なにやっつてんだよ俺？！ なにやらかしてんだよ俺？！ ああもう誰かいつそ殺してくれえええっ！！

「りゅう君うるさい」

……のたうち回ってたら隣で寝ていたもこ姉が不機嫌そうに体を起こした。 少し胸元がはだけてる。

「あ………悪いもこ姉………」

「……ん。りゅう君も早く寝なよ………？」

もこ姉はかわいらしくあくびをするとまた横になる。少しすると気持ちよさそうに寝息を立て始めた。

もこ姉は俺に対して少し無防備過ぎると思う。いや、俺があの状態だったから警戒心が薄れてるのか？

けどわかってんのかも姉？ 俺、男だぞ？

……ついも姉のはだけた胸元に視線が行ってしまふ。……悪い
かよ？ 俺、健全な16歳だぞ？

ああくそ、も姉もう少し警戒してくれよ。もし俺が襲い掛かっ
たりしたらどうする気だよ？

とはいえも姉、アイテムボックスに大量に剣持ってるからなあ。
もし俺が襲い掛かっても身体中串刺しにされるのがオチか。

いや、けど俺って今は最高峰の防御スキルっていう“過守護”が
使えるんだよな？ それならも姉の剣も防げるかも……それに昔
よりかなり力も強くなってるから、一度抑え込めたら ゴツンッ
！！ 思い切り地面に頭を打ち付けた。

おい俺、抑え込めたらどうする気だ？ 落ち着けよ？ COOL
になれよ？ 額から血をだらだら流しながら乾いた笑い声を上げる。
ヤバイ。変だぞ俺。むしろ余計変になったんじゃないか俺？ 少
し外の空気吸って来るか……。

なんかもういろいろ悶々して眠れる気がしない。音を立てないよ
うに立ち上がってテントを出た。

「……おお」

見上げると満天の星空。満天ってこういうのを言うんだな。そこ
そこ見慣れてたはずの星空に思わず感動してしまった。

もうこっちに来て半月近く経つのに何もかもが新鮮に感じる。今
の身体も……耳を澄ませば周りの草むらの中で小さな虫が這う音ま
で聞こえるし、鼻に集中すればテントで休んでるフィロとリリーの

匂いが……ゴホン！ とにかくいろいろ感覚が違う。

よくよく考えたら俺、とんでもない運命歩いてるよなあ……。異世界にいるなんて、高校のダチに言っても絶対信じないぞ。

「神埼、そんなところに突っ立っておらんでこっちに来んか？」

ぼんやり星空を見上げていたら焚き火にあたっていた師匠にそう言われた。どうせしばらく起きてるつもりだったんだ、言われた通り、師匠の隣に腰を下ろす。

すると師匠はじつと俺を見上げてきた。……なんというか……普通のかわいらしい女の子に見られてるみたいですごく変な気分だ。

「……ふむ。浅倉達から聞いておったが多少は元に戻ってきておるようじゃの？」

「わかるんですか？」

「なに、お前が小学生の頃からの付き合いじゃからのう。それだけにこちらで再開した時には驚いたわい。元のお前が見る影もなかったからのう」

見る影も無いってのは思いつ切りこっちの台詞だと思っただけどなあ……。

「で、浅倉のことは思い出したか？」

「……はい？」

「ふむ、その様子ではまだか」

師匠は残念そうにため息をつく。なんでもこ姉が出てくんだ？
思い出すって……俺ともこ姉は幼なじみで、姉弟みたいな仲で……
それ以外に何か有るか？

「いったいどういう……」「リュウト」ガバツと後ろから抱き付かれた。

ひんやりした冷たくて柔らかい感触。首に回された細い腕をそつとほぐく。

「リリー、焚き火の前で暴れると危ないぞ？」

「あ……ごめんなさい……」

振り向かずに言うと少ししゅんとしたリリーの返事が返ってきた。

「え……と、リュウト……隣、座っていい？」

「おう、いいぞ」

俺が答えるとリリーはいそいそと俺の隣に腰を下ろす。少し照れたような表情で俺を見上げると俺越しに師匠の方を見た。

「じ……こんばんは……」

「うむ、こんばんはじゃな。確かリリーと言ったの？ 眠れんのか？」

師匠が言つとリリーはあわてて俺の影に隠れてしまった。師匠の

表情が曇る。

「……何か怖がらすことでもしたかのう？」

「ごめん……えっと……そっちは、ぼくのこと……怖くないの？
ぼく、竜人だよ……？」

師匠が首を振るとリリーは目を伏せてギョツと俺の服を掴んだ。

「ぼくは……人間と話すの……まだちょっと……」

「……む？」

「ぼくのお母さん……人間にひどいことされて、殺されたから……」

俺と師匠は顔を見合わせた。これは……重いな。リリーの頭にそつと手を置いた。

「俺は怖くないのか？」

「リュウトは……竜人だし……、契りも交わしたから。フィロお姉ちゃんは、獣人だし優しいし……。もこお姉ちゃんは……ちょっと怖いけどマキナちゃんと仲良かったから……。けど……」

リリーはチラリと師匠を見た。師匠はじつとリリーを見つめる。

リリーはその視線から逃げるようにまた俺の影に隠れた。

「ふむ……」

師匠はゆっくり立ち上がると、俺の影に隠れたリリーを追いかけ

るように回り込んだ。それに合わせてリリーも俺に隠れながら逃げていく。

「やれやれ……これでは鬼ごっこじゃな」

ため息一つ。　瞬間、師匠が消えた。

「は？」「わきゃあ?!」

リアルにも止まらない速さで回り込んで、師匠はリリーに抱き付いていた。いや……本気出すなよ師匠……。リリー半分パニックになってるぞ？

「ええいこら！　暴れるでない！」

師匠はぐいとリリーに顔を寄せる。その距離数cm、鼻先が触れ合う距離だ。

「あ……うあ……な、なに……？　ぼ、ぼく食べてもおいしく……」
「人と話す時は相手の目を見て、じゃろう？」

そう言つと師匠はリリーと視線を合わせた。　はは、そついや俺も初めて師匠と会つた時これやられたな。

師匠はリリーとしばらくの間じっと見つめ合う。そしてふつと表情を和らげた。

「どつじゃ？　わしは怖いか？　おぬしにはわしがどつ見える？」

「……………」

リリーはおそろおそろといった感じで師匠の顔に手を伸ばした。リリーの手が師匠の柔らかいほっぺたに触れ、さらさらした髪に指を通す。

「ぼくと同じ……、女の子……」

一瞬師匠は複雑な表情をしたがすぐに優しく笑いかける。

「そうじゃ。同じじゃよ。人間だの竜人だの知らんが、わしも神崎もフィロも浅倉もおぬしと何も変わらん」

「……………けど」

「一を見て全を見たと思っでは損をするぞ？ おぬしが見たような人間が全てではない」

「……………」

リリーはまた視線をそらせてしまった。師匠は小さくため息をつくとニカッと笑う。

「よし！ 今日からわしがお前のお母さんになってやる」

「……………」

いやちよつと待て師匠？ なんでそうなる？ リリーの方も目が点になってる。というか“お母さん”ってついに諦めたか？

「おぬしの見たような悪い人間もたしかにおる。それを警戒するの

も悪いことではないじゃろう。……じゃがお前はまだ子供じゃ。子供の内から人を疑い、世界を疑わなければならんのは間違いなく不幸じゃ。

じゃからわしがお前のお母さんになってやろう。わしが怖いものからお前を護ってやる」

「……あ……でも……ぼく……」

「それに、形はどうあれお前がわしらと来る以上、嫌でも人と関わらねばならん。……安心せい、これでもわしは人を見る目には自信がある。それに子供を幸せにしてやるのは大人の義務じゃ。遠慮するのは許さんぞ?」

俺は思わず苦笑してしまった。師匠はまったく……相変わらず直球だ。けど たぶんそれが一番なんだろう。

「リ……リュウト……?」

不安そうなりリーの目。それに向かって俺は静かに頷いた。リリーはキョロキョロと視線をさ迷わせて、師匠の目を見る。

「じゃ……じゃあ……お願い……恋ちゃん……」

「呼び方が違う」

師匠はピシッと言うとリリーの額を小突いた。リリーは額を押さえながら少し頬を赤くする。

「あ……よろしく……お母さん……」

「……自分で言わせといてなんじゃが少々複雑な気分じゃのう」

師匠は照れくさそうに笑うと俺の方を見た。その顔が急に真剣な……元の世界で大切なことを言う時の顔になったから、思わず姿勢を正した。

「わしがこの子を護ると言ったのは、言っ飛ばせばこの子の境遇への同情心と子供を護るという義務感からじゃ。じゃが言葉は曲げぬ。約束は決して違えぬと誓っていい」

師匠の目が鋭くなる。心を見透かされるような、そんな気分だ。

「お前の理由はなんじゃ？ なぜ浅倉を護る？ なぜ護りたいと願った？ そしてお前は何を誓う？ ……早く思い出せよ……」
静かな、それでいてやけに耳に響く師匠の声。

「……でないと、お前はもう浅倉を護れんぞ」

竜斗達がいる場所の数百m上空に、その少女は立っていた。

白い法衣に身を包んだ、長い金髪の少女。その髪からは尖った耳が飛び出している。

少女は指先を唇に当てると静かに呟いた。

「教皇様……。黒竜と蒼竜……。発見いたしました……。一緒に、人間の女二人に獣人の女が一人……。了解。準備を整えます……」

少女は一度、自分の遙か下にいる人影に視線を向けると白い翼を広げ、どこかへと飛んでいった。

十三日目

side 赤川 恋二

夜明け前の空に静かに輝く月に虫の鳴く音。それに水のせせらぎ……風情があるのう。これで水浴びでなく温泉であれば完璧なんじやがの。

カラン コロンと歩く度に下駄と川辺の石がぶつかり小気味いい音が鳴る。

夜の月もいいが、わしは夜明け前の少し朧気な月の方が好きじゃ。儂げな光、徐々に明るくなる空に朝の空気。夜には無いなんとも言えん雰囲気がある。

適当に川辺を歩き回る。目的は水浴びじゃ、昨日は神埼達が急になくなってしまい探し回ったせいでできなかったからう。やはり汗をかいたままは気持ち悪いし、鼻が良いのが二人もおるから流石に気にする。

良さそうな場所で太刀を水に差して深さを確かめる。うむ、ここなら深さもちょうど良いし流れも緩やかじゃ。 さて……いやその前に……。

少し離れた場所に張られた、テントの方を確認する。うむ、ここなら神埼達からは見えんの。

……なぜ“神埼達”なんじゃ？ なに神埼の名前を真つ先に上げとるのじゃわしは！？

……けっして神埼に見られたら恥ずかしいとかそういうことではない。絶対ない。断じてない。

ただし心臓がキュツとして顔が熱くなつて嫌なだけじゃ。

……本当に見えんな？

帯を解いた。シユルルと衣擦れの音がして、着物が足元に落ちる。着物にシワがでkindんように慎重に畳んで川に入り、水に足を浸す。

冷たさが足から上がってくる。体がブルツと震えた。

一息つくと手拭いを水に浸してそれで体を拭く。

きめ細かい肌が水を弾く。この肌は我ながらなかなかのもんじやと思う。顔もなかなかじゃと思うし将来が楽しみじゃ。……あとは胸がもう少し有ればいいのじゃが。

両手で寄せてみる。……谷間もできん。手にあばら骨の感触が伝わってくる。

いやいや別にまだまだこれからじゃしの？ それに大きくならんでもそちらの方が着物には合うしの？ 別に気にしな……

……はっ？！

自分の胸に手を当てたまましばし呆然としてしまった。違う！断じて違う！ これは……

いや……、違わんの……。

ため息をついて水面に映る自分の顔を見つめた。凜とした、そし

て年相応のかわいらしさを併せ持った少女の顔。

そう、これが現実じゃ。自分をごまかすのはもう止めるとしよう。どのみちこんな体である以上いつかは嫌でも認めねばならん。

……わしの中身……心というべきか？　それがこの体に相応しいものに変わってきておる。つまり見た目通りの幼い少女のものへと変わっていつておる。

数日前から神埼と一緒に水浴びするのが途端に恥ずかしくなった。……きつかけもだいたいわかっておる。

あの日、水浴びしてた時に川辺で濡れた石で足を滑らせ、神埼に抱き止められた時じゃ。その……なんじゃ……抱き止められた時……その……“男の匂い”みたいなものを感じてしまって……ここから急に神埼に肌をさらしていることが恥ずかしくなって……。それに神埼に付いとる……アレを見るのが……その……うあ〜っ！！

頭の中に浮かんだイメージをぶんぶん首を振って振り払う。

……おまけに、最近はどうも浅倉やフィ口達が目の前で着替え始めても気にならなくなってきおった。……いやさすがに一緒に寝たり水浴びしたりは抵抗が有るがの。浅倉は妙にベタベタ触ってくるし。う。さらには座ると自然と女の子座りになるは浅倉に買わされた下着を着けるのも抵抗がなくなってきたはでもう……。

わしはこのままこの世界で成長し、変わっていくのじゃろうか？　大きくなつて、恋愛をして、結婚し、子を産み、育て、死んでいくのじゃろうか……？

……ふふ、滑稽じゃな。前の体の時はもうこの世に怖れるものな

ど何も無いと思っておったのに、今は自分の小さな変化にさえこんなにも不安になっておる。

自嘲気味に笑い、空を見上げる。月はちょうど見頃じゃ。これを肴に酒でも呑めればのう。

変わることは不安じゃが、不幸とは思わん。元々、あと何年生きられるかもわからなかった身じゃ。それがこうして若く、健康な体を得て新たな人生を歩める。形はどうあれこの事に関してだけはマキナに感謝しとるぐらいじゃ。何より……「師匠？」

「きやつ?!」

いきなり後ろから神埼に声をかけられて思わず「きやつ?!」などと悲鳴をあげてしまった。おまけに手は反射的に大切な部分を隠しておった。

……恥ずかしい。恥ずかしい、が。こやつにだけはそれを悟られたくない。無理に堂々と神埼と相対した。どんどん顔が熱くなるのを感じる。

「何じゃ？」

「ああ、もうすぐ朝食ができるんで呼びに来たんですけど……大丈夫っすか？ 顔、真っ赤ですよ？」

「な、なんでもない！」

神埼に背を向ける。……こやつは……よくも平然と……わしがこれだけ恥ずかしいのに……。まあ、こやつからすればわしの肌など

見ても何ともないんじやろうのう。胸も無いし……なんじやろうか？　なんかイライラしてきおった。

まったく、昔はもつと可愛げが有ったというのに、中学一年の頃に年齢を偽ってアルバイトを始めた頃から妙に落ち着きおって。

それでもその頃は『料理を巧くなっていつかも姉に食べさせてやりたい』とアルバイト先の料理長の技術を見よう見まねで覚えようとするなどまだ可愛げが有った。

……まあ、それで一年経たずに料理長の技術を完璧に盗みきつた上に独自の改良まで加えて料理長を泣かせるまでに至ったのはさすがにどうかと思うが。

高校に入ってから……まったく。女子にけっこうモテておったくせに興味も示さず。馬鹿みたいに一途で、馬鹿みたいに真剣で……そして強かった。

今は見る影も無いが、神埼ほど心が強く、揺るがん人間をわしは見ることがない。その強さの行く末を見たいと思った。この子が幸せを掴むのを見届けたいと願った。

あの頃は望んでもおそろくは叶わぬ願いじゃったが……ふふ、人生とは本当にわからんものじゃ。

見ると神埼は不審そうな顔をしておった。
まったく、腑抜けた顔をしておって。

川から上がり着物を手にとる。……せめて下着を着ける時ぐらい目をそらさんか……。太刀の鞘で神埼の頭を叩いた。

「って?! 何するんすか?!」

「うるさい。でりかしーを持たんかでりかしーを。そんなことでは愛想を尽かされるぞ?」

「は、はあ?!」

やれやれ、先は長そうじゃのう。

……願わくはその先に、この子の幸せが有ることを……。

十四日目(1)(前書き)

注意

どうも筆が進まないので気分転換に少しはっちゃけて書きました。
かなりの乱文かと思いますが十四日目だけはちょっと遊ばせてもら
いますm () (m

ストーリーとの関連は薄いので別に飛ばしても大丈夫です。

十四日目(1)

『よーやく、召喚に成功したわ』

もくもくと煙が立ち込める。床に描いた複雑な紋様の魔法陣の真ん中に、私の目当ての物はあった。

つかれた。いくら私が神様だからって異世界のものを召喚するのって大変なんだよね。けどけどこれで……。

召喚した物を手に取って状態を確かめる。なるほどね。使い込まれてるのが一目でわかるわ。とにかくこれで準備オツケーっと。

『さあ、狩りの時間よ!』

side マキナ(白)

『とうわけでこんにちは〜!』

「ひああっ?!」

空間移動魔法で丸太の椅子に座っていたもこちゃんの背後にワ

プして、後ろから抱き付く。わゝ　もこちゃんの胸柔らかいゝ
やっぱりもこちゃんのが一番揉みやすいねゝ　フィロちゃんは
私の手にはちよつと大きすぎるしリツちゃんと恋ちゃんはぺったん
こだし。

「ちよつ?!　マ、マキナ……やめて……。いや、あん……ん……」

『よいではないかよいではないか』

せつかくだから手に催淫効果を付加つと。もこちゃんをよがらせ
ながら他の人の反応をチエックする。

とりあえずフィロちゃんが眠って頭からたき火に突っ込みそうだ
つたからたき火の火を消滅させといた。

私達マキナが出現したらNPCは寝ちやうつて設定が有るのよね、
めんどくさい。変えちゃだめかなゝ。けどリツちゃんの変える時
でもかなり文句言われたからなゝ。とりあえずフィロちゃん周りの
空間を現座標に固定つと、これで倒れないでしょ。

「また来たのか……」

「マキナちゃんいらっしやーい」

りゅう君は軽く呆れ気味に、リツちゃんは嬉しそうに私を見る。

確認しないで来ちゃったけどお昼ご飯の後にみんなで話し合ってる
所だったみたい。

とりあえずトイレ中とかじゃなくてよかったよかった。まあそれ
はそれで面白そうだけど。

「何しに来おつた」

恋ちゃんだけは思いつきり警戒モードだ。

そういえば恋ちゃんとはあんまり話したことなかったか。最初の試練の時、黒マキナが“斬られた”って言ってたから避けてたからな。

『ちょっと遊びに来ただけだよ。ほら、だから刀から手を離して。私はリツちゃんのお友達だよ？ 娘の友達にひどいことしないでよお母さん』

「おぬしがお母さんなどと呼ぶな！ なら……まず浅倉を離せ」

『あ……あ』

もこちゃんのこと忘れてた。というか催淫効果の出力間違えた気がする。

「あ……いあ……ん……んう……は……はあ……もっと……ん……」

あちゃく、なんかすっかり出来上がってる。手を離すととろんと潤んだ目で私を見てきた。

「なんで……なんでやめちゃうのよお……」

あ、やっぱり出力間違えてた。

「お願い……お願いだから……最後までしてえ……」

あらら〜……。んー。サイキクスつと。

「あ……？」

もこちゃんの体を浮かべる。そして標的をりゅう君に向ける。

『もこちゃんをりゅう君の胸にシューッ!!』

「のわあっ?!」

超エキサイティング!! もこちゃんを受け止めたりゅう君は椅子から丸太の椅子から落ちた。

そしてちよどりゅう君の体にもこちゃんが馬乗りになる体勢になった。うんまあ狙ってたけど。

「も、もこ姉?」

「りゅう君……お願い……りゅう君。りゅう君のをあたしの

に して……もう、我慢できないの……」「ちよ?!
待てもこ姉!」「だめ……! やめて!」

服を脱ごうとしたもこちゃんをりゅう君とリツちゃんが全力で止めにはいる。いや、カオスなことになってるね……。……もうそろそろかな?

「……………あれ? ………………きゃああああ?!」

もこちゃんが悲鳴を上げた。過守護に当てられて催淫効果が切れたみたい。うん、まあ狙ってたけど。

顔真っ赤で泣きそうになってるもこちゃん達を見ながらお茶を一杯。……あ、茶柱。

「こっんの!!! マキナアアアア!!!」

『はいはい。スキル“第四波動”発動つと』

もこちゃんが飛ばしてきたファイアの熱エネルギーを吸収つと。後でお茶を暖め直すのにでも使いましょ。

「あ……あなたはいったい何しに来たのよおおおっ！！　こんな……こんな……うわああああん！」

ありやく、マジ泣きしちゃったよもこちゃん。元の世界では押し入れ占領するレベルでエロゲ集めてたくせにこういうの苦手だね。ま、そんなことより……。

『まあまあもこちゃん、そんなことよりいい物持って来たの。ほらほら』

「ぐすつ……そんなことよりって……」

言いかけてもこちゃんの動きが止まった。目をぱちくりさせながら私の手にあるものを見ている。

「……PSP？　しかもこの使い込み具合に改造のあと……それに
プレイ・イン・コレクション・ポケット
何より後ろのブロンゾさんステッカー……これまさか……」

『そ、もこちゃんのPSP。メモステもUMDも全部そのまま。んでさ、私とリツちゃんできよくちよくMHモンキーハンターやってるんだけど一緒にやらない？　クリアできないクエスト有って困ってるのよ。もこちゃんこついつのうまそつだし』

「……これやっていいの？」

「もちもち。というか嫌って言ったらさっきの淫乱状態にして最初の奴隷皆からやり直しさせちゃうよ」

？ あれ？ なんかもこちゃん震えてる？ というか泣いてる？ あれ？ そんな奴隷皆怖かつ「封印がとけられたーっ！」

いきなりガバアツと号泣しながら万歳するもこちゃん。え？ ちよ？ なに？

「うふふふ……あっはははは！ ついに……ついにこの時が来たわ！」

だからなにこれ?! もこちゃんこんなキャラだった?! 魔神でも乗り移ってるの?! ま、まあいいや……。

『あ……う、うんそうね。それじゃリツちゃんのPSPも……はい。それじゃみんなでレッツゴー……』「あんたそこは「一狩り行こうぜ！」でしょうが！ わかってないわね。やり直し！」

『ひ……一狩り行こうぜ……』

「声が小さい！」

『ひ、一狩り行こうぜ……！』

「まだまだあっ……一狩り行こうぜっ……！ はい……！」

『一狩り行こうぜっ……！』

「よろしい!! さうてひっさしぶりのモンハーン
最初は最初
は……どんな装備で相手をミンチにしようかな」

……やだ、なにこれ怖い……。

十四日目(2)

「あっはははは!! さいつこー　　ガンガンランサー　　ヤリヤ
リ」

うわあ……うわあ……、私とリツちゃんが二人がかりで勝てなかつたグランモス、フルボッコにしてるよ……。PSPを握りしめてテンションがひたすら上がりまくってるもこちゃん。……キャラ崩壊してるし。

「バックステツポオ!」

とうかさつきからもこちゃん相手の攻撃すり抜けてるけどなんで?

ああそっか、回避した瞬間0.1秒ぐらい無敵時間が発生するからそれで避けてるのか……。なにそれ怖い。まずもこちゃんってそんな反射神経なかったはずなのに。

「マキナ! そっちヘイト溜まってる!　時計回りに回避して!」

『えっ?!　う、うん!?!』

いやちよつともこちゃんヘイトって?!　なんでそんなのわかんのか?!　え、えつと一応スキル“数値判定”発動。……本当だ、私の方がもこちゃんよりヘイトが3高い。こわっ。

「よし！ マキナ！ このあと威嚇に移るはずだから頭殴って！
それで気絶するから！」

いやちよっ?! なんかさりげなく未来予知してない?!
ってマジで威嚇しでした?! しかも気絶した?!

「あとリリー！ こんがり肉のタイミングは音楽が鳴り終わってか
らうん、たん、たん、よ！」

「……………うん、たん、たん（上手に焼けましたー）」

もこちゃんはずっこく楽しそうに指示を出しながらグランモスの
しっぽを斬り落とす。うっわ……………なんかもう相手が可哀想になっ
てきたよ……………。

「……………ねえマキナ？」

『な〜に〜?』

二人でグランモスを突いたり殴ったり爆破したりしながら会話す
る。リツちゃんのPSPからはまた「上手に焼けました〜」という
声が聞こえた。

「これ、元々あたしのなんだしあたしが持っていていいよね？」

『だめ〜。技術レベル違い過ぎる物は表に出しちゃうとまずいのよ
』

私がそう言うともこちゃんの笑顔が固まった。それでもグランモ
スをボコる手を止めないのはさすがだと思う。

「どうして……なんで……なんであたしが持つてちゃいけないのよ!? やつと……やつとまた会えたのに……!」

いやそんな生き別れの恋人に会ったような勢いで言われても……。

「お願い! あたしはやつとまたこの子と会えたの! もう離さない! 離したくない!」

え〜? なんかりゆう君と再会した時より熱入ってるよねこれ。しかも相変わらずの超回避連発してるし

そんなこと言ってもな〜。仕方ない、もこちゃんにも納得できるやり方で黙らせよつと。

『じゃあ、私とゲーム対決しない?』

「……ゲーム対決?」

『そつ、このACで勝負しましょ。私が勝つたらPSP没収。もこちゃんが勝つたら好きにしていよいよ』

ちよつと大人げないかな? このゲームのジャンルはハイスピードメカアクション。簡単にまとめると人型起動兵器を操つて、超音速での冗談みたいな速度で戦うゲームだ。

鬼みたいな操作難易度と複雑さ、奥深さで知られていて、思った通りに動かすのにすら何日もかかるっていうようなゲームだ。

もこちゃんがこのゲームやったこと無いならその時点で勝ち確定だし、私はもう250時間以上やってる熟練プレイヤー。おまけに自分の体にチートをかけて動体視力や反射神経を徹底的に強化して

る。負けるわけがない。

ま、他のマキナに怒られるのも面倒だし、もこちゃんには現実の
厳しさというものを味わってもらいましょー。

『どっする〜？ やる〜？』

「もちろん」

もこちゃんはにっこり笑う。

「で、レギュレーションはいくつ？ 戦闘のルールは？ なんなら
ハンデ付けてもいいわよ？」

ふ〜ん、経験者みたいね。でもそれなら潰しがいいがあるわ。ただ
の人間が動体視力と反射神経を徹底的に強化した私に勝てるわけが
ないもん。マツハで蜂の巣にしてやんよ〜

『ハンデなんていらないよ。それじゃさっそく始めよっか、ステー
ジは……水上ステージね』

「……ハンデはいらない……か。殉ずるがいいわ……己の答えに…
…」

ん？

……まあいいや、そんなじゃアイテム取り出す、プラズマテレビ二
台にPS3、んでもってコンセントをこの間召喚したペカチュウ入
りのボールに差して……戦闘開始っつと。

ステージは水没した街。水面からビルの先っぽが顔を出したようなステージだ。私は愛機を水上でホバーさせながら各種武装を確認する。私の機体は高速起動型に組んで合って、チートをかけた動体視力も合わせてものすごい起動力を持っている。
さて、もこちゃんはどんな機体を使ってるのかな？

……つてなにあのもこちゃんの機体？

遠くに見えたのを見て、思わず吹き出してしまった。もこちゃんが使っているのは両手にパイルバンカーを装備した機体だった。

パイルバンカーってのは物凄く威力は高いんだけど射程が短すぎて対人戦ではほぼ使い物にならない所謂ロマン武器だ。まあお互い音速で飛び回りながら相手を殴るようなもんだからね。

しかも私の機体は超高速起動が自慢だし、まず敗けることはガスツ！『YOU LOSE』ない。……え？

顔面にパイルバンカーで穴を空けられて、水の底に沈んでいく私の機体。え？

もこちゃんは目を細め、細く息を吐く。え？

「貴様には水底が似合いだ……」

『いやちよつ?! え? 今何が……い、今の無し! もう一回!』

もこちゃんはフツと口元を弛める。さ、再戦開始。

い、今のは油断したただだもん! つ、次は……つてあれ?!

ちよ?! わ、私の機体の旋回速度がもこちゃんについていけない?! ああつ?! 画面から消え「あなた、いい的よ」ガスツ! 『

YOU LOSE』

え……え……？ 今何が……まばたきした瞬間画面から消えて……
も、もう一回！

ちよ？！ なんか動き読まれ「挟らせてもらうでえ！」ガス
ッ！『YOU LOSE』

なんか私が移動しようとした瞬間、移動先に回り込まれてやられた。あ……あれ？ もこちゃんにニュータイプスキルなんて持たせてないはずなのに……。も、もう一回！

「そんなんじゃこの先生きのこれない」ガスッ！『YOU LOS
E』

……ライフル乱射したのに全回避で正面突破された。

「死に腐れ」ガスッ！『YOU LOSE』

……ならこっちもパイルバンカーってやったら案の定瞬間
殺された……。

「あいむ あしんかー とぅーとぅーとぅーとぅーとぅー」ガ
スッ！『YOU LOSE』

……一回も画面に捉えられないまま負けた。

『YOU LOSE』

『YOU LOSE』

『YOU LOSE』

悔しい……。悔しい悔しい悔しい！なんで……。どうして！私は自分にチートまでかけて……。う……。ぐすつ……

「お、おいマキナ？ たかがゲームで泣くなよ……」

「うるさい！ 泣いてない！」

心配そうにりゅう君が声をかけてきた。うつさい……。なんで人間なんかに神様の私が心配されんのよ……。ああもう腹立つ……。ぐすつ、ひっく……。

「まだまだ！ もう一回よ！」

「……。ん？」

「何よ！？ 文句有るならもこちゃんのPSPぶっ壊すわよ！？」

もこちゃんをあわててPSPを背中に隠した。

「い、いや、なんか声の雰囲気が変わったから……」

「訳わかんないこと言っていないで早くやるわよ！ 絶対勝ってやるんだから！」

「まあいいけどさ。けど真剣に挑んでくる以上、敗けるつもりは無いわよ？ 3382時間のプレイ時間にかけてね」

どうしよう。勝てる気しなくなってきた……。

十五日目(1) 異変

side 浅倉 もこ

朝、テントの中で目を覚ます。

ザーザーと、かなりの勢いで雨がテントに当たる音が聞こえる。体を起こしてテントに雨粒が当たるのを見上げながら小さくため息をついた。

「はあ……最悪」

元の世界ではそこまで気にしなかったけど、こっちの世界で旅する分には雨って最悪だ。

冷たいし、地面はぬかるむし、オオイグに乗ってる間なんかもろに雨が直撃するからスピード出せないし。

一応フィロちゃんとあたしで雨避けの魔法を使ってるけど、あたしは魔力あんまり無いからフィロちゃんに負担かけちゃうし。

もう一回ため息。フィロちゃんってすぐ無理しちゃうからあまり負担かけたくないんだ。

りゅう君の過守護って雨は防げるのかな？ 防げるなら雨避け魔法の範囲狭くできるから多少魔力の節約になると思うけど。

うんと体を伸ばす……いたた。

なんか体もだるい。筋肉痛みたいな感じ。さすがにそろそろ体力

付けないとまずいかしらねえ……。ふあ……。ねむ……。

大きくあくびをしてコキコキと首を鳴らす。……。ん、とりあえず着替えよ。

「アイテム、取り出す」

あれ？

着替えが出てこない。おかしいな？ いつもなら言い切るのと同じ時に出てくるのに。

「アイテム！ 取り出す！」

もう一度やってみる。すると今度は普通に着替えの服が出てきた。……何なんだろう？

一応、他の物を取り出したりしまったりしてみた。……普通にできるわね。疲れてるからかしら？

ちょっと気にはなるけど……とりあえず着替えよう。と、その時ひよいとテントの入り口からフィロちゃんが顔を覗かせた。

「あ、起きてましたかもごさん」

「うん、どしたの？」

「ああ、リリーちゃんが近くで雨宿りできそうな小屋が見つけたので、そちらに移動しようってことになりましたので。もごさんも準備が終わった雨避け魔法の方お願いしますね？」

「りょーかい」

小屋か。助かった〜、前回雨が降った時は一日中雨避け魔法張つてなきゃいけなかったから大変だったのよ。

途中でモンスターとの戦闘挟んだりしたせいで魔力切れて、結局ずぶ濡れになっちゃったし。

フィロちゃんは必要なことを伝えると戻っていった。あたしはささと着替えて脱いだ服をアイテムボックスにしま……………あれ？

脱いだ服がすぐに消えなかった。首を傾げていると数秒ほど間を置いて消える。…………あたし体調でも悪いのかしら？

「浅倉〜！ まだ着替え終わらんのか〜？」

外で恋ちゃんの声が聞こえた。とと、早く行った方がいいか。

一心、深呼吸したり体を動かしたりして変なところがないかを確

認。大丈夫…………ね。荷物をまとめてテントから出た。

テントを畳んで移動を始める。雨はさらに勢いをましてバケツをひっくり返したような雨…………たぶんゲリラ豪雨ってやつだ。遠くが霞んで見えなくなってる。

とりあえず少し歩いたところに有ったっていう小屋の方向へみんなで向かう。フィロちゃんがオオイグの手綱を引きながら雨避けの魔法を張って、あたしがさらにそこに雨避け魔法を重ねて補助をや

る。

雨はきれいにあたし達を避けるようにカーブして降り注ぐ。……
やっぱりフィロちゃんは凄いなあ。こんな大雨、あたしの雨避け魔法じゃ絶対防ぎきれないもん。

前はフィロちゃんはこれを戦闘込みで半日ぶっ通しでやってた。あたしなんてこの範囲まで展開したら30分ぐらいが限界だ。

ちなみにりゆう君の方はどうやら過守護の力で雨も無効化できるみたい。だから雨避け魔法の範囲から追い出した。魔力とスペースがもつたいない。

リリーの方は自分から雨の中に飛び出していった。なんかイメージ崩れるレベルでご機嫌かつハイテンションで、雨の中くるくる回りながら踊ってる。

元々水辺で暮らしてたらしいし濡れるの好きなのかしら？

「みんなー！ 早くおいでよー！ 置いてっちゃうよー!？」

少し先をいくリリーが元気に手を振ってる。いやだからあんたそんなキヤラだった？

「リリー、あんまり遠くに行くでないぞー!」

「はい」

そして恋ちゃんとの会話はまるで姉妹みたいだ。なんか和……あれ？

雨粒が頬に触れた。さらに続いてポツポツと雨粒が落ちてくる。上を見上げるとフィロちゃんの雨避け魔法が雨を防ぎきれてないみ

たいで、いくらか雨粒が落ちてくる。と、見る間にその量は多くなつていった。

「あ……あれ？ す、すいません！ 今張り直しますね」

フィロちゃんは慌てた様子でもう一度雨避けの魔法を唱える。……けど雨粒の量は少しの間ましになっただけで、すぐにまた増えていく。

「フィロちゃん大丈夫？ 調子でも悪いの？」

「い、いえ。そんなこと……わきゃあ?!」

パチンと音を立てていきなりフィロちゃんの張っていた雨避け魔法が解けた。もろに雨が降り注ぐ。

「ちょ?! フィロちゃん?!」

「あ、あれ？ そんな……もう魔力が……ご、ごめんなさい！ 皆さん走ってください！」

結局、あたしたちはずぶ濡れになりながら走る事になった。

十

ひた、ひたと。雨煙の中、一つの人影が動く。

黒衣を纏ったその姿は闇そのものを纏ったようで、その姿は肩に背負った大鎌と合わせてさながら生者を狩るという死神のようだ。

「あーめ あーめ ふーれ ふーれ……なんだっけ？」

その雰囲気合わない明るい声で歌う。黒衣のフードから覗く顔は少年のものであった。金色の幼く、どこか危険な光を宿した瞳、その瞳は一つの小屋を映す。

ひた、ひた、とその小屋に近づく。少年はあごに手を当て、その小屋を見上げた。

「木造……植物だね。さうて、どうなるかな？」

楽しそうに笑い、少年は小屋の壁に手を触れた。

十五日目(2)

「うああ……」

小屋の中に飛び込んだあたしはそんな声を漏らした。
体中びっしょびしょ……うああ、下着まで濡れちゃってるし……。

「ごめんなさい……」

しゅんとフィロちゃんがうなだれた。一緒にしっぽと耳も下を向く。

「あ、いいいいいよ気にしないで。いつもいっぱい助けてもらってるんだし！」

「けど……」

伏せ目がちにフィロちゃんはあたしを見る。……ああもうやっぱりかわいい！ こういう表情もなかなか……。ああ……、頭などで慰めてあげたい……。

い、今ならいいよね？ 変じゃないよね？ おそろおそろ手を伸ばす。けど間にりゅう君が入ってきた。

「体調でも崩してるんじゃないか？ あまり無理するなよ？」

りゅう君はフィロちゃんのおでこに手を当てる。フィロちゃんは

「ひゃっ?!」って悲鳴を上げた。しつぽが跳ね上がる。

「……熱は無いけど顔が赤いな。腹減ってないか? 栄養がないと体温も上がらないからな」

「あ! い、いえ! 大丈夫です! お、お気遣いありがとうございます!」

「そうか? けど辛くなったらすぐ言えよ? それに今回のことは気にするな。濡れたことには誰も怒ってないし、むしろお前がしょげてたらみんな心配するんだ。いいな?」

「は、はい!」

フィロちゃんの顔が一気に明るくなった。しつぽもパタパタ元気に揺れてる。……りゅう君ずるい……。涼しい顔してそんな台詞吐かないでよ……。あなたはエロゲの主人公かっの。

フィロちゃんもそういうこと言ってもらうのに弱そうだし……あ、あなんかもうりゅう君を見上げる目が恋する乙女に……。くそう、一発ひっぱたいてやりたい……。

……あたしもりゅう君のことは好きだ(もちろん幼なじみとして)。けどやっぱこうやってフィロちゃんと絡んでるのを見るとちよつとイライラしてくるわけで……。

「はいはい女の子勢は着替えるからあんたは外でリリーとでも遊んで下さい」

「と? なんだよもこ姉?」

「いいから出た出た」

しっしっしと追い払うようにりゅう君を追い出した。フィロちゃんは少し不満そうにあたしを見ている。だつてさ、あいつ普通にフィロちゃんとフラグ乱立するんだもん。これ以上ほつといたらどうなるか。

「の、のう浅倉……」

恋ちゃんががおずおずと声をかけてきた。ん？ 何かな？ 恋ちゃんがこんな風に話すのは珍しい。

「その……わしも濡れたから……その……この前買ってもらった……服とし、しし下着をじゃな……」

ほほう？

これまで濡れようが汚れようがひたすらあたしが買ってきた洋服と下着を着るのは断固拒否してたのに。うふふふ、なんか最近どんだん女の子っぽくなってる。

その様子を見守るのが最近ちょっと楽しみなのよね。いつかフィロちゃんも巻き込んでいろんな服着せてみたい。

よしよし、どんな服がいいかな？ あまり派手なのは嫌がるだろうから地味めなので……。

「アイテム、取り出す」

……あれ？ また出ない。本当にどうしちゃったんだろあたし？

「アイテム取り出す。アイテム取り出す。アイテム取り出す。アイテム取り出す。っと、出た出たってあれ？」

出てきたのは目的のやつとまったく違う服……着物なんだけど裾が短くて袖なんかにもフリルが付いた白い和ゴスだった。前の町でなぜか有った　　というかたぶん白マキナの好みで作ったんだろうコスプレ専門店を買ったやつだ。いや、やたらめったら安かったのよ。

あくまでも安かったからいっばい買ったわけで、別にフィロちゃん達にコスプレさせようとか考えてた訳じゃない。うん。まあ念のために二人の体に合わせたやつばっか買ったけど。

和ゴスの服を広げる。ベースは着物だけどふりふりの付いた長い袖に明るい花模様。至るところに当然のようにフリルが付いてる。そして一番ハードル高いのは下半身の方だ。なんか……花が開くような形状のスカートでやっぱりフリル完備。しかもこの長さだと……ちよつと動いたら見えちゃいそうね。さすがにこれは酷いか。

「ごめんね？　なんか違うの出ちゃった。すぐに別のに……」「……これだよ」「……」

……え？

「……これで……よいと言っておる……」

恋ちゃんは軽く目を潤ませながら和ゴスを掴むんだ。ふるふると手が震えている。え？　いやマジで？　なんでいきなり？　なんかの罰ゲーム？

「ど、どつしたの恋ちゃん？ 普段ならどつという服絶対着ないのに」

「……練習……しよつかと……」

「練習？」

「その……普通おなじの女子はどついう華やかな服が好きなんじゃろ？
じゃから……少しは慣れようかと……」

いやいや間違ってるわよその認識？！ いやそりゃ確かにかわいいとは思っけど少なくともこれを着る勇氣はあたしにはないよ？！
……恋ちゃんの和ゴス姿……。

「レンさん？ その認識はちょっと……」 「フィロちゃんストップ
！！」

フィロちゃんの口をふさいだ。だって見たい。是非とも見たい！
恋ちゃんの和ゴス姿！！ このチャンス逃したらたぶんもうチャンス無いもん！！

「うんうんやっぱり女の子はフリルとか付いたかわいい服が似合う
よね！ じゃあ恋ちゃんもさっそくやってみよう！ 頑張って！」

「う……うむ」

恋ちゃんは帯を緩めた。はだけた着物の間から覗く白い肌。なん
というか……女のあたしでもむしゃぶり付きたくなるような滑らかな
肌……あ？！ いや？！ 別にあたしはそこまで変態な訳じゃない
よ？！ ただ……恋ちゃんにはなんか思わずそんなことを思わせる
色気があるんだ。

もちろんまだ子供だから、前の町ではさすがに言い寄られたりはしなかったけど、ロリコンの気が有る人や同年代の子なら問答無用で一目惚れさせそうなぐらいの魅力が有る。大きくなったら魔性の女とかになるかも……。

「の、のう浅倉……そ、そんなに見んでもらえんか？ 着替えずらい……」

「あ。ごめんね？ じゃあ向こう向いてるから」

恋ちゃんに背中を向ける。……ん？ 振り向いた瞬間、視界の端に人影が映った気がした……けど気のせいかな。

後ろでは恋ちゃんが着替える衣擦れの音が聞こえる。着物が床に落ちる音、下着を下ろして……や、ヤバい、なんかドキドキする……。

ちよつと時間が経って着替え終わったらしい。衣擦れの音が止んだ。恋ちゃんが深呼吸する音が聞こえた。

「……よいぞ」

言われて振り返って……言葉を失った。白い和ゴスの衣装に身を包んだ恋ちゃん。顔を真っ赤にして、短いスカートを恥ずかしそうに抑えながら、子犬みたいな潤んだ目であたしを見上げてくる。

なんだろう……その……何て言うか、初めて“萌え”っていうのを知った時の気持ちを思い出したというか……。えっと……うん。

「ま、股下がすーすーするのう……。ど、どこか……変かの……？」

不安そうにあたしを見上げてくる恋ちゃん。ヤバい、萌え死ぬ。とにかく写メを一枚。カシヤツ。画像を保護フォルダへ保存。あ、念のためSDカードにもコピーしとこ。よしもう一枚。

「な?! ころら?! 写真撮るでない?!」

「やだ! これで撮るななんて生殺しだよ?! フィロちゃん! 恋ちゃん押さえてて!」

「え、ええ?!」

「っ?! ちょ、ちょっと待て! 今外で何か物音が……!」

「そんなこと言ってごまかそうとしてもむ……あれ?」

がくん、と。急に重力が強くなった気がした。

……なんか昇りのエレベーターに乗ってる時みたいな感じ。いつたいなに……「やっと終わり? よかった、さつきはいきなり着替え始めたから出ていくタイミングに困ってたんだ」

天井から明るい、男の子の声が降ってきた。何が起きたか確認する間もなく、ふわりとあたし達の前に真っ黒な服を着た男の子が上から降ってきた。その手に握られてたのは……真っ黒な大鎌。

「お姉ちゃん達は竜人じゃないけど……ま、いいか」

につこりと晴れやかに笑い、踊るように大鎌が薙ぎ払われた。

十五日目(3)

side 神崎 竜斗

「リュウトー！　いくよー！」

大雨の中、雨の音に負けないように大きな声でリリーは叫ぶと、俺に向けて水の球を投げた。受け止めるとグニヨンとしたゼラチンみたいな感触。手の上でプルプル震えている。

これはリリーが遊びのために水を魔法で固めたやつだ。

リリーは元気に両手を振っている。今まではおとなしいやつだと思ってたけど、こういう面も合ってたんだな。……いや、母親が死んだってのが有ったからな……。

これだけ元気になったことのきっかけは師匠の「母親になってやる」発言からだろう。

あのあと師匠とリリーでしばらく話してたんだが、師匠は本当に子供ができたみたいだなんて何だかんだで喜んでたし、リリーの方もそうやって“子供”として扱ってもらえることが嬉しかったらしくすんなり仲良くなれた。

それに加えてこの雨だ。元々水辺で暮らしていたリリーにとって、肌が乾燥するっていうのはかなりのストレスらしい。だからこうやって雨に濡れるっていうのはリリーにとってとても気持ちのいいことだそう。それでこんなにテンションが上がっているんだろう。

水の球を投げる。リリーはそれを取って投げ返す。っと、こいつ意外に肩いいな。キャッチもうまいしもう少し強めにいくか。水の球を握り直してさっきより強めに投げた。

「わっ……！ じゃあ、ぼくもいくよ！」

さらに強い球が返ってきた。

意外にやるなこいつ……こつちもさらに強く投げる。けどリリーは片手であっさりそれを取った。そして返ってきた球はさっきよりさらに強い球だった。

これは……男として引けない。さらに強くぶん投げる。

竜人になって腕力上がったのもあって、たぶん150kmぐらいは出てると思う。

けどリリーはそれをすんなり受け止めた。なんか……軽く悔しい。

「ところで、リュウト？ ちょっと、気になったんだけど……」

「どうした？」

俺のと同じぐらいの勢いの球が返ってくる。受け止めた手がじんじんする。

「リュウト、過守護っていう能力で雨を防いでるんだよね？」

「ん？ ああ、そうみたいだな」

大きく振りかぶって全力投球。水の球が降り注ぐ雨粒を吹っ飛ばしてリリーに向けて飛んでいく。けどリリーはやはりあっさりとそ

れを受け止めた。

「じゃあ、なんでこの水の球は防がれないの？」

豪速球が返ってくる。ヤバい。マジで痛い。グローブが欲しい。

「そりゃあ危険じゃないからだろ」

ちよつと微妙な気もするがたぶんそうだ。過守護の効果は自分やもこ姉にとつての脅威を無効化する能力。ただ、何でもかんでも防ぐって訳でもなくて、師匠のツッコミとかは普通に通る。どうやら過守護の脅威って言うのは体に何らかの悪影響が出るレベルからしい。

ただし相手に敵意とか害意が有った場合は別みたく、旅の間に出たむちゃくちや弱っちいモンスターの攻撃なんかはちゃんと防いだ。

球を投げ返す。まあ今考えたのはだいたいもこ姉が分析したことなんだけどな。もこ姉は本当にこういうの得意だ。

「じゃあ、なんで雨は防いじゃうの？　こんなに気持ちいいのに」

「そりゃあ、雨なんて浴びてたら風邪とか引くからだろ」

「竜人、風邪なんて引かないよ？」

リリーは首を傾げながら球を返してくる。

……そういや水浴びする時とか、師匠はかなり寒そうにしてたけど俺は特に何も感じなかったな。いやけどあれは自分からやってるから………ん？　あれ？　なんか引つ掛かるな。

球を投げ返す。

ああくそ、もこ姉ならもつとすんなり考えられるんだろうに……
あゝ、水浴びの水は防がないのに雨は防いで別に体に影響は無くて……
つぶつ?!

リリーが投げた水の球が顔面に直撃した。いってえ……。

「リュ、リュウト……だ、大丈夫……!？」

「お……おう……」

リリーが心配そうに駆け寄って来る。これは……かなり恥ずかしい……。

けど、過守護で今のを防げなかった？ まあ確かに痛かったけど、脅威かって言われると微妙だしリリーにも悪意は無い。……
となると、ただ雨に濡れるのが脅威つてのは無理があるか？

そうなると……誰かが俺に害意を持って雨を降らしたとか……この雨自体がなんかヤバいとかか？ ……そういやフィロもなんか様子が変わったような……。

一応後でもこ姉に相談してみるか。

そう思ってもこ姉達のいる小屋の方を見た瞬間、地面が軋むような音が響いた。なんだ？ なんか下から……ってうお?!

いきなり地面が何かに押し上げられた。とつさに飛び下がって距離を取って……なんだよこれ?!

「き……木い?!」

小屋の下から大木がものすごい勢いで生えてきている。それは小屋を巻き込んでるか上空に押し上げてしまった。いや?! 訳わかんねえぞ?! 木とは言ってもちよつとしたビル並の太さと高さ

があつて……こゝこの世界ってこんなあつという間に育つ木があるのか……？

「リュウト……」

リリーが俺の腕を掴んだ。なんか……怯えてる？ さっきまでの元気の良さが無くなっている。

「気を、つけて……なにか、来る」

「来る？」

ふわりと羽根が落ちてきた。真っ白な、綺麗な羽根。見上げるとそこにそいつはいた。

「天……使……？」

雨の中、そいつは宙に立っていた。よく本で見る白い天使の翼。風もないのに法衣と長い金髪がはためいている。

「教皇様の名の元に、貴殿方に裁きを下しに参りました」

抑揚の無い声でそいつは言った。氷みtainな白銀の瞳が俺達を捉えた。ヤバい。目が合った瞬間、それだけで背筋が寒くなった。なんかわかんないがこいつは……絶対ヤバい！！

天使は何も無い空間から弓と矢を取り出すと、それを俺達に向けた。

「我は“光の教団” No.4 メリウス。悪しき存在よ、死を享受

しなさい。そして悔い改めなさい」

「確かに死にたくなるぐらいヤバいことはしたけど本当に死ぬつもりはねえぞ！」

メリウスと名乗った天使の射った矢を拳で弾く。俺の拳に触れる直前に矢は勢いを失って簡単に弾くことができた。

これが過守護の効果か……これなら！

「リリー！ 俺の後ろからあいつを狙え！ 矢は俺が弾く！」

「う、うん……」

リリーを後ろに回し飛んでくる矢を弾き飛ばす。メリウスは少し不満そうな表情で矢を連射し続ける。けどこの程度なら楽勝だ。師匠との修行と比べれば問題ない。

最初に感じた嫌な感じは気のせいだったか？

「リリー！」

「うん……！ いくよ……！」

リリーが聞きなれない言語で何かを叫ぶと周りの雨が集まり、四頭の水の竜へ変わった。

それが一斉にメリウスに向かい、一気に炸裂した。空気が震える程の衝撃。辺りを水煙が包んだ。

「やったか！？」

「……だめ」

突風が吹いた。それが一気に水煙を晴らし、メリウスが姿を現す。
……無傷の姿で。

「……この雨……なるほど、道理で矢に魔力が込められなかったわけです」

メリウスは雨に手をかざし、ため息をついた。

「致し方ありません。帰りの魔力を残しておきたかったのですが、早めに終わらせましょう」

メリウスは空に手をかざした。その手の先にはギラギラとした光が集まっていく。ゾクリと鳥肌が立った。

まずい……！

これだ……俺が最初に感じた感覚は……！

「禁忌【極光の鎚】」

メリウスがそう呟いた瞬間、辺りが光に包まれた。

十五日目(4)

side 浅倉 もこ

「もこさん危ない!？」

「わっきゃあああ?!」

「叫んどらんでとつと逃げんか!」

「よそ見しないでこっち見てよ」

四人の声が入り交じる。地面に伏せたあたしの頭の上すれすれを突然現れた黒いシヨタつ子の大鎌が掠めていく。すぐに恋ちゃんが間に回り込んで大鎌を弾き返した。

な、なんなのよいきなり?! なんていきなりあんなシヨタに襲われてんの?! あたしなんかした?!

狭い小屋の中で大鎌と刀がぶつかって火花が散る。お願いだからこんな狭い小屋の中でチャンバラは……きやつ?! 目の前の床に大鎌が刺さって床板が砕け散った。と、とにかくここにいちや駄目だ。

「フィ、フィロちゃん生きてる?! 大丈夫!？」

「は、はい!」

「と、とにかく逃げよう！ ここヤバすぎる！」

ほふく前進で小屋の出口に向かう。武器がぶつかり合う火花があたしの方まで飛んでくる。

というかりゆう君達は何をやってんのよ！ こんだけ派手にやってるんだから助けに来なさいよ！

何とか扉までたどり着いて扉を開けた。

「……………は？」

扉を開けるとそこに地面が無かった。木……………そう木ね。うん、なんか小屋がやたらめつたら大きな木の上に移動してる。というか大雨が降って視界が悪いのもあるだろうけど地面、見えないんですけ
ど。

あ……………あはは……………い、今までゾンビやら幽霊やら見てきたもん。今さらこの程度で驚かないわよ？ え……………えっと……………と、とりあえずどうしよ……………。どこか降りれる場所は……………。

「も、もこさん？ どうかしたんですか？」

フィロちゃんがあたしの隣まで這ってきて扉の外を見下ろす。その時だった。

「いまだ」

黒ずくめのシヨタの声が響いた瞬間、いきなり小屋が横倒しにな

った。え?! ちょ……やつ?!?! 重力に引かれて体が落ちる。

「なん……?!」「もこさん?!」

あたしが、フィロちゃんが、恋ちゃんが扉から空中に投げ出された。や、やだうそ……こんな高さから落ちたら……。痛っ?!

何かがあたしの腕に絡み付いた。腕が引っ張られてガクンと空中で宙吊りになる。肩が抜けそうなくらい痛い。

「フィロちゃん……! 恋ちゃん……!」

二人はそのまま落ちていつて見えなくなってしまった。……見上げるとあたしの腕にはロープが絡み付いていた。まるで生きてるみたいに自分からあたしの腕に巻き付いてくる。そしてそれを投げたのは……さっきの子だ。

横倒しになった小屋の出入口からあたしを引っ張り上げていく。

助けた? ……いや、いきなり襲ってくるような相手だもん。何か企んでると思った方がいい。

なら引き上げた瞬間……よね。大きく深呼吸。引き上げた瞬間に持つてる剣全部アイテムボックスから出して串刺しにしてやる。相手が子供だろうが酷いことされるぐらいならあたしはやるよ。うん……今なら……できる。

「さして、暴れないでよお姉ちゃん」

小屋の中に引っ張り上げられた。 今だ!!

「アイテム！ 取り出す！」

……………え？

剣が出ない。そんな！？ こんな時に？！

「お姉ちゃん、能力使おうとしてもたぶんもう無理だよ。あんだけ雨、浴びたもん」

首筋に大鎌を当てられた。黒い刃の冷たい感触に息を飲んだ。こ、これもし横に振られたら……………背筋がぞつとした。

……………怖がっちゃ駄目だ。パニックっちゃ駄目だ。考えないと。

パニックつたらろくなことになるのは嫌ってほど経験してる。ほら、ゲームならこんなピンチでもわくわくしてやってたじゃない。きつと……………きつと攻略法がある。

こいつはさつき『雨を浴びたから能力が使えない』って言った。そしてあたしやフィロちゃんの異変……………たぶんこの雨には能力や魔法を使えなくする効果があるんじゃないかしら。

そうなるとあの雨を降らしたのはこの子？ なんにせよそんなことが出来るなら相当強いんだと思う。天候を変えられるような人って大抵強キャラだし。

「ふーん、けつこつ落ち着いてるねお姉ちゃん。こつこつこの慣れてるの？」

「……………まあそんなところかしらね」

そうよ。今までだって黒いマキナに殺されたりゾンビに襲われたりしてきたんだもん。それに比べたらこれぐらいどうってことない。

少なくともあたしを助けたんだから殺す気は無いだろっし人間だし子供だし。ちょっとかわいいし。

「ま、いいんだけどさ。とりあえずお姉ちゃんの名前教えてくれな
い？ フルネームで。あ、嘘言ったら首はねるから」

さらつと怖いこと言わないでよ……。

「浅倉……もこ」

「お？ その名前やっぱプレイヤーだね？ 変な能力持ってるみたいだったからもしかしたらと思ったけど」

「っ？！ プレイヤーのこと知ってるってことはこいつもプレイヤー？！
けどそれならなんでこんなこと……」

「あ、ちなみに僕はイシュトって言うんだ。……たぶんね」

「たぶん？」

「うーん、元の世界の記憶がだいぶ曖昧でさー。PKってほしいところらしいんだけど」

血の気が引いた。そんな……PK……プレイヤーキラー……。二回目の試練のゲイツと同じ……。いやけど、PKのルールは試練の度に“誰かを殺す”だったはず。ゲイツはそれに関係なく殺して

たみたいだけどあんなぶつ飛んだ快樂殺人者がそうそういるもんか。だからきつと……大丈夫。

無理やりな思考で自分を落ち着かせる。

「んー。まあいいや。さつさとやること済ませちゃおう」

イシユトはにっこり笑った。

「服、脱いでくれない？ 全部」

え？

言葉の意味を理解するのに少しかかった。

脱ぐ？ え？ ええっ？！ そ、そういう目的？！ え？！ そ、そんな？！ あ、あ、あたしそんな……。い、いやそりゃガチムチとかキモ男にやられるよりは全然マシだけどそんな！？

心臓の音が一気に早くなった。

な………なんでこんなことに………い………いや、そりゃ………かわいいシヨタつ子とHなことするとか妄想したこと無い訳じゃないけどさ………だ、だって、その………さ、さすがに………。

痛っ？！

大鎌の刃があたしの首筋を引っ掻いた。え？！ そ、そっち

系のプレイ?! い、いやそりゃあたしどっちかというとなMだけど
そんないきなりは……。

イシュトは大鎌に付いたあたしの血を指で拭くと、それを口に含
んだ。

「スキル【即興劇】発動」

ふっと、部屋の中の空気が変わった。

十五日目(5)

side 神崎 竜斗

地面に大きく空いたクレーター。その底で俺は膝をついていた。光の塊を叩き付けられた地面はシュウシュウと煙を上げている。

「ぐ……痛っ」

ヤバイ……な、今は……身体中、バラバラになりそうだ……過
守護無しだったら本当にバラバラだったかも……。けど、骨まで
は………いってない。

顔を上げて、メリウスを睨んだ。

「なるほど、報告通り強力な防御能力を持っているようですね。あの攻撃に耐えますか」

メリウスは気を失ったりリリーを抱えて空中に立っていた。冷たい目で俺を見下ろし、薄い笑みを浮かべている。

「竜人つてのはだいぶしぶといみたいだからな。……それより、その子下ろしたらどうだ？ 戦いずらいだろ？」

「ご心配には及びません。もはやあなたなど私の相手にはなりませんからね。それに今さっき命令が入りました。……本来なら貴殿方に裁きを下し、この世から消えてもらうはずでしたが、この子は連

れ帰ることになりました。命は取りませんのでご安心なさい」

「……………どういうことだ？」

教皇……………そいつがマキナが言っただけの光の教団のトップか。たしかマキナは、強力な人心掌握の能力を持っていてそれで周りの人間を操ってるって……………

「貴殿方は光栄に思うべきです。本来ならここで死に行く運命であったのに、教皇様はこの子を教団に連れ帰るように仰い、貴方は捨て置くように仰られました。教皇様に気にかけてもらえるなど名譽の極みですよ？」

「……………だからなんで殺そうとしていたりリリーを連れて行くって聞いてんだよ。教皇っていろいろの目的はなんだ？」

「教皇様は今回、私の眼を通してこの戦いの様子をご覧になっていたのですが、このリリーという竜人がよく見ると可愛らしく気に入ったのでペットにしたい……………」と

は？

ちよつと待てよ、なんだその理由。リリーをペットなんて……………いや、それは置いといても仮にも教皇なんて呼ばれてるやつが『ペットにするから連れて帰れ』しかも竜人の俺を放っておいて？

無茶苦茶にも程がある。

「お前、その命令なんとも思わないのか？」

「何がですか？」

「ペットとか、俺を放っておけとかだよ！ 特に……俺は違うけど、黒竜の竜人って危険な種族なんだろう？ それをそんな理由で野放しにしているのか？」

メリウスは不思議そうに首を傾げる。その仕草に俺は嫌なものを感じた。

「そんな理由もなにも、教皇様の命令に従うのは当然でしょう。何がおかしいというのですか？」

教皇ってやつの人心掌握能力……思ったよりヤバいものなのかもしれない。

「さて、それではそろそろおいとましましょうか。あまり教皇様を待たせるわけにもいきませんので」

メリウスは翼を広げた。まずい！ 飛ばれたりしたら追いかけるのはほとんど絶望的だ。

拳を握り、一気に踏み込んだ。

メリウスが何かを呟くと見えない壁のようなものに拳を止められた。拳との間でバリバリと火花が散る。

ふと、メリウスは視線を上にした。表情が苦々しく歪む。

「……彼女ら、受け止めなければ怪我ではすみませんよ？」

「あん?!」

その瞬間には何を言っているのかわからなかった。だがずっと上

の方からフィロの悲鳴が聞こえてハツとして空を見上げた。

「なっ?!」

師匠とフィロの二人が落ちてくる。

嘘だろ?! これは……ヤバい!!

踵を返してすぐにそちらに走った。まずい! 師匠の方は落ちながら体を捻って着地の体勢を取っている。

だがフィロはそれができてない。まっ逆さまに地面に向かって落ちていく。

頭が潰れたフィロの姿が脳裏をよぎって鳥肌が立った。間に合え! 思い切り地面を蹴る。

が、ぬかるんだ地面に足を取られてしまった。思わず息を呑んだ。フィロに地面が迫る。

「神埼!!」

空中で師匠がフィロの足を掴んだ。そして思い切りフィロを俺に向けてぶん投げた。

フィロの体を受け止める。師匠は体勢を崩した状態で地面に落ちた。何かが碎ける音がした。

「……師匠?」

……いつもならすぐに返ってくる返事がない。

「お見事です。どうにか助かりましたね。……まあ、やはり一人は無事ではすまなかったようですが」

背後からの声。振り返るとメリウスがリリーを抱き抱えたまま、空中に浮かんでいた。

「それでは私はここで。ごきげんよう、黒竜の竜人よ」

「ま、待て！」

止める間もなく、メリウスは空高く飛んでいってしまった。

十五日目(6)(前書き)

ノクターンにてセルフパロディ作品『神さまとゲーム脳とエロゲ主人公の物語』を初めてみた。

ちよww アクセス数本家涙目ww

十五日目(6)

「師匠！ 師匠！」

返事が無い。抱き起こして見ても目を閉じたまま開こうとしない。おい……嘘だろ……？

胸に耳を当てる。……トクントクンと心臓を打つ音が聞こえて少しだけ胸を撫で下ろした。

左腕と左足が風船みたいに酷く腫れ上がっている。これは折れている……いや、砕けてるか？ とにかく素人目でもわかるくらい酷い。「レン……さん……」

ふらふらとフィロが近付いて来る。師匠を見てハッと口元を抑えた。目から涙が溢れ出す。

「私の……せいで……」

「そついうのは後だ！ もこ姉は!？」

「そ、それが……まだ上に……い、いきなり大きな鎌を持った男の子が襲ってきて！ それで……」

何なんだよこの展開は?! 大きな鎌を持った男の子?! そいつも光の教団つてのの仲間か?! 小屋を押し上げた木を見上

げる、上の方は雨で霞がかっていて見えない。匂いも……駄目か。
ん？

木の上の方から何か落ちてくる。……悲鳴？

「きゃああああ！？ 誰でもいいから受け止めてええええ！！」

もこ姉？！

落ちてきたのはもこ姉だった。ま、待てよおい！？ すぐにもこ姉の落下点に回り込む。いけるか？

受け止めた瞬間、過守護の能力がもこ姉の衝撃を和らげるのを感じた。がちりと抱え込んでしりもちを付いた。

ひくひくと顔をひきつらせながらもこ姉は俺を見上げる。

「あ……あり……ありがとうりゆうくん……し、死ぬかと思った……」

「もこ姉？！ 大丈夫か？ 大きな鎌を持ったやつに襲われたって」

「え？ あ、ああ、うん。大丈夫だよ。隙を突いて飛び降りてきたの」

もこ姉は立ち上がると服に付いた泥を払う。メリウスの攻撃であったクレーターや折れた矢を見回し、そして師匠に目を止めてハッと息を飲んだ。

「れ、恋ちゃん？！ 大丈夫？！」

わたわたと師匠に駆け寄って行った。「ヒール！ ……ああもう

！ 魔力切れてる！ アイテム取り出す！ 包帯！ フィロちゃん
そっち縛って！」そうやって師匠の手当てをするもこ姉とフィロか
ら視線を外し、メリウスが飛び去った空を見上げる。

……………くそ……………くそおっ！！

思い切り地面を殴り付けた。

姿はもう見えない。匂いも完全に消えてて追いかけることもでき
ない。くそおっ！ さっきまで楽しそうにに笑ってたのに！ 何で
だよくそおっ！！

「りゅう君？」

もこ姉は師匠を手当てしながらこちらを向いた。その間も師匠を
手当てする手は止めない。ゲーム脳の効果で“手当て”もほとんど
無意識でできるらしい。

「何があったか話してくれない？ ……リリーはどこ？」

「ああ……………」

俺が一通り説明するともこ姉は呆然としたように口を開けて
いた。

「……………え？ 光の教団？ あの、マネキン軍団が言ってた？」

「ああ。リリーを拐ったメリウスってやつが口振りからするとすぐ
に殺されたりはしないだろうけど、追いかけるのは……………もう……………」

「大丈夫」

もこ姉は確信を持ったように言った。俺が言葉を返す前に町で買った地図を取り出すと、その一点を鉛筆でグリグリと塗り潰す。

「もこ姉？」

「光の教団つてのわね。世界のあちこちに転送用の魔法陣を隠して、それを使った転送魔法で移動するの。この近くならさつき鉛筆で印付けた場所ね。で、転送魔法つてのはかなりの魔力を使って準備しないと発動できない上に時空間が弛む時間帯……つまり日付が変わる前後30分しか使えないの。だからその時までには追い付いて襲撃を掛ければ間に合うってわけ。向こうも魔力減ってるだろうしあまり……」 「ちょ、ちょっと待ってくれもこ姉?!」

俺が話を止めるともこ姉は不満そうに顔を上げた。

「何よ？ 時間無いんだから質問は後にしてよ」

「いや！ なんでそんな魔法陣やらなんやらのこと知ってるんだよ？ 俺 初耳だぞ？」

俺がそう言うともこ姉はきょとんと首を傾げた。

「……あれ？ なんであたしこんなこと知ってるの？」

「いや、だから俺に聞くなよ」

「フィロちゃん？」

「いえ、私も今のは初耳ですけど……」

もこ姉はもう一度首を傾げる。

「まあ、知ってるならそれはそれでいいじゃない。そんなことよりりゅう君手伝って、恋ちゃんが休めるようにテント準備して……リリー助けに行くわよ！」

そうだ。今はリリーを助ける方が優先だ。もこ姉のことも今はいい。

……なんだ？ この違和感……？「りゅうくん！ ボーツとしてないでテントそっちの地面に固定して！ 力有るのあんたしかいなんだから！」

「お、おう」

あわててもこ姉の手伝いに走る。

テントの組み立てをもこ姉を手伝って地面に固定する。

「りゅう君……そっち地面に打ち付けて……」

もこ姉が泣いていた。

正直少し意外だった。二回目の試練の辺りから俺や師匠以上に怪我とかに対しては動じなくなってたのに。

「……泣くなよもこ姉」

「だって恋ちゃんが……恋ちゃんが……」

雨に濡れながら涙声のままテントを組み立てるもこ姉。……普段なら【ゲーム脳】の効果だったので誰よりも早くテントを組み立てていたのにひどく手付きがたどどしい。俺の半分も進んでない。

「ねえりゅう君……恋ちゃん大丈夫だよね……」

ぐしぐしと涙を拭うもこ姉。……なんだろうか。まるで最初の頃のもこ姉に戻っていったみたい……。……。

十五日目(7)(前書き)

昨日の晩に投稿するつもりがいつの間にか爆睡してたorz
疲れてるなあ……

十五日目（7）

俺ともこ姉はオオイグで平原を駆け抜けて、転送魔法陣つていうのがあるつていう森に入った。かなり深い森で、生い茂る木が空を覆い隠す程だ。地面もびっしりと苔に覆われている。たぶんめつたに人が来ないんだらう。

ここからは体の大きいオオイグには乗っていけそうにない。降りるしかなさそうだ。

オオイグから飛び降りて匂いと耳で周りの安全を確認する。……大丈夫。それにほんの微かにリリーの匂いを感じた。もこ姉の言ったこと、間違つてなかったみたいだ。

「もこ姉、ほら降りれるか？」

「ん。よつと」

もこ姉に手を貸して降ろしてやる。

フィロと師匠は置いてきた。師匠は動かしたらまずそうな状態だったし、手当てや気を失ってる師匠の護衛にはそれなりに強くて索敵もできるフィロが適任だったからだ。……まあもこ姉がそう決めたんだけどな。

もこ姉はキヨロキヨロと周りを見回して、地図を広げる。

「転送魔法陣はここから東に300mつてところね。言った通り、

日付が変わる前後30分までは向こうもどこかに隠れて魔力の回復に集中してると思うから、こっちも隠れてるわよ。あたしも魔力回復しときたいし先に見つかったらほぼ終わりだからね。作戦でも考えてましょ」

「相手の場所は探さなくて大丈夫なのか？」

「魔法陣の場所は知ってるし、使おうと思って即使えるほど転送魔法は易しくないよ。こっちは匂いである程度索敵もできるしね。それよりは下手に動いて見つかることの方が怖いわ」

「……おう」

適当な岩影に腰をおろす。地面の苔がまるでクッションみたいだ。力を抜いて、ふつと息を吐いた。

「……なんなんだろうかこの気持ちは。」

「リリーを助けなきゃいけないのに……、気が進まない？ リリーのことは好きだ。それは間違いない。助けてやりたいと思ってる。」

「……なのに、気乗りしない。これは……戦うのを嫌がってるのか俺？」

自分の腕を掴むとズキリと痛んだ。メリウスの攻撃でまだ身体中が痛い。

「……正直あまり動きたくないしメリウスと戦いたくない……。」

「アイテム取り出す。水筒。……りゅう君も飲む？」

「ああ、サンキュ」

もこ姉はストンと隣に腰を下ろすと、取り出した水筒から水を一口飲んでそれを俺に渡す。……………これさっきもこ姉が口付けたよな？ いいのかこれ？

「りゅう君さ、怖いんでしょ？」

「は？」

もこ姉は身を乗り出すようにして俺を見ていた。ちょ、ちょっと近くないか？ それになんでききなり？

「りゅう君の過守護の能力、以前よりは心への影響減ってるってマキナも言ってたでしょ？ だからきつと、そういう怖いとかの感情が戻ってきたのよ。少し前までのりゅう君、自分が怪我するのも全然気にしないから見ててヒヤヒヤしたもん。けど今はちゃんと怪我するの怖がってるよね？ さっき傷の手当てしてる時も痛そうな顔してたし」

確かに俺、ちょっと前まで怪我とか全然気にしてなかった。思い出して納得した。何も気にしないで素手で刃物受け止めたりしてたし、もこ姉さえ護れたらそれでいいって思ってた。

けど今同じようにできるかって聞かれたら……………自信が無い。……………師匠が言ってた『今のままじゃもうもこ姉を護れない』っていうの、こういうことか？ だとしたら師匠エスパーかなんかかもな。いや、今気付いたもこ姉も相当だ。俺自身気付かなかったのに。

「よくわかったなもこ姉、今日は……………なんか凄くないか？ 転送魔法陣ってののにも妙に詳しいし。本当にどこで知ったんだ？」

俺がそう言うともこ姉は渋い顔をして顎に手を当てた。

「あたしも転送魔法陣のことは本当になんてかわかんないんだけど、なぜか知ってるのよね。どこで聞いたのかしら？ りゅう君に気付いたのは……たぶんスキルのゲーム脳が弱ってるせいかしら」

「ゲーム脳が弱ってる？」

「そ、黒い服着た男の子が襲ってきたって話したでしょ？ その子が降らした雨で能力を封じられたってのも。だからりゅう君のことにも気付けたし雰囲気も違うんだと思う」

「……どういう意味だ？」

もこ姉は「うーん」と首をひねる。なんて説明するか考えてるみたいだ。

「ゲーム脳の効果はいろんな行動をゲームみたいにする事。食事とかよく食べさせてもらってるから知ってるよね。でね、行動だけじゃなくて考え方もってことみたい。……要するに」

もこ姉はおもむろにボウガンを取り出した。矢をつがえてその照準をすぐ近くの木に……いや、木に止まっている鳥に向けた。

ビュンと矢が空気を切り裂く音。矢は鳥に突き刺さり、そのまま地面に落ちた。矢が刺さった鳥は地面の上でピクピク震えている。

「あ……」

「あたしは今、あの鳥を射っても何も感じなかった。せいぜい『当

たつた当たつた〜』ってぐらいね。つまりそういうこと」

もこ姉はボウガンをしまいながら言った。どことなく自嘲気味に笑う。

「これまでも……二回目の試練でゲイツを射つてからはそう、なんか吹っ切れちゃったみたいだね。モンスターなんかは普通に殺してきたし、殺しても何にも感じない。……けどあたしは、元の世界にいた頃はそういうの全然駄目で、部屋に現れたゴキブリ叩き潰すこともできなかつたんだから。

けどゲームだつたら特に気にせず殺せる。

たぶんだけど、あたしは今、知らない相手ならゲーム感覚で人も殺せる。そういう能力みたいなんだ、あたしのゲーム脳」

「な……？」

「あ！ ああもちろんりゅう君達は別だよ！ あたしみんなのこ」と大好きだし、ゲームでも好きなキャラが死んだらマジ泣きしちゃうししばらく鬱になるし」

もこ姉はあわててそう言うところほんと咳払いした。

真面目な表情で俺を見る。

「けどもし、あたしが何かしそうになつたらりゅう君が止めてね？ 約束だよ？ ……今だからそう思うんだけどちょっとだけ怖いんだ、自分が何かやらないか」

もこ姉は俺が答えるより早く俺の手を取って小指を絡めた。

「んじゃ、ウソついたら針千本吞みますって、よろしくね」

……もこ姉と再会した時、昔とずいぶん変わったと思った。

けど、このもこ姉は俺の覚えてるもこ姉とまったく同じだ。明るくて、ちょっと強引で……俺が好きだった……。

そうか、思い出した。俺がもこ姉を護りたいって思った理由。俺はもこ姉のことが好きだったんだ。小学生の時からずっとずっと。

その気持ちについてはまだ思い出せない。今ももこ姉のことは好きだ、けどたぶん以前の好きって気持ちとは違っただろう。

……師匠が言った『早く思い出せ』ってのはこれか。……本当にエスパーだな師匠。……思い出せ……か。

もこ姉に聞こえないぐらい小さくため息をついて水筒の水を飲んだ。

「……………あ、間接キス……………」
「グブツ?!」

盛大にむせた。

side
フィロ

傷の手当て、こんなところでしょうか？

もこさんの残して言ったテントの中、私はレンさんの腕を添え木に固定する。

痛み止めのお薬が効いたみたいですね。呼吸もだいぶ落ち着いてますしもう大丈夫かな？

レンさんの額に浮かんだ汗を拭う。……こんな小さな体で、あんな無茶して……。……無茶させたのは私ですね。

……もし私が、あの黒づくめの男の子を倒しちゃっていたらこんなことにならなかつたんでしょうか……。

い、いけない！ と、とにかく今はレンさんの手当てと護衛に全力を尽くしましょう！

……リュウトさん達は無事でしょうか？

テントの天井を見上げながらため息。本当は一緒に行きたかった、待つてるだけは辛いです。

……レンさんを動かせる状況でもありませんでしたし、レンさんの怪我の原因を作った私がこんなこと考えちゃ駄目ですよね。

……手当てに集中してたんで気付きませんでしたけど、雨上がってますね。確かもこさんはあの雨が私の魔力を打ち消してたって……。

「……【ファイア】」

ポンと手のひらに火が灯った。多少は魔力も回復してるみたいです。

それならテントの周りに結界でも張って薬草でも探しましょうか？ たしかこの地域には腫れに良く効く薬草があるはず……。

プルルルル プルルルル

「きゃっ?!」

な、なんですか?! え、えと……レンさんの荷物の中で何か鳴って……それに震えてる？

恐々とレンさんの荷物から“それ”を取り出してみる。

これつてもこさん達が使ってた“ケータイ”っていう道具ですよね？ 遠くの人と話せる魔法具らしいですけど……

『もしもし、おハロー。聞っこえるフィロっち?』

「きゃっ?!」

ケータイから声が?! こ、声使りの魔法意外でこんなことできるなんて……。しかも私の名前？

「あ、あの。どちら様でしょうか?」

『あ、いたいた。私、黄色のマキナ。短い付き合いかもしれないけどよろしくね~』

「は、はあ」

マキナ？ ……もっさん達が度々口にしてた名前だったと思いま
すけど……

『とりあえず。フィロっち、見事新規参戦キャラに選ばれたよ。
おめでと〜パフパフ〜』

「は……はい？」

『詳しいことは会場だね。……ああ、それとちよつと耳すましてみ
て。このままじゃ一人あぶれちゃうからね。それじゃ！』

プッッ

………終わりでしょうか？ なんか言いたいことだけ言っ
ていった
ような……。

耳をすませ？

………え

ん？ 今何か聞こえました？

………た………けて………

人の声？ 魔力を耳に集中して聴覚を強化してみる。なんか上から……あの、小屋を押し上げた樹の上から聞こえたような気がしましたが……。

……助けてえ〜！ りゅうくん！ フィロちゃん！ 恋ちや〜ん！

あ、あれ？ これって……もじさんの声？

十五日目(8)

side 神崎 竜斗

時刻は11時38分。俺ともこ姉は樹の影から魔法陣の様子を伺っていた。

森の中の開けた場所に描かれた星みたいな模様(もこ姉は“ろくぼうせい”とか言ってた)

暗闇の中で薄ぼんやりと光っていて、光の粉というか……何かの粒子が立ち上っている。

「……来たぞ」

俺ともこ姉は木の影に体を隠した。

森の木々の間から、メリウスは音もなく空中を滑るように移動して魔法陣の中央まで行く。そのすぐ後ろをでっかい鳥かごみみたいなのがついていく。中にいるのは……リリーだ。

11時51分。魔法陣の星とその周りのうねうねした文字が回転しだす。メリウスは地面に手を当てて何かの呪文を唱え始めた。

「りゅう君、準備いい？」

「なあ……、やっぱり俺が……」

「大丈夫だって、そもそもりゅう君遠距離攻撃できないでしょ？
この作戦は遠距離攻撃できる方がいいのよ」

もこ姉が考えた作戦。要約するともこ姉が囿になってメリウスを誘きだして、その間に俺がリリーを助けるっていう作戦だ。

……もこ姉が言っただゲーム脳の効果。言われてよくわかった。

もこ姉……、自分が死ぬことか相手を殺すことか考えてないのか？ ……ゲームじゃないんだぞ？

考えてみればおかしいと思うべきだったんだ。普通の女の子がいきなりこんな世界に放り込まれた上にあんな思いをしたっていうのにあっさり順応して、モンスターを殺してレベルアップしたってはいやいで……。

二回目の試練の時、ゲイツを射ってからもこ姉は変わった。俺はそれをいい変化だと思っていただけ……全然そんなことはなかったんだ。あの時から……もこ姉の何かが変わってしまった。

「りゅうくん？ なにボーツとしてんのよ？ 急がないと向こうが先に転送魔法発動させちゃうよ？」

「あ、ああ悪い」

「それじゃ配置について、あたしがあのメリウスっていうやつ射ったら作戦開始ね？」

「……ああ」

後回しにしよう。実際問題として俺一人じゃありりーは助けられない。それにあのメリウスってやつ、おそらくは関係無いやつを殺すのは避けている。

樹から落ちてくるフィロ達のことを教えてくれたし、もしあの夕イミングで俺達を追撃していれば追っ手の心配も無かっただろうにそれをしなかった。

今はそこに賭けるしかない。

もこ姉と分かれて体勢を低くしたまま草場の影から影へ移動する。幸い向こうは魔法陣の方に集中しているようだ。こちらに気付く気配は無い。

後ろに回り込み、木の影に隠れながら様子を伺う。

ビュンツと空気を裂く鋭い音と同時に、もこ姉が隠れているだろう場所から放たれた矢がメリウスに向かって行った。

それがメリウスの頭に命中する寸前でメリウスは軽く頭を動かしてかわす。矢が飛んできた方向を見た。

続けざまに矢が飛んでいく。メリウスは気だるそうに手を前に出し、防御魔法を張る。　　だがもこ姉の矢はその防御魔法を貫通した。

「　　っ?!」

矢がメリウスの肩に突き刺さる。短い悲鳴が聞こえた。

もこ姉の使っている矢……あれにはもこ姉達の魔法やスキルを封じていたっていうあの雨が泥と一緒に塗りたくられている。もこ姉

いわく矢と魔封じの雨の“合成”だそうだ。

続けざまに飛んでくる矢にたまりかねたようにメリウスは空中に逃れる。けどもこ姉の矢は動きを先読みするように正確にメリウスに向かつていく。

メリウスは翼をひるがえして空高く上昇すると矢が飛んでくる方向へと向かつて行った。

……………ここまでは予定通りだ。

もこ姉の射撃精度にあの矢ならさすがにメリウスも放っておくわけにはいかない。さらに、もこ姉がやっているのは木々の間に隠れながらの100m程度離れた場所からの狙撃だ。簡単には捕まらないうだろう。

その間に俺はリリーを助ける。音でメリウスが離れたのを確認。草影から飛び出してリリーが閉じ込められた檻に向かった。

「リリー！ 大丈夫か!？」

返事はない。リリーはぐったりとしたまま檻の中で横たわっている。とにかく檻から出そう。

鉄格子を思い切り引っ張る……駄目だ！ くそ、めちゃくちゃ堅いなこれ。

急がないと。どうやれば開けられる？ 早くしないとリリーも……もこ姉も……！

その瞬間、パキンと音を立てて鉄格子が壊れた。

え？ 見ると俺の手がぼんやりと光っていた。これ過守護か？ ……これは要するに檻が脅威っていう……こういつ効果も有るのか？

「リリー！ しっかりしろ！」

リリーの体に触れる。その瞬間またパキンと音が鳴った。

「う……ん……」

リリーが薄く目を開けた。焦点の定まらない目で俺を見る。

「リユー……ト……？」

「助けに来たぞ！ 立てるか！？」

リリーは手をついて立ち上がるうとする。けどバランスを崩してまた倒れた。

「ぐめ……へんなくすり……のまされ……ちから、はいらない……」

「わかった。背負ってやるからこっちへ来い」

リリーを引き寄せて背負う。よし、あとはリリーを安全な場所に移して……「作戦はともかく、力不足ですね。やれやれ、見逃してあげたのにどうやってここを嗅ぎ付けたのやら」

マジかよ。ゆっくり後ろを振り返る。そこにはもこ姉の首を片手で掴み、持ち上げるメリウスがいた。早すぎる……。

もこ姉は首を掴まれたまま、だらんと両手両足をぶら下げている。

「さて、さっそくですが取引です。その蒼竜の娘とこの子を交換しましょう。ああ、断れば不本意ながらこの子は殺しますので」

「……………くそっ」

予想通りそう来るか。どうする？ なんとかもこ姉を取り返してリリーも……………。

「おかしな真似をすれば全員に攻撃を加えます。貴方自身は強力な防御能力を持っているようですが他は違うでしょうか？ 護りきれますか？」

……………釘を刺された。どうすれば……………ん？

何か周りがいきなり明るくなった。メリウスが空を見上げ、大きく目を見開いている。なんだ？

俺も思わず空を見上げた。……………な？！

小さい太陽みたいなバカでかい火の玉が落ちてくる。

「ちよっ……………な？！ もこ姉！！」

逃げる間も与えず火の玉はもこ姉ごとメリウスに直撃した。

十五日目（9）

いきなり落ちてきた巨大な火の玉が炸裂して辺りに炎が飛び散った。
とっさにリリーを抱き寄せる。

一瞬で辺りに熱波が拡がった。近くにあつた木が燃え出して空が真つ赤に染まり、黒煙が辺りに立ち込める。そしてメリウスが立っていた場所は大きなクレーターに変わっていた。

俺はその光景を呆然と見ていた。意味がわからなかった。突然隕石みたいな火の玉が落ちてきてそれがもこ姉を……。

「……もこ姉……」

辺り一面火の海だ。これじゃ……もう……。

「もこ姉えええええ！！」

「おい、あたしがどうかした？」

「……は？ 振り返る。もこ姉が苦い顔をして俺の後ろに立っていた。」

「リ、リュウトさん！ リリーちゃん！ 大丈夫ですか！？ ごめんなさい！ うまく加減ができなくて……」

師匠を背負ったフィロがペコペコと謝ってくる。……………なんで
もこ姉が？ 確実に掴まってたよなもこ姉？ それに今のフィロが
？ あんなむちゃくちゃなの使えたのかこいつ？

クレーターの中央に目を向ける。……………あいつ、生きてる。

メリウスはボロボロに焦げた翼を動かして炎の中から飛び出して
空中で静止した。その手にはもこ姉が掴まれている。……………もう
一度確認する。

俺の隣にもこ姉がいる。見た目もしゃべり方も雰囲気も間違いな
い。そしてメリウスももこ姉を掴まえている。さっきまで話してた
けど昔の俺のことなんか完璧に知ってるし間違いなく俺の知って
るもこ姉だった。……………どういうことだ？

メリウスもそれに気付いたようで俺の隣にいるもこ姉と自分の掴
まえているもこ姉を見比べる。

「……………なんですか？ これは……………」
「つまり色々予定外は有ったけど、僕の作戦が大成功したみたいだ
ね」

メリウスが掴まえていたもこ姉がにやりと笑った。瞬間、髪と身
長が縮み始める。なんだ？！

「んじゃ、【即興劇】が終わる前に。装備変更っ」と

もこ姉だったやつのが服装が黒衣へと変わり、その手に黒い大鎌が
現れた。メリウスの表情が凍り付く。

「貴方は!」「はい、僕の間合いつと」

ドスリと鈍い音が響いた。大鎌の柄尻がメリウスの鳩尾にめり込む。さらにくの字に折れ曲がったメリウスの後頭部に大鎌の柄を叩き付けた。

「がつ……」

メリウスが墜落する。もこ姉だったやつ……黒衣を着た金色の瞳の子供はくるりと空中で身体をひねって着地した。

何がどうなつてんだ!? 捕まつてたもこ姉が黒ずくめの子供になつて、もこ姉がもう一人いて……途中で入れ換わつてた? けどいつから? 俺が話してたもこ姉は昔の俺のこと知つてたぞ?

黒衣の子供がメリウスの首筋に大鎌の刃を当てながらこちらを向いた。フィロともこ姉が身構える。

味方じゃないのか?

「気をつけてくださいリュウトさん。あの男の子……イシュト君が私達を襲つて来た子です。そのせいで恋さんが……」

「あ、それはごめんね。そっちの着物の子大丈夫?」

イシュトと呼ばれた子供はにへらと笑う。……こいつ、へらへらして見えるけど立ち姿に隙がまつたくない。たぶん、相当強い。

「……誰だ? お前……。それになんでもこ姉に?」

「うーん、説明しなきゃダメ? 面倒くさいんだけど」

「……魔人……だよ？ あの子……」

俺の後ろに隠れていたリリーが小さく言った。ふらふらしてて息を荒くしながら俺にしがみついてくる。俺はそれを支えた。

「魔人？」

「うん……。魔界にすんでる……ぼくたち竜人とおなじ、人にこわがられてる種族……だよ……」

リリーがそう言うのを聞くとイシュトはため息をついて頭を掻いた。ゲシゲシとメリウスを蹴る。

「そ、んでこいつら光の教団の狩る対象。で、こいつらがちよっかい出してきたから仕返し中。もういい〜？」

「光の教団に仕返しするのに、なんであたしらを襲ってきたのよ？」

もこ姉が聞くとほんの少しイシュトの表情が弛んだ。

「光の教団に仕返ししようとは思っただけど連中の本拠地がどこかわかんなくてさ。そんな時に黒いマキナちゃんから竜人二人と一緒に旅してるって聞いてね。きっと光の教団の幹部クラスが出てくると思っただ。だからもこお姉ちゃん達の中の誰かと入れ換わってそいつ捕まえちゃおうと思って。一番弱そうな人に化けてれば向こうも油断するだろうし。ま、僕と光の教団が来るタイミングが被るとは思わなかったけど」

「さっきもこ姉に化けてたのは？」

「僕のスキルとしか言わないよ。りゅくくん？」

イシュトはぐりぐりとメリウスの頭を踏みつけながら言った。丁寧にもこ姉の声真似をしながら。

なんか……さっきまでこいつが化けたもこ姉相手にしんみりしてたつてのがむかつく。

そもそもこいつのせいで師匠は……。

「とりあえず、あなたの目的は達成したのよね？　ならあたしたちにこれ以上何もしない？」

もこ姉が言った。イシュトは「うん、別にもう何も無いよ」と答える。そしたらもこ姉は　心底安心したような嬉しそうな顔で笑った。

「そっか。よかった。それならとりあえず安心ね。それじゃ行こ、りゅう君、フィロちゃん、リリー」

……おい？

もこ姉は踵を返して歩き出す。……それ……だけ……？　師匠があんな怪我したんだぞ？　なのに……なんであんな嬉しそうな表情ができる？

「もこ姉、それでいいの？」

「いいよ。リリーは無事に取り返せたんだし、あの子が光の教団相手に暴れてくれるならあたし達も助かるしね。あの子とまともに戦うことにならなくて本当に良かったわ。多少被害が出ちゃったけど

恋ちゃんも回復魔法でどうにかなるでしょ」

胃に冷たい物が落ちた気がした。「多少被害が出ちゃったけど恋ちゃんも回復魔法でどうにかなる」違っ……違っだるもこ姉。それじゃまるで……。

その時だった。

ブルルルル　ブルルルル

幾つかの携帯が同時に鳴り始めた。その全部が同時に通話モードに切り替わる。

『『『『はい、皆さんお待ちかね。第三の試練始めるよー！』』』』

っ?!　すぐに携帯をポケットから出して画面を見た。……

深夜0時。しまった!　この可能性を考えなきゃいけなかった!

……?　そして俺は異変に気付いた。

NPCが眠っていない?　マキナと仲がいいリリーはともかく、メリウスもフィロも起きてる?　いつもならNPCは眠るはずじゃ……。

『『『『それじゃみんなー!　試練会場に飛ばすからねー!』』』』

考える間もなく辺りの風景が入れ換わった。

十六日目(1)

十 ????

『ねえ。本当に次の試練で“あれ”使うの?』

まただ。私が次の試練であれを使っつて言っつてから何回も何回も何回も聞いてくる。

『だから言っつたじゃん! もう……次の試練の担当は私なんだから黙っつてなさいよ!』

『け、けどさ。ちよつと難易度高過ぎない? そんなことしたら誰もクリアできないよ?』

こいつは少し前からちよつと変だ。確かに前から私達の中でも少し変わりものだったけど、最近は特に変だ。特定のプレイヤーにもちよくちよく会いに行っつてるみたいだし。『だから次の試練の担当は私なんだつて! ちゃんと何人かは生き残るように考えてるんだからからもう……見てるのは自由だから黙っつてなさいよ! あんたの担当はポーナスでしょ! そつちも最近サボっつてるし』

あいつはプウツと頬を膨らませると『もういい!』つて言っつてどこかに消えてしまつた。

まっつたく……けどいいや。次は待ちに待つた私の番なんだからね

周りの風景がぐにやぐにや歪んで、その歪みが徐々に戻っていく。

変わった風景も森だった。けど、さっきまでいた森と違って木々がまばらで月明かりがよく入る。

そこそこ明るくて動きやすそうね。それに地面も苔とか生えてなくてしっかりしてる。

今までは真っ暗な空間だったり瓦礫が散乱した街だったりで動きにくかったけど、森っていうのは同じなのにわざわざ条件良くしてくれるなんて今度のマキナはいくらか良心的かな？

……… って、あれ？

「リュウト……… どう？」

「な、なんなんですか今の?! いきなり景色が歪んで……… それで………」

「リリーと……… フィロちゃんがいる？」

イシュトの方を見るとメリウスもいた。どういうこと? NPCは試練には参加しないはずじゃ……… それに眠ってもない。

『ようこそ! 三回目の試練会場へ!』

あたしたちの目の前の空間が裂けるとそこからマキナが現れた。暗い森の中でも目立つ明るい黄色の髪に髪と同じ色のドレス。なんとなくタンポポを思い出す。黄マキナってどこかしら?

マキナはあたしたちを見回して指折り数え始める。

『りゅうくん、恋ちゃん、イシュくん、もこっち。それにフィロっ

ち、リツちゃん、メリちゃん……OK・OK』

マキナはあたしたちを順番に指差して数えていく。そして子供みたいに元気よく両手を広げた。

『うっは〜！ やつとこの日が来た〜 試練担当する日ずっとずっと楽しみにしてたんだよ ああそだそだ、フィロっち達のことちゃんと説明しないとね』

今回のマキナはいつにもましてテンション高いわね……。この状況……フィロちゃん達理解できるの？

マキナは唇に指を当てると『インスタントスキル【かくかくしかじか】』と唱える。あたしの頭の中に一気にいろんな情報が流れ込んできた。

「……………説明すら何でもあり？」

フィロちゃん達がここにいる理由。早い話がゲーム参加者の人数合わせらしい。

元々2000人いたこのゲームの参加者。そのうちPCは1800人ぐらいで、PKは200人ぐらいだったらしい。

けど、PCと比べてPKの方が強すぎる上にPCはこの世界に馴染めず狂ったり自殺したりする人が後を立たず、今はPCが600人、PKが190人ぐらいになっちゃってるそうだ。

これはマキナ達にとって予想外だったらしくて、このまま行くとPKに殺されてPCが全滅しそうな計算だし、何より人数が少なすぎて試練のたびに死ぬ人が少ないと華が無くてつまらないらしい。

……ひど。

「ふざけるな!! お前……俺たちをなんだと……それにフィロ達まで巻き込んで……!!」

りゅう君がぶちギレてる。

けど正直今さらじゃない? あたしは
いいけどな。フィロちゃん達が仲間に加わるの心強いし。……フィロちゃん達茫然としてるけど。

さて、そうなるとできるだけ話が長引いて欲しい。あたしはもちろん、フィロちゃんもりゅう君を追いかけるために肉体強化魔法使ってあたしと恋ちゃんを運んで来たんだ。魔力も体力もかなり減ってるはずだ。ちょっとでも回復時間が欲しい。

フィロちゃんに背負われている恋ちゃんは……駄目ね。さすがに骨が砕けたのは一回や二回回復魔法使っても全然治らないし、そもそも意識が戻ってない。戦力としてはまったく期待できない。リリーも……なんかふらふらしてるし、あまり戦力には数えない方がいいかも。

あたしはそうやってサツと戦力分析をする。

問題なのはイシュトとメリウスの方。イシュトはPKで、前回の試練でのゲイツの言葉を信じるなら必ず誰か一人殺さないといけない。

メリウスもどう動くかわからない分やっかいそうだし……理想としてはイシュトにはメリウスを殺してもらって味方について欲しいところだ。

やっぱり最高レベルの恋ちゃんが戦闘不能ってのは痛い。ゲームでも高レベルキャラがやられたら一気に死亡フラグだし。いざというときにイシュトを抑えられる人がいない。

『さてさて、それじゃ第三の試練のルール発表するよ。ああ、それとイシュ君はメリちゃんから足どけてあげて？ 踏まれたままつても可哀想だし。あ、それともそっちの趣味？』

マキナがけらけら笑いながらそう言うとメリウスは勢いよくイシュトを払いのけた。イシュトもそのまま軽く飛び退く。イシュトの方は下手にマキナに逆らうつもりは無いみたいだ。……賢明ね。

マキナは手を高く上げ、指をパチンと鳴らした。すると地面に魔法陣が現れる。

『第三の試練は私の召喚したサイキョーのスキルを持ったキャラとのバトルだよ。それじゃ、召喚！』

バチバチと火花が散って魔法陣からせり上がるように人影が出てくる。……マキナ？

魔法陣から出てきたのもマキナだった。呼び出した黄色のマキナと同じく黄色の髪に黄色いドレス。

ただ、全体的にかなり色素が薄い上に目に光が無い。あゝ、俗にいうレイプ目ってやつ？ なんか人形みたいな感じがする。

『この子は“レプリカマキナ”そのまんま私のデッドコピーだよ』

黄色いマキナはくしゃくしゃともう一人のマキナ……レプリカの頭を撫でる。その間もレプリカはまったくの無反応だ本当に人形みたい。

『この子に関して説明すると……、まあ動く人形ぐらいに思っれていいわ。この試練終わったら別にいらないし、Hなこと目的に欲しいっていうならあげてもいいよ。どお？ りゅう君？ イシュ君？ それにもこちゃん？』

「ちよ?! なんてあたしの名前が出るのよ?!」

『いや、もこちゃんならいけそうと思って。んで説明続行するとね。身体能力的にはぶつちゃけそこまで強くない。魔法なんかも使えない。代わりに一つだけチートスキルを持つてるの。ん、どう説明するかな?』

「ぐだぐだ言うのはそこまでにしてくださいませしょうか」

メリウスが怒気を込めた声で言った。矢を弓につがえてギリギリと音が鳴るぐらい引き絞る。

「マキナの名は我らが……教皇様が崇める主神の名。この世の何よりも偉大なるその名を、貴女のような俗物が名乗るなど断じて許す訳にはいきません!」

マキナはメリウスを横目で見て、にたりと笑った。

『私が本物の神様だったのに。勝手に崇めといてそんなこと言われてもね。それじゃ、偉大なる私の名の元、あなたに裁きを下しま

しよ』

マキナが指を鳴らすとレプリカはおもむろに手を持ち上げる。そしてゆっくりとした動作でメリウスを指差した。

『……………死んで……………』

メリウスの額にぼつりと黒い斑点が現れた。それが一気に広がって……………メリウスの頭が崩れた。

「……………え？」

メリウスの頭が黒くなって崩れて……………身体中に黒いのが広がっていく。あっという間に原形を無くして崩れていく身体。メリウスの身体は全部、黒い土くれみたいなものに変わってしまった。

バクバクと心臓が鳴り始める。や……………ばい……………。

『レプリカの持つてるチートスキルは【死亡宣言】あらゆるものを問答無用で“殺す”スキルだよ』

マキナはにっこり笑ってそう言った。

十六日目(2)

宙に浮かんで、土くれに変わったメリウスを見下ろしながらマキナはにっこり笑っていた。まるで子供が虫をいたぶるような、ここまでのマキナと同じ表情。

マキナが何か呟くと空に大きな時計と電光掲示板が現れた。電光掲示板には1の表示が灯っている。

『さてこの試練。クリア条件は12時間生き延びるかレプリカが三人殺すかのどちらか。全員で協力して生き延びるもよし、誰かを縛り上げてレプリカの前に放り投げるもよし。ルールは無用。生き残ったもの勝ちだよー』

そこまで言ってマキナはイシュトを見た。

『ああ、けどイシュ君はPKだから試練終了までに一人は殺さないといけないのか。大変だね。そんなじゃ、あの時計の秒針が一周したらスタートね』

この試練……最悪だ。

問答無用で相手を殺すっていうあのレプリカ的能力はやばすぎる。おまけに……一人は殺さないといけないっていうイシュト、あの子も相当ヤバイ。最初に襲撃かけてきた時には恋ちゃんと互角にやり合ってたぐらいだ。

……この場合。落とし所を決めといた方がいいかもしれない。

たぶん……時間いっぱいまで全員生き延びるのは無理だ……。ならどこで落とすか……。

レプリカはあと二人殺す。そしてイシュトは一人殺さないといけない。……なら、なんとかレプリカがイシュトを殺すように持っていきたい。

レプリカがイシュトを殺したとして、レプリカが殺すのはあと一人。その時は……。

あたしは周りのみんなを見回した。

……恋ちゃんだ。

最高レベルの恋ちゃんを失うのは確かに痛い。けど、今ここでは足手まといにしかならないし、それに腕と足の骨が砕けてるんだ。回復までにどれだけかかるかわからないし、回復魔法で治しきれるかもわからない。

ゲームとかでなら複雑骨折での戦線離脱なんかはもうイベント扱いだし。ゲームのイベント内で死んだ人間に蘇生魔法をかけれないのと同じで、あたしの魔法では治せないのかもしれない。あくまでもかもしれないけどなんかそんな感じがする。

それだと後々も足手まといになり続ける可能性がある。ならここで……

……え？

どっと嫌な汗が吹き出した。息が苦しくなった。足が震える。

あたし今……何を考えてた……？

恋ちゃんを……殺す……？ さっきのみたいに……土くれに変えて……？

あたしが……考えた……？

吐き気がした。そんなあり得ちゃいけないことを本気で考えてた自分が信じられなかった。

なんで……あたしどうして……「もこ姉っ!!」

りゅう君の声でハッと我に帰った。レプリカがあたしに指先を向けていた。時計……しまった?!

「うあ……!?!」「もこ姉!!」

りゅう君はあたしの腕を引っ張って自分の後ろに引き倒した。

『……………死んで……………』

レプリカが呟く。りゅう君が短い悲鳴を上げて後ろに倒れた。あたしはそれを受け止める。りゅう君の胸元にひどい火傷みたいな痣が広がっていた。

「あ……ああ……」

頭の中がぐちゃぐちゃになっていく。どうしよう……どうしよう
どうしよう……!? やだ……こんなの……。

レプリカが指先をあたしに向ける。けど動けない。足に……力が
入らない……。やだ……誰か……助けて……。

『……………死ん』 「【ウォール】!!!」

いきなりあたしの前に地面から壁が飛び出してきた。ほとんど同
時にその壁が土くれに変わってぼろぼろ崩れだす。

「もこさん！ 立ってください!!!」

フィロちゃんがあたしの前に滑り込んできた。聞き取れないぐら
い早口で何かを唱えて地面を殴りつける。すると地面から何十枚も
の壁がレプリカとあたしたちの間に現れた。

「もこさん！ リリーちゃん！ 本気で走ります！ どこでもいい
からしがみついでください!!!」

「え？ う、うん!!」

フィロちゃんは右肩に恋ちゃんを、左肩に自分より大きなりゆう
君を担ぎながら叫んだ。普段の大人しさからは考えられないような
迫力で、あたしは何も考えずにフィロちゃんの腰にしがみついた。
リリーも前からフィロちゃんの首に腕を回す。後ろではフィロちゃ
んの作った壁がどんどん土くれに変わって崩れていく。

「駆け抜けるは我！ 何者にも止めること叶わず！ 刹那に來たり
て刹那に去る【シン・ディー・ウィン】!!!」

フィロちゃんが聞き覚えの無い呪文を唱え終わるのと同時に体にものすごいGがかかった。周りの風景が瞬間で何筋もの線に変わり、後ろの風景が信じられない速さで遠ざかっていく。

あたしは固く目を閉じて無我夢中でフィロちゃんにしがみついた。

少しの間走り続けて、フィロちゃんは急にブレーキをかけた。

「うわ!？」

勢いでフィロちゃんの背中に顔が押し付けられる。

フィロちゃんは木の影に滑り込むと肩に担いでいた恋ちゃんとりゆう君を降ろして倒れるように地面に突っ伏した。

「フィロちゃん……?!」

フィロちゃんは肩で息をしながらあたしに弱々しく頷いた。……

大丈夫じゃなさそうだ。今の魔法、見覚えがないけど何だったんだろ……？

ぜえぜえと苦しそうに息するフィロちゃんの背中を擦りながらりゆう君の様子を見る。

胸に大きな火傷の痕。……過守護の能力のおかげで死なずに済んだんだと思う。またこいつは……こんな無茶して……。またあたしは……こんな無茶させて……。

……魔力……足りるかな？

「【ヒール】……」

眩くように言つとあたしの手に光が灯った。少しだけりゅう君の火傷の範囲が狭くなる。

……大きな怪我には焼け石に水だ。

りゅう君の額に浮かんだ脂汗を拭いながら周りを見る。

りゅう君と恋ちゃんは言わずもがな。フィロちゃんはまだ呼吸を整えられなくて咳込んでる。リリーもふらふらしてて、りゅう君の手を握ったまま倒れそう。そしてあたしも今ヒール使つて魔力が空っぽ。まともに戦えそうな人が一人もいない。

どうしよう……どうしよう……。こんな状況じゃ……。

頭の中に最悪のパターンが浮かぶ。イシュトに一人、レプリカに二人殺される。……このままじゃ確実にそうなる……。

この中から三人……。それを考えると勝手に涙が溢れてきた。やだ……そんなの……やだよ……。

……今、動けるの……。あたしだけ……。あたしだけなら……。逃げられる……。

……そんなの駄目……。！！ みんなが死んじゃうぐらいならあたしも一緒に死んじゃった方がいい！！

……考えないと……。考えて……。考えて……。考えないと……。みんなが生き残る方法……。だから教えて……。 “ゲーム”ならあたしはどうやってこの場面を乗り切る？

その時、頭の中で機械的な声が聞こえた。

『スキル【ゲーム脳】への依存度が一定値突破。熟練レベル上昇。スキル効果を強化します』

その声が終わると同時にスウツと気分が落ち着いた。何今の？いや、どうでもいい。そう、考える。クリアできない“ゲーム”は無い。あたしは、あたしたちはどうする。どうやればこの状況を突破できる？

頭の中で様々な思考がぐるぐる回る。……一個だけある。全員生き残れる可能性。けどこれは……実現できるの？

その時だった。

「見つけた」

男の子の声。振り返った視線の先に、イシュトが立っていた。

十六日目(3)

全員生き残れる可能性。それはイシュトにレプリカを殺させることだ。

イシュトのルールは誰か一人殺すこと。ならレプリカを殺してもOKなはずだ。

問題なのはそれを実現する方法を考えてイシュトを説得することだった。イシュトにとってはあだし達の誰かを殺してしまう方が遙かに簡単なんだから。

……その方法をこれから考えようって時に……！

イシュトは大鎌を構えてゆっくりと近づいてくる。

どうする……どうするどうする！ 思考が一気に加速する。けど、答えが出る前にイシュトはあだし達に近づいてくる。

「じゃあね。バイバイもお姉ちゃん」

大鎌が振り上げられる。

あだしが出した答えは……

「お願いっ！ あんたのスキル教えてえええっ！！」

土下座だった。地面に平伏しておでこを地面にすり付ける。……

駄目だ。こんな答えしか出せなかった。

「……なんのつもりかな？」

「あんたの……ううん。あなたの持つてるスキルを教えてください！
！ それであのレプリカを絶対に倒せる方法を考えますから！ お
願いします！」

「ふざけてるの？」

降ってきた言葉は冷たかった。見上げるとイシュトは改めて大鎌
を振り上げる。 ダメッ！

固く目をつむった瞬間、甲高い金属音が聞こえた。……恐る恐る
目を開けたら……恋ちゃんがイシュトの大鎌を刀で受け止めていた。

「恋……ちゃん……？」

「……無事じゃの？ すまん……少々寝すぎた。……事情はマキナ
のインスタントなんたらとやらで把握しておる」

恋ちゃんは刀を振り払ってイシュトを弾き飛ばした。イシュトは
片手でバク転して距離を取る。なんか表情が……楽しそうだ。

「うわあつ。すごいね君。そんな怪我でまだ動けるんだ」

本当にそうだった。あたしも恋ちゃんの怪我は見たけど……
トラウマになりそうなくらい痛々しかった。薬草なんかは使ったけ
ど全然治りきってないはずだ。……現に今もすごい脂汗が出る。

一方のイシュトは楽しそうにステップを踏み始める。まるでおもちゃを見つけた子供みたいな顔で大鎌を構えた。

「こんな状況だけど嬉しいな　君と戦うの楽しかったもの」

「……………たのむ」

ポツリと呟いて、崩れるように恋ちゃんは膝をついた。刀を地面に刺してさっきあたしがしたみたいにイシュトに土下座した。

「お願いじゃ……………。わしでは……………この子たちを護れん……………。じゃからたのむ……………。この子の……………浅倉の話だけでも聞いてくれ……………」

絞り出すような声で恋ちゃんは言った。……………けどイシュトは気だるそうにステップを止めるとハアとため息をついた。

「……………がっかりだな。君は楽しそうだと思ったのに。そんな都合のいいお願い通ると思う？　僕は君たち殺しちゃう方が楽だもん」

そう言っただけでイシュトはくすりと笑う。

「ああ、けど誰か死ぬかだけは選んでいいよ？　僕が殺すのは一人でいいからね。誰にする？」

「……………」

恋ちゃんは何も言わない。土下座の体勢からゆっくりと顔を上げて正座の形になる。

「……………調子に乗るなよ悪ガキが……………」

一瞬で空気が変わった。恋ちゃんの周りに舞っていた木の葉が何かに斬られたように一斉に弾けた。な、なに?!

喉元に刃物を突き付けられたような感覚がした。背筋がゾクゾクして、何故か足から力が抜けて、思わずしりもちをついた。

イシュトからもさっきの余裕が消えた。たぶん無意識に一步下が

る。
「ちょ……なにこれ……?」

恋ちゃんは立ち上がると刀を手取る。その瞬間に周りの木の葉っぱが一斉に散った。

「誰が死ぬか選べ……のう……ならわしとお前ならどうじゃ……?」

「え……え?」

恋ちゃんが一步進む。イシュトが一步下がる。

「わしがお前の両手両足切り落としてあのれぷりかとやらの前まで引きずって行ってやるう……それで二人共死ねばこの試練は終わりじゃ……どうじゃ? 簡単じゃろう」

「ちょ……ちょっと?! め、目が怖いよ?!」

「誰を殺すか選べ? 全員生き残れるかもしれんというのに何故話も聞かん……! 何故命を数で考える!? ……怖いからというならまだ許すがお前は違うじゃろう……子供は殺したくなかったが……わしはわしの大切なものを護るためならば……鬼と成り果てようとも構わん……」

イシュトの背中に木が当たった。恋ちゃんはイシュトの喉元に刀を突き付ける。近くにいただけで鳥肌が立ってくる……これが殺気ってやつなのかな……。イシュトの表情に本格的に怯えが走った。

「わ、わかったよ！ もこお姉ちゃんの話聞くから！ だ、だから許して！」

「……嘘ではないな？」

「ほ、ホントだよ！ けど……けどどう考えても駄目な作戦しかなかつたらどうするの！？ ぼ、僕だって死にたくないよ！」

「……その時はわしからは何も言わん。お前の好きにするがいい。

……わしらに刃を向けるならさつき言ったことを実行するがの」

恋ちゃんはそう言うのと刀を鞘に納めた。イシュトはホッと息をついてあたしの方を見る。

「……それで、どうするの？」

「……ちょっと待って」

まず考えるのは……レプリカへの勝ち筋だ。レプリカの能力は要するに即死の能力。見たところ相手を指差して『死んで』って咳くだけで相手を殺せる。ただし過守護で多少は防げるし間に壁なんか有ったら貫通はしてこない。

なら物陰に隠れておいて不意打ち……は敵しそうか。

マップを開いてレプリカがいる場所を見る。木の表示が次々と消

えていつてる。たぶん向こうも不意打ちに警戒して隠れる場所を消していつてるんだ。

遠距離からの狙撃つてのも有るけど、見つかったらほぼアウトなんだから直線上に並ぶリスクが怖い。さすがに相手が見えない距離から当てるのはあたしでも相当厳しいし、こちらの場所は確実にバシるからかなり危険だ。そもそもあの指差したら終わりっていう能力相手に遠距離戦って自体無謀かも。あのスキルは遠距離で使うのが一番活きる。ゲームで言うならスナイパーライフルに遠距離戦挑むようなものね。……となるとやっぱりイシュトのスキル次第になつてくるか……。

「あなたのスキル。どんなものか教えてくれない？」

イシュトは少し渋い顔をしたけど恋ちゃんを見てため息をついた。

「……僕の能力は【即興劇】物の役を操る能力だよ」

「……役？」

「そ、役。マキナの造ったこの世界の全ての物は役を持つてるんだ。服は服の役を持つてるし剣は剣の役、木は木の役を持つてる。で、僕のスキルは要するに……」

イシュトは近くに落ちていた木の枝を拾い上げた。くるくると指先で弄んでその先端を掴む。

「スキル【即興劇】発動」

イシュトが呟くと木の枝の形が変わった。握りやすい太さに適度な長さ。これは……。

「杖？」

「そ、僕的能力で“木の枝”に“杖”って役を与えたんだよ。ガラ
ス玉も劇の中では宝石になれるように、僕的能力は触れてる物にそ
れに近い性質を持った別の物の役を演じさせること。これ以外にも
鉄の棒を槍にしたり布を服にしたり……火消しの水を魔力消しの水
に変えたり木造建築の小屋を大木に変えたりね」

なるほどね、あの雨や小屋のことはこの能力の応用だったんだ。
ならば……。

「じゃああたしに変身したのは？ りゅう君達でも気付かなかった
みたいだしあたしのスキルも使ってたらしいけど」

「あれはもこお姉ちゃんの血の……遺伝子っていうの？ それを媒
体にして僕自身にもこお姉ちゃんの役を演じさせたんだよ。遺伝子
を性質の共通点にしてるからね。見た目も中身も能力もほとんど同
じ存在になれる」

「……………その能力って他人のスキルまで自分に付けたりできるの
？」

「ん、できるよ。一人分だけだけどね」

勝ちの目が有るならこっぴい。……つまりイシュトにあた
し達の中の誰かのスキルをコピーさせれるってことだ。

ならりゅう君の過守護をコピーさせたらいけるんじゃない？ イ
シュトは竜人の破壊衝動がどうのこうのってのも無いから過守護も
全開で使えるし相当強力なはず。

……いや、駄目だ。

イシュトがあたしに従おうってなってるのは恋ちゃんに気圧されたからだ。過守護なんてコピーさせたらいいよ恋ちゃんにも抑えられなくなる。

同じ理由で恋ちゃんのスキルをコピーさせるのも駄目。強くなりすぎる。

なら残るは……あたしはみんなを見回した。みんなの視線があたしに集まってる。

……フィロちゃんは魔法系……？ リリーの場合は水を操る能力。それであたしはゲーム脳……。

……
っ！！

「イシュト！ あなた他人のスキル“だけ”コピーできる！？」

あたしは思わずイシュトの肩を掴んでいた。イシュトが頷くと……
…つい笑いがこみ上げてきた。そうだ！ あれがあっただんだ！
イシュトが驚いたような、ちょっと怖がったような顔であたしを見つめる。

「ちょっと？ ついにおかしくなっちゃった？」

「違う違う」

コホンと咳払いして呼吸を整える。

「見つけたわよ。あいつを……レプリカを殺す方法」

十六日目(4)

side デウス・エクス・マキナ(黄)

『るるる　どう来るかな　』

周りの木や障害物なんかを殺しながら歩くレプリカの何mか上を、浮かびながらついていく。レプリカは能力的には私の劣化品だけ。知能はそんなに変わらない。死角になる物を消したり周りの小さな変化に気を付けたりと不意討ち対策もばっちり。私が思いつくことはしっかり埋めている。

逆に言えばもしこのレプリカを倒すことができるなら、それは私をあっと言わせるような手ってこと。そういう意味でもこちゃん達がどんな手を使って来るか、すっごく楽しみ！もちろん私のスキルを使ったらもちやん達がどんな作戦立ててるか知ることできるけどネタバレなんかつまらないからね。

あゝ、早く来ないかな

……他のマキナが言った通りだわ。私、今すっごく楽しい。うん、ただ楽しいだけじゃない。死んでく人が見せる“絶望”も、仲間を護る“勇気”や“愛”もすごくすごく素敵。もっともっと、もっともっとと欲しい。見たい。

怒りも悲しみも苦しみも喜びも快楽も羞恥も怠惰も傲慢も色欲も全部全部見たい。全部全部私を満たしてくれる。

『だから全部私に見せてねみんな。見せてくれる人はみんなみんな

大好きだよ。』

クスクス笑いながら辺りの魔力の流れを探ってみる。

……きた!!

森の中から、空に大きな火の玉がいくつも打ち上げられる。それが放物線を描いて降ってきた。

流星群みたいに降ってくる火の玉。これはフィロちゃんかな？ たぶんもこちゃんの携帯のマップでレプリカのだいたいの場所を割り出してその一帯を攻撃ってことね。

けど甘い甘い。

レプリカは両手の人差し指を降ってくる火の玉に向けた。

『死んで……』

レプリカが咳くと同時にレプリカに当たりそうだった火の玉がろうそくの火を消すみたいに消え去った。他の火の玉は地面に落ちて炸裂して辺りに炎が飛び散る。けどレプリカの周りはまったくの無傷だ。

炎とかなら【死亡宣言】でも殺せないって思ったのかしら？ でもまあいにくさま、【死亡宣言】は問答無用で対象を殺す能力。それが魔力だろうが火だろうがその存在ごと殺してしまえば関係無いよ。

で、こんなので終わりかな？ だったら期待外れ……あ？

周りを見回して気付いた。……レプリカ、炎に囲まれてる。

……そっか。レプリカのいる辺り一面への攻撃、これが狙いか。

私はくすりと笑う。これぐらいはやってくれないと面白くない。

もこちゃんは一度レプリカ能力を見てる。レプリカが指差した相手しか殺せないことも察してる。ならレプリカが指を差しきれない量の火の玉を降らしてやれば当然レプリカは自分に当たるやつを優先して殺す。

けどそうすると殺さなかった火の玉がレプリカの周りに落ちて、レプリカは炎に囲まれることになるって寸法だ。二段構えの戦術、うんうんさすがもこちゃん

レプリカは自分を囲む炎の壁を見回す。炎の壁は意外と分厚くて、向こう側はかなり見えにくいみたいだ。フィロちゃんの魔力も相当なもんね。

次はどうくるかな？ 炎の壁があるから向こうもこちらに近付きやすくなってるはず。なら接近戦を仕掛けて来るかな？

パチパチと炎が燃える音が鳴り続ける。

「アイテム！ まとめて取り出す！ そして【サイキクス】！！」

炎の向こう側から男の子の声が聞こえた。直後に炎の壁をイシュ君が突き破って突っ込んできた。

来た！ 本命！

イシュ君の周りに大量に剣や盾が現れる。それがサイキクスで浮かんでイシュ君の前で壁になり、それごと突っ込んでくる。

もこちゃんの能力をイシュ君に演じさせたか。さっきレプリカ能力を【ウォール】の壁一枚で防げたのを見ての作戦ね。【死亡宣言】は指差した相手を問答無用で殺せるけど、逆に言えば指差した

やつしか殺せない。だからいくつも盾を用意すれば殺しきれない。

さすが。一回見ただけで本当によくそこまで察しがつくって思うよ。

『……けど残念ね。考え方は正しいけどその方法は間違ってるよ』

レプリカは剣や盾に隠れて向かって来るイシュ君に人差し指を向けた。

『……死んで…………』

パキンと甲高い音がした。【サイキクス】で浮かんでいた剣や盾が勢いを失ってガラガラと音を立てて地面に落ちた。

「あっ?!」

『残念でしたイシュ君。確かにいっぱい盾を用意すれば殺しきれないよ。けど、【サイキクス】の魔法自体を殺すってのは考えてなかったみたいだね』

無防備になつたイシュ君。それにレプリカは指先を向ける。

『死んで…………』

断末魔を上げる間もなくイシュ君の頭が黒く変わった。

レプリカに勝てそうな唯一のキャラが……。ちよっと残念でため息をつく。

全身が黒ずんだ色に変わり、イシユ君の身体は土くれになって崩れ落ちた。

十六日目(5)

『さーてさて、イシユ君も死んじゃったしもう面白いのは見れないかしらねー？ レプリカ、さっさと決めちゃお』

レプリカの隣に着地してそう指示を出す。レプリカはこっくり頷いて自分を囲ってる炎に指先を向ける。

『死んで……』

炎の壁を端から殺していく。フツフツと順番にかき消えていく炎の壁。……お？

炎を晴らした先に……もこちゃんが立っていた。

『……レプリカ、殺っちゃえ』

レプリカは頷いて指先をもこちゃんに向ける。

『……死ん』「アイテムまとめて取り出す！」

もこちゃんの前に剣やら盾やらがたくさん現れて壁になる。そのいくらかが土くれに変わった。

『死んで……死んで……死んで……』

レプリカが呟くたびにもこちゃんの作った壁が土くれに変わって

いく。もこちゃんは壁が崩れそうになるたびに何かを取り出して壁を補強する。

何でもこちゃん自ら出てきたかな？ イシュ君殺されたことに責任感じた？

ぼろぼろ崩れてく壁。もこちゃんはひたすら物を出して壁を分厚くするだけだ。なんの策も無し？ だったら期待はず

グシャリと肉と骨がまとめて潰れる音がした。ビチャリと地面が真つ赤な血肉で彩られた。

『……………あ？』

隣を見るとレプリカが胴体から大槍の刃を生やしていた。レプリカの胴体をほとんど縦真つ二つに貫いた刃からボタボタと血が滴る。そして……………。

『……………なんで？ レプリカ的能力で間違いなく死んだはず……………』

黒い大槍を握る“イシュ君”はレプリカの身体を貫いたままにんまり笑っていた。

「もこお姉ちゃんが持つてるスキル、知ってるよね？」

……………そうだ忘れてた。【コンティニュー】もこちゃんが持つてた“一度だけ”死んでも復活することができるスキルだ。

そっか……………そういうことが……………。

イシュ君はもこちゃんのスキルをコピーしてゲーム脳と一緒にコンティニューもコピーしていたんだ。

コンティニューの縛りは“一度だけ死んでも復活できる”もこちやんはもう、一度死んだけどイシユ君はまだ一度も死んでない。スキルだけをコピーしたのならイシユ君は一度死ねる。

そっか……こんな方法有ったんだ……。

『く……ふふ、あは、あはははは』

自然と笑いが込み上げてきた。

イシユ君が顔をしかめる。

「……なに？」

『あは、あはははは！ すごいすごい！ 本当に私をあつと言わしてくれました！ 私の想像を越えてくれました！ うん楽しい！ 私すっごく楽しいよ！ ……けど80点！ 満点はまだ上げられない！』

わくわくが止まらない！ この先の展開が！ この後のイシユ君の顔が！ 結末が楽しみで仕方ない！ さあレプリカ！ 見せてよこの先を！

『……死………n……d……』

レプリカが声にもならない声を出した。その瞬間、レプリカの身体を貫いていた大槍と血が土くれになって崩れ落ちた。レプリカは両足でしっかりバランスをとって、顔だけイシユ君に向ける。

「……え？」

さっきの私と同じ、あっけにとられた表情。いい。すごいいい！

すごく楽しい！

『だから80点なのよ！ 言ったでしょ、レプリカ 능력は対象を問答無用で殺すこと。イシュ君から受けた“ダメージ”も問答無用で殺しちゃいました』

「な……?!」

『大斧でも使って脳天から叩き割ってれば良かったのにね』 さあレプリカ！』

レプリカはゆっくりとイシュ君に指先を向けた。呆然としてしまったイシュ君はほんの少し反応が遅れる。

「うあ……！」 『死んで……』

能力が発動する瞬間、赤い影がレプリカとイシュ君の間に飛び込んできた。

「……っ!!」

恋ちゃんだった。そして能力が発動した瞬間 折れた方の腕でレプリカの人差し指を掴んだ。

「ちよっ?!」

『っそっ?!』

黒ずむ腕。恋ちゃんは一瞬もためらわず自分の腕を切り落とした。飛び散る血。返す勢いでレプリカの身体に斬りつける。

『 ツ?!?!?!! 』

レプリカが悲鳴を上げる。切り落とした恋ちゃんの腕が地面に落ちる前に土くれに変わる。けど恋ちゃんはそれには目もくれず、イシュ君に向けてレプリカの血が付いた刀を放り投げていた。

「イシュト!!」

イシュ君も理解したらしい、刀を掴むと刀の刃に噛み付くようにしてレプリカの血を口に含んだ。

「スキル【即興劇】発動！」

イシュ君が【即興劇】の発動を宣言する。そして人差し指をレプリカに向けた。

「死ね!!」

【死亡宣言】が発動する。一気に黒ずんでいくレプリカの身体。

『 あ…………… 』

…………レプリカの身体が土くれに変わって崩れていく。最強の能力を持たせたのが仇になっちゃったか。

ボロボロ崩れ始めたレプリカは一瞬私に目を向ける。そして何か言おうとした瞬間、その体が完全に崩れ落ちた。

…………お見事。けどあつちも無理っぽい。

目を向けると恋ちゃんも膝から崩れ落ちて、そのまま地面に倒れた。自分で切った腕からはどんどん血が溢れて恋ちゃんの周りに血溜まりを作っていく。

「恋ちゃん!!」「レン……さん……」「お母さん!」そんな声
してもこちゃん、フィロちゃん、リツちゃんが恋ちゃんの周りに集
まってくる。

「恋ちゃん! 恋ちゃん! 返事して!」「す、すぐに手当てを!

もこちゃんとフィロちゃんが必死に手当てしようとする。リツち
ゃんと、意外にもイシュ君は茫然として恋ちゃんを見ていた。あゝ
あゝ、かわいそゝ。けどそうというのはあんまり好きじゃない。

『「つアドバイスしとくとさゝ、恋ちゃんもう死ぬよゝ」』

その場の空気が固まった。

「う……そ……だよ……」

リツちゃんが虚ろな目を私に向ける。ふらふらと私に何歩か近づ
いてきた。

「うそ……だよね? 黄色のマキナちゃん……? だって……だつ
て……」

『だってもなにも死んじやうもんは死んじやうもん。それを親切に
教えてあげたのに嘘つき呼ばわりはむかつかくなゝ』

リツちゃんは震えていた。恐怖? いや違うわね、目に光が戻っ
てる。これは……

「うああああああっ!?!?!?!」

リッちゃんがブチキレた。一瞬で空中に巨大な水の竜を何匹も作り出し、それを私に叩きつけてくる。まあ効かないけど。

『スキル【雨散霧消】っ』

私に向かって来ていた水の竜が全部水蒸気になっちゃって消えた。…ついでに神様に楯突いたお仕置きもしとこっか。ギリギリ死なない程度に。

『【山崩しの雷槍】』

手の中に雷の槍を作り出す。そしてそれを指で弾いてリッちゃんに飛ばした。

「っ!!」

リッちゃんはすぐに水の防御壁を張る。けど私の打った雷槍はそれをあっさり貫通した。

「ひっ?!」

雷槍がリッちゃんを貫く……その直前だった。

『ちよつとちよつと、そんなのぶついたら死ぬでしょ普通』

私そっくりの声。次の瞬間白いマキナがリッちゃんの目の前に現れた。そして雷槍は……デコピンで跳ね返された。

『なんの用よ白マキナ』

返ってきた雷槍を掴みながら私は言った。すると白マキナはにんまり笑ってもこちゃん達の方を振り返る。

『ボーナスタージム』

……へ？

白いマキナはぼろぼろ泣いていたフィロちゃんともこちゃんに向けて続ける。

『一定レベル突破おめでとう！ そんなわけでボーナスタージム持ってきたよー』

「……………」

もこちゃんがすごい形相で白マキナを睨んでる。それを気にする様子もなく白マキナは黒い小瓶を取り出すともこちゃんに放り投げた。

『今回のボーナスタージムは魔法ブースト薬。一回しか効果はないけど飲んだ人の魔力を全回復して、さらに魔法のランクを5ランクほど上げられる薬です。あ、5ランクってのはどれくらいかと言うと』

白マキナはクスリと笑う。

『回復魔法最低ランクのヒールでも、死ぬ寸前って人を助けられるくらいかな？』

「えっ?!」

もこちゃんは少し呆然と白マキナを見て、すぐに魔法ブースト薬を飲んだ。そしてヒールでの治療にかかる。

『……ちよつと！』

私はたまらず声をかけた。白マキナは『ん？』と小首を傾げる。

『あんたちよつと鼻肩し過ぎじゃない？ いきなり出てきてこんな
の……』

『え〜？ 魔法ブースト薬はそんなにチートなアイテムでもないで
しょ？ たまたまタイミングが良かったかもしれないけど、ポーナ
スアイテムに関しては私に任されてるんだから』

『……お気に入りキャラだからってあんまり鼻肩してるとまたお仕
置き食らうよ？』

『だから鼻肩なんてなんのことかわかんないって。……ほらほらリ
ツちゃん泣かないで』

白マキナはリツちゃんをギュツと抱きしめると、い〜こい〜こと
頭を撫でる。

『……せつかく楽しかったのに気分が悪いわ。用が済んだなら消え
てくれない？』

『はいはい。じゃね、リツちゃん』

白マキナはそう言うとパチンと指を鳴らして煙のようにどこかへ

消えた。

『……………なにあいつ』

最近白マキナはちょっと変過ぎる。勝手にプレイヤーのところへ行ったり明らかに文明レベル違うゲーム機とか召喚したり。

……………今日のことみんなにチクっちゃお。

とりあえずもう試練も終わりか……………。なんかさっぱりしない終わりがただけ……………。指を鳴らしてみんなを元の場所に戻した。

十七日目(1) (前書き)

やや暗めな展開が続きますが勘弁してくださいあ…;

R・18版のところが平行して書いてたらなんか文が混ざって…
…(ヤメロ

二章ももう少しで終わりです。そろそろ白マキナがデレ期に……)
殴

十七日目(1)

side 浅倉 もこ

……試練の日から丸一日が過ぎた。

薄暗いテントの中でフィロちゃんと一緒に恋ちゃんの包帯を変えていく。

白マキナがくれた魔法ブースト薬のおかげで命は助かったみたい。けど……。

「レンさん……」

フィロちゃんは丸一日の間ほとんどずっと泣きながら恋ちゃんの看病をしてる。自分を庇って大怪我させたのが相当堪えてるみたいだ。

そんなフィロちゃんを見てるのも……左腕を無くした恋ちゃんを見るのもすごく辛い。

……けど私は自分を責めるつもりはない。私はベストを尽くしたし、あの展開は誰にとっても仕方なかった……はず……。

「……フィロちゃん？ あと私がやっとかから休んだら？ ずっと休んでないんだし……」

フィロちゃんは黙って首を振る。……まあ看病できてるだけましなのかもしれない。リリーの方は本当に取り乱しちゃって……どうも死んだお母さんのこと思い出しちゃったみたい。今はりゅう君が見てるけど……。

その時、テントの外で人の気配がした。

「……僕だけど、入っていい？」

「……いいけど」

入ってきたのはイシュトだ。あたしと目が合うとすぐに視線を反らして薬瓶を差し出してきた。

「……この辺りの薬草に僕の即興劇使って薬にしてみたんだけど……。たぶん効くと思う」

「……ありがとう」

あたしはイシュトの差し出した薬を受け取った。……本当に意外なことに恋ちゃんがこうなってから一番必死に駆け回ってたのはこの子だった。

あちこち走り回って食べ物や薬草なんかを取ってきてはまた探しにいくのを繰り返してる。いったいどういふつもりなんだろう……。

とりあえず何か悪いことする気配はないけど……恋ちゃんの上半身を起こしてイシュトの持ってきた薬を飲ませた。

「……にがい」

っ?!

恋ちゃんが目、覚ました?!

「れ、恋ちゃん大丈夫?! あたしのことわかる!? え、えと、フィロちゃん! りゅう君とリリー呼んできて!」

「は、はい!」

フィロちゃんはバタバタとテントから出ていった。恋ちゃんは目をシヨボシヨボさせながらテントの中を見回す。

「……全員、無事じゃった……か……?」

ひどく弱々しい声で恋ちゃんは言った。以前のはきはきした感じはもうない。

「うん。大丈夫だったよ」

「そうか……おお……、お前も無事か……」

恋ちゃんと目が合って、イシュトはビクリと震えた。

恋ちゃんは中が空っぽになった着物の袖に目をやり、小さくため息をつく。

「……むう、夢ではないか……」

「い、いめんなさい!」

ガバツといきなりイシュトが恋ちゃんに土下座した。恋ちゃんは。

それを見てシヨボシヨボと目を細める。

「……………何を謝っておる？」

「だって……………ぼ、僕がもつとちゃんとしてたらこんな……………！ ぼ、僕を庇って、え、えと……………！」

「……………ばかめ」

コツンと恋ちゃんはいシュトの頭をこづいた。いシュトはちょっとだけ顔をあげる。

「……………怒らないの？」

「怒るわけがない。……………むしろ礼を言わねばならんぐらいじゃ。ありがとうのう……………いシュト……………」

「れ、礼って……………ぼ、僕のせいで……………腕が……………」

「じゃからお前はばかじゃと言っとる」

もう一度、少し強めに恋ちゃんはいシュトを小突いた。

「……………わしはお前のような子供に命をかせさせたんじゃ。ならばわしも……………命懸けでお前を護るのは当然じゃろう。それよりも、お前がおらんかったらきつとわしらは生きてここにおらんかったじゃろう。それに……………礼を言う。……………まあしらを襲ってきたことに関しては三時間程説教してやりたいところじゃが……………反省しておるようじゃしそんな邪気の無い目で見られてはのう……………」

そう言って泣き出しそんなイシュトの頭を撫でる。そしてテントの入り口の方に目を向けた。

「……じゃからこの子を恨むのはやめてやれ。よいな……神埼。リリー……」

「はい」「……うん」

テントの外から声がした。りゅう君とリリー、フィロちゃんが入ってくる。

リリーはイシュトを見ると露骨に嫌な顔をしていた。

けど恋ちゃんはそれには何も言わず、手をじっと見つめて閉じたり開いたりしていた。

「……のう、浅倉」

「ん？ なに？」

「次の町までどのくらいか、わかるか？」

「えっと……ちょっと待ってね。アイテム、取り出す」

地図を取り出して開く。え、あたしたちがいるのはこの辺りで次の町がここだから……。

「よかった。けっこう近いわよ。そうね……オオイグを最高速で飛ばせば一日かからないと思う。よかったわね恋ちゃん」

「ああ……、そうじゃな。よかった……」

恋ちゃんは弱々しく笑って、あたしたち全員を見回した。

「次の町にいたら……そこでお別れじゃ」

十七日目(2)

……………やっぱり。

“次の町についたらお別れ”恋ちゃんの言葉にあたし以外は言葉を失っていた。

「ど……して……」

最初に口を開いたのはリリーだった。目から涙がぼろぼろ溢れ出す。

「や……ぼく……やだよ……おわかれ……やだ……おか……さあん……」

「……子供にこんな泣かせ方をするなど、何年生きてもこれだけは未熟じゃな。わしも」

恋ちゃんは片手でリリーの頭に手をまわすとぽふっと自分の胸に抱き寄せた。リリーの頭を優しく撫でながら、恋ちゃんは顔を上げる。

「……見ての通りの身体じゃ。おそらく、これ以上の旅にはたえられん。じゃから次の町で適当に居着ける場所を見つけたらそこに置いていってくれ。足手まといにはなりたくないからのう」

「そ、そんな！？ な、なら私が諦めます！ 元々私が『故郷に帰りたい』なんて言い出したから始まった旅なんですから……」

「ばかもん」

恋ちゃんはフィロちゃんのおでこを少し強めに小突いた。フィロちゃんは短く悲鳴を上げておでこを押さえる。

「ここまで来てやめる？ わしらのここまでの旅を徒労にするつもりか？ そんなことはわしが許さん。……それに」

恋ちゃんはリリーを離すと襟元を緩め、自分ですらして肩の部分を出した。腕を切ったところから、血管状に黒い線が肩まで伸びていた。

「……それは？」

りゅう君が目を鋭くした。

「……わしは隠し事は嫌いじゃし苦手での。……どうやらわしの身体はあのねぷりかというやつ有能力に毒されておるらしい。……自分でわかる。身体にゆっくりと毒のようなものが拡がっていくのがの。……おそらく、もう長くはないじゃろうしこの身体も次第に衰えていくじゃろう。ここまでの試練を経験しとる神埼と浅倉ならわかるじゃろう？ あと試練は三回、足手まといを抱える余裕はあるまい」

……誰も何も言わなかった。……うん、恋ちゃんの言う通りだ。試練はあと三回も残ってる。それも回数を重ねる度に難易度が上がってる。足手まといになった恋ちゃんを抱えてる余裕なんて全くない。恋ちゃんが大怪我した時から考えてたことだ。

……ちよつと悲しいけど、仕方ないよね？ 仕方ないんだよね？

「……それって次の試練で自分が死ぬの覚悟ってことだね」

沈黙を真つ先に破つたのはイシュトだった。呆れたような、怒つてゐるような、そんな表情だ。前髪をかき上げてため息を吐く。

「……なんでそんなあつさり自分を殺せるのさ。頭おかしいんじゃないの？」

「……好きな者、愛する者が死ぬのを見たくないからじゃよ」

自嘲気味に笑つて恋ちゃんは答える。

「長く生きておるとのう。愛する者の死に目に合うことが多くなる。……何度経験しても胸が張り裂けそうになる」

……その言葉はすごく共感できる。……お父さんとお母さんが死んだ時、あたしも一緒に死んじゃえばって何度思ったかわからない。

恋ちゃんは肩から力を抜いてりゅう君の方を見た。

「そこにおる神埼はわしの弟子での。わしにとっては息子も同然の可愛い子じゃ。愛してある。もし……この子がわしを庇つて死ぬようなことになればわしは堪えられん。じゃから、わしはわしのためにこの子達と別れる」

「……はあ。よくそんな堂々と人のこと愛してるなんて言えるよね」

「別に隠すこともあるまい。誰かを好き、愛しいと思うことは醜い

「ことではないのじゃからの。隠して後悔するのも自分じゃ」

「……そっか」

イシュトはすつくと立ち上がった。そして恋ちゃんの前で膝をつくと視線を合わせてにっこり笑う。

「……なん むぐっ?!」

イシュトが恋ちゃんを抱きしめてキスした。いや、現在進行形。キスしてる。

「……。…………っ?! …… …… ……っ?!?!?!?!」

恋ちゃんの顔が真っ赤になってじたばたし始める。あまりに突然のことにみんなぼかーんとしてしまつて誰も動けなかった。あたし込みで。………え? ええ?! ええええええ?!

「だ、だ……だめえええ!」

リリーがイシュトを羽交い締めにして無理やりひっぺがした。

恋ちゃんは顔真っ赤で、わなわな震えてる。ちよつと涙目。

「な……な、な、何をしとるんじや貴様は!? ひ、人が真剣な話をしとる時にこんな……」

「あれ? だつて人を好き、愛する気持ちは隠す必要無いんでしょ?」

イシュトはリリーに羽交い締めになされたまま子供らしい満面の笑

みを浮かべる。

「僕、君のこと大好きだよ？ 初めて会って、戦った時から気になった。もこお姉ちゃんに化けて君のこと知って可愛いと思った。試験の時に君に脅されて凄いと思った。そして僕を命懸けで助けてくれて大好きになった。うん、僕は君のことが大好きだ！」

……まさかの告白タイム。普段めったなことじゃ動じない恋ちゃんが口をパクパクさせてる。

「な……な……なん……い、いやその……じゃな……いや、え……あ……じゃ、じゃからと言ってな、いきなり接吻などは……」

「あ、そつかごめん。こういうのは順序っていうのが大切なんだよね？ じゃあ今度一緒にデートしようで、手を繋いでまたキスしようよ」

「……………」

恋ちゃんは頭を抱えてしまった。イシュトはクスクス笑ってそれを見ている。さっきまでの重い空気どこ行った？ なんかもう全部台無しにされたような……。けど可愛いわねこの二人……。

「それに、僕には君を治せる当てがある」

「……………なに？」

恋ちゃんの表情が変わった。イシュトはニツと笑う。

「ねえ恋ちゃん。僕と一緒に来ない？ 僕ならきつと君を助けられる。きつと君を護り通せる」

「……おい」

これまで黙っていたりゆう君が口を開いた。少し強い力でイシュトの肩を掴む。

「治せるって……具体的にはどうする気だ？ そんな言葉だけじゃとつてい信じられないぞ？」

「教えない」

「おい？」

この状況で即答！？ 鋭く睨み付けるりゆう君にイシュトはにっこり笑い返す。

「だって、言わなくても止められるだろうけど、言ったらたぶん『やめろ』って邪魔されるもん。……まあ邪魔されても瞬殺するけどさ、恋ちゃんの仲間はあまり手を出したくないしね」

ちよ？！ それってほとんど脅迫じゃない？！ というか言ったら邪魔されるって何するつもり？！

「……………行くっ」

恋ちゃんが静かに答えた。は？！ 今なんて？ なんで今の流れで？！ 思わず恋ちゃんを見る。

「どうせ他に当ても無いんじゃない。治せる可能性があるというなら行かぬ理由もあるまい？」

「い……いやそりゃそうかもしれないけど……」

「……納得してくれぬか？」

恋ちゃんはあたしをじっと見る。何か訴えるような　　そうか。

「……そうだね。治せる可能性が有るなら行くべきだよな」

「もこ姉?!」

恋ちゃんはたぶん、あたし達と別れる口実が欲しいんだ。

ああは言ってたけど、このままだとフィロちゃんやリリーは確実に恋ちゃんと一緒にいようとするのはずだ。

けど、恋ちゃんの言う通りそれだと今後の試練で恋ちゃんは足手まといになる。それを恋ちゃんは一番嫌がってる。

イシュトは性格はともかく、強い。嘘を言ってるようにも見えないし、恋ちゃんを本当に護ってくれるっていうならかなり頼りになる。おまけにそれで恋ちゃんが治るって言うなら万々歳だ。

……まあ、かなり怪しいけど。

イシュトは面倒臭そうにため息をつく。視線で人が殺せたらって思っただけで自分を睨むリリーを見てにへらと笑った。

「ま、本人が来るって言ってるんだから決定だね　それじゃあ……うん。メリウスが使おうとした転送魔法陣を書き換えて使うから……今夜の11時半出発で！　それまでにお別れしといてね」

明るくそう言つと、イシュトはリリーの手をすりと抜けてテントの出口へ向かう。と、りゅう君の横を通り過ぎるところで足を止めた。

「恋ちゃんの大好きなりゅう君に一つ、いいこと教えてあげるよ」

「……なんだよ？」

イシュトはチラツとあたしの方を見た。

「僕がもお姉ちゃんを演じている時に言った言葉、たとえばあの時あの場所にいたのが本人だったとしても同じことを言ったはずだよ」

「……なに？」

りゅう君は何かに動揺したようだった。え？ なに？ なに言われたの？

「使ったからわかるよ。あのスキル、相当やばい。なんとかしないかどうかにもならなくなるかもよ」

それだけ言つて、イシュトはテントから出ていった。

十七日目(3)

side 赤川 恋次

……情けない。

わしの胸に顔を埋めて泣いておるリリーを見ながら心底そう思った。

別れは今日の日付が変わる前。わしはイシュトと一緒にいくことになった。

……リリーは神埼達と一緒にいることになった。ずっとわしと一緒にイシュトについていくと言っておったが、先程ようやく説得が終わったところじゃ。

……本当に情けない。どの口で『親になってやる。護ってやる』などと言えたものか。

「ねえ……おかあさん……」

「ん？ なんじゃ、リリー」

「頭……なでなでして……」

「む。しかしお前は髪を撫でられるのは嫌がっておらんかったか？」

「いいから……」

言われた通りに頭を撫でてやる。少し濡れたような、冷たい感触じゃった。

リリーはキュッと目をつむってわしにしがみつく。

「……ねえ」

「ん？」

「ほんとうに……行っちゃうの……？」

「……うむ」

「ぼくも行っちゃ……だめ……？」

「……さっきも言ったじゃろう？」

……イシュトの口振りからして、おそらくイシュトと一緒に行くことは相当に危険なことなのじゃろう。……今のわしにこの子を護る力は無い。

それに、わしが抜けた後の神埼達の中で一番強いのはおそらくこの子じゃ。神埼はあの体たらく。浅倉も頭は回るが強いわけでは無い。

正直なところフィロとこの子の方が二人より遥かに強い。

……マキナのゲームなどというろくでもないものに巻き込んでおいて神埼達を護って欲しいなど……卑怯にもほどがあるな。

自分で切った腕と、力の入らぬ手を見る。

自由にならぬこの身が怨めしい。ため息が自然と零れた。……いや、贅沢じゃなこんなことを思うのは。……まだ愛する者を抱きし

めることはできる。

ならばせめて今は、今だけでも……。

「師匠、入っていいですか？」

リリーが寝入ってしまった頃。テントの外から神埼の声が聞こえた。

「……かまわん。じゃが静かにな。リリーが寝ておる」

「はい。失礼します。……大丈夫ですか？」

入ってきた神埼は何やら神妙な面持ちじゃった。

「体の方は相変わらずじゃな。……神埼。浅倉とフィロはどうしておる？」

「イシュトが転送魔法陣を書き換えるのを手伝ってます。フィロはちよつとでも責任を取るうとして。……もこ姉は……『面白そうだから』……と」

「訪ねて来たのはそのことか？」

「……はい。その……どう思います？ もこ姉のこと……」

「お前はどっと思っておるんじゃ？」

返ってくる言葉がわかっていて、あえてそう問う。神埼はしばらくの間押し黙った。

「イシュトの言ってた通り異常……だと思えます」

神埼は慎重に言葉を選びながら続ける。

「俺の知ってる昔のもこ姉は……元気だけど自分がやったことで誰かが怪我したりしたら凄く気にして、それをずっと引きずるような性格でした。実際、この世界で再会したばかりの頃のもこ姉も、俺を怪我させた時は少し精神的に不安定になってましたし。それが今は……」

「やはりイシュトの言った通り【ゲーム脳】の影響が出ていると？」

「はい……」

それは常々思っていた。わしや神埼は元の世界にいた頃から精神鍛練を積んでおったからここまでこの世界にも適応できたのじやろう。じゃが浅倉の変化は……劇的すぎる。

あまりにも何事に対しても冷静過ぎ、あまりにも……冷淡過ぎる。先日の試練の時も何の躊躇も無く、一度イシュトを殺す作戦を提案しておった。例え復活することがわかっていたとしても、それを平然と提案できる人間などめったとない。

それにイシュトも……当然ながら自分が死ぬ作戦を渋っていたが、浅倉からゲーム脳のスキルを受け取った途端、ためらい無く浅倉の作戦を実行した。

まるで現実を現実と見ておらんような……現実を小説や何かの中

のことと見ているような……そんな感じじゃった。おそらく神崎もそれを感じたのじゃろう。

「……マキナ。出てきたらどうじゃ？」

『えっ?! なんでバレたの?!』

まるでまぶたをあけるように、ぐにやりと空間が開いてそこから白いマキナが顔を出した。珍しく驚いたような表情をしておる。神崎もポカンと口を開けていた。

「全然気付かなかった……」

『いや気付けるはず無いんだけど？ 気配完璧に消滅させてたはずだし』

「気配は消すものでは無く溶け込ませるものじゃよ。草だろつと虫だろつとそこには気配がある。じゃがお前の周りだけ“気配の無い何か”があるようにぽっかりと気配の穴が空いておった。これまでもちよくちよくわしらを見ておったじゃろう？」

マキナは『恋ちゃんリアルニュータイプかなんか?』などと呟いて苦笑いする。……にゅーたいぷ? まあいい。

「で、教えてくれんか? 浅倉のゲーム脳とやらは実際、どうなんじゃ?」

『んとね〜。だいたい二人が想像した通りだよ』

マキナは開いた空間の縁に頬杖をついて、どこからか取り出した

煎餅をかじり始める。神埼はいつものことながら少し呆れ気味にマキナを見ていた。

「…………元に戻せないのか？」

「いんや？ 一応りゆう君が【ゲーム脳】をもちちゃんに対する脅威だと考えてるなら【過守護】で打ち消せるよ。けどそれはやめた方がいいかな」

そう言いながらマキナは熱い茶を一口すすする。

「ぶつちやけて言うと元のもこちゃんの精神力じゃ、この先耐えられない。というか精神力が強かったら【ゲーム脳】の影響ここまで受けないよ」

「…………どういうことだ？」

「そのまんま。精神力が強い人ならそれでゲーム脳の悪影響は抑え込めるの、逆に抑え込めてないってことはもこちゃんの精神力が弱いから。二回目の試練の時、ぼろぼろになった精神をゲーム脳で無理矢理縫い合わせたようなもんだったからね……。…………ほっとくのが一番じゃない？ 無理に何とかして自滅したら元も子も無いでしょ？ 本人の精神力が上がれば自然と悪影響も無くなってくから」

…………ふむ。言ってることは無責任きわまりないが一理有るか。

「……………いったんは様子を見るべき……………かの？」

神埼も頷く。マキナは旨そうに茶を飲み干すとふうっと一息つい

た。

『もういいよね？ 私帰るよー』

「ああ待て、一つ言っていないことがある」

『なによー。私もあまり話してるのまずいんだって。鼻屑し過ぎって周りから睨まれてるんだから』

ぶつと頬を膨らませるマキナ。わしはそれに対して姿勢を正した。

「……先日のこと、礼を言う」

『ほえ？』

マキナはきよとんとして目をぱちくりさせた。答えを求めるように神埼を見て、もう一度わしを見る。

「他のマキナからそのように批判されてまでわしを助けてくれたこと、感謝してある。……ありがとう」

マキナは目をぱちぱちさせる。何を言われたかわからないかのようにししばかーんとし、急に顔を赤くした。目が右往左往し始める。

『い、いや別に……え……あ、ほら！ あれは……えと。あくまで友達のリッチちゃんのためにやったことだし？ いやというか私はたまたまタイミング良くブースト薬あげただけで鼻屑じゃないし？』

「おお、リリーを友達と言ってくれるか。ありがとっ、これからも仲良くしてやってくれ」

『だ、だからっ　っ!?!』

ボタンと、開いていた空間が閉じた。白い髪の毛が挟まって小さな悲鳴が聞こえた。思わずくっくっくと声を殺して笑ってしまった。

「……どうしたんだあいつ急に？」

「いや、なかなか可愛いらしいところもあるではないか」

……あんな顔ができるのじゃな、あやつも。

……もしマキナがマキナとして生まれておらんかったら……、ただの普通の少女として生まれていたら。あの子もリリー達と同じように笑えたのじゃろうか……？

十七、二十一日目（おまけ…とある幽霊少女の話）（前書き）

書き忘れてたけど一つ前の話で二章の本編は終わり、ちよいとおまけを挟んで三章に移ります。

書き初めて約半年………思えば遠くまで来たものだ

ちよいと仕事が忙しいんで更新遅いかもですけど、これからもよろしく願います！ m（――） m

十七、二十一日目（おまけ：とある幽霊少女の話）

「うーらめーしゃー」

「ぎゃあああああっ?!」

とある街の暗い夜道。悲鳴を上げて逃げていく男の後ろ姿を見ながらその少女は「くひひっ」といたずらっ子のような笑みを浮かべた。

白っぽい半透明の体に白い着物。足は無く、エクトプラズム状になっていてふわふわと宙に浮いている。

彼女は幽霊だ。

ただ彼女の場合、死んで怨みを残したために幽霊になったなどの理由は無く、この世界で目覚めた時から幽霊。この世界に呼び出され、“幽霊”という種族としてスタートしたプレイヤーの一人だ。

さて、彼女がなぜ人を驚かせていたかと言うと、本人の趣味……というのもし少し有るが生きるための糧を得るためだ。種族としての幽霊は魂や人の感情で自身を構成しており、この世に存在し続けるためには食事するように他人の魂や感情を食べ続ける必要がある。

方法として、魂を食べる場合には基本的に他人に憑依し、その状態でさらに他人から口移しに魂を吸いとるという方法をとる。

要するに誰かの体を一時的に乗っ取ってさらに他の誰かにキスして魂を食べるのだ。

ただこの方法、乗っ取られる方にはたまったものでは無く、特に女性の場合は好きでもない相手にキスする苦痛、さらにはキスすることにより興奮した相手が襲い掛かってくることもあったため、さすがに悪いと思った彼女は最近ではもっぱら感情の方を食べている。

感情の食べ方は簡単で、人が強い感情を発すればそれを食べることができる。

つまりは脅かしたり怖がらせたりすればいいのだ。

こちらは本人の趣味も兼ねられるのでなかなか楽しめるのだが、魂を直接食べるよりはかなり数をこなさなければならぬ。

「それに味が今一つ……」

回収した恐怖の感情をむぐむぐと頬張りながら少女は呟く。

「うーん、やっぱり感情だと美味しくないねー魂食べたいなー。あゝ、あの人とまた会いたい……」

少女は一人呟きながらふわふわと路地の中を漂っていく。

彼女の言う“あの人”とは過去唯一、自分から魂を食べさせてくれた人だ。

しかもその魂の味が絶品で、他のどの魂でもそれと比べると見劣りしてしまう。

「たしか……りゅう君って呼ばれてたっけ？ 良かったなー、あの人がすごく熱くて大きくて……。一口食べただけでこうやって人の形とれるぐらいレベルアップしたし……」

ぶつぶつ呟きながら漂っていく。別に壁にぶつかってもすり抜けるので前を気にする必要もない。……情事の最中にいきなり部屋を幽霊に横断されたカップルにはたまったものでは無かったが。

「そういえばなんか女の子だらけのハーレムパーティーだったけど、あれ全部恋人だったりするのかな？　もしかしてそういう能力？　だったら私も加えてくれないかな？　そうすれば魂食べ放題！　くひひ　とりあえず次会ったら背後霊にでもなっっちゃうかな」

そうやって悪巧みをしている間に地面に十字の碑が立ち並ぶ墓地についた。ここは彼女が最近根城にしている場所だ。静かで何故か少女にとっては妙に居心地が良く。墓場に幽霊が現れたからといってどうしようとする輩もない。そして。

「リカちゃん。どこー？　返事してー」

「……」

墓場の一角から消え入りそうな程小さな声が聞こえた。少女がそちらに行くと　やや黄色がかった髪とドレスを着たマキナそっくりの少女“レプリカ”が朝別れた時とまったく同じ体勢で座っていた。

少女はそんなレプリカを見て苦笑いする。

「ねえリカちゃん。確かに『ここでじっとしてて』って言ったけど少しは動いてもいいんだよ？」

少女がそう言うとレプリカは頷いて手をブンブン振り回す。

三回目の試練。あらゆるものを問答無用で殺せるレプリカとの戦いは少女にとっては欠伸が出るほど簡単なものだった。

そもそもすでに死んでいる幽霊を殺せる訳もなく。少女はとりあえず時間切れまでレプリカに憑いて試練をクリアした。

その後、マキナが自由にしていっていいと言ってレプリカを置いていったので、誰が引き取るかという話になったのだが、「自分が引き取る」と言う男達の鼻息がやたら荒かったことと、いつでも憑依できる体があれば便利だろうからと少女が引き取った。

が、便利どころではなかった。

レプリカは言われたことは何も言わずに必ず従うのだが、それが度を過ぎるのだ。

動くなと言えば丸一日でも微動だにしない。寝ると言えば起きると言うまで絶対に起きない。おそらく息をするなと言えば死ぬまでしないだろう。

おまけに基本的に言われたことしかせず、トイレすらせずにそのまま漏らすようなレベルだ。（これらは“最低限自分のことは自分で”という命令で解決したが）

そして……こちらはレプリカのせいでは無いのだから……可愛すぎた。そう、それが一番の問題だった。

この世界の治安は地域にもよるが元の世界と比べるとすごい悪い。夜道を女性一人で歩けば誰に何をされようと文句は言えないレベルだ。

そしてレプリカは誰から見ても人間離れして可愛かった。まるで作り物のような完璧な容姿は同性である少女から見てもつい見とれてしまうほどだ。

……もちろん変質者や人浚いの目も大いに引く。

こんな墓場に根城を構えたのもレプリカを人目につけないためと
いうのが大きい。

しかし少女はレプリカの世話を苦とは思わなかった。

なんだかんだと言いながらレプリカは可愛かったし、幽霊である自分を見ても平気なレプリカには癒されていた。

こんな生活が続くのも悪くない。少女はそう思っていたのだが……その生活は今日、木っ端微塵に碎かれることになる。

「それじゃ、私はお腹いっぱいご飯食べてきたし、次はリカちゃんもご飯食べに行こうか？ ほら立って」

少女の言うご飯とは、少女にとっては感情や魂。レプリカにとっては料理店の残飯等だ。

「それじゃ行こうか」

少女はレプリカに体を重ね、憑依する。光の無かったレプリカの目に光が灯り、自分の体を慣らすように準備体操をする。

「くぅ〜！ 一日中動いてなかったから関節ガチガチ〜！ ……おっ、」

レプリカに憑依した少女は体を捻ったところで動きを止めた。人が来たのだ。

さっ、と墓石の後ろに隠れて様子を伺う。

「……………あれ、男？ 女？」

やって来たのは若い人間が一人。フードを被り、小さめの棺桶をずるずる引きずっている。頭にはフードを被っていて、そこから覗く顔は実に中性的な顔立ちだった。

「……………女の子？ いや……………魂の色からして男の子よね？ 棺桶持ってるし葬儀屋さんかな？ ……まあそれはどうでもいいや」

少女は物陰からその青年（？）の様子を見ながらジュルリと涎を垂らす。

「美味しそう……………」

少女は見ただけである程度人の魂の質を見極めることができるのだが、その青年の魂は以前食べた“りゅう君”に勝るとも劣らない質だったのだ。少女は涎をふきふき様子を伺う。

「これは……………行くしかない！」

魂を食べたいなら生身の人間に憑依して相手にキスすることが必要だ。魂の色を見た限り相手は男。“こんなに可愛いレプリカの顔でキスをせがめばロリコンだろうと無かるうといつかは折れるに違いない”。少女はそう読んだ。

「こんばんは、いい夜ですね」

「ああ、こんばんは」

少女が近付くと驚く様子もなく青年はにこっと笑い返す。声まで中性的だ。

「え〜つと。……あなたを見て一目惚れしてしまいました。だから……キスさせてください！」

ドストレート。しかし青年は眉一つ動かさず「ああ、いいよ」と答える。少女は「男ってチョロい」などと愚かにも心の中でガッツポーズをとっていた。

少女はスキップしそうな勢いで青年に近付いていき「よっ」と頭にお札を貼られた。

するとレプリカの体は操り糸が切れた人形のように崩れ落ち、幽体の少女はレプリカの外に弾き出された。

「へ？ え？ ちょ？」

幽体のはずの少女の額にお札が貼られている。青年はにこにこ笑う。

「はじめまして。僕の名前は伊集院。ゲームの参加者の一人でスキルは【死霊使い（ネクロマンサー）】死霊やアンデットを自由に使用する能力だよ。ちょうど強そうな死霊を探していてね、君の噂を聞いて来たんだ」

「え？ いやちょよ？！ 死霊使い?!」

「うん。じゃあ行くうか。今日から君は僕のものだ」

青年はすたすた歩き出す。少女もその後についてふわふわ飛んでいく。

「ちよっ?! か、体が勝手に?!」

「抵抗しても無駄だよ。僕的能力でね、僕のお札を貼られた死霊は僕には絶対に逆らえない」

「ちよっ?!? や……う、うらめしやああああっ!?!?」

暗い空に、幽霊少女の悲鳴がこだました。

十七日目〜二十一日目（おまけ…とある切り裂き魔のお話）

空には二つの赤い月が浮かんでいる。赤い月明かりは地上を赤黒く照らし、まるで森一面に血をぶちまけたような色に染める。

男はその風景が好きだった。

「ああ……美しい……」

月を見上げる背の高い細身の外人。短い金髪に赤いレンズの色眼鏡、古びたスーツを着こなす紳士然とした出で立ちのゲイツ・リッパ―は万感の想いを込めて呟いた。

「唯一残念なのは、この美しい風景に添えるのがケダモノの血と言うことでしょうか？ ……さあ、アリスさん」

ゲイツは背中合わせに立っていた少女に呟いた。血がこびりつき、ほつれた赤髪に血で染め上げられたボロを華奢な体に巻いた、アリスと呼ばれた少女はゆっくりと視線を上げる。

目には光が無く。身体中に付いた爪で引っ搔かれたような痕が痛々しい。その少女の生気の無い目に異形の怪物“オーク”の姿が映る。

豚のような顔に普通の人間より一回り大きな体。その体には獣から剥ぎ取った毛皮で作った服らしきものを巻き付けている。

人間からはモンスターとして扱われる“亜人”の中でもオークは特に代表的かつ恐ろしい種族だ。残虐でズル賢く、しばしば集団で村などを襲い人間を食らう。

また、極めて性欲が強いことでも知られ、オークに捕らえられた女性は狂い死ぬことができるまで延々と彼らの慰み物にされることになると言われている。

アリスはゆっくりと視線を動かした。自分とゲイツを取り囲むオークの群れ。おそらく30頭は下らないだろう。

「……………クハッ」

少女の目に光が灯った。にいと口辺が引き上げられ、にたりと笑みを作る。

「クヒッ！　クハ、クハハハ！　オーク！　オーク！　オーク！　オーク！　オーク！！　ヒハハハッ！！」

アリスは狂った笑い声を上げると目を剥き、正面にいたオーク目掛けて駆け出した。オークが斧を構えるのを見ても速度を緩めることはない。振り下ろされた斧の一撃を難なく避け、懐に飛び込んだ。

「スキル【フルコンボ】！　30コンボ！！」

アリスはオークの胸に拳を打ち込む。次の瞬間、アリスが拳を当てた場所に瞬間的に30回の衝撃が走った。衝撃は釘を打つようにオークの胸に突き刺さっていき、胸に穴を穿つ。アリスの体が返り血で真っ赤に汚れた。

「クハツ！ 嬉しい？ また私を汚せたよ？ ねえ嬉しい！？ 良かったねえー、あなたたち私を汚すの大好きだもんねー！？ だってあんな楽しそうに何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も汚して汚して汚して汚して汚して汚して汚して汚して汚して汚して汚して汚して汚したもんねえっ？！」

倒れたオークの頭を叩き潰すとアリスはすぐさま次のオークに向かった。「5コンボ」そう呟くと同時に地面を蹴る。一瞬で加速し、オークの顔面を拳で砕いた。返り血がまたアリスの身体を汚していく。

「また私を汚せたよ！？ 嬉しい？ 嬉しいんでしょ！？ 私は優しい子だからさあ……もつともつともつともつともつともつともつともつと！！ 汚させてあげる！！ ヒヒツ……ヒヒヒヒヒ」

アリスはさらに他のオークに向かっていく。ゲイツはそのアリスに自身の腕から取り出した鉞を放った。アリスはその鉞を掴むとオークの集団の中に飛び込み、血の華で自らを汚していく。

「……………素晴らしい」

鉞を振るい、縦横無尽に暴れ狂うアリスを見ながら、うつとりしたような目でゲイツは呟いた。後ろから迫ってきたオークが自分の背中から生えた無数の槍に貫かれるのを見ようともしない。

「邪魔しないでいただきたいですねえ。……血染めの舞台上で踊り狂う壊れた人形。これぞ芸術だ。私はこれを見たいがためにあなたたちの相手をしているのですから」

ゲイツの両手に大型のナイフが現れる。

「さあ、私も……狂気と狂喜の宴を楽しみましょう」

数分後には周囲に動くオークの影は無くなっていった。アリスは肉塊となったオークの死体を優しく抱き上げるとその血肉を自身に塗りたくった。

「ねえゲイツ見て、私……また汚れたよ……」

血の滴る自分の腕を見ながら恍惚の表情でアリスは呟いた。

「それでね、彼は『大丈夫？』って言うて私をお風呂で綺麗にしてくれるの。フッフ……でね、そしたら彼にまた汚させてあげるの。何度も何度でも、身体の中まで真っ白に汚させてあげるの……フッフッフッフ」

血にまみれながら妖艶に笑うアリスをゲイツは満足気に見つめる。アリスは首をカクンと傾けてゲイツを見た。

「ねえゲイツ……彼、喜んでくれるかなあ……？」

「ええ、きっと」

「そう？ そうだよな？ 喜んでくれるよね？ 私ね、彼が喜んでくれるなら何でもするの。何でもさせてあげるの。いっぱいいっぱいっばいっばいっばい汚させてあげるの。……けどね」

アリスは急に表情を曇らせた。大人にすぎる子供のような目でゲ

イツを見つめる。

「もし……もしもね。彼が私に、私が彼に何をしても喜ばなくなったら……私が生きる意味が無くなったその時は……」

「ええもちろん。その時には私が貴女を殺してあげましょう。壊れた人形の最期を飾るにふさわしい死と、永久の安らぎを約束しましょう」

ゲイツの言葉にようやくアリスは子供らしい笑顔を浮かべた。

「ありがとう。だからゲイツのこと、彼の次ぐらいに好きだよ」

そう言って立ち上がったアリスの肩から、身体に巻いていた血濡れのボロ布が滑り落ちた。赤い月明かりの中、血と傷にまみれた身体がさらされる。

「……美しい」

ゲイツはほうと感嘆の吐息を洩らすとアリスに近付き、その身体に撫でるように触れた。

「……ねえゲイツ。ゲイツも私を汚したい？ ゲイツなら……少しぐらい、汚してくれていいよ？」

「せっかくですが、私は美しいものは見て愛でる主義でしてねえ。貴女を欲望の捌け口にすることは私の主義に反します」

「そう？ 残念……だわ……」

アリスの目から再び生気が失われていく。

ゲイツはアリスの足元に落ちたボロ布を拾い上げるとアリスの肩にかけ、二人でどこかに向けて歩き出した。

ここは魔界。

赤い二つの月が照らす。悪と魔と狂気の楽園である。

「……………まだかろう？」

森の真ん中に建てられた小さな家の中で赤川 恋二……………いや、あえて恋と呼んでおこう。恋はイシュトが淹れてくれた紅茶と茶菓子を味わいながら窓際の椅子から外を眺めていた。

外の風景は今までの場所とはまったく違う 空に赤い二つの月が浮かび、それに照らされた全てが血のような色に彩られる深紅の世界だ。イシュトによるとここは“魔界”という場所らしい。

竜斗達と別れ、イシュトに背負われて転送魔法陣で移動した先がここだった。

恋は窓から室内へと視線を移す。フローリングの床に小洒落た家具。清潔なクロスが敷かれたテーブルには紅茶と茶菓子が置かれている。これらは全てイシュトが【即興劇】のスキルで造り上げた物らしい。（元々はぼろぼろで、人骨が転がっているような小屋だったそうだ）

「何とも便利な能力じゃな……………」

恋は一人呟くと空になった紅茶を入れようとポットを手に取る。

「……………む」

ポットを持つ手がふるふると震えた。重い。片腕を失ったこととレプリカの能力に侵されたことは想像以上に恋の体力を奪っていた。かつては無双を誇っていた彼女も、今では一人で普通の生活をすることすら危うい。ため息をつくと諦めてポットを離す。

「……………むむう」

恋は少々不安を感じた。こんな状態でモンスターに襲われでもしたらひとたまりも無い。おまけにイシュトが『魔界は本っ当に危険なんだ。普通の子供が何の用意も無しに一人で出歩いたら10分以内に死ぬか浚われてるか犯されてるぐらい』などと言っていたものだから気が気ではない。

ちなみにそのイシュトは恋を治療する“素材”や薬に栄養のある食べ物。それに仲間を呼びに行く、と30分ほど前に出かけて行った。

「……………はよう帰ってこん、ひゃっ?!」

近くの木からカラスが飛び立った音に驚き、変な声を上げて椅子から滑り落ちてしまった。しこたま打ち付けた尻を擦りながら、つい誰にも見られていないか周りを見回す。

「うつうつ……………早く帰ってこんかあ……………」

軽く泣きそうになりながら恋は椅子に座り直す。

本人はあまり自覚していなかったがその様子は一人で留守番するのを不安がる幼い少女そのものだった。

コンコンコン

… 玄関のドアをノックする音が聞こえた。恋の表情が明るくなり…
… すぐに凍り付いた。

(ノックの回数が……違う?!)

イシュトには『僕が帰ってきたら二回、一回、三回のリズムでノックするからそれ以外では絶対に開けないこと』と念を押されていたのだ。

「イシュトでは……無いのか……?」

刀に手を伸ばす。だが今となっては振り回すこともできず、いざというときには威嚇ぐらいにしか使えない。

ドアをノックする音がドン ドンという乱暴な音に変わった。

「ひっ……」

ドアに体当たりしている。重い音が響くたびにドアがミシミシと悲鳴を上げる。

恋は咄嗟に部屋の角に置いてあったベッドの下にもぐり込んだ。その直後に玄関のドアが破られた。

ずかずかと入って来たのは……豚のような頭に大柄な人間の身体という異形の怪物二匹だった。恋は知るよしも無かったが“オーク”と呼ばれる亜人だ。

「なんじゃ……あやつら……」

ベッドの下から様子を伺っていた恋は気配を殺しながら二匹のオークを観察する。

大柄な体躯に並みの人間の倍の太さは有りそうな腕。醜悪な豚の頭。そして 獣欲と性欲にまみれた目。

恋はひたすら息を殺した。見つければ何をされるかわからない……いや、何をされるか察しがつくからなお恐ろしい。

二匹のオークはテーブルに置かれていた茶菓子をわしづかみにするとそれを食べるように食べる。さらに台所まで行くとそこらにあった食材を手当たり次第に食い荒らし始める。

その様子はまるで飢えた豚。見ているだけで気分を害するような光景だった。

ぴくりとオークの一匹が何かに反応した。ふごふごと鼻を鳴らすとゆっくり振り返り……恋と目が合った。

「つ……」

見つかったと判断した瞬間、恋はベッドの下から飛び出して出口へ向かった。

だが弱った恋の脚力では間に合わない。オークは見た目に似合わない素早さで恋の前に回ると巨大な拳を振るった。

恋の腹にオークの拳がめり込む。肺から一気に空気が押し出された。

「か……はっ、こぼ……」

崩れ落ち、まともにも息もできない恋を二匹のオークは見下ろす。そして二匹は顔を見合せ下卑た笑みを浮かべた。

「あぐつ?!」

オークは恋の髪を掴んで無理やり立たせた。そして乱暴に突き飛ばし、ベッドの上に押し倒した。ギシギシとベッドが軋む。

「やつ……やめ……」

オークが何をしようとしているかすぐにわかった。一匹が恋の着物を力任せに引きちぎる。そしてもう一匹のオークが自分の、獣の皮で作られた腰巻きをめくり上げる。恋は自分の目に映ったものに激しい恐怖心を感じた。

「い、いやじゃ! 誰か……誰か!」

必死に叫ぶ。だがそれに応えるものはいない。

じたばたともかく恋に手を焼いたのかオークは恋の身体を持ち上げると、うつ伏せにして上半身だけをベッドの上に乗せた。頭をベッドに押さえつけられ、もはやどうすることもできない。

今までに感じたことがない絶望感が恋の心を満たした。自然と涙がこぼれる。

「クヒッ。ヒヒッ」

不意に笑い声が聞こえた。声は少女の声、だがその笑い声は明らかに正気のものではない。

恋は押さえ付けられたままなんとか目だけ玄関の方に向ける。そこには一人の少女が立っていた。

ほつれた赤髪にボロを華奢な身体に巻き……全身血塗れで焦点の定まらない目で恋を見ている。

「アハツ、アハハハ！ 懐かしいの。ねえあなたあなた、今どんな気持ち？ やっぱ最初は怖い？ それとも楽しみ？ 私の時はねえ、巢に連れていかれて20匹ぐらいに汚されたの……クフフ。ああ……あの時は凄かったなあ……それでね、そこで彼と出会ったの。クフフ……ヒヒツ、ヒハハハ！」

異常なテンションで話しかけて来る少女に恋は目を白黒させる。だがオークの片方が少女に目を付けたのに気づき、ハツと我に返った。

「や、やめんか！ 貴様らの相手はわしがしてやるから！ おぬし！ 早く逃げんか！」

護るべき相手がいることで恋はまともな精神状態を取り戻した。全ての女子供は“赤川 恋二”にとっては護るべき対象だ。たとえ自分の身がどうなっても目の前の少女だけは助けようと声を張り上げる。

だがオークは言葉が通じているのかいないのか、少女に狙いを定め襲い掛かった。

「ああっ！」

恋は悲鳴に近い声を上げた。少女が床に押し倒されあつという間に着ていたボロを剥ぎ取られるのが視界の端に見えた。

そして自分も、着物を引きちぎられる。恋をpushさえ付けていたオークが身体を密着させる。恋は恐怖と嫌悪感にギョツと目を閉じた。

「【フルコンボ】……1000コンボ」

少女の方からぐちゃぐちゃと肉が擦り潰れるような音がした。胸から背中にかけてがほぼミンチ上になったオークが裸の少女の脇に倒れる。

「なあにしてるわけえ!？」

少女はぐりんと目を剥き倒れたオークに視線を向けた。少女の右腕は関節が外れおかしな方向に曲がっている。少女はそれを鈍い音を立てて自分で戻した。オークを睨み付け踏みつける。

「なに勘違いしてるかなあ!？ 私の中まで全部汚していいのは彼だけ! 私が全部捧げるのは彼だけなの!! フヒツ……けど安心してえ……? あなたにもちゃんと汚させてあげるからあ………50コンボ」

ほんの僅かに息の有ったオークの頭部を、少女はなんのためらいもなく踏み潰した。一瞬でオークの顔面に数十回の衝撃が走り、衝撃が走る度に血や骨、ピンクがかかった脳髓が飛び散った。少女はそれを手ですくい、恍惚とした表情でそれに頬擦りする。

恋も、それを押さえ付けていたオークも呆然とその光景を見ていた。少女は視線を恋とオークに向ける。

「あれえ？ どうしたの？ 大丈夫だよ？ 邪魔なんてしないから早くその子を汚して幸せにしてあげなよ？ それとも見られてたらやりにくいの？ じゃあ散歩にでも行ってるね」

少女は平然とそう言うと本当に玄関へと向かっていく。恋の思考が急速に回転しだした。

あの少女は明らかに普通ではない。目の前にいるオークより遥かに危険だろう。関われば死ぬかもしれない。

このまま少女が部屋を出ていくのを見送ればおそらく命の危険はほぼ無い。オークの目的は恋の身体であって命ではなく、恋もその事をなんとなく感じていた。

本来の “赤川 恋二” なら少女を見送っただろう。命の重みを誰よりも知り、どんなことになっても命さえあればどうにでもなると考えている赤川 恋二ならそうした。

だが女としての…… “恋” は全力でこれを拒否した。目の前の怪物に犯されるぐらいなら舌を噛みきって死んでやると本気で思っていた。

二つの気持ちがぶつかり合い混じり合い、そして 「助けて…

…！」

「……あれえ？」

恋の掠れるような声に少女はかくんと人形のように首を傾げた。

「助けて……お願いじゃから……頼む……！」

「んんう？ どうしたのかな、何でかな、わっかんないな？
なんでなんでそんなこと言っちゃうの？ 汚してもらえばいいじやない、身体中べたべたにぐちゃぐちゃに……ヒヒツあっそっか。
怖いんだね？ 大丈夫だよ、最初は痛かったけどお薬もらえば気持ちよくて気持ちよくて死んじゃいそうになっちゃうからさあ……
フフツ、フフツ……ああ懐かしいなあ……」

「い……嫌じゃ……わしは……こんな……こんなやつに……絶対嫌じゃ！」

恋のその言葉に少女は動きを止めた。

「こんなやつは嫌？」

少女は小さく呟くと恋の方に向き直る。じつと恋を見つめた。

「そっか……そっかそっかそっかそっかあ！ あなたも彼が……イシウトが好きなのね！？ 彼以外には汚されたくないんだ！？ うんわかる！ すっごくわかるよその気持ち！」

急に目を爛々と輝かせ始めた少女は「5コンボ」と呟き床を蹴った。瞬間的に床に五回の衝撃が走り少女は爆発的に加速する。

「【フルコンボ】50コンボォ！」

その勢いのままオークに体当たりを食らわす。オークは吹き飛び壁に叩き付けられた。立て続けにその体に衝撃が走り壁にめり込んでいく。

少女は外れた肩を鈍い音をさせて戻しながら恋の方を見ると、くすりと妖艶に笑う。

「私はアリスよ。ねえあなたは？ お名前は？」

「……れ、恋じゃ」

恋にとってはこのあとが問題だった。今、目の前にいる少女アリスは容易く自分を殺す力を持っている。そして明らかに気が触れている。何をきっかけに殺されるかがまったくわからない。

アリスは恋に手を伸ばす。恋は思わず目をつむった。

チュツ

「……っ?!」

唇に感じた柔らかい感触。恋が驚いて目を開けると目の前にアリスの顔があった。

「彼を好きな人は私も好きよ。だってだって、同じ幸せを共有するもの同士だもんね。素敵だよね彼。強くて優しくかわいくてかっ

こよくて明るくて勇気があって行動的で残酷で男の子で黒衣で大鎌で即興劇で私を綺麗にしてくれて汚してくれて……。ほら、一緒にシャワー浴びよう?」

なぜか先程までとは打って変わった、どこかウキウキした口調で喋るアリスに恋は目をぱちくりさせる。

「え……あ、むう? な、なに?」

「彼に汚してもらう前に身体を綺麗にしときましょ。本当は彼に綺麗にしてほしいけど二人もいちゃ大変でしょう? だから私が綺麗にしてあげるの。ウフフフフ……。私って気が利くでしょお? 彼、喜んでくれるかなあ……。さあ、フフ……。ヒヒヒ」

アリスは恋を抱き寄せるとその首筋に舌を這わせた。

「身体中、すみずみまで……。綺麗にしてあげるね」

十七日目〜二十一日目（おまけ…とある少女）？（のお話 2）

「うふふふふ、綺麗な肌……これが彼に汚されるなんてゾクゾクする……」

「ばっ……ばかもん?! ど、どこに触って……ひゃっ?!」

シャワーを浴びながら、恋の肌をアリスが指先で撫でる。

アリスは恋を後ろから抱きしめるように身体を密着させ、舌や指を恋の滑らかな肌に這わせる。

「だっ、だからやめ……あう?! あ……、ひあっ?!」

浴場に響く自分のあられもない声に恋は赤面した。あまりの恥ずかしさに珍しくパニックになる恋をアリスはくすくすと妖艶に笑って後ろから恋をぎゅっと抱きしめる。

「ああ……こんな気持ち初めて……。ほら暴れないで、私が綺麗にしてあげる。いいでしょ? いいよね? 痛くないようにするからさあ」

「わ、わしは女同士でそういうことをする趣味は無い!」

かなり致命的なことを口走った気がするが本人はまるで気付いていない。それにそれどころでもない。

「ふあっ?! ま、まてこら?! ど、どこを……やっ! あくっ
……! あっ……!」

「ウフフ、そつかあ……ここがいいんだあ……ウフフ、ウフフフ
……彼にも教えておくねえ……?」

今まで感じたことの無い感覚に恋は頭がぼんやりし始めていた。
頭をブンブン振ってどうにか理性を保つ。

「わ、わかった……わかったから、お願いじゃから一度離してくれ
……少しのぼせてきて……くらくらする……」

「ああごめんね? かわいい声で鳴くからつい」

アリスが力を弛めた瞬間、恋は全力で逃げ出した。脱衣場に
脱ぎ散らかしてあった着物を掴み、脱兎の勢いで玄関まで走る。

「ウフフフフ、懐かしいなあ。私もこの世界に来たばかりの時、オ
ークと追いかけてこしたっけなあ……フヒッ。立場が逆ねえ……次
は私が汚す番かなあ……ヒヒヒッ」

後ろで聞こえたそんな声に本気で怯えながら恋は着物を羽織り玄
関にあった自分の下駄をはいた。この下駄はただの下駄ではない。
かつて魔王討伐ボーンナスとしてもらった【天狗の下駄】というもの
だ。

効果は魔力を消費することで瞬発力を高めるというもの。体力を
失った恋でもこれならばかなりの速度を出せる。

恋は下駄に魔力を込めた。体が一気に軽くなる感覚。そして全力

で一步を踏み出し 「え？」

玄関先まで来ていたイシュトにもろに突っ込んだ。激突し激しく地面を滑る。巻き上がる砂ぼこり、恋は慌てて身体を起こした。

「つつ……。す、すまんイシュト！ 大丈夫か？」

イシュトは目をぱちくりさせて恋を見上げる。

「……えーと。大丈夫だけど君がそんな積極的ってのには驚いたよ」
「……うん？」

恋はその言葉にハツとした。今の自分の状態を再確認。客観的に見るなら……。イシュトが帰って来た時点で半裸 帰って来たイシュトにタツクルして押し倒す イシュトに半裸で馬乗り……という構図だ。カアツと恋の頬が赤くなる。

「ち、ちちちち違う！ 断じて違う！！ これは……」 「イシュトーッ！……！」

凄まじい勢いでアリスが恋ごとイシュトに覆い被さった。裸で。恋とイシュトを抱きしめながらすりすりイシュトに頬擦りする。

「ああ待ってたよー！ 待ってたんだよイシュトー！！ 私ね、イシュトと離ればなれになってる時はいつもイシュトのこと考えてたんだよ！？ 座ってる時も立ってる時も歩いてる時も寝てる時もご飯の時もトイレの時も汚されてる時もどんな時でもイシュトのこと考えてたんだよ！？ だってイシュトのことが好きだもの！ それだけで私ね、すごく幸せな気持ちになるの。イシュトに汚して欲し

いってきゅんきゅんしてくるの。けどこうやって本当に会えるともう幸せ過ぎて何がなんだかもわからなくなっちゃうけど幸せだからもういいや！ ねえイシュトは離ればなれになってる時私のこと考えてくれてた？ ううん、考えてくれてなくても別に全然いいんだよ？ 今はイシュトは私のこと知ってくれてるもんそれだけで幸せ。けどもしも私のこと少しでも考えてくれたならもう嬉しくて嬉しくて死んじゃいそうなくらい嬉しくて！ ごめんねイシュト、私はこんなに幸せにしてもらってるのに私は私を汚させてあげることしかできなくて。どうやってたら汚させてあげる以上のことができるか考えてるんだけど私バカだから思い付かなくて。だから何かあったら何でも言っつて、イシュトがしたいなら私をバラバラにだっつてしていいから。けどとにかく今は早く汚して欲しいな 早く早く早く」

あまりのどぎつさにさすがの恋も目を白黒させた。イシュトが「うんいいよ、けどちょっと待ってね」と平然と返したのも十分つままなければならぬ台詞なのだがアリスがあまりにもどぎつ過ぎた。

「……ふう、私は少し散歩でもしてた方がいいですかねえ？」

恋達を見ながら、イシュトのそばに立っていたスーツ姿の金髪の紳士然とした男は呟いた。

アリスはそちらにかくんと首を傾げる。

「ごめんねゲイツ。恋はイシュト以外には汚されたく無いんだってそれに今日は私と恋の二人だから時間がかかると思っつ、どこかで時間潰してて」

「なん?! な、な、な……」

声を上げたのは恋だった。自分の知らないところでいつの間にかとんでもないことになっている。

「いえいえ、悦びに乱れる貴女も私には十分魅力的ですよ。……して、彼女が恋さんですか……」

ゲイツと呼ばれた男は恋を……いや、恋の切り落とし、空っぽになつた着物の袖の部分を見る。

「……素晴らしい」

「は？」

うつとりと空っぽの袖を見つめるゲイツに危険なものを感じながら、恋は助けを求めるようにイシュトを見た。

「あ、恋ちゃんほらほら、腕の治療に必要なもの持ってきたよ」

イシュトはそう言って何かが入ったバッグを持ち上げる。

「おおすま……ぎゃあああああっ?!」

イシュトがバッグから取り出したのは……子供の生腕だった。

「魔界の市場で買ってきたんだ。高かったんだよー、人間の女の子の肉って人食い連中にはご馳走らしいからさ。とりあえずこれに【即興劇】を使って君の新しい腕を作っていくね」

腰を抜かしながら、目に涙を浮かべた恋はひくひくとひきつった

笑みを浮かべる。

「もう嫌じゃ……神崎のところへ……帰りたい……」

おまけのおまけ

アリス「イシュトは私のこと好き？ 好きだよな？ 好きなんだよね？ ……嫌いじゃないよね？ 嫌いじゃないんだよね？ ……嫌いになるな……！ 嫌いにならないで……！ お願いだから嫌いに
ならないでください！ 何でもするから！ 何でもしていいから！
もっともつとイシュトが好きになってくれるように頑張るから！
お弁当だつて作るし部屋も掃除するしもつと可愛くなるし夜だつてもつと勉強して頑張るから……！ お願い…… お願いだから嫌いに
ならないでえ……」

イシュト「ん？ 別に嫌いじゃないよー。君といるのけっこう楽しいし」

アリス「……え？ ホントに？ 私のことそんな気持ちになつてくれたの？ ……うふ、うふ……えへへへ。ああ、どうしよう！ 嬉しい！ すつごく嬉しい！ どうしようかなどうすればいいかなこの気持ち！ 幸せ過ぎて幸せ過ぎて変になっちゃいそう！ 私だけこんな幸せな気持ちになっちゃうのがみんなに申し訳なくなっちゃうぐらい！ ねえイシュト？ 私はお礼にどうすればいいかな？ 何をすればいいかな？ この幸せちよつともイシュトにあげたいんだけどイシュトはどうすれば幸せ？ 何をすれば幸せ？ ねえねえ教えて ご飯作る？ お風呂入る？ キスする？ それとも……。ああもう全部私が幸せになることばかりじゃない！ これ以上幸せになったら本当に変になっちゃうよ……。けどイシュトに変にされるなら全然いいや ねえねえどうすればいい？ 私は何を捧げればいい？」

イシュト「んー。じゃあそんだけ言うなら君の全部ちよつだい？」

アリス「私の全部が欲しい？ ……心外だなーシヨツクだなー。私の身体も心も命もとづくにイシュトに全部全部捧げてたのに！ あ！ ごめんね！？ 責めてるわけじゃないの！ なんかもう嬉しくて心がふわふわしちゃってつい調子に乗っちゃったの。ごめんね？ 許して？ ね？ お詫びをしないと……だから何でも言ってる？

お詫びなんだから私のこと気にしなくていいんだよ？ どんなに変なことでも私は全部受け入れるから。それも含めて全部全部好きになるから。ね？ イシュトのいいところも嫌なところも……あ、うん。私にとつては嫌なところなんて一つも無いんだけどね？ とにかく私に全部見せて……それでもつともつと私にイシュトを愛させて。ね？ だって私はイシュトの知ってる部分はもうめいっばい愛しちゃってるもの。イシュトは何が好き？ 何が嫌い？ 趣味は好物は苦手は特技は家族は性癖は？ 私が知らないイシュトを全部全部教えて？」

イシュト「別にこれ以上愛してくれなくていいよー。……それより君のこと話してよ。よく考えたら僕、君のことあんまり知らないし」

アリス「……………ぐす。……………ひつく。あ……………ごめんなさい……………。なんだかもう……………嬉しくて涙が出ちゃって……………。ねえ夢じゃないよね？ ……これって現実なんだよね？ 私、イシュトを愛せて、イシュトに愛されてるんだよね？ ……だってイシュトが私のこと知りたいつてもつと私を愛したいつて……………」

イシュト「……………なんでそうなるの？」

アリス「ああもう夢みたい！ ちょっとほっぺたつねって……………あ！ やっぱり駄目！ ……これでもし本当に夢だったら私悲しくて死んじやうもの！ ……夢でもいい……………私幸せだよ……………ぐすっ、ひつく……………」。

え、えへへ。ごめんね？ けど泣いてる私もイシュトは好きでいてくれるんだよね？ だったらもう少し泣こうかな……？ ねえ……私ずっとずっとイシュトのこと好きだから、イシュトも私のこと好きでいてね？ ね？ お願いだよ？ ずっと愛し合って、死ぬまで愛し合って……ううん。死んでも愛し合ってようね？ 死んでもずっとずっと一緒にいようね？ えと……えと……それで何からしようか……えへへ、ずっと夢見てきたことなのにいざそうなるってんパっちゃって。けど夢じゃないよね？ 夢じゃないといいな。えと、それで……子供は、子供は何人欲しい？」

イシュト「……あ、うん。二人ぐらいでいいんじゃない？」

「二人！ 二人ね！？ うわあよかったあ。私も二人がいいと思ってたの！ 男の子と女の子で、お互いに似てくれたらいいなあ……けどちょっと怖いかも。イシュトが私のことほっといて子供のことばかりになるんじゃないかって……。ううん、そんなこと言っちゃ駄目だね！ 子供は私とイシュトの愛の結晶なんだから！ けど私も愛してね？ 構ってね？ 絶対だよ？ 絶対絶対絶対だよ？……よし、じゃあ今から子供作りしましょう！ 話してたら早く子供が欲しくなっちゃった！ えっと……毎日十回ずつすればきつとすぐよね？ じゃあ今からしようすぐしよう！ うふふ……イシュトの子供……楽しみだなあ……早く早く早く 一秒でも早く子供が見たいの！ だから、ね？ お願い、ここで今すぐ……」

恋「……誰か何とかしてくれ……」

おまけのおまけ（後書き）

二章はこれで終わりですかね〜。

後は軽くスキルの紹介やって三章に行きます。

……で、区切りっていうのと師走で忙しいっていうので次回の更新は一週間から十日後となります。ここままで話のストックほぼ使いきっちゃってf^_^ ;

三章ではもこ以外の各キャラにスポットを当てた話。そして最終章である四章に向けて大きく事態が変わります。おまけで出したキャラも絡んでいきますのでお楽しみに〜。

それでは、年末辺りにまたあいましてよ〜ノシ

マキナのここまでのまとめ（前書き）

皆さんお久しぶりですゼロですノシ

10日ぶりなんでまずまとめから上げました。こうして見るといろいろあったなあ（シミジミ

さて、リアルの方が正月休みに入り、今日からぐーたら生活満喫です

新しいゲームも買ったし大量のおやつにご馳走も準備万端。たぶん仕事初めまで家に引きこもってます（笑）

さて、それではよいお年をノシ

追記 ACV発売まで一ヶ月切ったよ（*^|^*）
体験版も配信されるらしいから一度みんなやってみようぜ

マキナのここまでのまとめ

(閲覧注意です。作品のイメージをぶっ壊す危険があります)

白マキナ「ここまでのまとめ&裏話！ はっじめるよー！！」

もこ「……いきなりなんなのよあんたは……。しかもあたしまでこんなところに呼び出して……」

マキナ「いや〜、ちょっとここまでのおさらいみたいなの挟みたいな〜って話が上から来てさ、もこちゃんにはお相手役になってもらおうかと」

もこ「はあ？ っていうかなんでいきなり……」

マキナ「セロさんの気分と都合と流れです」

もこ「？ セロって誰よ？ とりあえずあたし帰りたいんだけど……」

マキナ「まあまあ。……今度 a t e / z e r のDVD見せてあ

げるから」

もこ「……え？ あれアニメ化したの？」

マキナ「もちちゃんが異世界にいる間にね。今回戦闘シーンとかものすごいよ？ 魔術工房（笑）とか吹いたし（笑）」

もこ「……さあ。気合い入れてやるわよ！」

マキナ「さて、買収が終わったところで、そんなもちちゃん。頼んどいたの出して〜」

もこ「ルールとかね」

ルール：ノルマは一ヶ月間の生存

一ヶ月の間に計六回、各マキナからの試練が有る。タイミングやルールは担当したマキナが決めている。死んだらもちろん失格。

一定レベル毎に白マキナからアイテムや能力等のボーナスが貰える。こちらの内容は白マキナが決める。ただ、白マキナがやんちゃし過ぎたせいで他のマキナからお仕置きされてる間はボーナス配布無し。

一般のプレイヤー以外にPKもプレイヤーキラー参戦している。彼らに与えられた目的はプレイヤーを殺すことで、試練の度に誰かを殺さなければいけない。

プレイヤーの知らないような知識を与えられている上に戦闘力も高いが、知識を刷り込まれた影響で元の世界の記憶はかなり曖昧に

なっている。

NPCはマキナのゲームに関することは知らず、知ることもしかない。ただしマキナの方から巻き込んだ場合は別。

もこ「こんな感じかしら？」

マキナ「OK・OK・お疲れ様。そんじゃここからは私が。ここまでをさらっと振り返ってみましょー」

・もこちゃん奴隷スタート

もこ「……いきなり酷すぎでしょ。目の前であんなことあったし……」

マキナ「たしかエルフ耳の子がおっさんに売られていったのね。……ちなみにあのエルフ耳の子はあの後薬浸けにされて幸せな毎日を送っているようです」

もこ「……絶対幸せじゃないでしょそれ」

マキナ「本人は幸せそうよ？ 精神崩壊してるけど」

もこ「あんだ今、女性読者に全力で引かれてるわよ？」

マキナ「いやいやこんな小説に女性読者なんて……あれ？ なんかメールが……」女性読者がいるの確認してるから自重しろ』？ ……

…「ごめんなしあー!! (土下座)」

もこ「この話題は早くも終了ですね!!」

・次に第一の試練

担当者は黒マキナ

ルールは“こいつは死んでよし”と思うやつを指差して、一番多く指された人が死亡。

もこちゃんが死亡 コンティニューの能力で復活 フィロちゃん
とキャツキヤウフフ もこちゃん百合に覚醒やつほい／(＾o＾)／

もこ「マキナ…：あんだ真面目にやってる？」

マキナ「私はいつでも真面目に不真面目！」

・で、りゅう君恋ちゃん登場

マキナ「もこちゃん胸わしづかみww」

もこ「だーかーらー！ そーいう話題は止めなさい！」

マキナ「これぐらいいいじゃんよー。で、りゅう君がフィロちゃん
助けてフラグ成立！ りゅうフィロ大勝利！ もこフィロ大敗北！」

もこ「うっさい!!」

マキナ「ちなみにこの時、恋ちゃんが暴れまわったせいで皆の兵隊
が壊滅。後で奴隷の大脱走が起きたそうよ」

もこ「へー、じゃあみんな出られたのかな？」

マキナ「半分ぐらいはね」

もこ「……この世界さらっとハード過ぎない？」

マキナ「で、その後。もこちゃんがりゅう君に怪我させて絶賛鬱モード。そして……」

第二の試練 担当者は赤マキナ

ルールは壊された街で時間まで生き残ること

私こと白マキナのかわいいイタズラでバイオハード化

おまけにPKも一緒

もこちゃんが集団レプの危機 ゲイツさんがみんなの幻想をぶち壊す ゲイツさん無双 もこちゃんヘタレ脱却

もこ「ちょっとあんたみんなの幻想をぶち壊すってどういう意味よ？！」

マキナ「言わせる気？」

もこ「やめて。やっぱ言っな」

・町を出て幽霊少女と遭遇。

マキナ「もこちゃんがりゅう君とディープリキス」

もこ「言っなああああっ……！」

・リリーを助けにえんやこら。マネキン軍団とバトル。

もこ「あれでりゅう君が過守護の能力まともに使えるようになったのよね」

マキナ「ちなみに作者のセロさんはチラッとリリーをあのマネキンたちに輪かn……いだ？！ いだだだほっへはひっはらはいへ〜！」

もこ「リリーもお母さんと死別したりで大変だったみたいね……。
(マキナのほっぺたつねり中)」

マキナ「ちなみにこの時、さりげなくりゅう君が犯罪者になりました。けど手は出してないしロリコンの鑑だね」

もこ「……へ？」

・マキナがゲーム持って遊びに来る。マキナフルボッコタイム。

マキナ「……もこちゃんは本当に化け物でした…… (ブルブル)」
もこ「まあまあ、マキナもなかなかだったよ？」

マキナ「本当に、どうやってたらあんな動きできるの？ なんか動きが読まれてた気がするんだけど」

もこ「んー。なんかこう……集中していると感覚が広がっていったね。相手の放ってる感情を感じ取ったり少し未来の敵の動きが見えるのよ」

マキナ「……ニュータイプみたいなこといってるんですけど……」

・イシユ君襲撃。同時にメリウス襲撃。

もこ「あの時は本当にもう……能力使えないしいきなり服脱げとか言われるしおいてけぼりにされるし……」

マキナ「能力戻るまでもこちゃん裸だったのね（笑）」

もこ「寒かったわ……」

マキナ「ちなみにりゅう君とイシユ君が化けたもこちゃんは二人寄り添って夜まで暖めあつてましたww」

もこ「え」

そして騒動の最中第三の試練。担当者は黄マキナ。

ルールは指差した相手を即死させるチートスキルを持ったマキナのレプリカと戦う。

レプリカが死ぬ、12時間逃げ延びる、レプリカが三人殺すのいずれかで試練終了。

怒りのメリウス（笑） 全員くたくたへとへと 恋ちゃんがイシユ君を脅迫 「いけ！ イシユ君！」 イシユ君死亡 もこ&イシユ「計画通り（ニヤツ）」

マキナ「ちなみに他の試練で使ったレプリカ達はプレイヤー達に……」もこ「いわせねーよ（ボカッ）」

マキナ「痛いよー。もこちゃんが苛めるよー」

もこ「……というかあんた、止められるとわかってて言ってるでしょ」

マキナ「……………え？」

もこ「……………え？ まさか自覚無しのドM？」

マキナ「ちよつ?! ち、違うわよ!? 私神さまよ?! そんなわけないじゃない!？」

もこ「はいはい。わかったから次行こうねー」

マキナ「ちよ?! 放置プレイすなー!」

・恋ちゃんが離脱。

マキナ「戦力ダウンしちゃったねー。第四の試練大丈夫かな？」

もこ「やっぱり第四あるんだ……………」

マキナ「もちろん。けど次の担当の青マキナはわりかし優しいからむちゃくちゃなのは無いと思うよ? ……緑は怖いけど」

もこ「不吉なこと言わないでよ……………」

マキナ「さてさて、本日はここまでにしときましようか。おつかれさまー」

もこ「おつかれー。それじゃさっそく例のやつ見せてよ」

マキナ「オッケー。今回のはすごいよー。バーサーカーとアーチャーの戦闘シーンとかマジでカッコいいから！ 前作が嘘みたい（笑）」

もこ「バーサーカーか……おじちゃんの最期を考えると……ね」

マキナ「そういやバーサーカーっていつも幼女のために戦ってない？」

もこ「うっさい。黙ってなさいあんた」

マキナ「重たい展開は私好きじゃないのよー。逆にキャスターコンビは楽しそうで何よりですww」

もこ「えー。あたしあの鬼畜組はちょっと嫌いなんだけど……」

マキナ「けどけど、あっちの龍君の神さまに対する考え方って完璧だと思うんだよね。それに青髭の旦那もけっこう悲しい過去が有るんだよ？ そもそも教会がジャンヌを……ってメール？ 尺が無いからもう止めるって？」

もこ「え？ まだそんなに喋って無いわよ？」

マキナ「無いのは尺じゃなくてこの展開を纏める技術なんじゃない（強制終了しました）」

続く(たぶん)

スキル一覧

【ゲーム脳】

所有者：浅倉 もこ

ランク：C

主人公、浅倉 もこのスキル。

自身が能動的に行った行動をゲーム仕様に変える。（例、アイテムを無限に持てる。食事を食べようとしただけで食べたことになる。複雑な詠唱や呪文の理解が無くても魔法の習得、使用が可能）

魔法に関してはかなり有益なスキルで、仮に魔王クラスがこのスキルを持てば上級魔法を疑似詠唱破棄で連発可能。

その場合はランクA相当だが、もこの魔力が低すぎて活かさきれていない。

また、思考がゲーム感覚（つまり現実でナイフを突き付けられれば普通パニックになるがゲームなら冷静にどうするか考えられる）という風になる。

もこが危機的状况でも冷静に思考できるのはこのため。

【過守護】

所有者：神埼 竜斗

ランク：A++ E B

自分及び自分が最も大切に思うものへの脅威を無効化する結果を張る。

対象の幅は広く効果も絶大。使用者の精神力次第ではウイルスから隕石まで無効化することができる防御系スキル最高峰。

なのだが現在ではもこ達にとって最大の脅威である竜斗自身の力と破壊衝動を抑えるために効果が激減している。

【狂喜の宴】

所有者：ゲイツ・J・リッパ（PK）

ランク：B

全身から過去に自分が手にしたことがある刃物を自在に取り出すことができる。

ゲイツはもっぱら大型のナイフで戦う。ナイフの扱いは非常に巧みで投げナイフの腕前は神業的。また、懐に入られた場合は身体中から針ネズミのように刃物を出して身を護ることも可能。

刃物であれば制限無く取り出せるが魔剣等を取り出そうとしても普通の剣になってしまう。あくまでも“刃物”しか取り出せない。

【幽体】

所有者：幽霊少女

ランク：？

スキルというよりは種族としての特性。壁抜けや呪い、憑依等、幽霊にできそうなことは一通りできる。

【即興劇】

所有者：イシュト（PK）

ランク：A+

この世界のあらゆる役を操るスキル。イシュト曰くこの世界の全ては石なら石、草なら草という役を持っており、イシュトはこれらに他の役を演じさせることができる。（例、ガラス玉を宝石に。草を薬草に。剣を魔剣に等）

他人の遺伝子を媒体にすることで自身の役を書き換えることも可能。それによってもこに成り済ましたり、スキルをコピーするなどした。

全スキル屈指の万能スキルであり、戦闘面以外でも寂れた小屋を小綺麗な家に変えたり、他人の腕を別の人間に付け替えたりするとすら可能。

【死亡宣言】

所有者：レプリカマキナ

ランク：EX

第三の試練で黄色のマキナが「私が考えたさいきよーのスキル」として産み出したチートスキル。

指を差して死亡を宣言すれば問答無用で相手を即死させる。ちなみに竜斗がこれを受けても生き残れたのは、このスキルの脅威が竜斗の力や破壊衝動より遥かに大きく、過守護がこちらに対して全開になったから。それでも一撃で戦闘不能になった。

物理的だけでなく、魔法やダメージなどの形を持たないものすら殺すことが可能。

【死霊使い】

所有者：伊集院

ランク：？

死霊を操るスキル。詳細は不明。

街で出会った幽霊少女を操って連れていった。

【フルコンボ】

所有者：アリス

ランク：A

先にコンボ数を宣言してから攻撃することで、その攻撃を宣言した回数分出したことにするスキル（先に10コンボと宣言してから殴れば一瞬で同じ場所を10回殴ったことになる。分かりやすく言うならトリコの釘パンチみたいな状態）

一点にダメージが集中するので想像以上の深手を与えることができる。コンボ数を宣言してから走り出せば地面をコンボ数分蹴ったことになり急加速が可能。

ただし衝撃も回数分しっかり自分に返るので身体への負担が大きい。盾等を殴ってしまうと悲惨なことになる。

二十一日目

side 浅倉 もこ

「お姉さん。その果物4つちょうだい」

「はいよ。4つで400円ね」

露店をしていた狐耳のお姉さんから、紙袋に入った桃みたいな果物を受け取ってお金を払う。周りで呼び込みやつてるアクセサリー店なんか少し後ろ髪引かれながらそこを離れた。

次は広場の方にも行くのかしら？ 少し歩くけど道はちゃんとした石畳だ。これまでぬかるんだ道なんかを歩いてたことを考えると全然平気。もう少し歩いて回りたいし。

賑やかな大通りを歩きながら他の人に見られないうちに果物をアイテムボックスにしまっておく。誰にも聞こえないくらい小さな声で歌を口ずさみながら広場へ向かった。

ここはウェルダンの街。この辺り一帯の街では最大の都市らしくて、とても賑やかな街だ。ゲームとかで見る城下町なんかと雰囲気が似てる。

街の中央には冒険者ギルドを初めとしたギルドが活動してる大広場があって、その周りを居住区や商店街なんか囲んでいる。

この街はすつごく気に入った。かわいい服も美味しい食べ物（こっちは誰かに食べさせてもらわないと味わかんないけど）もいっぱい有るし、柔らかいベッドで休めるし大きなお風呂もある。

それに。

あたしの脇を頭からびよこんと犬耳を生やした男の子達が元気に走り抜けていった　かわいい。

道の反対側を見れば猫耳を生やした女の子がメモを見ながら歩いてく　かわいい。

ああもうくそかわいい！　なんでこう犬耳とか猫耳とか狐耳とかのあたしの萌えポイントを的確に押さえた人が多いかなこれ！　うゝ、撫でたい写メ撮りたい抱きしめたい持ち帰りたい！！

……こほん。ここからフィロちゃんの故郷まではほとんど目と鼻の距離で、人口の過半数はフィロちゃんと同じ獣人だそうだ。

他の地域では獣人はいい顔されないけど、ここは獣人の勢力内。逆に道ですれ違う普通の人がちよつと縮こまりながら歩いている。

……さて、この街に来てもう四日になるんだけど、ここに居座っているのには理由がある。

フィロちゃんの故郷へはもうあとは山道を通る一本道なんだけど、そこに強大なモンスターが現れたとかで通行止めになってる。

幸い街のギルドの方で討伐隊を組んでくれてるそうだから、今は無理せずその結果待ちつてとこね。で、せつかくだから今のうち

に羽を伸ばそうってことになった。

幸いあたしがアイテムボックスに持ってた剣やら盾なんかを少し売ったらそれなりにまとまったお金も入ったし、今のうちに使いましょつと……お？

広場を目前にしたところでりゅう君、フィロちゃん、リリーの姿が目に入った。すぐに物陰に隠れて様子をうかがう。

……恋ちゃんのことでもフィロちゃんもリリーも落ち込んでたから、りゅう君と一緒に遊んできなさいって送り出したんだ。

二人がりゅう君のことを好きなのはわかってる。見りゃわかる。だから一緒に遊んでくればちよつとは元気になるでしょつて。

リリーはりゅう君と手を繋いで、フィロちゃんの方はりゅう君に露店で買ったリボンを見せながら楽しそうに笑ってる。こうやって見ると家族に見えるかも。りゅう君とフィロちゃんが夫婦で、リリーが娘か妹つて感じで。

フィロちゃんのこととはちよつぱり胸がチクチクするけど、ね。けどフィロちゃんが楽しそうにしてるのを見るのはあたしにとつても嬉しい。ああ、すつごいしつぱ振つてる。とりあえず写メ撮つとこつ。

そうして見ていると後ろから人が近付いてくる気配がした。

……またナンパかなあ……。この街に来てから多いのなんの……。本気で苦手だからやめて欲しいんだけど……。

「ねえねえ、あなたって……」

あれ？　かわいらしい女の子の声でした。振り返ると……黄色いマキナがそこにいた。

「えっ？」

黄マキナ?!　……いや違う。この子マキナじゃない!?

色素の薄い、やや黄色がかった髪に髪と同じ色の服。三回目の試練の時に出てきたレプリカだ。何でここに?!　とつさに身構える。

「あーっ!!　やっぱりそうだ!!　えー、たしかもこ姉って呼ばれてたっけ?　久しぶりー!　生き残ってたんだ!？」

レプリカはキャツキヤとはしゃぎながらあたしの手を取って両手でブンブン握手する。え?　……えと……何これ?　とりあえず何か仕掛けてくる様子は無いけど……。何これ?

「で、あのりゅう君ってお兄さんはどこ?　良かったらまた少し食べさせてもらいたいんだけど」

と、レプリカはキョロキョロ口周りを見回して……りゅう君を見つけた。……って食べる?!　え?　え?　それ食料的に?!　性的に?!

「みっけ」

そう言った途端、レプリカからすつと白いもやみたいのが出てきて飛んでいった。レプリカの体がカクンとあたしの方に倒れてきて、反射的に受け止める。

ちよ？！ なに？ レプリカはあたしの腕の中ですよすや眠ってる。かわいい じゃなくて！ なにこれ！？ どうしろってのよ！？ 何がどうなってんの？！

その時、広場の方でワツと声が上がった。振り返ってそつちを見ると……フィロちゃんがりゅう君を押し倒していた。

「どっ、どうしたんだよフィロ！？ 待て！ やめろーっ！？」

「いいじゃないさー！ 前はあっさり食べさせてくれたのにー！ いいから一口お願い！」

りゅう君にフィロちゃんが馬乗りになって、無理やりキスしようとしてる。

……頭痛くなってきた……。

え、えと……何がどうなってこうなった？

「ああ、すいません。何かお騒がせしたみたいで」

「ひゃっ？！」

またもやいきなりすぐ後ろから声をかけられて思わず悲鳴を上げてしまった。

振り返ると黒いショートカットの、中性的な感じの……。

……女の人よね？ 危うく男の人と間違えそうになった。

うん、ちゃんと胸がある。

白いYシャツ姿で、鎖で繋いだ黒い棺桶をズルズル引きずっていた。……かなり異様な光景。

その人はあたしが支えていたレプリカの頭を撫でると半分呆れたように苦笑いする。

「レプリカ。棺桶の上にも座ってて。ゆうを回収するから」

声をかけられるとレプリカは即座に反応して立ち上がり、女の人 が引いてた棺桶の上にちょこんと腰かけた。

女の方はポケットから一枚のお札を取り出す。するとそのお札は ふわりと宙に浮かび、一直線にりゆう君を襲っていたフィロちゃん に向かって行った。

「あうっ?!」

お札が側頭部に貼り付いた瞬間、フィロちゃんがまるで糸が切れ た人形みたいにかくんとりゆう君の上に倒れ込んだ。……うわぁ。 周りに人が集まってきてるし。

「………すみません。連れが迷惑をかけたみたいで」

女の方は苦笑いして頭を掻く。自分の手の中に戻ってきたお札を ピシッと指で弾くと、お札から「ぎゃーっ」って声が出た。

「ちょっと人も集まってきましたし、場所を変えませんか？ お詫 びもしたいですから……」

「と、言うわけです。ご理解いただけましたか？」

「は、はあ……」

とある喫茶店の一番奥まった場所にあった席で、あたし達はさっきの女の子……伊集院さんの説明を受けていた。

伊集院さんの隣ではレプリカが一ミリも動かずじっと座っている。その前にはお札が置かれていて……なんか中から「出してーっ」って声が聞こえる。

えと、伊集院さんの説明をまとめるところだ。

伊集院さんもあたし達と同じくこの世界に召喚されたプレイヤーで、魔物退治を請け負ってお金と経験値を稼いできたらしい。

スキルは「死霊使い（ネクロマンサー）」その名の通り死霊を操る能力で、今お札に閉じ込められているのは伊集院さんが使役している幽霊らしい。

ちなみにその幽霊もプレイヤーで、自分の名前を忘れてたからゆうって呼んでるそうだ。レプリカはゆうが自分が憑依するために連れてたのかなんとか。……というかこの幽霊……たぶん一度あたし達と会ってるわよね……思い出したくないけど。

「……ひつく……わたし……わたしリュウトさんになんてことを……ひつく……」

……フィロちゃんは軽くトラウマを刻まれたみたい。リリーは幽霊見るのは初めてだったみたいで、りゅう君の腕にしがみついているぶるぶる震えている。

「いやぁ……、失礼しました。うちのゆうが本当にご迷惑を……」

お札の中から「うちのゆうも何もあんた私のこと無理やり拉致監禁したんじゃないさーっ」って声が聞こえてきた。伊集院さんはため息について頬杖をつく。

「ところ構わず人を驚かせたりレプリカの体を使ってキスして回る君を放っておけと？」

伊集院さんはお札をピシピシ叩く。お札から「ぎゃーっ。お尻叩くなーっ」って声が聞こえてきた。……お尻？

「僕はさっき言った通り魔物退治を請け負ってましてね。ゆうも退治依頼を受けて出会ったんですよ。最初話を聞いた時は驚きました。まさか幽霊がプレイヤーなんて思いもしませんでしたからね」

「最初から死んでるもんね」

「ええ、しかし……そちらのあなたの方も十分凄い存在だと思いますがね」

伊集院さんはそう言ったりゅう君の方を見た。

「俺か？」

りゅう君が聞くと伊集院さんは頷いた。

「実は僕、依頼で一度紅竜の竜人と戦ったことがありましてね。話し合いなんて到底できないような相手でしたから。紅竜より危険と呼ばれる黒竜の竜人のあなたがそれだけ落ち着いていられるのには驚きました」

「まあ俺のはスキルが特別だったのと……このリリーが竜の契りつて言うのでいくらか俺の力を抑えてくれてるからな」

りゅう君はリリーの頭を撫でる。するとリリーは「ひゃっ!?!?」と悲鳴を上げた。

「あ、悪い。髪は敏感だから撫でられるのは苦手……だったか？」

「う、うん。リュウトなら……いいよ……? けど……、契りのことは……あまり人にはなさないほうが……」

伊集院さんはリリーの方に視線を向けていた。検分するようにリリーの体をまじまじと見る。

「竜の契り……ということはあるか？」

リリーはちよつとためらいながら頷く。

「う、うん。ぼくは蒼竜の竜人……だよ? けど、あまり人にはい

わないでね……?」

「ああ。大丈夫ですよ。竜人に関しては僕も最低限の知識は身に付けていますから余計なことは言いふらしたりしません。……それにしても竜の契りですか……」

伊集院さんはリリーとりゅう君を見比べる。そして額にシワを寄せこめかみに指を当てた。

「……この世界にはその手の法律が無いとはいえ……いえ、きつと竜人同士辛いことや通じ合うことがあったのですね。何も言いません。末永くお幸せに」

「……ありがとう。……けどリュウトはやさしいよ? あそんでくれるし、まだ何もされてないし……」

「……え? この会話って……何? どういう意味? 竜の契りってなんかあるの?」

伊集院さんはリリー、りゅう君を見て、そこからあたしとフィロちゃんに視線を移す。

「……ふむ。ここで会えたのも何かの縁です。よろしければお互い協力しませんか?」

「協力?」

「ええ」

そう言って伊集院さんはにっこりと微笑む。

「同じプレイヤー同士、やはり助け合いませんか？……ね」

二十二日目(1) (前書き)

すみませんリアルの場合で更新遅れ気味です) . . . (

しばらく少し遅くなると思いますが……生暖かな目で見守ってやってくださいm () m

二十二日目(1)

かつて僕は、幸せだった。

裕福ではなかった、環境に恵まれているわけでもなかった。

それでも、彼女がいた。彼女と一緒にいれるだけで、彼女と触れ合っていていられるだけで僕は世界一幸せな人間になれた。

こんな幸せがいつまでも続いて欲しいと、願っていた。

……………待ってて。

僕は、きっと僕達の幸せを取り戻してみせるから……………。

十

side 浅倉 もこ

うわぁ……………多いわね。

あたしの目の前には広場に山と積まれた剣や盾、巨大弩に薬に鎧に食料にテントにその他もろもろ。

周りではいかにも歴戦の冒険者ですって感じの方々があたしのこ
とを見守ってる。

……というか怖いよ!? まじまじと見ないで!? そっちのお
じさん潰された目の部分せめて眼帯当てて! 明らかにあたしの胸
とかお尻とかやらしい目で見てる連中どっか行け!

「浅倉さん、それではお願いします」

「は……はあ……」

隣に立っていた伊集院さんに促され、目の前の道具の山に手をか
ざした。

「アイテム、まとめてしまう」

あたしがそう言うとう道具の山がまとめて消えた。周りの方々から
やんややんやと歓声が上がる。

「おお、本当に全部いけるんですね」

「……あれでできなかつたらただじゃすまない雰囲気だしね」

昨日、伊集院さんから受けた提案は、プレイヤー同士お互いに協
力し合おうってことだ。

つまり、あたし達は伊集院さんが受けた魔物(例のフィロちゃん
の故郷への道をとおせんぼしてるってやつ)の退治依頼を手伝う。
そしたら代わりに伊集院さんはフィロちゃんの故郷まで試練の時込
みで護衛してくれるっていうのだ。

ちなみに魔物退治の依頼を手伝うって言っても、あたし達は荷物持ちだ。

というのも、この魔物退治にはけっこうな人数が参加するらしいんだけど、当然人数が多いってことは荷物も多い。魔物が逃げたら何日もかけて追いかけないといけないからテントや予備の武器なんかもいる。巨大弩なんてのを武器にする人までいる。

そして大荷物を持ってたらいきなり魔物が襲撃してきた時に対処できない。

なんで普通なら荷物持ちを雇うんだけど、その費用は大抵冒険者持ちでなかなか馬鹿にできない金額らしい。

けどあたしは【ゲーム脳】のアイテムボックスがあるから荷物を一人で全部持てる。つまり荷物持ち代が丸々浮くというわけだ。

伊集院さんはその分のお金を他の人達からもらって大儲け。あたし達は戦闘には参加しなくていいって言われてるし分け前ももらえるし、死んだ冒険者の持ち物は猫ババしても大丈夫なんて言われてる。

つまりあたし達にとってもかなり美味しい話ってことだ。

「もこ姉！」

冒険者の人から安く買い取ったお古の軽鎧を装備したりゆう君がこっちに走ってきた。その後ろを木の杖を持ったフィロちゃんがついてきてる。

「おー、りゅう君その鎧似合ってるじゃん」

服の上から薄い金属の胸当てに肩当て、ガントレットにレガース

を着けたりゆう君はなんかそれっぽく見える。ゲームで出てきそう。中ボスぐらいに。

「それより、リリー知らないか？ はぐれたみたいで……」

「ああ、待ってて」

携帯を開いてマップを表示する。……あ、いたいた。広場の隅っこの方でじっとして……ん？

マップにリリーが点で表示されてて、そのすぐ隣にもう一つ点が表示されてる。名前は……【白マキナ】

……白マキナ？ あいつ、なんか用？

白マキナは三回目の試練の後からちょこちょこ現れるようになった。出てきても少しモンハンやったりゲームでフルボッコにしたら帰っちゃうけど。

……何だかんだで友達だっというリリーのことが心配だったみたい。あいつがよく現れてくれたおかげで、リリーも少しは元気になったと思う。

あたしとしてもゲーム仲間ができるのは嬉しいしね。新発売のゲーム持ってきてくれたこともあったし。……まあボコボコにしたけど。ちよっとあれは大人気なかったかなあ……三連続完封だしなあ……。

……と、話がそれた。なんで白マキナが……ってあら？

あらためてマップを見てみるとそこに白マキナの名前は無かった。少し探してみるけどもどこにもいない。リリーがこっちに向かって来てるのだけが表示されていた。

「リュウト!!」

駆け寄ってきたリリーをりゅう君はぽふっと抱きしめて受け止めた。

「どこ行ってたんだ？ 探したぞ？」

「ごめん……なさい。……ぼくね、人がいっぱいいるの……、にがてだから人がいない方に行ったの。そしたらマキナちゃんが出てきて話し相手になってくれて……」

リリーが不安そうだからって理由だけで出てきたのかしら？ だったらあいつもずいぶん過保護ね……。……もしかして百合とか？
……見たいかも……。

「……それで、話してたんだけど、なんだかぼくたちのこと、心配してるみたいだったよ？ ……これ、落としていったし……」

リリーはそう言って……ネックレスを掲げた。

木彫りの十字架のネックレスで、白くキラキラ光るチェーンが通されている。よく見ると十字架の部分にはびっしりと小さな小さな文字が書かれていた。

「……ちよつと見せてくれませんか？」

フィロちゃんがそう言うのとリリーはフィロちゃんに十字架のネッ

クレスを渡す。

フィロちゃんはそれを光にかざしてまじまじと見つめた。

「魔除け……でしょうか？ 書いてるのは古代語？ ……ごめんなさい。はっきりとはわかりませんが、御守りみたいなものだと思います」

フィロちゃんはリリーにそれを返した。リリーは『どうしよう？』って感じでりゅう君を見る。

「もらっとけよ。必要なもんならあいつから取りに来るだろ」

「うん。じゃあそつするね？」

リリーはネックレスを首にかけた。

このネックレス一つが、幸にも不幸にもあらゆる事態をひっくり返す引き金になるなんて、この時は思いもしなかった。

二十一日目(1・5)(順番間違えました:f^| ^;) (前書き)

すいません(汗) 載せる順番間違えた(汗)

時刻は深夜0時過ぎ。

あたしたちは街の大衆浴場……要はこの世界の銭湯にいた。

0時に試練が有るかもしれないから入るのはそれ以降にしてるんだけど、この時間だと人がいなくて快適。リリーやりゆう君は竜人だつてバレると都合悪いしね。

「はあ……気持ちいい〜」

湯船に使って手足をうんと伸ばす。お湯は白い濁り湯で、聞いた話だと天然温泉らしい。大衆浴場で天然温泉つて贅沢よね〜

「それでお昼の……イジユウインっていう人から頼まれた件。受けるんですか？」

あたしの隣でフィロちゃんが言った。顔を洗ってぶるぶると頭を振る。……なんというか、何度も見てるけどやっぱりフィロちゃん肌綺麗よねえ。

健康的に日焼けした肌に抜群のスタイル。それでいて全体のバランス取れてて胸の形も良くて、とつても柔らかくて。……もしもリゆう君とフィロちゃんがくっついたらこの身体もあいつのやりたいようにやられちゃうのかなあ。ああもうなんかモヤモヤするという

かなんというか……」「聞いてます?」

あ……。フィロちゃんがジトツとした目であたしを見ていた。

「う、うん! 両方にメリット有りそうだし受ける方向で考えてるよ! あははは」

「……何を考えてたんですか?」

「あ! いや! フィロちゃん肌綺麗だなーって……あはははは」
フィロちゃんはちょっと顔を赤くして自分の身体を見る。そしてあたしの方を見た。

「もこさんが言うところとちょっと嫌みに聞こえますよ?」

「え? いやいやそんなつもり無いって! あたしの方はフィロちゃんみたいにスタイル良くないし!」

「いや、その次元じゃないと言いますか……もこさんの場合は肌が綺麗過ぎて怖いと言いますか……」

そう言っってフィロちゃんがあたしのほっぺたにぶにぶにと触れる。

いや、確かに今のあたしの肌綺麗かも知れないけどさ。どうも元々の自分の身体じゃないから実感湧かないのよ。

……っっていうかこういう話に乗ってくれるようになって……水浴びのたびに触り続けたかいが有ったかしらねえ。うふふ。

「フィロちゃんはやっぱりりゅー君のこと好きっ。」

「ふえっ?!」

フィロちゃんの顔が一気に真っ赤になった。うっ、かわいいなもう。

「えと……そ、それは……その……それは……」

「あゝ、いいってわざわざ言わなくて。わかってて聞いたから」

「……たまにもこさん意地悪ですよね」

だってフィロちゃんってこういう風にからかうとかわいいもん。そんなことを考えながらフィロちゃんの恋のライバル(?)のリリーを探す……っていない?

「そっぴやリリーはどこ行ったの? 姿が見えないけど」

「5分ぐらい前にお風呂に潜ってそれっきりですね」

「……あはは」

リリーはどうも地面の上を歩き回ってるより水の中に潜ってる方が居心地がいいらしい。だからこの銭湯に来るとしばらくお湯の中に潜ってる。

……溺れてないよね?

「少し話がそれましたけど、私はちょっとあの人苦手です……」

「伊集院さんのこと？ どして？ 見た感じいい人そうだけど」

「いや……人柄はともかく……臭いが」

臭い？ フイロちゃんは顔をしかめたまま続ける。

「その……あの死体臭くて……臭い消しは使ってるみたいですけど私にはちよつと……」

「あゝ、死霊使いって言うてたっけあの人。……ってまさかあの棺桶の中って」

伊集院さんが引きずっていた棺桶の中身を想像して肌がぞわぞわした。あ……あんな優しそうな顔して……。

と、その時浴場の戸が開く音が聞こえた。湯気でよく見えなけれど誰か入ってきたみたい。こんな時間に？ 珍しいわね。

ぺた、ぺた、と足音が近付いてくる。……あれ？ なんかちよつと背中が寒いんだけど？ 気温下がった。

湯気の向こうに人影が見える。シルエットからして髪の長い女の子みたい。

それが湯気の中、ぺた、ぺたって近づいてきて……止まった。ピクリとも動かずにジツとこっちを見てる。なんか……不気味だ。

そう思った瞬間、壁に付けてあった松明の火がフツと消えた。

「ちょ？！ なに？！」

「も、もこさん？！」

周りが完全に真っ暗になった。あたしとフィロちゃんはギュツと手を握りあう。……何なの？ 何か起きて「きゃあああ？！」

なっ？！ 暗闇の中でリリーの悲鳴が聞こえた。

「リリー！？ どうしたの！？ 大丈夫！？」

返事がない。な……なんか本格的にヤバいことになってる？

「フィ……フィロちゃん！ 明かりつけて！ 早く！」

「……………」

フィロちゃんからの返事がない？！ フィロちゃんはスルリと音もなくあたしの手を抜けていった。

まっ暗闇の中に一人、取り残される。

背中に冷たい感触があった。ぺたりと、誰かが後ろからあたしの肩に手を置いてる。

え？ あたしの後ろって……もう壁しか……。

カタカタと歯が鳴った。後ろに、なにかいる。ゆっくりと振り返

「怨めしや……」

真っ白な女の子の顔が目の前にあった。

「きゃああああああっ！！！！」

いや。さすがに酷いでしょ。本物の幽霊は反則すぎるでしょ。

元通りに松明が灯った浴場で、あたしたちの前には伊集院さんが連れてたレプリカマキナと……宙に浮かんで口をもごもごさせてる幽霊のゆうがいた。

「三人共いい恐がりっぷりだったねえ。幽霊冥利に尽きるってやつだわ」

「……せめてリリーには手加減してあげてよ」

リリーはフィロちゃんの胸に抱かれて失神してる。幽霊って時点でこわがってたからねえ……。

ゆうは「ごっめ〜ん」なんてケラケラ笑ってる。

……まあいいわ。聞きたいこと聞けるし。

「ちょっと聞きたいんだけど、いい？」

「うん」

「伊集院ってどんなやつ？」

「よくわかんない」

即答しないでよ。

「いや、なんかあるでしょ？」

「だって私があいつに捕まったのってほんの何日か前だもん。だいたいは棺桶の中に入れられてたし。あ、けどいいやつだとは思っよ？ 毎日お線香あげてくれるし」

「……それ微妙ね」

うーん。あんまし参考にはならないか。なんか性格も適当そうだしなあ……。

……そうなると気になるのはレプリカの方かしら？

レプリカに目を向ける。お湯に浸かったままピクリとも動かない。

「ねえ。……えーと、レプリカ？」

「……………」

レプリカは顔を上げてあたしを見た。……リアルなレイプ目って
こんななんだって思うぐらい目に生気がない。

「あの伊集院って人のこと、何か知らない？」

「……………創造主、デウス・エクス・マキナの命によりその質
問には答えられない」

「自分から長文喋った?!」

なんかゆうがやたら驚いてる。その反応でどういふことかはだ
いたい察しがついた。

「……………つまりマキナの命令で、あたしたちにそういふことは教えら
れないってこと？」

レプリカはこっくり頷く。他人の情報とかを話すことはできない。
ロボット物だとよくある話ね。

「なんか話せることは？」

「……………一つだけ」

「なに？」

「今は危険日だからするなら避に……………」
「ごめん。やっぱり言わな
いでいい」

ため息ついておでこに手を当てる。なんというか……………あいつらそ

うつつネタ好きねえ……。まあ神様はだいたい好色だって聞くけど……。

厨二病真っ盛りだったところに調べた神話関係を思い出して苦笑い。

そんなら……。

「あの伊集院って人に大切にしてもらってる？」

レプリカはこっくり頷く。やっぱり、自分のことなら答えられるか。

ゆづは目を丸くしてレプリカを見る。

「そついつのオツケーなんだ！　じゃあ私のこと好き？」

レプリカはふるふると首を振る。

「……………もしかして、私に憑かれるの嫌だったり？」

レプリカはこっくり頷いた。

ゆづは本気で落ち込んだみたいでお湯の中に沈んでいった。……
なんかお湯が冷たくなつた気がする。

「じゃ、あの伊集院って人は何か企んでるように見える？」

「……………創造主、デウス」「ああ、もういいから。こついつ質問だと駄目か……………じゃあ、あの人はあなたに優しくしてくれてると思つ？」

今度はレプリカはごっくり頷いた。どうも基準がはっきりしないわね。

「じゃあ、あなたはあの人のこと、どう思ってる？」

「……………好き」

おお。そういう感情もちゃんと有るんだ。

「私のこと嫌いなくせに」

……………ゆうがすすり泣くような声がどこからか聞こえた。

「……………ちなみにあの幽霊のことはどう思ってるの？」

「……………大好き」

その瞬間浴場の松明が盛大に弾けた。真っ暗な中であの幽霊の音がわんわんと反響する。

「うっはあああ！！ もうリカちゃんのバカーッ！！ 私も大好きだよおおおっ！！」

……………いや、呪いの雄叫びみたいで怖いんですけど……………。

二十二日目（1）

かつて僕は、幸せだった。

裕福ではなかった、環境に恵まれているわけでもなかった。

それでも、彼女がいた。彼女と一緒にいれるだけで、彼女と触れ合っていていられるだけで僕は世界一幸せな人間になれた。

こんな幸せがいつまでも続いて欲しいと、願っていた。

……………待ってて。

僕は、きつと僕達の幸せを取り戻してみせるから……………。

十

side 浅倉 もこ

うわぁ……………多いわね。

あたしの目の前には広場に山と積まれた剣や盾、巨大弩に薬に鎧に食料にテントにその他もろもろ。

周りではいかにも歴戦の冒険者ですって感じの方々があたしのこ
とを見守ってる。

……というか怖いよ!? まじまじと見ないで!? そっちのお
じさん潰された目の部分せめて眼帯当てて! 明らかにあたしの胸
とかお尻とかやらしい目で見てる連中どっか行け!

「浅倉さん、それではお願いします」

「は……はあ……」

隣に立っていた伊集院さんに促され、目の前の道具の山に手をか
ざした。

「アイテム、まとめてしまう」

あたしがそう言うとう道具の山がまとめて消えた。周りの方々から
やんややんやと歓声上がる。

「おお、本当に全部いけるんですね」

「……あれでできなかつたらただじゃすまない雰囲気だしね」

昨日、伊集院さんから受けた提案は、プレイヤー同士お互いに協
力し合おうってことだ。

つまり、あたし達は伊集院さんが受けた魔物(例のフィロちゃん
の故郷への道をとおせんぼしてるってやつ)の退治依頼を手伝う。
そしたら代わりに伊集院さんはフィロちゃんの故郷まで試練の時込
みで護衛してくれるっていうのだ。

ちなみに魔物退治の依頼を手伝うって言っても、あたし達は荷物持ちだ。

というのも、この魔物退治にはけっこうな人数が参加するらしいんだけど、当然人数が多いってことは荷物も多い。魔物が逃げたら何日もかけて追いかけないといけないからテントや予備の武器なんかもいる。巨大弩なんてのを武器にする人までいる。

そして大荷物を持ってたらいきなり魔物が襲撃してきた時に対処できない。

なんで普通なら荷物持ちを雇うんだけど、その費用は大抵冒険者持ちでなかなか馬鹿にできない金額らしい。

けどあたしは【ゲーム脳】のアイテムボックスがあるから荷物を一人で全部持てる。つまり荷物持ち代が丸々浮くというわけだ。

伊集院さんはその分のお金を他の人達からもらって大儲け。あたし達は戦闘には参加しなくていいって言われてるし分け前ももらえるし、死んだ冒険者の持ち物は猫ババしても大丈夫なんて言われてる。

つまりあたし達にとってもかなり美味しい話ってことだ。

「もこ姉！」

冒険者の人から安く買い取ったお古の軽鎧を装備したりゆう君がこっちに走ってきた。その後ろを木の杖を持ったフィロちゃんがついてきてる。

「おー、りゅう君その鎧似合ってるじゃん」

服の上から薄い金属の胸当てに肩当て、ガントレットにレガース

を着けたりゆう君はなんかそれっぽく見える。ゲームで出てきそう。中ボスぐらいに。

「それより、リリー知らないか？ はぐれたみたいで……」

「ああ、待ってて」

携帯を開いてマップを表示する。……あ、いたいた。広場の隅っこの方でじっとして……ん？

マップにリリーが点で表示されてて、そのすぐ隣にもう一つ点が表示されてる。名前は……【白マキナ】

……白マキナ？ あいつ、なんか用？

白マキナは三回目の試練の後からちょこちょこ現れるようになった。出てきても少しモンハンやったりゲームでフルボッコにしたら帰っちゃうけど。

……何だかんだで友達だっというリリーのことが心配だったみたい。あいつがよく現れてくれたおかげで、リリーも少しは元気になったと思う。

あたしとしてもゲーム仲間ができるのは嬉しいしね。新発売のゲーム持ってきてくれたこともあったし。……まあボコボコにしたけど。ちよっとあれは大人気なかったかなあ……三連続完封だしなあ……。

……と、話がそれた。なんで白マキナが……ってあら？

あらためてマップを見てみるとそこに白マキナの名前は無かった。少し探してみるけどもどこにもいない。リリーがこっちに向かって来てるのだけが表示されていた。

「リュウト!!」

駆け寄ってきたリリーをりゅう君はぽふっと抱きしめて受け止めた。

「どこ行ってたんだ？ 探したぞ？」

「ごめん……なさい。……ぼくね、人がいっぱいいるの……、にがてだから人がいない方に行ったの。そしたらマキナちゃんが出てきて話し相手になってくれて……」

リリーが不安そうだからって理由だけで出てきたのかしら？ だったらあいつもずいぶん過保護ね……。……もしかして百合とか？
……見たいかも……。

「……それで、話してたんだけど、なんだかぼくたちのこと、心配してるみたいだったよ？ ……これ、落としていったし……」

リリーはそう言って……ネックレスを掲げた。

木彫りの十字架のネックレスで、白くキラキラ光るチェーンが通されている。よく見ると十字架の部分にはびっしりと小さな小さな文字が書かれていた。

「……ちよつと見せてくれませんか？」

フィロちゃんがそう言うのとリリーはフィロちゃんに十字架のネッ

クレスを渡す。

フィロちゃんはそれを光にかざしてまじまじと見つめた。

「魔除け……でしょうか？ 書いてるのは古代語？ ……ごめんなさい。はっきりとはわかりませんが、御守りみたいなものだと思います」

フィロちゃんはリリーにそれを返した。リリーは『どうしよう？』って感じでりゅう君を見る。

「もらっとけよ。必要なもんならあいつから取りに来るだろ」

「うん。じゃあそつするね？」

リリーはネックレスを首にかけた。

このネックレス一つが、幸にも不幸にもあらゆる事態をひっくり返す引き金になるなんて、この時は思いもしなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2195u/>

神さまとゲーム脳と過守護な殺戮竜の物語

2012年1月6日12時48分発行